

剣侠

国枝史郎

青空文庫

木劍試合

1

文政×年の初夏のことであつた。

すぎなみのすけ杉浪之助は宿を出て、両国をさして歩いて行つた。

本郷の台まで来たときである。さかきばらしきぶし榺原式部少輔様のお屋敷があり、お長屋が軒を並べていた。

と、

「エーイ」

「イヤー」

という、鋭い掛声が聞こえてきた。

(はてな?)

と、浪之助は足を止めた。

(凄いような掛声だが?)

で、あたり四辺を見廻して見た。

掛声はお長屋の一軒の、塀の内側から来たようであった。

幸い節穴があつたので、浪之助は覗いて見た。

六十歳前後の老武士と、三十五六歳の壮年武士とが、植込の開けた芝生の上に下り立ち、互いに木剣を構えていた。

(こりやアいけない)

と浪之助は思った。

(まるでこりやア段違いだ)

老武士の構えも立派ではあつたが、しかし要するに尋常で、構えから見てその伎倆うでも、せいぜいのところ免許ぐらい、しかるに一方壮年武士の方の伎倆は、どつちかというところ道不鍛練の、浪之助のようなものの眼から見ても、恐ろしいように思われる程に、思い切つて勝れているのであつた。

それに浪之助には何となく、この二人の試合なるものが、単なる業わざの比較ではなく、打うち物ものこそ木剣を用いておれ、恨みを含んだ真剣の決闘、そんなように思われてならなかつた。

豊かの頬、二重にくくれた頤、本来の老武士の人相は、円満であり寛容であるのに、額ひたいを癩癬かんべきの筋でうねらせ、眼を怒りに血ばしらせている。

これに反して壮年武士の方は、怒りの代わりに嘲りと憎みを、切長の眼、高薄い鼻、瘦せた頬、蒼白い顔色、そういう顔に漂わせながら、焦心あせる老武士を充分に焦心らせ、苦しめるだけ苦しめてやろうと、そう思つてもいるように、ジワリジワリと迫り詰めていた。
(やるな)

と浪之助の思つた途端、壮年武士の木剣が、さながら水でも引くように、左り後ろへ斜めに引かれた。

誘いの隙に相違なかつた。

それに老武士は乗つたらしい。

一足踏み出すと真つ向へ下ろした。

壮年武士は身を翻えしたが、横面を払うと見せて、無類の悪剣、老武士の瘦せた細い足を、打つたら折れるに相違ない、それと知つていてその足を……打とうとしたきわどい一剎那に、

「あれ、お父様とう」という女の声が、息詰まるように聞こえてきた。

正面に立っている屋敷の縁えんに、十八九の娘が立っていた。

跣足はだしでその娘が駈け寄つて来たのと、老武士が木剣を閃ひらめかせたのと、壮年武士が「参つた」と叫び、構えていた木剣をダラリと下げ、苦笑いをして右の腕を、左の掌で揉んだのが、その次に起こつた出来事であつた。

浪之助も塀の節穴越しに、苦笑せざるを得なかつた。

(若い武士が打たれるはずはない。わざと勝を譲つたんだ)

そう思わざるを得なかつた。

浪之助は娘を見た。

石榴ざんろの蕾を想わせるような、紅あかい小さな唇が、娘を初々しく気高くしていた。

2

「何だそのような未熟の腕でいながら、傲慢らしく振舞うとは」

こう老武士の窘たしなめるような声が、浪之助の耳へ聞こえてきたので、老武士の方へ眼を移して見た。

娘を横手へ立たせたまま、壮年武士と向かい合い、老武士は説いているのであつた。

「たとえばどのような伎倆うでがあるかと、世間には名人達人がある、上越す者がどれほどもある、増長慢になつてはいけないのう」

こう云つた時には老武士の声は、穏やかになり親切そうになり、顔からも怒りがなくなつていた。

「第一わしのようなこんな老人に、もろく負けるようなそんな伎倆では、自慢しようも出来ないではないか。のう澄江すみえ、そうであろうがな」

「まあお父様そのようなこと……もうよろしいではござりませぬか……でも陣十郎様のお伎倆うでまゑは、お立派のように存ぜられますわ」

藤と菖蒲あやめをとりあわせた、長い袂ひそえの単衣ひとえが似合つて、臍へらたけてさえ見えるその娘は、とりなすようにそういうように云い、気の毒そうに壮年武士を見た。

壮年武士の表情には、軽侮と傲慢とがあるばかりであつた。

しかし娘にそう云われた時、その表情を不意に消し、

「これは恐縮に存じます。……いや私の伎倆など、まだまだやくぎでござりまして、まさしく小父様に右の籠手こてを、一本取られましてござります。……将来気をつけるでござりませう」

「さようさようそれがよろしい、将来は氣をつけ天狗にならず、ますます勉強するがよい。いやお前にそう出られて、わしはすっかり嬉しくなった。……では茶でもものむしどうぞ。

……陣十郎じんじゅうろう来い、澄江来い」

好々爺の本性に帰つたらしく、こう云うと老武士は木劍を捨て、屋敷の方へ歩き出した。「では陣十郎様、おいでなさりませ」

「は」と云つたが陣十郎様という武士は、何か心に濟まないかのように、何か云い出そうとするかのように澄江の顔を凝視するばかりで、歩き出そうとはしなかつた。

「澄江様。……澄江様」

「はい、何でございますか？」

「私の甲源一刀流、お父上の新影流より、劣つて居るとお思い遊ばしますかな？」

「いいえ……でも……わたくしなどには……」

「お解わかりにならぬと仰せられる？」

「わかりませんでござります」

「わからぬものは剣道ばかりか……男の、男の、恋心なども……」

「……」澄江の眼には当惑らしい表情が出た。

「打とうと思えば小父様など、たった一打ち手間暇はいらぬ。……打たずにかえって打たれたは……澄江さま、貴方のためじゃ」

「……………」

その時屋敷の縁の上から、

「おいで、こら、何をして居る」

老武士が呼んで手を拍った。

「羊羹を切ったぞ。おいでおいで」

「はい」と云うと陣十郎へ背を向け、澄江はそつちへ小走った。

「ちと痛い」と右の手を揉み、

「あの老おいぼれ耄、フ、フ、何を……が、澄江には恩をかけた。……この手で……」

と口の中で呟きながら、陣十郎という若い武士は、屋敷の方へそろそろと歩いた。

3

(どうにも変な試合だったよ)

浪之助はそんなことを思いながら、両国の方へ歩いて行った。

(それにしてもちよつと美しい娘だった)

こんなことをチラリと心の隅で思い、独り笑いをもらしたりした。
年はまだ二十三歳、独身で浪人であった。

親の代からの浪人で、その父は浪之進といい、信州高島たかしまの家臣であったが、故あつて浪人となり、家族ともども江戸に出た。貨殖の才がある上に、信州人特有の儉約家しまつやで、金貸などをひそかにやり、たいして人にも怨まれないうちに、相当に貯めて家屋敷なども買、町内の世話をして口を利き、武士ではあつたが町人同然、大分評判のよくなつた頃、五年ほど前にポツクリ死に、母親はその後三年ほど生きたが、総領の娘を武家は厭、町家の相当の家柄の家へ、——という希望を叶えさせ、呉服問屋へ嫁入らせ、安心したところでコロリと死に、後には長男の浪之助ばかりが残つた。当然彼が家督を取り、若い主人公になり済まし、現在に及んでいるのであるが、この浪之助豚児ではないが、さりとて一躍家名を揚げるような、一代の麒麟児でもなさそうで、剣道は一刀流を学んだが、まだ免許にはやや遠く、学問の方も当時の儒家、林信満のぶますに就いて学んだが、学者として立つには程遠かつた。

ところがこのごろになつて浪之助は、何かドカーンと大きなことを、何かビシツと身に

泌みるようなことを、是非経験したいものだ、そんなように思うようになった。なまぬるい生活がつづいたので、強い刺戟を求め出したと、そう解釈してよきそうである。

袴無しの着流しで、蠟塗りの細身の大小を差し、白扇を胸の辺りでパチツカせ、青簾に釣つり忍しのぶ、そんなものが軒にチラチラ見える町通りを歩いて行った。

浅草観世音へ参詣し、賽銭を投げて奥山を廻り、東両国の盛場へ来たときには、日が少かたむし傾かたむいていた。

娘太夫を巡つて

1

両国橋を本所の方へ渡ると、江戸一番の盛場となり、ことに細小路一带には、丹波から連れて来た狐きつね爺おやじとか、河童かっぱの見世物とか和蘭陀眼鏡おらんだめがねとかそんないかがわしい見世物小屋があつて、勤番武士とか、お上りさんとか、そういう低級の観客の趣味に、巧みに迎合させていた。講釈場もあれば水芸、曲独楽きょくごま、そんなものの定席もできていた。

曲独楽の定席の前まで来て、浪之助はちよつと足を止めた。

しばらく思案をしたようであったが、木戸銭を払って中へ入った。

こんなものへ入って曲独楽を見て、口を開けて見とれるという程、悪趣味の彼ではないのであったが、以前にこの娘太夫で、美貌と業の巧いので、一時両国の人気を攫った、本名お組芸名源女くみげんじよそういう女と妙な縁から、彼一流の恋をした。ところが今から一年ほど前に、不意にその女が居なくなつた。悪御家人の悪足と一緒に、駆落ちしたのだという噂があつたり、養母に悪いのがついていて長崎の異人へ妾めかけに売つたのと、そんな噂があつたりしたが、とにかく姿を消してしまつた。浪之助は妙にその女には、かなりの執着を持つていて、姿を消されたその当座は、ちよつと寂しく感じたりし、もうその女がいなくなつた以上、そんな曲独楽なんか見るものかと、爾来じらいよりつきもしなかつたが、今日は彼の心の中に、昔なつかしい思いが萌もえた。そこで、木戸をくぐつたのである。

棧敷と土間もかなりの入りであつた。

舞台には華やかな牡丹燈籠が、二基がところ立てであり、その背後うしろには季節にかな適わせた、八橋の景が飾つてあり、その前に若い娘太夫が、薄紫のしめ髪斗目の振袖で、金糸銀糸の刺繡かみしもした袴、福草履ふくぞうりを穿いたおきまりの姿で、巧みに縄をさばっていた。

「おや、ありやア源女じゃアないか」

驚いて浪之助は口の中で叫んだ。

娘太夫は源女のお組、それに相違ないからであつた。

瓜実顔、富士額、薄い受口、切長の眼、源女に相違ないのであつた。ただ思いなしか
一年前より、痩せて衰えておとろいるようであつた。

(舞い戻つてこの席へ出たものと見える)

油然ゆうぜんと恋心が湧いて来た。

(逢つて様子を聞きたいものだ)

その時源女が昔ながらのとはいえ少し力の弱い声で、

「独楽こまは生独楽生きて廻る」と、口上を節づけて述べ出した。

「繩も生繩生きて動く。……小だめしは返り来の独楽、繩を離れても慕い、翻騰として飛び返る。ヤーハツ」と云つたかと思つと、右手の振袖が渦を巻き、瞬間繩が宙にほぐれ、差し渡し五寸もあるらしい、金蒔絵黒塗り銀心棒、朱色渦巻を胴ほに刻つた独楽が、唸うなりをなして舞い上り、しばらく宙に漂うように見えたが、あだかも生ける魂あつて、すでに源女に手繰たくられている、絹、麻、髪を緬ないませで造つた、鼠色に見える繩を目掛け追うかのように寄つて来た。

と、源女は右手を出した。

その掌てのひらに独楽は止まった。

グルリと掌を裏返した。

逆さかさになつたまま掌に吸いつき、独楽は森しんしん々と廻っている。

どつと喝采が見物の中から起こつた。

しかしどうしたのかその一刹那、ポタリと独楽が、掌から落ち、源女は放心でもしたように、棧敷の一所を凝然と見詰めた。

2

恐怖がその顔に現われている。

(どうしたんだらう?) と驚きながら、源女の見詰めている方角へ、浪之助も眼をやつた。
(や) とこれも驚いた。

そこに、棧敷に、見物にまじつて、榊原式部しきぐさ少輔しょうぶ様のお長屋の庭で、老武士を相手に試合をしていた、陣十郎という壮年武士が、舞台を睨にらむように見ているではないか。

単なる浪之助の思いなしばかりでなく、陣十郎の眼と源女の眼とは、互いに睨み合つて

いるようであり、源女が独楽を掌から落とす、放心したように茫然としたのも、陣十郎の姿を認めたからであると、そんなように思われる節があった。

(二人の間には何かあるな)

そんなように思われてならなかった。

「弘法にも筆のあやまり、名人の手からも水が洩れる、生独楽を落としました源女太夫のあやまり、やり直しは幾重にもご用捨……」

床から独楽を拾い上げ、顫えを帯びた含み声で、こうテレ隠しのように口上を述べ、源女が芸を続け出したのは、それから直ぐのことであった。

これがかえって愛嬌になったか、見物は湧きもしなかった。

その後これといって失敗もなく、昔ながらに鮮かに、源女は独楽を自由自在に使った。

一基の燈籠に独楽が投げ込まれるや、牡丹が花弁はなびらを開くように、燈籠は紙壁しへきを四方に開き、百目蝋燭ろうそくを露出させ、焰の先から水を吹き出し、つづいてもう一基の燈籠の中から、独楽が自ずと舞い上り、それを源女が手へ戻した途端、そのもう一基の燈籠も、紙壁を開き水を吹き出した。この最後の芸を終えて、悠々と源女が舞台から消えると、見物達は拍手を送った。

浪之助は小屋を出て、裏木戸の方へ廻って行った。

「久しぶりだな、爺とつつあん」

木戸口にいた爺じいさんへ、こう浪之助は声をかけた。

「へい」と木戸番の爺おやじは云った。

「これは杉様で、お珍しい」

「たっしやでいいな、一年ぶりだ」

「旦那様もおたっしやのご様子で」

「源女が帰って出演でているようだな」

「よくご存知で、ほんの昨今から」

「ちよつと源女に逢いたいのだが」

「さあさあどうぞ」と草履ぞうりを揃えた。

心付を渡して草履を突っかけた。

「源女さんのお部屋は一番奥で」

「そうかい」と浪之助は歩いて行った。

書割だの大道具だのが積み重ねてある、黴臭い薄暗い舞台裏を通り、並んでいる部屋々

々の暖簾のれんの前を通り、一番奥の部屋の前へ立った。

長い暖簾を掲げて入った。

衣装籠つづらに寄りかかりながら、袴をさえ取ろうともせず、源女はグツタリと坐っていた。

「お組、わしだ」と浪之助は云った。

と、源女は閉じていた眼を、さもだるそうに細目をあけたが、

「浪之助様。……存じて居りました」

そう云ってまたも眼をとじた。

衰弱していると云つてもよく、冷淡であると云つてもよい、極めて素気ない態度であった。

立ったまま坐りもせず、そういう昔の恋人の、源女の様子を眺めながら、浪之助は意外さと寂しさと、多少の怒りとを心に感じた。

3

「知っていたとは？ ……何を知って？」

「棧敷にお居でなされましたことを」

眼をとじたまま云うのであった。

「では舞台上で観ていたのか」

「ええ」と源女は眼をあけた。

「浪之助様がお居でになる。——そう思つて見て居りました」

「ふむ」と浪之助は鼻で云つた。

「ただそれだけか。え、お組」

「……………」

「一年ぶりで逢つた二人だ。浪之助様がお居でになると、ただそう思つて見ていただけか」
少し愚痴とは思つたが、そう云わざるを得なかつた。

なるほど二人の往昔そのかみの仲は、死ぬの生きるの夫婦いっしょになろうのと、そういつたような深い烈しい、燃え立つような仲ではなかつた。とはいえ双方好き合い愛し合つた。恋であつたことには疑いなく、しかも争いをしたのでもなく、談合づくで別れたのでもなく、恋は続いていたのであつた。そうだ、続いていたのであつた。それなのに女は一言も云わず、別れましようとも切れましようとも、何とも云わずに姿を消し、今日迄消息たよりしなかつたのである。さて、ところで、今逢つた。と、そのような冷淡なのである。

愚痴も厭味も浪之助としては、云い出さないではいられないではないか。

で、そう云つて睨むように見詰めた。

「それにさ、いかに心持が、わしから冷やかになつてゐるにしても、坐れとぐらい何故云つてくれぬ」

いかさま浪之助はまだ立つていた。

これには源女も済まなく思つたか、

「どうぞ」と云うと水玉を散らした、友禪の坐蒲団を押しやった。

坐つたが心が充たされず、尚浪之助は白い眼で、源女の顔をまじまじと見た。

源女は又も眼を閉じて、衣装籠つづらに身をもたせていた。

眼の縁辺りが薄く隈取られ、小鼻の左右に溝が出来、見れば意外に憔悴もしてい、病んででもいるように疲やせてもいた。

(ひどく苦勞をしたらしい)

そう思うと浪之助の心持が和なごみ、女を憐れむ情愛が、胸に暖かく流れて来た。

「お組、いままでどこにいたのだ？」

「旅に……旅に……諸方の旅に」

「旅を稼いでいたというのか？」

「いいえ。……でも……ええ旅に。……」

言葉が濁り曖昧であった。

「旅はいずこを……どの方面を？」

「どこと云って、ただあちらこちらを」

「ふむ。……一座を作って？」

「いいえ、一人で……でも時々は……一座を作っても居りました」

やはり言葉が濁るのであった。

「なぜそれにしても旅へ出ますと、わしに話してはくれなかったのだ」

「……」

源女は返辞へんじをしなかった。

睫毛が顫え唇の左右が、痙攣けいれんをしたばかりであった。

窓から西陽が射し込んで来て、衣桁にかけてある着替えの衣装の、派手な模様を照らしていた。

二三度入り口の暖簾をかかげて、一座の者らしい男や女やが、顔を差し込んで覗いたが、

訳あるらしい二人の様子を見ると、入ろうともせず行ってしまった。

「陣十郎という武士を知っているかな？」

話を転じて浪之助は云った。

と、源女は首をもたげた。

4

「陣十郎！ ……陣十郎！ ……みずしな水品陣十郎！ ……あなたこそどうしてあの男を！」

そう云うと源女はのしかかるように、衣装籠から身を乗り出した。

恐怖と憎悪とがあからさまに、パツと見開いた眼にあつた。

凄じいと云つてもいいような、相手の態度に圧せられて、浪之助はかえつてたじろいだ。

「いやわしはただほんの……それも偶然先刻方……さつき榊原様のお長屋で……試合をしていたのを通りかかつて……だがその男が棧敷にいたので……」

「ただそれだけでございますか」

源女は安心したように、そう云うと軀をグツタリとさせ、衣装籠へまた寄りかかった。

そうして眼を閉じ黙ってしまったが、やがて浪之助へ云うというより、自分自身へ云う

ように、うわごと謔言のように呷いた。

「陣十郎、水品陣十郎……何と云おう、悪鬼と云おうか……あの男のためにまアわたし妾は……これまでどんなに、まあどんなに……苦しめられ苦しめられたことか！ ……だま騙されす賺かされおび怯やかされ、旅でさんざん苦しめられた。……こんなにしたのはあの男だ。妾をこんなに、こんなにしたのは！ ……病人に、白痴に、片輪者に！ ……先生、お助け下さりませ！ ……でも妾はどうあろうと、あれをどうともして思い出さなけりやア……でもお許し下さりませ、思い出せないのでございます」

不意に源女は節をつけて、歌うように云い出した。

「ちちぶのこおり

おがわむら

へみさまにわの

ひのきのね

むかしはあつたということじゃ

いまはかわってせんのうま

ごひやくのうまのうまかいの

……

……

……

まぐさのやまや

そこなしの

かわのなかじのいわむろの

……さあその後は何といったかしら？ ……思い出せない思い出せない。……そうしてあそこはどこだったかしら？ ……山に谷に森に林に、岩屋に盆地に沼に川に、そうして滝があつたかもしれない。

大きなお屋敷もあつたはずだが。……そうしてまるで酒顛しゅてんどうじ童子のような、恐ろしいお爺さんがいたはずだが。……思い出せない、思い出せない。……」

顔を上向け宙へ眼をやり、額に汗をにじませて、何か思い出を辿るように、何かを思い出そうとするように、源女は譚うわごと言のように云うのであつた。

癩癩の発作の起こる前の、痴呆状態とでも云うべきであろうか、そういう源女の顔も姿も、いつもとは異ちがつて別人のように見えた。

浪之助は魔まわれたようにゾツとした。

と、不意に前のめりに、源女は畳へ突つ伏した。

精根をすっかり疲労つかれさせられたらしい。

「お組」と仰天していざり寄り浪之助は抱き起こした。

「しっかりおし、心をたしかに！」

その時背後から声がかかった。

「源女殿いつもの病気でござるか」

驚いて浪之助は振り返って見た。

いつ来たものか三十五六の武士が、眉をひそめながら立っていた。

5

額広く眉太く、眼は鳳ほうがん眼がんといつて気高く鋭く、それでいて愛嬌があり、鼻はあくまで

高かったが、鼻梁が太いので険しくなく、仁じんちゆう中ちゆうの深いのは徳のある証拠、唇は薄くな

く厚くない。程よいけれど、大形であった。色が白く頬が豊かで、顎も角ばらず円味づい

ていた。身長は五尺五六寸もあろうか、肉付は逞たくましくあつたけれど贅肉なしに引きしまつ

ている。髪は総髪の大髻おわたぶさで、髻の紐は濃紫こむらさきであった。黒の紋付に同じ羽織、白博多の帯をしめ、無反むそりに近い長めの大小の、柄を白糸で巻いたのを差し、わざと袴をつけていないのは、無造作で磊落で瀟洒の性質をさながらに現わしていると云つてよろしく白博多の帯と映り合つて、羽織の紐が髻と同じ、濃紫であるのは高尚であつた。

そういう武士が立つていた。

と見てとつて浪之助は、思わず「あッ」と声を上げ、抱えていた源女を放したかと思うと、四五尺がところ後へすべこり、膝へ手を置いてかしまつてしまった。

武士の何者かを知っているからであつた。

川越の城主三十五万石、松平大和守の家臣であつて、知行は堂々たる五百石、新影流の剣道指南、秋山要左衛門の子息であり、侠骨凌々たるところから、博徒赤尾の磯五郎を助け、縄張出入などに関係したあげく、わざと勘当されて浪人となり、江戸へいでて技を磨き、根岸御行みゆきの松に道場を設け、新影流を教授して居り、年齢は男盛りの三十五、それでいて新影流は無双の達人、神刀無念流の戸ヶ崎熊太郎や、甲源一刀流の辺見多へんみ四郎や、小野派一刀流の浅利又七郎や、北辰一刀流の千葉周作等、前後して輩出した名人達と、仲ゆづの間にあつたという、そういう達人の秋山要介正勝あきやまようすけまさかつ！ 武士は実にその人なので

伯はくち

あつた。

勿論浪之助はかつてこれ迄、秋山要介と話したこともなく、教えを受けたこともなかったのであるが、それほどの高名の劍豪であつた、江戸に住居する武士という武士は、要介を知らない者はなく、そういう意味で、浪之助も、諸方で遙拝して知っていたのであつた。そういう要介が現われたのである、かしこまつたのは当然といえよう。

かしこまつた浪之助の様子を見ると、要介はかえつて気の毒そうに、微笑を浮かべ会釈をしたが、さりとて別に何とも云わず、^{たお}仆れている源女へ近寄つて行き、片膝つくと手を延ばし、源女の背を撫でながら云つた。

「源女殿、要介じゃ。いつもの発作が起こられたか」

そう云つた声を通じたと見える、源女は顔を上げて要介を見たが、

「先生！」とやにわに縋りついた。

「陣十郎が！ 水品陣十郎が！」

「陣十郎が？ どうなされた？」

「棧敷にいました！ ^{わたし}妾につき纏い！」

「……………」

要介の顔色もにわかに変わった。

「彼、悪鬼、江戸まで来たか！」

「先生！」

「大丈夫」と要介は云った、

「ついて居る、わしが、大丈夫じゃ」

「はい……先生！……でも妾は！……恐ろしい、恐ろしい、恐ろしい！」

「自分で自分を苦しめてはいけない。……自分で自分を恐れさせてはいけない。……秋山要介が付いて居る」

剣鬼と剣聖

1

俺の長くいる場所ではない、こう思つて浪之助がその部屋を出たのは、それから間もなくのことであつた。

書割や大道具の積んである間を、裏木戸の方へ歩いて行つた。

と、何かなしにゾツとした。

で四辺あたりを見廻して見た。

書割が積んであるその横手の、薄暗い一所に水晶陣十郎が、刺すような眼をしてこちらを見ていた。

「あ」と浪之助は自分ながら馬鹿な、と云うよりも臆病千万な、恐怖に似たような声をあげ、足を釘づけにしてしまった。

陣十郎という男の身の周囲まわりを、殺気といおうか妖気といおうか、陰森としたものが取り巻いていて近寄るものを萎縮させる。

——そんなように一瞬思われもした。

(馬鹿な)と自分で自分を嘲けり、浪之助は足を運んだ。

とはいえ陣十郎の前を通る時も、通り過ぎた時も恐ろしかった、不意に切り付けられるはしないだろうか、そんなように思われてならなかった。

その浪之助が小石川富坂町の、自分の屋敷へ戻ろうとして、お茶の水の辺りを歩いていたのは、初夜をとうに過ぎしていた頃で、源げんしよ女の小屋を出ても気にかかることや、愉快でないことが心にあつたので、その心を紛らそうとして、鼯こぶしにしてしている小料理屋で、時

刻を過ごしたからであつた。

お組くみはどうしたというのだろうか？ 病気には相違なさそうだが、何という変な病気なんだろう。秋山要介というような、余りにも有名な人物と、非常に親しくしているようだが、どこでどうしてそうなったのか？ 水品陣十郎という悪鬼のような男、あの男もお組や秋山要介と、深い関係があるようだが、その関係はどんなんだろう？

(どつちみち今日は変な日だつた)

浪之助はそんなことを思いながら、まだ酔っている熱い頬を、夜に入って青葉の匂いを増した、さわやかな風に吹かせながら、樹木多く人家無く、これが江戸内かと疑われるほど、寂しい凄いお茶の水の境地を、微吟しながら歩いて行つた。

遅く出た月が空にあつたが、樹木が繁つているために、木洩れの月光がそここへ、光の斑ふちを置いてあるばかりで、あたりはほとんど闇であつた。

不意に行手で閃めくものがあり、悲鳴がそれに続いて聞こえた。

ギョツとして浪之助は足を止めた。

(切られたらしい)と直感された。

(横へ逸れて行つてしまおうか)

ふとそんな気も起こったが、町人とは違い武士であった。

(卑怯な) と思い返して走って行った。

香具師——それも膏藥売らしい、膏藥箱を胸へかけた男が、右の胸から血を流し、その血の中に埋もれて居り、そうした死骸を見下ろしながら、一人の武士がその前に佇み、一人の女がその横にいて、血刀を懐紙で拭いているという、凄惨無慈悲の光景が、巨大な棒のように射して来ている木洩れの月光に照らされて、浪之助の眼に映った。

フーツと気が遠くなりそうであった。

そう、浪之助はもう少しで、気を失って仆れそうになった。

「貴殿のおいでを待っていました」

水品陣十郎がそう云った。

2

血刀を女に拭わせている武士、それは水品陣十郎であった。

「拙者水品陣十郎と申す、浪人でござる、お見知り置き下され」

現在人を殺して置いて、本名を宣る膽の太さ、あらためて浪之助の怯えている心を、底

の方から怯やかした。

「はあ」とばかり浪之助は云った。

それ以上は云うこともなく、そう云った声さえ顫えていた。

「……ソ、その者は？ ……その死骸は？」

さすがにそれだけは浪之助も訊いた。

「拙者ただ今討ち果したものだじゃ」

「はあ。……さようで……何の咎で？」

「裏切りいたした手下ゆえ」

「はあ」

「憎むべきは裏切り者。……言行一致せざる奴。……」

「はあ」

「失礼ながら貴殿のご姓名は？」

「ス、杉浪之助。……」

「杉浪之助殿。……お住居すまいは？」

「小石川富坂町。……」

「源女の小屋で今日午後、お眼にかかったことご存知か？」

「サ、さよう。……存じ居ります」

「源女の部屋へ行かれましたな？」

「……………」

「貴殿と源女との関係は？」

「これと云つて、何もござらぬ。……一年前に、ただちよつと……」

「さようか」と陣十郎は疑わしように、刀の切先のようにキラキラ光る、氷のように底冷たい眼を、じつと浪之助の顔へ注いだが、

「秋山要介殿源女の部屋へ、今日参つて居られたが、貴殿と秋山殿との関係は？」

「何でもござらぬ、ただ今日、はじめてあそこでお逢いしたまで。……」

「しかと左様か。偽りはござるまいな」

「何の偽り。……真実でござる」

まるで吟味でも受けているようだ。——浪之助はにわかには不快になり、自分の如何にも生地のないことに、腹立たしきを感じはしたが、蛇に魅入られた蛙かわずとでも云おうか、陣十郎という男に見詰められていると、手も足も出ないような恐怖感に、身も魂も襲われるの

であつた。

女に血潮ちのりを充分に拭わせ、やがて陣十郎は悠々と、刀を鞘に納めたが、

「拙者貴殿に悪いことは申さぬ、深い因縁がないとあれば、いよいよもつて幸いでござる、源女とも秋山要介とも今後決して関係つけなさるな」

「はあ。……しかし……それは……何故に。……」

「さようさ、拙者が好まぬ故」

「……………」

何という凶太い我儘だろう。何という押おし強つよい要求だろう。——そうは思ったが浪之助は、それに反抗して否と云い切るだけの、力を持つことが出来なかつた。

で、じつと黙っていた。

「わけても源女と関係なされては不可いない。……いかがでござる、よろしゅうござるか」

「……………」

「よろしい、承知なされたそうな。……念のため貴殿にお訊たずねいたすが、貴殿、源女の歌う不思議な歌を、耳にしたことござるかな？」

こう云つて探るように睨むように見た。

(あの歌のことだな) と浪之助は思った。

3

(ちちぶのこおり、おがわむら、へみさまにわのひのきのね)

この歌のことだなとすぐ思った。

しかし聞いたとそう云つたら、どんな目に逢わされるか知れたものではない、こう思ったので浪之助は、

「いや」と簡単に否定した。

「聞かない、よろしい。それは結構。……そこで貴殿に申し上げて置く、今後決して聞いてはならぬ。よしんば例え聞くことがあつても、決してその意味を解いてはならぬ。……よろしゅうござるか、浪之助殿」

「よろしゅうござる」と浪之助は云つた、仕方がないから云つたのであつて、その実彼はそういわれたため、かえつてその歌に含まれている意味を、解いてやろうと決心したくらいであつた。

こういう問答をしているうちにも、今は血刀を拭い終えて、陣十郎の横手に佇んで、爪

楊枝を噛みながら、二人の問答を上空のように、平然と聞き流している、女の姿を観察した。

三十がらみの年恰好で、櫛巻に髪を結んで居り、絞りの単衣に黒くろじゆす縷子の帯、塗りの駒下駄を穿いている。腰の辺りに得も云われない、毒々しい迄の色気があった。顔は整いすぎほど整っていたが、鼻がひときわ高かったので、ここで一点ぶちこわしていた。毒婦型に嵌まった凄艶の女！ そう云えば足りる女であった。

パチリと女は腕かひなを打った。どうやら藪蚊が刺したらしい。左の腕の肩まで捲った。月光に浮いて見えたのは、ベツタリ刻られた刺いれずみ青であった。

(凄いな)と浪之助はヒヤリとした。

(陣十郎とはいいい取り合わせだ)

「念の為に申し上げて置く」

重々しい。ねつとりとした。威嚇的の声で、陣十郎がその時云った。

「貴殿拙者に食言いたせば、ここに斃れているこの男のような、悲惨な運命となりましよう。よろしゅうござるかな、浪之助殿」

云い云い指で膏葉売をさした。

「……………」

無言でゴックリと唾を飲んで、ただ浪之助は頷いて見せた。

「よろしい、では、お別れいたす。……お妻行こう」

「あい、行きましょう」

月光の圏内から遁れ出て、二人は闇に消えてしまった。

小間使に下女に老婆に老僕に若党の五人を召使に持ち、広い庭を持った立派な屋敷に、
気儘くらしに生活している浪之助の身分は、なかなか悪くないと云ってよかろう。

翌日は昼頃までグツスリと寝、起きると物臭さそうに顔を洗い、小綺麗な小間使お里の
給仕で、朝昼兼帯の食事をし、青あおすだれ簾すだれを背後に縁へ出て、百合と蝦夷菊との咲いている
花壇を、浪之助はぼんやり眺めながら、昨日きのう一日に起伏した事件を、どう統一したらよか
ろうかと、一つは暇、一つは興味、一つは自分の将来に、多少関係あるところから、ムツ
ツリ思案しているところへ、

「旦那様、ご来客でございます」と、小間使が知らせて来た。

「誰だ？」と浪之助はうるさそうに云った。

「秋山要介様と仰せられました」

4

泉水築山などのよく見える、風通しのよい上等の客間へ、秋山要介を慇懃に通し、茶菓を備え歓待し、これほどの高名の人物によつて、訪問されたことの喜びやら、恐縮やら、光榮やらを感謝しいしい、浪之助が謹ましく応対したのは、それから間もなくのことであつた。

貴殿と源女との以前の關係を、昨日源女より承うけたまわつた。そうして昨日水晶陣十郎が、どこやらのお長屋の庭において、誰やらと試合をしていたのを、貴殿御覽になられたと、その源女に仰せられたそうな、そのお長屋がどこにあるか、それをお知らせにあずかりたく、拙者参上いたしましたのでござると磊落な調子で要介は云つた。

「陣十郎の現在の住居を、是非とも承知いたしたいので」

こう要介は附け加えた。

「本郷の榎さかきばやし原はら式しき部ぶ少しょう輔すけ様の、お長屋の一軒でございました」と、浪之助はあの時見た一部始終を話した。

「何人のお長屋でござりましたかな？」

「さあそれは、うっかり致しまして、確かめませんでござりましたが、よろしくば私ご案内いたし」

「^{かたじ}忝けのうござる、では遠慮なく、夕景にでもなりましたら、散策かたがたご同行を願ひ……」

「かしこまりましたござります。……ところで……」と浪之助は言葉を改め、昨夜お茶の水の寂しい境地で、その水品陣十郎に逢い、一種の脅迫を受けたことを話した。

じつと聞いていた要介は、次第にその眉をひそめたが、

「彼の兇悪まだ止まぬと見える。……まことに恐るべきは彼の悪劍……」と独言のように呟いた。

「先生、悪劍と申しますは？」と、浪之助は探るように訊いた。

要介はしばらく沈黙したまま、泉水の鯉が時々匆ねて、水面へ姿を現わして、そのつど霧のような飛沫を上げ、岸に咲いている紫陽花あじさいの花が、その飛沫に濡れたのか、陽に艶めいて見えるさわやかな景へ、鋭い瞳を注いでいたが、

「柳生流の『車ノ返シ』甲源一刀流の『下手ノ切』この二法を並用したらしい、彼独特の

剣技でいやる」

こう云って浪之助を正面から見詰めた。

その眼をまぶしそうに外しながら、

「しかし先生などの腕前からすれば、陣十郎の腕前など……」

「なかなか以って、そうはいかぬ。……一年前に上州間庭まにわ、樋口十郎左衛門殿の道場において、偶然彼と逢いましたな、懇望されて立合いましたか……」

「勝負は？」

「相打ち」

「……」

「見事に足を。……」

「足を？」

「さよう。払われました」

「……」

「拙者は面を取りましたが」

浪之助は黙ってしまった。

当代劍豪十人を選んで、日本の代表的人物としたら、当然その中に入るべき人物、秋山要介正勝ほどの人が、相打ちになったというからは、彼水品陣十郎という男、伎倆うでは伍格ごかくと見なければならぬ。

(そんな出来る男なのかな)

嘘のように思われてならなかった。

5

用意して置いた酒肴を出した。

「はじめに参つたのにこのご歓待、要介少なからず恐縮に存ずる」

こう云いながらも遠慮せず、悠々と盃を重ねる態度が、明朗であり闊達であり、先輩も後輩も無視して、真に磊落であり洒落であつて、しかも本来が五百石取りの、先はまず大身の家柄の、御曹司である品位は落とさず、浪之助には慕わしくてならなかった。

「陣十郎のその悪剣、何と申す名称でござりますか？」

浪之助はそう訊いて見た。

「逆の車と申しておりましたよ。勿論邪道の悪剣ゆえ、正当の名称はござらぬが、彼自身

勝手に附けたものと見えます。……まずこう中段に太刀を構える」

こう云いながら要介は、白扇を取るとグツと構えた。一尺足らずの獲物ながら、名人の構えた扇であった、浪之助にはその扇が、差しつけられた白刃より凄く、要介の躰からだがその背後に、悉すっかり皆隠れたかのように思われた。

「と、こうグ——と左斜に、太刀を静かに引くのでござる」

云い云い要介は扇を引いて見せた。

「さながら水の引くが如く。……云う迄もなく誘いの隙じゃ。……誘いの隙じゃと知りながら、百人が百人それに乗れり、一步踏み出すか打ち込むかする。……と、その機先を素早く制し……柳生の業車わざぐるまノ返シ、そいつでこう一旦返す」

扇をクルリと下返しに返した。

「ハツと相手が動揺した途端、間髪を入れず下手ノ切、甲源一刀流の下手ノ切……」

こう云うと要介は左膝の辺りまで、扇を引き付けて八双に構え、すぐに刎ね返して掬い切りをした。

「こいつで来るのじゃ、さようこいつで。……下れば足、上れば胴、もう一段上れば顎へ来る……必ずやられる、必ず切られる」

「しかしそのように解つて居りますれば、その術を破る方法が、いくらもあるように存ぜられますが」

「それが無い、こいつが業じゃ。……分解して云えば今のようではあるが、分解も何も差し許さず、講釈も何も超越して、序破急を一時に行なうと云おうか、天地人三才を同時にやると云おうか、疾風迅雷無二無三、敵ながら天晴あっぱれと褒めたくなるほどの、真に神妙な早業で、しかも充分のネバリをもつて、石火の如くに行なわれては、ほとんど防ぐに術が無い」

「はあ」と浪之助は溜息をした。

「恐ろしい業でござりまするな」

「恐ろしい業じゃ、恐ろしい悪剣じゃ。……爾来拙者苦心に苦心し、あの悪剣を破ろうもの、考案工夫をいたしおるが……」

「考案おつきになりませぬか？」

「彼のあの時の太刀さばきが、いまだに眼先にチラツイいて、退きませぬよ、消えませぬよ」

「はあ」とままたも浪之助は、溜息せざるを得なかつた。

それにしても昨夜お茶の水で、陣十郎に脅迫された時、反抗しないでよいことをした、
 変に反抗でもしようものなら、逆ノ車でズンと一刀に、切り仆されてしまったことだろう。
 浪之助にはそう思われた。

二人は盃を重ねて行つた。

いつか夕暮となつていて、庭の若竹の葉末辺りに、螢の光が淡く燈ともされていた。

6

酒に意外に時を費し、二人が屋敷から立ち出でたのは、相当夜の更けた頃であつた。

「あまり早く出かけて行つて、その屋敷のあたりをまいまいし、陣十郎に目付けられでもしたら、面白くないことになる、おそい方がよろしゅうござる」と、要介はそう云つてかえつてよろこんだ。

家にいる時も外へ出てからも、どういう因縁から源女のお組などと、先生にはお懇ちかづき意になりしましたか？ お組のうたつた不思議な歌の意味、あれはどうなのでござりますか？

何が故に水品陣十郎は、先生やお組を狙うのですかと、浪之助はいろいろ要介に対して、訊きたいことがあつたけれど、一つは昨夜陣十郎によつて、そういうことに触れてはなら

ぬと、威嚇されたのが身に泌みてい、一つは要介その人も、そういうことに触れられることを、好んでいないように思われたので、つい浪之助は訊きそびれてしまった。

こうして本郷の榊原様の、お屋敷地辺りまでやって来た。

屋敷町は更けるに早く、ほとんど人の通りなどなく、家々の門は差し固められ、藁いらかが今夜も明かな月夜、その月光に照らされて、水に濡れたように見えるばかりであった。

「先生、このお屋敷でございます」と、浪之助はお長屋の一軒の前で立った。

二百石取りか三百石取りか、相当立派な知行取りの、お長屋であることは構えで知れた。板塀が高くかかっている、その上に植込みの榎や朴が、葉を茂らせてかかっている、その葉がこれも月の光に燦いぶしぎん銀のように薄光っていた。

「表門の方へ廻って見ましょう」

こう云つて要介が先に立ち、二三間歩みを運んだ時、消魂けたましい叫声が邸内から聞こえ、突然横手の木戸が開き、人影が道へ躍り出た。

一人の武士が白刃を下げ、空いている片手に一人の女を、横抱きにして引つ抱えてい、それを追つてもう一人の武士が、これも白刃を掲ひっさげて、跣足はだしのまま追つて出て来た。

「おのれ
汝！………待て！………極重悪人」

追つて出た若い武士の叫びであつた。

「お兄様！ ……お兄様！」

抱えられている娘は悲鳴をあげた。

「陣十郎だ！」とその瞬間、要介は叫んで足を返した。

娘を抱えている武士が紛う方もない、水晶陣十郎であるからであつた。

陣十郎は躊躇したらしく、一瞬間立ち止まつた。

背後から若い武士が追つて来る、行手には二人の武士がいる。何方へ走ろうかと躊躇し

たらしい。

そこへ追いついた若い武士は、

「父上の敵、くたばれ悪漢！」

声諸共切り込んだ。

「切れ——ッ」と差し出したのは娘の躰！

「あッ」とばかりあやうくも、白刃を三寸の宙で止め。

「人楯とは汝卑怯者！」

「お兄様お兄様妾もろとも、陣十郎を切つてお父様の敵を！」

叫ぶ娘の澄江すみえをグツと、再び抱え込んだ陣十郎は、二人の武士に向い威嚇的に、白刃を振り廻し叱咤した。

「退け！ 邪魔するな！ 致さば切るぞ」

駆け抜けようとするその前へ、両手を拵げて要介は立った。

7

「眼眩まなくらんだか水品陣十郎！ 拙者が見えぬか秋山要介だ！」

「なに秋山？」とタジタジとしたが、

「いかにも秋山！ ウ——ム南無三！」

「事情は知らぬが日頃の悪業、邪は汝おのれにあるは必定！ ここは通さぬ、組み止めるぞ！

……」

途端に背後の若い武士が叫んだ。

「我々兄妹はこの家の者、榊原家の家臣でござつて、拙者は嶋澤しぎさわ主水と申し、妹儀は澄江と申す。それなる男はいささかの縁辺しるべ、最近我が家の寄宿者かかりうととなり、我等養い居りましたるところ、わずかのことよりたつた今し方、われらが父庄右衛門を殺し、ご覧のお

り妹を誘拐し、遁れようとしたし居ります。承わりますればご貴殿には、ご高名の秋山先生との御事、助太刀お願いいたしまする」

「心得てござる」と要介は云った。

「そうなくとも水品陣十郎に対し、拙者従来確執ござる。討つて取らねばならぬ奴、まして貴殿ご兄妹の敵とありましては、いよいよもつて見遁し難い。……助太刀たしかに承知いたしました。……貴殿そなたより切つてかかられよ。拙者組み止めお引き渡す。……浪之助殿、貴殿も共々」

「承知しました」と浪之助も云つて、本来は小胆である彼ではあつたが、傍らには要介が居ることではあり、そうでなくてもこういう場に臨めば、そこは武士で義侠の血も湧き、勇気も勃然と起こるものであり、やにわに刀を引き抜いた。

腹背敵を受けたばかりか、その中の一人は劍聖ともいうべき、秋山要介正勝であつた。剣鬼のような水品陣十郎も、進退谷まつたと知つたらしい、突立つたまま居縮んだが、抱えていた澄江を地へ下すと、肩を片足でグツと踏みつけ、大上段に刀を振り冠り、

「秋山氏か、久々に御意得た。いかにも貴殿の云われるとおり、拙者と貴殿とは敵同志、と云うよりも競争相手、討つか討たれるか行く道は一つ、しよせんは命の遣り取りする間、

ここで逢つたも因縁でござろう、勝負承知、逃げ隠れはしない。……主水、主水、鳴澤主水、^{おのれ}汝に対しても云い分はない、いかにもこの方汝の父親、庄右衛門を武士の意地で、今し方切つてすてたは確かだ、親の敵に相違ない善悪正邪を論じたなら、五分の理屈はこっちにもある。が、云うまい理屈は嫌いだ！ 悪人に徹底しようぞ。ワツハツハツ、拙者は悪人！ 悪人なるが故に義理はいらぬ。そこで恋しい女があれば、理不尽であろうと奪つて逃げる。そこで澄江を奪つたのよ。悪人であれば人情は無益、こつちの命のあぶない瀬戸際、そうなつては恋女も情婦もない、人質、人楯、生ける贖、^{にえ}土足にかけてこの有様だ！ かかれ秋山、かかれ主水！、一寸と動かば振り冠つた刀、澄江の上に落ちかかるぞよ！

悪人の本性を如実に現わし、左右に向かつてこう喚くや、月光にドギツク振り冠つた刀を、上げつ下げつ切る真似をして、陣十郎は心よげに笑つた。

切齒はしたが澄江の命があぶない、要介も主水もかかりかね、足ずりをして躊躇^{ためら}つた。

8

が、その時澄江が叫んだ。

「躊躇はご無用妾を殺して、陣十郎をお討取り下さりませ。……まずこの如く！」と織せんし手を揮った。

「ワツ」と陣十郎が途端に叫び、飛び退くと刀を肩に担ぎ、不覚にも一方へよろめいた。そこを目掛けて、

「二つになれ！」と、切り込んだは主水の刀であった。

音！

鏘然と一合鳴った。

陣十郎が払ったのである。

と見て取つて翻然と、要介は無手で躍りかかった。

劍光！

斜に一流れした。

陣十郎の横なぐりだ。

が、何の要介が、切られてなろうか飛び違った。

そこを二度目に切り込んだ主水！

またも鏘然と音がして、陣十郎の払った刀の、切先が延びて主水の股へ！

「あッ」

主水が地に仆れた。

「お兄様！」と簪を逆手に、それで陣十郎の足の甲を突き、機先を制した澄江が叫び、地を這つて主水へ近寄つた。

「今は憎さが！」と吼えながら、何という残酷陣十郎は、澄江の背を拝み打ち！
切ろうとした一刹那風を切つて、浪之助の投げた石飛礫が、陣十郎の額へ来た。

「チエーッ」

片手で払い落とした隙を、ドツとあてた躰にあたり！

要介の精妙の躰あたりを食らい、もんどり打つて二間の彼方へ、毬のように飛ばされた陣十郎！
とはいえ彼も鍛えた躰だ、飛燕の軽さ飛び起きるや、這い廻っている主水の傍を、矢のように駈け抜けて一散に脱兎！

「待て！」と要介は追つかけたが、

「浪之助殿、貴殿は居残り、主水殿と澄江殿を介抱なされい！」

「かしこまりました」

「頼む」と云いすて、要介は韋駄天追つかけたが、この辺りの地理に詳しい彼、陣十郎は

どこへ行つたものか露路か小路へ逃げ込んだらしい、既に姿は見えなかった。

が、この頃から物音に驚き、お長屋の窓や潜門くぐりが開き、人々が顔を出し、

「どうしたのだ？」

「火事か？」

「盗賊か？」

などと、口々に罵つた。

要介はそこで、大音に叫んだ。

「悪漢、鳴澤家に禍わざわいいたし、この界限に隠れ居ります。お出合い下されお探し下され」

「行け」「探せ」と人々は叫び、追っ取り刀で走り出して来た。

「向こうだ」

「いや、こつちでござろう」

四方の露地や小路に駆け込み、あそこかここかと探し廻つた。

次から次、屋敷から屋敷へと、この騒動はすぐに伝波し、家中の武士、夜廻りの者、若党、仲間などが獲物を携え、ここの一画を包围して、陣十郎を狩り立てた。

9

向こうでも人声がし、こちらでも人声がした。疑心暗鬼から味方同志を、敵と間違え声を上げたり、「居たぞ」と叫んで追って行き、それが知り合いの同僚だったので、ドツと笑う声が出た。

いつの間にか敵は一人ではなく、大勢であるように誤伝されたらしく、あそこの露路に五人居ましたぞ、勘兵衛殿のお長屋の塀に添って、三人抜刀して居りましたぞなどと、不安そうに云い合ったりした。

辻を人影の走って行くのが見えたり、屋敷の庭の松の木などに登って、様子を窺っている人影なども見えた。

と一つの人影が、月光を避けて家の塀の陰を、それからそれと伝わって、この一画から遁れ出て、下谷したやの方へ行こうとするらしく、そろそろと歩いて行くのが見えた。

ほかならぬ水品陣十郎であった。

もとどり

髻むすが千切れてバラバラになった髪を、かき上げもせず額にかけ、庄右衛門を切った血刀を、袖の下へ隠しながら、跣足はだしのまま歩いていった。

辻を左へ曲がった途端、

「出た——」

「やれ！」

劍光！ 足音！

五人の武士が殺到して来た。

「……………」

無言でサ——ツ。

「ギャ——ツ」

「ワツ」

仆れた。

生死は知らず二人の武士は仆れ、三人の武士は一散に逃げた。

そうしてこここの地点から、陣十郎の姿も消えていて、霜の下りたような月光の中に、のたうつている二人の負傷者が、地面を延びつ縮みつしていた。

中山右近次と伊丹佐重郎、その両家に挟まれた、黒い細い露路くろの中を、この頃陣十郎は歩いていった。

さすがの彼も疲労したらしく、時々よろめいたり立ち止まったりした。

丁字形の辻へ出た。

左右前後をうかがってから、右の方へ歩いて行った。

と、一人の夜廻りらしい男が、六尺棒をひっさげて、石材の積んである暗い陰から、鷲足をして忍び出て、陣十郎の後を追った。

足を払おうとしたのであろう、そろそろと六尺棒を横に構え、膝を折り敷くとヒュ——
ツと、一揮！ 瞬間にもう一つの人影が、これは材木の立てかけてある陰から、小鬼のよう
に躍り出た。

「ワツ」

クルクルと六尺棒が、宙に刎ね上って旋回し、夜廻りは足を空にして、丸太のようにぶ
つ仆れた。

陣十郎ははじめて驚き、前へ二間ほど速そくに飛び、そこでヒラリと振り返って見た。

一人の男が地に仆れてい、その傍らに一人の女が、血にぬれたあいくちヒ首あいくちを片手に持ち、片
手で衣装の裾をかかげ、月光に白々と顔を浮かせ、その顔を気味悪く微笑させ、陣十郎の
方を見詰めていた。

「陣十郎さん、あぶなかつたねえ」

「誰だ。……や、貴様はお妻」

「情婦いろを忘れちゃ仕方がないよ」

「うむ。……しかし……どうしたんだ」

「そいつアこつちで云うことさ。……一体こいつアどうしたんだえ」

「どうしたと云って……やり損なつたのよ」

「そうらしいね、そうらしいよ。……それにしてもヤキが廻つたねえ」

10

「ヤキが廻つたと、莫迦を云うな、人間時々しくじることもある。……それはそうとお前は どうして?」

「ここへ来たかというのかえ。……下谷の常磐ときわで待ち合わそうと、お前と約束はしたけれど、気になつたので見に来ると……」

「この騒動で驚いたか」

「それで物陰にかくれていると、この夜廻りが六尺棒でお前の足を払おうとしたので……」
「飛び出してグツサリ横ツ腹をか」

「とんだ殺生をしてしまったのさ」

「お蔭で俺は助かった」

「わたしやアお前の命の恩人、これから粗末にしなさんな」

「と早速恩にかけか」

「かけてもよかろう礼を云いな」

「いずれゆつくりと云うとしよう」

「そのゆつくりが不可いけないねえ」

「そうだ、ゆつくりは禁物だ。……どうともして早くここを遁れ。……しかし八方取りまかれてしまった」

「いいことがある、姿を変えな」

「姿を変えろ？ どうするのだ？」

「夜廻りの野郎の衣装を剥ぎ……」

「成程こいつア妙案だ」

物陰にズルズルと夜廻りの躰を、陣十郎は引っ込んで、自分も物陰へ隠れたが、出て来た時には陣十郎の姿は、武士から夜廻りに変わっていた。大小は脇腹へ呑んだと見え、鍔

の形だけふくらんで見えた。

「さてこうやって頼冠りをし、お前という女と手を取り合ったら、ドサクサまぎれの駈落者と、こう見られまいものでもないの」

「あたしやアちよつと役不足さ」

「贅を云うな。……さあ行こう」

歩き出したところへ四五人の武士が、警め合いましいながら近寄って来た。

「待て」

「へい」

「何者だ」

「ごらんの通りで……お見遁しを」

「うふ、そうか、おっこち同志か」

「へい」

「行け」

「ごめんなすって」

「これ、待て待て」

「何でございます」

「物騒な殺人者ひところしが立ち廻っているぞ。用心をして行くがいい」

「——へい、ご親切に、ありがたいことで。……」

三月が経ち初秋となった。

甲州方面から武州へ入るには、大菩薩峠を越し丹波川に添い、青梅おうめから扇町谷おおぎまちや、高たかは萩村ぎむらから阪戸宿さかどじゆく、高阪宿と辿つて行くのをもつて、まず順当としてよかつた。

この道筋を辿りながら、一人の若い武士と一人の娘とが、旅やつれしながら歩いていた。鳴澤しぎさわ主水わもんどと澄江すみえとであつた。

父の敵水品陣十郎を目つけ、討ち取つて復讐しようという、敵討ちの旅なのであつた。主水と陣十郎との関係は？

従々またいとこ兄弟まいたいとこという薄いものであつて、あの時からおおよそ三カ月ほど前に、飄然と鳴澤家へ訪ねて来て話を聞いて見れば、成程そんな親戚もあつたと、ようやく記憶に甦えつつくらいで、世話する義理などないのであつたが、寛大で慈悲深い庄右衛門は、そういうことにはこだわらず、陣十郎の懇願にまかせ、家へ寄食させて世話を見てやった。

敵討の旅

1

これが大変悪かった。

はじめのうちは陣十郎も、猫を冠つて神妙にしていたが、次第に本性を現わして、出ては飲み、飲んでは酔つて帰り、酔つて帰つては武芸の自慢をし、庄右衛門や主水の剣法を、児戯に等しいと嘲つたり、不頼ならずもの漢らしい風儀の悪い男女をしげしげ邸へ出入させたり、そのうち娘の澄江に対して横恋慕の魔手を出しはじめた。

澄江は庄右衛門の實の娘ではなく、一人子の主水と配妻めあわす目的で、幼児から養つて来た娘であり、この頃庄右衛門は隠居届けを出し、主水と澄江とを婚礼させ、主水を代わりに御前へ出そうと、心組んでいた折柄だったので、陣十郎の横恋慕は、家内一般から響蹙きざされた。

自然冷遇されるようになった。

冷遇されるに従つて、いよいよ陣十郎は柄を悪くし、ますます庄右衛門や主水の剣法を、

口穢く罵った。そこでとうとう腹に据えかね、あの日庄右衛門は庭へ下り立ち、陣十郎と立ち合った。立ち合つて見て庄右衛門は、広言以上に陣十郎の劍法が、物凄いものであることを知り、内心胆を冷やしたが、娘の澄江が仲に入ったため、意外にも陣十郎から勝を譲られた。しかし庄右衛門は考えた。この恐るべき悪劍法者を、このまま屋敷にとめ置いては、我家のためになるまいと。そこでその日茶を飲みながら、それとなく退去を命じてしまった。

これが陣十郎の身にこたえた。

彼としては勝をゆづつたのであるから、今後は厚遇されるであろう、そうして勝をゆづつたのは、澄江が出現したからで、澄江のためにゆづつたのである。だから今後はおそろく澄江も、自分に好意を持つだろうと、そんなように考えていたところ、事は全然反対となった。

そこで小人の退さかうらみ怨うらみ！　そういう次第ならと悪心を亢ぶらせ、翌夜不意に庄右衛門を襲い、寝所でこれを切り斃し、悲鳴に驚いて出て来た澄江を、得たりとばかりに引つ抱え、これも物音に驚いて、出て来た主水をあしらいあしらい、戸外そとへ走り出て遁れようとした。と、意外な助太刀が出た。

秋山要介や浪之助であった。

そこで澄江を手放したあげく、身を持って遁れ行方不明となった。

こうなつて見れば主水としては、なすべき事は一つしかなかつた。

敵討！

そう、これだけであつた。

父の葬式を出してしまうと、すぐに敵討のお許しを乞うた。

「よく仕れ」と闊達豪放の主君、榑原式部少輔様は早速に許し、浪人中も特別を以

て、庄右衛門従来の知行高を、主水に取りせるといふ有難き御諒、首尾よく本望遂げた上は、家督相続知行安堵といふ添言葉さえ賜つた。

「お兄様妾も是非にお供を」

いよいよ旅へ出るという間際になつて、こう澄江が云い出した。

「お父上が陣十郎に討たれました。その原因の一半は、妾にあるのでござりますから」
 こう澄江は主張するのであつた。

「女を連れての敵討の旅、それはなるまい」と主水は拒んだ。

「主君への聞こえ、藩中の思惑、柔弱らしくて心苦しい」

こう云つて主水は承知しなかつた。

「宮城野、みやぎの

しのぶは女ばかり、

姉きょうだい妹

二人で父の敵を、討ち取つたではござりませぬか」

2

だから私達兄妹二人で、父の敵を討ち取つたところで、不思議はないといふのであつた。そういう澄江の心の中には、自分達二人は許いいなすけ婚である、良人おとととなるべき主水が旅へ出、敵を搜索するとなれば、幾年かかるかわからない、その間寂しい家に籠つて、イライラして帰りを待つてゐるより、自分も未熟とはいひながら、田宮流小太刀の教授を受け、その方では目録を取つてゐる、まんざら迷惑の足手まといとはなるまい、その上殺されたお父様は、義理深い養父であり、かつは舅しゅうと父となる人であつた、実の父親へ尽くすよりも、もつと尽くさなければならぬお方だ、そのお方が一半は妾のために、あのような御最期をお遂げになつた、どうでも自分としては敵を討ちたい、それにお母様は数年前に死なれ、残つて孝養する必要はない、かたがたどうでも主水と一緒に、旅へ出たいという考えが、濃く強くあるのであつた。

主水としても拒絶はしたものの、実は一緒に旅へ出てもよい、なろうことなら一緒に行

きたいと、そう思っているのであった。行く行くは夫婦になる二人である、その一人を家へ残して置いて、帰期の知れない旅へ出る、幸い敵に巡り合っても、返り討ちにならないものでもない、そういう旅へ出て行くことは、心にかかる限りである。二人一緒に行つたなら、苦しい時にも悲しい時にも、分け合つて慰め合えるではないか。足手まといになるどころか、妹は小太刀ではかなりの使い手、現にあの夜あんな場合に、簪を抜いて男の急所、陣十郎の足の甲を突いて、急難を免がれたほどである。敵陣十郎はどうかというに、甲源一刀流では劍鬼のような使い手、自分のように新影流で、ようやく仮免許を受けたような者とは、段違いの名人である。自分一人では討つに難い、せめて妹が側そばにあれば——だから一緒に旅に行きたい、そう願っているのであったが、一藩の者からうしろ指をさされ、あれ見よ鳴澤主水こそは、親の敵を一人では討てず、女手を借りたわと云われることが、心外なことに思われて、断行することが出来なくなつたのであった。

「主君の内意をお伺いして」

よしと云つたら連れて行こう。こう不図ふと主水は考えつき、上役を介して伺いを立てた。と、主君が仰せられた。

「親の敵を二人の子が討つ、しかも一人は女とのこと、健気である。仕つかまつれ。聞けば澄江は

小太刀を使うとのこと、足手まといなどにはならぬであろう」

さらに奥方よりは澄江に対して、守袋と金一封をさえ、使者を以て下された。

上々吉の首尾であった。

こうして二人は旅へ出た。

先ず甲州へ出かけて行つた。

と云うのは陣十郎は寄食している間、過去に悪事でも犯しているためか、その過去について語ろうとせず、訊いても言葉を濁らせて、真相らしいことは云わなかったが、しかし鳴澤家に寄食する直前、甲州辺りの博徒の家に、賭場防ぎ即ち用心棒として、世話になっていたということを、問わず語りに語つたことがあつた。

雲を掴むような洵まことにあやふやな、あてにならないあてであつたが、その他には探すあてが無かつたので、二人——主水と澄江との二人は、ともかくも甲州へ行くことにした。

さて甲州へ行つて尋ねたところ、栗原宿の博徒の親分、紋兵衛という老人が、二人にとつてはかなり為になる、耳寄の話を話してくれた。

「お妻とかいう変な女を連れて、水品先生には三月ほど前に、たしかにこの地へ参られましたが、何と思つたか武州方面へ向け、すぐに出発なさいましたよ。あの人とくると武州方面にも、鼻屑はなぢにしている親分さんが、相当たくさんありますし、あの人の剣術の先生という人が、有名な小川の逸見多四郎様へんみなので、旁々かたがたあちらへ参られたのでしようよ」

これが紋兵衛の言葉であつた。

(甲源一刀流では宗家ともいふべき、逸見多四郎先生が、さては陣十郎の師匠だったのか) そう思つて主水はヒヤリとした。

(ではその逸見先生の屋敷に、ひそかにかくまわれているかもしれない)

そこで主水と澄江の二人は、武州をさして旅をつづけ、今や上尾宿あげおしゆくまで来たのであつた。

江戸はほんの眼の先まへにあり、自分の屋敷も眼の先まへにあつたが、敵の居場所さえ突き止めない先に、まさか屋敷へも立寄られない。こう思つて二人は江戸入りさえ避けて、すぐに上尾宿へ来たのであつた。

「お早にお着きで。……いらつしやいまし」

女中に案内されて上つたのは桔梗屋はたごやという旅籠屋であつた。

逸見家のある小川宿へ向け、実はすぐにも行きたいのであったが、うかうか行つて陣十郎のためにもしも姿を見付けられたら、返り討ちに逢わないものでもない、そんなように心配もされたので、まだ日は相当高かつたが、この宿へ足を止めたのであった。

往来に向いた部屋へ通された。

旅装を解いて先ずくつろぎ、出された茶で口を濡らしている時、

「馬大尽がお通りになる」と口々に囁す声が聞こえてきた。

(馬大尽とは何だろう?)

こう思つて主水は障子を開け、——部屋は二階にあつたので、欄干越しに往来を見た。

一挺の駕籠かごを取り巻いて、博徒らしい五人の荒くれ男と、博勞らしい四人の男とが、傍若無人に肩で風切り、往来の左右に佇んで、一種怖そうに一種好奇的に、この一団を眺めながら、噂している宿の人々の前を、東の方へ通つて行くのが見られた。

と、その中に深編笠をかむり、黒塗りの大小を門かぬぎに差し、無紋の羽織を一着した、浪人らしい一人の武士が、警護するように駕籠に引添い、悠々とした足どりで歩いていた。

(はてな?)と主水は眼を見張つた。

(陣十郎に似ているようだが?)

笠をかむっているので顔は見えず、そう思った時には通り過ぎていて、背後うしろ姿しか見えなかった。確かめることは出来なかったが、気にかかってならなかった。

「澄江、おいで、あれをご覧ください」

「はい、何でございますか」

脱ぎすてた衣装を畳んでいた澄江は、そう云い云い立って来た。

「あれをご覧ください、あそこへ行く武士を。……あ、いけない、曲がってしまった」

さよう、その時その一団は、行手にあつた四辻を、左の方へ曲がってしまった。

「お兄様、何なのでございますか？」

「わしの眼違いかも知れないが、陣十郎に似た浪人らしい武士が……」

「まあ」と澄江は眼を据えた。

4

「通って行つたとおっしゃいますので？」

「博徒と博勞らしい一団が、駕籠を護つて通つて行つたが、その中にその武士がまじつていたのだ」

「ではちよつとわたしが行つて、陣十郎かそうでないかを……」

「待て待て」と立ち上る澄江を制し、主水は思慮深く考え考え、

「陣十郎も敵待つ身、油断があらうとは思われぬ。あべこべに其方そちの姿を見付け、悪剣を揮わぬとも限らない。……もし彼がまこと陣十郎としても、見受けたところ博徒の輩の、賭場防ぎの用心棒として、住み付いている身の上らしく、さすれば今日や明日の中に、この地を去るものとも思われぬ。……馬大尽とは何者か、先刻さつきの一団は何者か、その辺りのことから十分に探つて、その上で事に取りかかった方が、安全のように思われる」
こう云つて澄江を動かさなかつた。

夕食の膳の引かれた頃、番頭が挨拶に顔を出した。

「ちと物をたずねたいが」主水は早速話しかけた。

「へい、何でございますか」

「馬大尽とは何者かな？」

「馬大尽でございますか」

「馬大尽じゃと囃されて行つた様だが、彼は一体何者かな？」

「木曾の大金持でございます」

「木曾の金持？ 信州木曾のか？」

「へい左様でございます。信州木曾谷福島宿の奥所、西野郷に住居いたします。馬持大尽様でございます」

「馬持大尽？ ははあ馬持の？」

「五百頭どころか一千頭にも及ぶ、たくさんの木曾駒きそごまをお持ちになって居られる、大金持の旦那様なので……お駕籠に乗って居られましたのが、その旦那様なのでございます」

「馬持の大尽様だから馬大尽？」

「へい、さようでございます」

「訳を聞いてみると不思議ではないな」

「へい、さようでございますとも」

「博徒風の男が五人ばかり、駕籠に付き添って行ったようだが……」

「高萩村の猪之松親分から、迎え出ました乾分衆こぶんで」

「高萩の猪之松？ 博徒の頭か？」

「へい左様でございます。……赤尾村の林蔵親分か、高萩村の猪之松親分か、並び称され居ります大親分で」

「それにしても木曾の馬大尽が、武州の博徒などと親しいとは？」

「それには訳がございます。……ご承知のこととは存じますが、木曾福島には毎年はんげし半夏至の候、大馬市がございまして、諸国から馬持や博労が集まり、いくらとも知れないたくさんの馬の、売買や交換が行なわれ、大おおにぎわ賑いをいたします」

「木曾の馬市なら存じて居る。日本的に有名じゃ」

「荒っぽい大金の遣り取りが行なわれますのでございます」

「もちろんそれはそうだろうな」

「そこを目掛けて諸国の親分衆が、身内や乾兒衆を大勢引連れ、千両箱や駒箱を担ぎ、景気よく乗り込んで行きました、各めいめい自の持場に小屋掛けをしまして、大きな盆を敷きますので」

「つまり何だな博奕をやるのだな」

「へい左様でございます。その豪勢さ景気よさ、大相もないそうでございます」

5

「賭場をひらくとは怪しからんではないか」

「などと仰せられても福島みづまの賭場、甲州こうしゅう身延みのぶさんおんえしきとほ山御会式賭場と一緒に、日本における二大賭場と申し天下御免なのでございますよ」

「ふうんそうか、豪勢なものだな」

「本名は井上嘉門様、西野郷の馬大尽様が、この馬うまいち市でお儲けになる金高、大変もない
そうでございます」

「云わずと知れた、そうだろうな」

「そこで親分方の乾分衆が、押しかけて行って無心をなさる」

「成程な、有りそうなことだ」

「それを一々嘉門様には、お取り上げなされてご合力なさる」

「感心だな。金があるからだろうが」

「親分方といたしましても、見て見ぬふりも出来ませんので、お訪ねをしてお礼を云う」

「義理堅い手合だ、そうだろう」

「嘉門様には一々逢われて、丁寧にご会釈なさるそうで」

「金持には珍しい心掛けだな」

「そこで諸国の親分衆と、嘉門様とはそんな関係から、ずっと永らく交際して居られ、嘉

門様が旅などなさいますと、その土地々々の親分衆が、争つて歓待なさいますそうで」

「ははあそうか、よく解つた」

「高萩村の猪之松親分とは、心が合うとでも申しましようか、わけても親しいご交際だそうで、馬市が終わると大金を持たれ、毎年のようにこの土地へ参られ、猪之松親分をお相手にして、上尾の宿がひっくり返るほどの、多々羅遊びをなさいます」

「フーンそうか、豪勢なもんだな」

「と云いましても抜目は無く、武州には小金井の牧場があり、牧馬や、牧牛が盛んでありますから、その間に牧主や博労衆などと、来年の馬市の交渉などを、なさいますそうでございませう」

「それはまあそうだろう」

「多々羅遊びをなさいまして、上尾の宿を潤しますので、馬大尽がおいでになったと聞くと、宿の人達は大喜びで、お祭のようにはしゃぎます」

「ところで馬大尽の同勢の中に、浪人風の武士がいたが、あれは一体何者かな？」

「用心棒でございますよ、猪之松親分の賭場防ぎの」

「で、何という姓名の者か？」

「さあ何と申しますやら、ああいう浪人衆は一人や二人でなく、猪之松親分の手許などには、五人六人と居りまして、居たかと思うと行ってしまい、行ったかと思うと新しいのが来る。いつもいつも変わりますので」

知りたいたいと思つた肝心のことが、これでは一向知れなかつた。主水もんども澄江すみえも失望したが、とにかく明朝宿を立ち、高萩へ行つて猪之松親分を探り、さっきの武士が陣十郎か否か、確かめて見ようと決心した。

ちようどこの夜のことであつた。

高萩の猪之松と張り合つている、赤尾の林蔵は乾児の藤作や、杉浪之助と連れ立つて、広谷ヶ原の賭場を抜け出し、野良路をかなり不機嫌そうに、上尾宿の方へ歩いていた。

思うように賭場に人が寄らず、自然テラの薄いのが、彼の不機嫌の原因であり、人寄りの悪いのは猪之松のためだと、そう思つてひどく不機嫌なのであつた。

(これまで来てくれた客人さえ、どうやらこの頃は俺を見切つて、猪之松の賭場へ行くらしい)

これが心外でならなかつた。

今牛若と小天狗

1

武州入間郡赤尾村に、磯五郎という目明めあかしがあり、同時に賭場を開いていて、大勢の乾こ児ぶんを養っていた。いわゆる二足の草鞋わらじであつて、渡世人からは卑怯であるとして、とかく悪口を云われるものであるが磯五郎ばかりは評判がよかつた。それは人間が出来ているからであつた。もう五十歳をいくつか出て元氣も衰えたところから、御用の方は聞いていたが、賭場や乾児の世話などは、倅せがれに委かせて隠居していた。

その倅が林蔵であつた。

この頃林蔵は二十八歳、小兵ではあつたが、精悍無類、それに大胆で細心で、父に勝る器量人、劍は父の磯五郎共々、秋山要介正勝に従いて学び、免許以上に達している。今牛若と綽名され、若親分として威望隆々、武州有数の大貸元であつた。

ところが入間郡と境を接する、高麗郡の高萩村に、猪之松という貸元があり、この頃年三十一歳、小川宿の逸見多四郎へんみに従ついて、甲源一刀流の極意を極め、小天狗という綽名を

受け、中年から貸元になり、博奕にかけてはほんの素人、それでいてひどく人気があり、僅かの間に勢力を延ばし、林蔵の大切な縄張りをさえ犯し、どっちかといえれば現在においては、貫祿からも人気からも、林蔵以上と称されていた。

そこで両雄並び立たず、面と向うと何気無い顔で、時候の挨拶から世間話、尋常の交際^{つきあ}はしていたが、腹の中では機会^{おひ}があったら、蹴込んでやろうと思っていた。

野良路には露があり、それが冷々と足を濡らした。

「杉さん、賭場をどうお思いかね？」

並んで歩いている浪之助へ、こう林蔵は声をかけた。

「今日始めて見た賭博の場、いや洵に愉快だった」

ほんとに浪之助は愉快そうに云った。

「一瞬間に勝負がつき、突嗟に金銭が授受される。……息詰まるような客人の態度。……細心な中盆の壺の振り方。……万事が真剣で緊張していて、見ても自ずと力が入る。

……」

「アツハハ大変ですねえ、お侍さんだけに渡世人と異^{ちが}って、物の見方が面白いや。……まあどうかあんなものへは、決してお手を出しませんように」

「いやわしはやるつもりだ。今日のはじめてのことであり、駒の張り方さえ解らなつたが、一日の見学でよく解つた。この次からはわしも張るつもりだ」

「いけませんよ杉さん、そいつは不可^{いけ}ない。あいつに手を出して味を覚^いえると、一生涯やめられません。……やればやるほど深みへ入り、財を失い人を悪くし、碌^{ろく}なことにはなりません」

「だろ^うとわしも思っている。だからわしはやろうというのだ」

「へー、そいつア変ですなえ」

「わしには物事が退屈なのだ。そこで何かしら退屈でない、全身でぶつかって行けるような物に、ぶつかりたいものと思つていたので。……博奕、いや結構なものだ。……当分こいつにぶつかって行くつもりで」

「呆れましたな、とんでもない話だ。……秋山先生に知れようものなら、あつしやアこつびどく叱られますよ。……お連れしなけりやアよかつたっけ」

「先生に知れちやア面白くない、こいつは秘密にして置くんだね」と浪之助はこう云うとクスクスと笑つた。

秋山要介や源女などと、浪之助がこの地へやって来て、林蔵の家へ止宿したのは、半月ほど前であつた。

あんな事件から親しくなり、浪之助はその後要介方へ出入りし、武術の話を聞かして貰つたり、新影流の教えを受けたりした。

ある日行くと要介が云つた。

「源女殿を連れて秩父地方に参る。よろしかったら貴殿もご同道なされ」と。

「秩父地方に何か用でも？」

「旨くゆくと大金を掘りあて、まずく行つても変わったことを、いろいろ経験しましょう」
「よ」

こう云つて要介は意味ありそうに笑つた。

「源女をお連れなさいますのは？」

「あの婦人おんなが——いや、あの婦人の歌が、秩父行きの原因でな。……秩父の郡小川村逸見こおり様庭の松の根、昔は在つたということじゃ。——と云うあの婦人のうたう歌が」

いよいよ意味ありそうに要介は云つた。

もつと詳しく聞きたいものと、そう浪之助は思ったが、それ以上要介が話さなかったの
で、いずれ聞くとして要介達と一緒に、そうした旅へ出て行ったら、無聊に苦しんでいる
自分にとつては、面白からうとそう思い、浪之助と一緒に行くことにした。

旅へ出ると何と要介は、すぐこの地へやって来て、林蔵方へ止宿してしまった。

が、何か画策しているらしく、一人でブラリと家を出て、二三日帰って来ないかと思え
ば、源女を連れて出かけて行って、やはり二日でも三日でも、帰って来ないようなことが
あつた。

林蔵の家へ来てからの浪之助は、決して退屈しなかつた。博徒、侠客、貸元などと呼ば
れる、この人間の社会生活が、珍らしく痛快であるからであつた。義理人情を旨として、
行ることといえは博奕であり、それで生活を立てている。勢力争い——縄張争い、こいつ
がコジレルと血の雨を降らす。親分乾兒の關係が、武士の君臣關係より、もつと嚴重で頼
母のもしい。巧言令色、追従などという、そういういやらしいことが行なわれず、生一本で正
直だ。

これが浪之助を喜ばせたのであつた。

(俺も博奕をやってみようかな)

そんなことを思つてそう思つたことを、こつそり乾児へ云つたことがあつた。

「親分に堅く云われて居るんで、杉さんに張らせちやアならねえって」

こう云つて乾児達は相手にしなかつた。

これだけが浪之助には心外であつた。

とうと浪之助は我慢しきれず、一度でいいから賭場を見せてくれと、今日林蔵へ押し立て頼んだ。

「仕方がないねえ」と云いながらも、断わりきれず浪之助を連れて、林蔵は自分の賭場の一つ、広谷ヶ原へ出かけて行き、今はその帰りなのであつた。

三人は野良路を歩いて行く。

「親分これからどうなさいます？」

乾児の藤作が声をかけた。

「杉さんにもつきあつて貰つて、山城屋へ行つて遊ぶとしようぜ」

「そう来なくちやアならねえところさ。第一お山やまさんが大喜びだ」

上尾宿一番の遊女屋山城屋、その前までやって来たが、見れば表が閉ざされていた。それでいて屋内からは賑かな、男女の声が聞こえてきた。

「親分どうも変ですねえ、表を閉じて遊ぶなんて、まず余つ程の大尽でなけりやア、当今年やるこつちやありませんぜ」

藤作はいくらかムカツ腹で云った。

「そうさ、こいつアちよつと変だ」

林蔵もいくらか怪訝そうに云った。

「戸をどやしつけてみましょうか」

「そうさな、ひとつひつ叩いてみねえ」

そこで藤作は戸を叩いた。

「へ——い、どなたでございますかな、今晩は都合で閉めましたんで。お馴染様であろうとご一現様であろうと、お断わりすることになってますんで」

わかいしゆう
若衆であろう潜戸の向こうで、こう素っ気なく挨拶をした。

「親分あれをお聞きですか、お馴染様であろうとご一現様であろうと、お断わりすると云っています」

「うむ、どうも仕方がねえな。ともかくももう一度俺の名を明かして、その若衆に掛合つてみな」

「へい、よろしゅうございます。……おいおい若衆、他でもねえが、赤尾の親分を知っているだろうな。お前のところのお山さんとは、切つても切れねえ仲だつてこともよ。今年暮ごろには受出してよ、黒板塀に見越の松、囲うつてことも知つてなけりやア嘘だ。その林蔵親分がな、ここにおいでなすつているのだ。ヤイこれでも戸をあげねえか」

「へい、さようでございましたか、赤尾のお貸元さんでございましたか。……野郎とうとう来やがったな」

「え、何だつて、何て云つたんだい？」

「いいえ何にも云やアしません。……ええどうも困りましたな。いつもでしたら家中総出で、お迎えするんですが、何しろ今晚は馬大尽様が、そのお山さんを相方にして、しかも家を総仕舞いに^{おっしや}して、誰もあげるなど有仰つて……」

その時林蔵が声をかけた。

「それじゃア何かいお山の客は、木曾の馬大尽井上^{いのうえかもん}嘉門様か？」

「へい、さようでございます」

「それじゃアどうも仕方がねえ。そうそうそう云えば井上大尽が、今日この土地へ来られたつてこと人の噂で聞いたつけ。此方俺も随分ご厄介になった方だ。……いやそれなら結構だ。そういうお方に可愛がられたとあつては、かえつてお山に箔がつく、いやそれなら結構だ。……杉さん、藤作、じゃア行こう。……笹屋へでも行つて飲み明かそうぜ」

三人は山城屋の門から離れ、五町ほど離れたこれも遊女屋の、笹屋というのへ乗り込んだ。

三人各自寝についた。

夜中に林蔵は眼をさまし、用を達すため部屋を出た。

内緒の前まで来た時である、

「林蔵親分はお気の毒な……」という、笹屋の主人の声が聞こえた。

（はてな？）と林蔵は足を止めた。

「林蔵親分はお気の毒な、お山さんの心の変わつたのも知らず、高萩の親分の来ているのを、馬大尽だと嘘を云われても、真に受けてこんな俺らの所へなんか、穏しくおいでなさるんだからなあ」

答える内儀おかみの声が聞こえた。

「お山という女の性悪には、妾わたしも驚いてしまいました。馬を牛に乗り換えるもいいが、日頃お二人さんの張合っているのを、百も二百も承知の上で、林蔵親分を袖にして、猪之松親分へ血道をあげ、狎なれつくとは性悪の骨張だよ」

林蔵は内緒の前を離れ、用を達すと裏梯子から、自分の部屋へ返って来た。

お山へ義理を立てるために、女を寝かしてはいなかった。

布団の上に胡座あぐらを組み、黙然として考え込んだ。

（お山はどうせ宿場女郎、売物買物で仕方ねえが、高萩の猪之松は顔役だ。四百五百の乾児共から、立てられている男じゃアねえか。俺とお山との関係を、知らねえこともねえはずだ。それでいて俺の女を取る。まあまあそれも仕方ねえとして、井上大尽だと偽って、俺の遊びの邪魔をするとは、男の風上にも置けねえ奴。……そうでなくてさえ俺と彼奴きやつとは、早晚腕づくで争わなけりやアならねえ。そういう立場に立っている。ヨ―シそれではこの機会に……）

折柄三番鶏の啼声がし、夜がそろそろ明けかけた。

(よし)と林蔵は立ち上り、身仕度をすると階下に下りた。

寝ずの番の若衆が土間にいたが。

「これは親分、もうお帰りで」

「うん、わしは、これから帰るが、連れの二人はまだ寝ている、起こさずにそのままにして置いてくれ」

「へい、よろしゅうございます」

潜戸から林蔵は外へ出た。

暁の霧が立っていて、宿の家々は薄れてい、往来を歩く人影も少なく、家々の戸はとぎされていた。林蔵は朝風に鬢を吹かせ、寝臭くなっている躰の汗を一度に肌から引き込ませ、足早に往来を歩いて行つた。宿を出ると街道で、野良が四方に展^{ひら}けてい、林や森や耕地があつた。左へ行けば赤尾村、右へ行けば高萩村、双方へ行ける分岐点、そこに六地藏が立っていて、木立がこんもり茂っていた。そこまで行くと立ち止まり、林蔵はしばらく考えたが、やがて木立の陰へ隠れた。

次第に時が経って行く。

やがて空が水色に色づき、それが次第に紅^{あかみ}味ざし、小鳥が八方で啼き出した。

と、その時上尾宿の方から、七人の人影が現われて、街道をこっちへ歩いて来た。
高萩の猪之松の一行であった。

三十一歳の猪之松は、色白で大兵で、品の備わった立派な男で、博徒などとは見えなかつた。高い太い鼻は凜々しかつたが、小さい薄い唇は、子供のように初々しく、女などにはどうにも愛されそうであった。結城ゆうきの衣装に博多はかたの帯、鮫鞆さめざやの長脇差を差している。

後の五人は乾児であり、もう一人は浪人らしい武士であった。

馬大尽井上嘉門を、乾児達へ出迎えさせ、定宿明石屋へ送り届け、自分も行って挨拶をし、上尾へ出て来たついでとあつて、乾児を連れて山城屋へ行き、この頃深間になつたお山を揚げ、一夜遊んでの帰途であつた。

六地藏の前までやって来た時、木陰から林蔵が現われた。

5

「高萩の、ちよつと待ってくれ」

林蔵は正面から声をかけた。

「おお、これは赤尾のか、どうして今頃こんな所に？」

猪之松はちよつと驚いたように、足を止めてそう云つた。

「何さ昨夜^{ゆうべ}上尾へ行つて、陽気に騒ごうと思つたところ、馬大尽が山城屋に来ていて、表を閉めての多々羅遊び、そこでこつちはすっかり悄氣^{しよげ}、つまらねえ所へ上つてしまい、面白くもねえところから、夜の引き明けに飛び出して、野面の景色を見ていたつてわけさ。

……見ればお前さんも朝帰りらしいが、上尾へでも行つたのかえ」

「うむ」と猪之松は苦い顔をし、当惑らしくそう云つたが、

「実は俺らもその通り、上尾へ行つて遊んだが、面白くもねえ待遇を受け、業を湧かしての帰り道さ。いやすつかり懲りてしまった」

「あんまり懲りてもいないようだが……そうしてどこへ上つたのかな？」

「楼^{うち}か、楼は、ええと笹屋だ」

「へえ、こいつは面妖だな。俺らの上つたのも笹屋だが、お前さんの噂は聞かなかつたぜ」
「はてな、それじゃア違つたかな」

「大違いの真ん中だろう。……まあそんなことはどうでもいい。そこで高萩の相談がある。聞けばお前さんは小川宿の、逸見^{へんみ}多四郎先生の、直弟子で素晴らしい手並とのこと、以前から一度立合つて、教えを受けたいと思つていた。ここで逢つたは何より幸い、あまり人

通りも無さそうだから、迷惑だろうが立合ってくれ」

「ナニ立合え？ …… 剣術の試合か？」

「それも是非とも真剣で」

「真剣勝負？」

「命の遣り取り！」

「……………」

猪之松は無言で眼を見張った。

しかし心では考えた。

（お山との関係を知つたらしい。そのお山だがこつちから手を出し、横取りしたというのではない。向こうからお膳を据えたので、林蔵との関係は知っていたが、そこは売物買物だ。こだわらずに膳を食べたまでだ。とはいえ林蔵の身になってみれば、気持のいいことはあるまいよ。 …… そんなお山のことばかりでなく、従来縄張りの争いから、気持の悪いことばかりが、双方の間にあつたはずだ。そこで林蔵はその葛藤を、今日一気に片付けようと、ていのいい真剣の試合に事寄せ、俺を討取ろうとするのだな）

ただし猪之松は昨夜山城屋が、林蔵に戸閉めをくれた上、馬大尽が来ているなどと、嘘

を云つたというようなことは、夢にも知つてはいなかつた。というのは山城屋の若衆の、それは勝手のあつかいだったからで。猪之松はあの晩お山の頼みで、総仕舞いをしてやつたばかりなのであつた。

「どつちみち何時かは俺と林蔵とは、命の遣り取りをしなければならねえ、そこ迄の事情に逼つている。と云つたところでこんな往来で、しかもこんな朝っぱらに、試合などに事寄せられて、勝負をするのは気色が悪い、ここは一先ず避けることにしよう」

林蔵よりは年長であり、思慮も熟している猪之松だったので、そう腹を定めると笑顔を作つて云つた。

6

「いかにも俺は逸見先生へんみから、劍術を仕込まれてはいるけれど、聞けばどうしてお前さんこそ、劍道にかけては鬼神と呼ばれる、秋山要介先生から、極意を授かっているとのこと。とても俺など敵いそうもない。まあまあ試合はお預けとしようよ」

「それじゃア何かな……」と林蔵は、少し急ぎ込み進み出た。

「勝負はしねえとこういうのか？」

「そうさ、勝負は、いずれその中、盆ほんごぎ座の上でするとしよう」

「ほほうそれじゃア博奕打は、盆座の上で勝ちさえすりやア真劍勝負には及ばねえと、こ
うお前さんは云いなさるのか」

「まあそういったところだろう。無職渡世の俺らには、何より賽コロの勝負が大事、刃物
三味は二の次さ」

猪之松は冷やかに云い放し、口をゆがめて嘲るように笑った。

林蔵はいよいよ急き立ったが、グツと抑えてこれも嘲笑し、

「そうかお前さんがそういうふうなら、真劍勝負は止めましょう。がその代り今日これか
ら、高萩の猪之松は渡世に似合わず、刃物を恐れる卑怯者、赤尾林蔵の手並に怯え真劍勝
負を拒断ことわったわと、関東一円触れ廻つても、決して苦情は云うまいぞよ」

云いすてるとペツと唾を吐き、グルリと猪之松へ背中を向け、街道を赤尾村の方へ歩き
出した。

「おい赤尾の、ちよつと待ちな」

怒った猪之松の声がした。

「用か」と振り返った林蔵の前に、猪之松の抜いた長脇差が、白く真直に突きつけられて

いた。

「や、とうとう、それでも抜いたか！」

「そうさ、それまでこの猪之松に、真劍勝負を望むなら、俺も男だ引きはしねえ。気持よく相手になろうじゃねえか。……やいやい手前達……」と振り返り、乾児達へ声をかけた。

「赤尾のと俺との真劍勝負、手を出しちやアならねえぞ。もし俺が殺されたら、そうさな骨だけは拾ってくれ。……それから水晶先生もだ……」

こう云うと猪之松は編笠を冠った、浪人武士の方へ顔を向け、

「貴郎あなたも助太刀などなされずに、最後まで見ていておくんなせえ」

「心得てござる」と云いながら、その武士はゆるゆると編笠を脱いだ。

鳴澤庄右衛門を討つて取り、甲州へ一旦落ち延びたが、主水が敵討にやって来るであろう、燈台かえって下暗し、それに武州には甲州以上に、親しくしていた博徒があり、身上の治まらぬところから、破門はされたが剣道の師匠、逸見多四郎先生も居られる、かたがた都合がよかろうと、甲州から武州へ引つ返し、以前わけても世話になった高萩村の猪之松方に、賭場防として身を寄せた。それは水晶陣十郎であった。

脱いだ編笠を手に提げて、その陣十郎は立木に背をもたせ、

「お貸元同志の一騎討ち、またと見られぬ真劍勝負、とくと拝見いたしました。が、もし高萩の親分にもしものことがございましたら、きつと陣十郎林蔵殿を、生かしてお帰しはいたしませぬ」

云い云い気味悪く白い眼で笑った。

7

猪之松が林蔵へ声をかけた。

「さあ乾児どもへも云い聞かせた。横から手出しはさせねえつもりだ。二人だけの太刀打ち勝負、遠慮なくどこからでも切り込んで来なせえ！」

ピタリと正眼に太刀を構えた。

「さすがは高萩の見上げた態度、それでこそ男だ気持がいいや。……行くぞ——ツ」と叫ぶと赤尾の林蔵は、脇差を抜くとこれも正眼に、ピタリとばかりに引つ構えた。

新影流と甲源一刀流、相正眼の嚴重の構え、水も洩らさぬ身の固め、しばらくの間は位取ったばかりで身動き一つしなかった。

と、この時上尾の宿から、旅仕度をした一人の武士と、その連れらしい一人の女とが、

差し出たばかりの朝日を浴びて、急ぎ足で歩いて来た。

鳴澤しぎさわ主水わもんどと澄江すみえとであった。

昨日見かけた編笠の武士が、敵水品陣十郎か否か、それを窃ひそかに確かめようと、上尾宿の旅籠桔梗屋を立つて、高萩村へ行こうとして、今来かかった途中なのである。

「お兄様あれは？」と澄江は云つて不安そうに指を差した。

博徒風の人間が切り合つてい、数人の者がそれを見ている、そういう光景が行手に在り、鏘然その時一太刀合い、日光に白刃が火のように輝き、直ぐに引かれて又相正眼、二人が数間飛びすぎり、動かずなつた姿が見られた。

「切り合いだな」と主水は云つた。

「博徒同志の切り合いらしい」

「かかりあいなどになりましたは、大事持つ身迷惑千万、避けて行くことにいたしましよ
う」

「それがよかろう」と主水は云つた。

「ではその辺りから横へ逸れて……お待ち」と不意に足を止め、主水はじつと一所を見詰めた。

「立木に背をもたせかけ、切り合っている武士がいる。昨日見かけた編笠の武士だ！」
 「まあ」と澄江は声をはずませ、主水へ躰を寄り添わせたが、

「あのお侍さんでございませうか。……おお、まさしく水品陣十郎！」

「編笠を脱いだあの横顔、いかさま陣十郎に相違ない！ ……妹！」

「お兄様！ 天の賜物！」

「とうとう逢えた！ さあ用意！」

「あい」と云うと懐中していた、長目の懐刀の紐を解いた。

尋ねる親の敵の姿を目前にまざまざ見かけたのであった。思慮深い主水もいくらか上気し、敵陣十郎の周囲にいる博徒が、陣十郎に、味方をして、刃向って来ないものでもない、そういうことさえ思慮に入れず、討って取ろうの一心から、妹澄江と肩を並べ、陣十郎に向かつて走りかかり、正面に立つと声をかけた。

「珍らしや水品陣十郎、我等兄妹を見忘れはしまい。よくぞ我父庄右衛門を、悪逆無道にも討ち果したな。復讐の念止みがたく、汝を尋ねて旅に出で、日を費すことここに三月、天運叶って汝を見出でた！ いざ尋常に勝負に及べ！」

復讐乱闘

1

声をかけられて陣十郎は、さすがに狼狽し顔色を変え、背にしている木立から素早く離れ、その木立を前に取り、しばらくは無言で主水兄妹を、幹越しに睨み息を詰めた。

が、思案が定まったらしい、蒼白であった顔色へ、俄かに赤味を加えたが、

「おお汝らは鳴澤しぎさわ兄妹、何の見忘れてよかろうぞ、汝らの父親庄右衛門のために、堪忍ならぬ恥辱を受け、武士の面目討ち果し、立ち退いて来たこの拙者だ、何の見忘れてよかろうぞ。それにもかかわらずこの拙者を、敵呼ばわり片腹痛し、怨みといえそれがしば某こそ、かえつて汝らに持つ身なるわ！ ……敵討とな、笑止千万！ 逆怨みとは汝らのことよ！

……が、逆怨みしてこの拙者を、討ち取るとあらば討ち取られよう。とはいえ只では討ち取られない。いかにも尋常の勝負してくれよう。その上での命の遣り取り！ あべこべに汝ら討つて取られるなよ。……やあ高萩の兄弟衆、お聞き及び通りご覧の如く、こやつら二人逆怨みして、拙者を敵と云いがかり、理不尽にも討ち取ろうといたします。拙者は一人相手は二人、日頃の誼よしみ兄弟分の情、何卒お助太刀下されい」

卑怯にも黒白を逆に云い做らし、思慮の浅い博徒を唆り、主水兄妹を討ち取らせようと、そう陣十郎は誠にやかに叫んだ。

「合点だ、やれ！」と応じたのは猪之松の乾兒こぶんの角太郎であつた。

「水品先生を敵と狙う！ とんでもねえ奴らだ料ツてしまえ！」

「合点だ、やれ！」

「やれやれやれ！」

八五郎、権六、松、峯吉、無法者の四人の乾兒達も、そう叫ぶと脇差を一斉に抜いた。親分猪之松と林蔵とが、二人ばかりの果し合いに、今も白刃を構えている、親分の命で手出しが出来ない、謂う所の脾肉の嘆！ それを啣っていた折柄であつた。切り合う相手が現われた。理りひきよくちよく非曲直は二の次である、血を見ることが出来、切り合うことが出来る、これだけでももう満足であつた。

「やれやれ！」と喚きをあげながら、主水と澄江とを引つ包み、無二無三に切りかかった。主水は驚き怒つたが、妹澄江を背後に囲うと、

「やあ方々理不尽めさるな、我等は主君よりお許しを受け、免状までも頂戴致し、公に復讐に参つたものでござる！ 怨敵は水品陣十郎、その陣十郎をお助けなさるとは、伊達衆

にも似合わざる無道の振舞、お退き下され、ご見物下され！」

必死の声でそう叫んだ。

と、姦物陣十郎は、鷺を鳥と云いくるめる佞弁、

「あいや方々偽いつわりでござるぞ、彼らの言葉をお信じ下さるな。免状を持った公の復讐何の何の偽りでござる。こやつら二人父の不覚が、身の破滅となり知行召し上げ、屋敷を放逐されたはず、人の噂で聞き及び居ります。所詮は浪人の窮餘の索、拙者を討ち取ってそれを功に、帰参願おうの手段でござる！」

2

「そうとさそうとさ！」

「それに相違ねえ」

「何でもいいから料ツてしまえ！」

角太郎はじめ五人の博徒は、主水兄妹に切りかかった。

こうなつては問答は無益、切り払って危難をまぬがれ、陣十郎に近寄つて、討ち取るより他に策はなかつた。

「理非を弁えぬ汝ら博徒、その儀なれば用捨はならぬ、切つて切つて切りまくり、五ツ屍を積んで見せる……妹よ、澄江よ、背を合わせて……」

「あい」と云うと妹澄江も、血相変えて一所懸命、懐刀逆手に真向に構え、背中を主水の背中に附けた。

「くたばれ、野郎！」とその瞬間、主水目掛けて躍りかかったは、剣法は知らぬが喧嘩には巧みの、切り合いには手練の角太郎であつた。

音！ 鏘然、つづいて悲鳴！

捲き落とされた脇差が、土煙立つ街道に落ち、肩を割られた角太郎が、足を空ざまに宙に上げ、

「切られた——ツ、畜生！ ……畜生！ 畜生！ 畜生！」

倒れてノタウチ這い廻り、はだけた胸を血で濡らした姿が、悲惨に醜く眺められた。

「ワ——ツ」と博徒どもは一度に退いた。

「妹、つづけ！」とその隙を狙い、開けた人垣から突き進み、陣十郎目掛けて主水は走つた。

「陣十郎！ おのれ 汝！ ……尋常に勝負！」

真向に刀を振り冠り、走り寄られて陣十郎は、既にこの時抜いていた刀を、これは中段に構えながら、主水の凄じい氣勢に壓せられ、劍技はほとんど段違いの程度に、自身おのれ勝つては居りながら、ジタジタと後へ引き、しばらく姿勢を保ったが、敵わぬと知ったか何たる卑怯！ 街道を逸れて耕地の方へ主水へ背を向け走り出した。

「逃がしてなろうか、汝陣十郎！ 穢おのれき振舞い、返せ、勝負！」
主水は罵つて後を追つた。

二十間あまりも追つたであろうか、

(妹は?)と気が付き振り返つた。

四人の博徒に取り囲まれ、切りかかる脇差を左右に反かわし、脱けつ潜りつしている澄江の姿が、街道の塵埃ほこりを通して見られた。

(南無三、妹を死なしてなろうか!)

「澄江ヨ——ッ」と呼ばわり引つ返したが、

「主水勝負！」と陣十郎の声が、刹那背後から聞こえてきた。

「心得たり！」と振り返つた主水の、眼前を閃めく白刃の光!

「音！」

鏘然！

陣十郎と、はじめて主水は一合した。

が、次の瞬間には、互いに飛び違い構えたが、敵かなわぬと知ったか復またも卑怯、陣十郎は走り出した。

「待て、汝、卑怯未練！ 逃げようとして逃がそうや！」

追っかけたが妹が気にかかり。

「澄江ヨ——ツ」と呼ばわり振り返った。

3

「お兄イ様ア——ツ」と答える澄江の声が聞こえ、つづいてワ——ツという悲鳴が聞こえ、その澄江に突かれたのであろう、一人の博徒が横腹を抑え、街道から耕地へ転がり落ちる姿と、散った博徒の間を突破し、こっちへ走って来る澄江の姿とが見えた。

「妹、見事！……兄はここじゃ！」

呼ばわった主水の背後から、

「勝負！ 主水！ 参るゾツ」という、陣十郎の声が聞こえた。

「参れツ」と叫んで振り返り、途端に日の光を叩き割り、切り込んで来た陣十郎の刀を、鏢際を受けて頭上に捧げ、皮を切らせて敵の肉を切る、いりみしやしんぶつま 入身捨身仏魔の劔！ それで切り込んだ主水の刀を、何と無雑作に陣十郎は、受けもせず横に払い捨て、刀を引くと身を翻えし、またも一散に走り出した。

策有つて逃げると感付かぬ主水、

「またも逃げるか、未練の陣十郎！ 遁さぬ、返せ、父の敵！」

叫んで追ひ、追いつつ振り返り、

「妹ヨーツ、ここじゃ、兄はここじゃ！ ……待て陣十郎、逃げるとは卑怯……妹ヨーツ」と十間二十間！ 既に二町を街道から離れた。

行手に巨大な藪があり、丘の如くに盛り上っていたが、その裾を巡って走って行く、陣十郎の後を追ひ、これも藪を向こうへ廻り、振り返つても街道は見えず、妹の姿も見えなくなつた時、

「主水」と叫んで陣十郎が、おのれ 自身と後へ引つ返して来、

「フ、フ、フ、不愠の痴者、しれもの ここまで誘き寄せられたか。……誘き寄せようため逃げた拙者、感付かぬとは扱々さてさて笑止、が、そこがこつちの付目、人目あつては罽殺しは出来ぬ、

今は二人だ、二人ばかりだ、逃がそうとて拙者は逃げぬ、逃げようとして汝逃がさぬ、藪を盾に人目を遮り、久しく血を吸わぬこの業物わざものに、汝の血を吸わせてやる。……ゆるゆると殺す、次々に切る。……まず最初に右の手、つづいて左の手を切り落とす。つづいて足じゃ、最後に首じゃ！……前代未聞の返り討ちに、汝逢ったと閻魔の片で、威張つて宣のたまり通れるよう、むごたらしくきつと殺してやる！……さあこの構え、破らば破れッ」

極悪非道の吸血鬼、変質性の惨虐の本性、今ぞ現わして陣十郎は、甲源一刀流上段の構え、左足を踏み出し太刀を振り冠り、左手の拳、柄頭の下から、憎々しく主水を横平に睨み、鏢際を握った右の手で、からかうように太刀を揺すぶった。

勝れた業の恐ろしさよ！ 振り冠られた刀身は、凍った電光のそのように、中段に太刀を付けた主水の全身を、威嚇し圧して動かさなかった。

八方へ心を配ったあげく、博徒一人をとにかく切った。人一人切った心身の疲労つかれ、尋常一様のものではない。のみならず敵を追い二町の耕地を、刀を振り振り走つて来た。その疲労とて一通りではない。主水は疲労に疲労していた。そのあげくに向けられた悪剣！

眩む眼！ 勢はずむ呼いき吸！

4

博徒^{しめまつ}松^{まつ}の横腹を、懐劍で一突き突いて倒し、散った博徒の間を突破し、陣十郎の後を追う、兄主水に追い付こうと、澄江は疲労に疲労た足で、耕地を一散に走ったが、懲りずに追い縋る博徒三人に、又も囲まれ切り込まれた。

「まだ来る気か！」と女ながらも、田宮流の小太刀を使つては、男勝りの手練の女丈夫、しかし獲物は懐劍であつた、相手の脇差は受けられない、そこで飛び違い遣り違わせ、機を見て突きつ切りつして、

「お兄子様ア——ツ」と呼ばわり呼ばわり、主水の後を追おうとした。

と、気づいて主水の方を見た。

主水の姿が見えなくなつていた。

驚き、落胆し、放心しようとした。

クラクラと眼が廻り、全身の力が一時に脱け、腕が烈しく動悸打ち、眼の先が暗くなつた。

たつた先刻^{さつき}まで陣十郎を追い追ひ、自分の名を呼んで力づけてくれた兄！ その兄はどこへ行つた？ 陣十郎のために殺されたか？ 広い耕地、飛々にある林……丘、大藪、畦、

小川……遙か彼方には秩父連山！……朝の日が野面にいっぱいに充ち、小鳥が四方に翔けている。……兄の姿も陣十郎の姿も、その野面のどこにも見えない。

「お兄イ様ア——ツ」と呼ばわった。

こたま木精さえ返つて来なかつた。

クラクラと眼眩み倒れようとした。

そうでなくてさえ荒くれ男、数人を相手に闘つたあげく、一人を突いて倒していた。疲労困憊その極にあつた。しかも今も切りかかつて来ている。そこへ兄であり恋人であり、許いいなすけ婚でもある主水の姿が見えなくなつてしまったのである。

恐怖、不安、焦燥、落胆！

フラフラと倒れかかつた。

「くたばれ——ツ」とばかりそこを目掛け、博徒権六が切り込んだ。

あやうく反わしたが躓つまずいて、澄江はドツと地に倒れた。

「しめた」と峯吉が切り下ろした。

パ——ツ！ 倒れた姿のまま、早速の気転土を掬い、澄江は峯吉の顔へ掛けた。

「ワツ」

よろめき眼を抑え、引いたのに代つて八五郎が、

「洒落臭え女郎！」と突いて来た。

ゴロリ！ 逆に八五郎の方へ、寝返りを打って片手を延ばし、八五郎の足の爪先を掴み、柔術の寝業、外へ捻つた。

「痛え！」

悲鳴して倒れた途端に、澄江は飛び起きフラフラと走り、

「お兄イ様ア——ツ」と悲しそうに呼んだ。

が、これがほとんど最後の、彼女の懸命の努力であつた。

二間あまりも走つたが、不意に立ち止まるとブルブルと顫え、持っていた懐刀をポタリと落とし、あたかも腐木が倒れるように、澄江は地上へ俯向けに倒れた。

意識が次第に失われて行く。

その消えて行く意識の中へ、入つて来る博徒達の声といえは、

「殺すのは惜しい、担いで行け」

澄江を担いで三人の博徒が、高萩村の方へ走り出した時、街道へ二つの人影が現われ、指差ししながら話し合った。

杉浪之助と藤作であつた。

今朝笹屋で眼をさまして聞くと、親分林蔵は少し前に、一人で帰つたということであつた。そこで二人は少なからずテレテ、急いで仕度したくをし出て来たところで、みれば博徒風の三人の男が、若い一人の女を担ぎ、耕地を走つて行くところであつた。

「この朝まだきに街道端で、女を誘拐かどわかすとは不埒千万、藤作殿嚇して取り返しませうぞ」

「ようがす、やりましょう、途方もねえ奴らだ」

二人は素早く追いついた。

「やい待て待て、こいつらア——ツ」

まず藤作が声を上げた。

「女を誘拐かどわかすとは何事だ！ ……ヨ——、汝うぬらア高萩の、猪之松身内の八五郎、峯吉！」

「何だ何だ藤作か！ チエツ、赤尾の百姓か！」

峯吉が憎さげにそう叫んだ、

「百姓とは何だ、溝鼠。……杉さん、こいつらア猪之松の乾兒こぶんで……」

それ以前から杉浪之助は、担がれている女へ眼をつけたが、姿こそ旅装で変わってはいたが、いつぞやの夜、本郷の屋敷町で、危難を秋山要介と共に、救ってやった鳴澤しぎさわ家の娘、澄江であることに気がついた。

「やあ汝おのれら！」と浪之助は叫んだ。

「その女は拙者の知人、汝らに担がれ行くような、不束ふつつかのある身分の者ではない。……放せ！ 置け！ 汝等消えろ！」

「何を三ピン」と八五郎は怒鳴った。

「どこの二本差か知らねえが、俺らの獲物を横から来て、持って行こうとは気が強えや！ ……問答は無益だ叩きのめせ！」

「よかろう、やれ！」と命知らず共、担いでいた澄江を抛り出すと、脇差を抜き無二無三に、浪之助と藤作とに切つてかかった。

「殺生ではあるがその儀なれば」

刀を引き抜き浪之助は、ムーツとばかりに中段につけた。

性来墮弱の彼ではあり、劍技にも勝れていない彼ではあったが、三カ月というもの秋山

要介に従い義侠の精神を吹き込まれ、かつは新影流しんかげりゆうの教えを受けた。名人から受けた三カ月の教えは、やくぎの師匠の三年に渡る、なまくらの教えより効果がある。今の浪之助というものは、昔の浪之助とは事変わり、気魄横逸勇氣凜々、真に大丈夫の倅おもかけがあつた。その浪之助に構えられたのである。

博徒共は怖気を揮つた。

三人顔を見合わせたが、誰云うともなく、

「いけねえ」

「逃げろ！」

三方に別れて逃げてしまった。

と見て取つた浪之助は、刀を鞘へ納めるのも忙しく、澄江の側へ走り寄り、地に膝突き抱かかき介え、

「澄江殿！ 澄江殿！」と呼ばわつた。が気が付き、

「これは不可いけない。氣絶して居られる、では、よし」と、急所を抑え「やッ」と活だ！

「あツ」と澄江は声を上げ、息吹き返し眼を見開らき、茫然と空を眺めたが、
「お兄子様ア——ツ」と恋しい人を、苦しい息で血を吐くように呼んだ。

「拙者でござるぞ、杉浪之助で！ 気が付かれたか、拙者でござるぞ！」

そう呼ぶ浪之助の顔を見詰め、しばらく澄江は不思議そうに、ただハツハツと荒い息を
したが、

「お、お——、貴郎様は……いつぞやの晩……あやうい所を……」

「お助けいたした杉浪之助！ 再度お助けいたしたは、よくよくの縁、ご安心なされ！
それに致してもこの有様は？」

「は、はい、有難う存じます。ご恩は海山！ ご恩は海山！ ……お兄子様ア——ツ」と
またも呼んだ。

「お兄子様とな？ 主水殿か？ ……その主水殿、如何なされた？」

「敵……父上の……父上の敵……陣十郎に巡り逢い……切り合う間に兄上には、陣十郎に
誘き出され！ ……向こうへ、向こうへ、向こうへ行き……そのまま姿が見えずなり……

お兄子様ア——ツ」とまたも呼び、再び気絶したらしく、ぐったりとなりもたれかかった。
「おおそうか、さてはお二人、兄妹お二人敵討ちの旅に、お出でなされたと伝聞したが、

その敵の水品陣十郎に、おおそうか、さてはここで、お出逢いなされて切り合ったのか。
 ……それにしても無双の悪剣の使手、陣十郎と太刀打ちしては、主水殿に勝負はない。…
 ……その陣十郎に誘き出された？ ……一大事！ 捨てては置けぬ！ ……とは云えどこへ
 ？ どこへ主水殿は？」

向こうへ向こうへと云ったばかりで、どの方角へ行つたとも云わず、再度澄江は気絶してしまった。

「どこへ？ どっちへ？ 主水殿は？」

「杉さん……てつきり……高萩村だア！」

それまで側そばに佇んで、気を揉んでいた藤作が叫んだ。

「このお女中を引つ担ぎ、連れて行こうとしたからにやア、先刻さつきの奴らア陣十郎とかいう、悪侍の一味でござしよう。その先刻の奴らといえは、高萩村の猪之の乾兒で。ですから恐らく陣十郎って奴も猪之の家にいるのでござんしよう。ということであつてみれば陣十郎とかいう悪侍、主水様とかいうお侍さんを、高萩村の方角へ……」

「いい考え、そうだろう。……では拙者はその方角へ……藤作殿頼む、澄江殿の介抱！」

「……」

「合点、ようがす、貴郎は早く……」

「うむ」と云うと股立取り上げ、大小の鏢際束に掴み、大藪のある方角とは、筋違いの方角高萩村の方へ、浪之助は耕地の土を蹴り、走った、走った一散に走った。

この時上尾宿の方角から、馬大尽を迎えに出、慰勞とあつて猪之松により、乾兒共々上尾宿の、山城屋で猪之松に振舞われ、少し遅れてその山城屋を出た、高萩村に属している、四人の博勞が酔いの覚めない足で、機嫌よくフラフラと歩いて来た。

7

それへぶつかつたのは八五郎であつた。

浪之助のために威嚇され、盲目滅法に逃げて来た、猪之松の乾兒の八五郎であつた。

「いい所で逢つた、さあ頼む。……事情は後でゆっくり話す。……今は頼む、加勢頼む。

……玉を……女だ……女を一人……担いで行くんだ、一緒に来てくれ」

息せき喋舌る八五郎の言葉に、獵り立てられた四人の博勞は、

「ようがす、やりやしよう、合点だ！……誘拐と来ちやアこつちの領分、まして高萩の

お身内衆のお頼み恐れるところはありやアしねえ。それ行け、ワー——ツ」と走り出した。

来て見れば先刻の侍は居らずに、藤作一人が途方に暮れたように、気絶している女の周囲を、独楽のようにグルグル廻っていた。

そこへ押し寄せた五人の同勢、

「この女だ、それ担げ！」

ムラムラと寄つたのに驚いた藤作、

「こいつらア……馬方め……八五郎もか！ ……また来やがったか、汝懲りおのれずに」

喚いて脇差を引っこ抜き、振り舞わしたが多勢に無勢、すぐに脇差は叩き落とされ、それに博労の喧嘩上手、土を掬うとぶつ掛けた。

口に入り眼に入った。

「ワ——ツ、畜生！ 眼潰しとは卑怯な」

倒れて這い廻る藤作を蹴り退け、澄江を担いで五人の者は、耕地を横切り、丘、森、林、畦や小川を飛び越え躍り越え、どことも知れず走り去った。

大藪の陰に刀を構え、睨み合っている陣十郎と主水、二人の構えには変わりはなかった。上段に振り冠つた陣十郎は、その刀を揺すぶり揺すぶり、命の遣り取りのこの際にも、

大胆不敵悠悠寛々一面相手の心を乱し、あせらせ焦心せ怒らせようと、憎々しく毒々しく喋舌りつづけた。

「さあさあ主水切り込んで来い。籠手を打て、右籠手を！ と拙者は引つ外し、大きく右足を踏み出して、貴様の肩を叩き割る。……それとも諸手に力を集め、胸元へ突を入れて来てもいい。と拙者はあやなして反わし、あべこべに貴様の咽喉を刺す……が、貴様も多少はできる腕、思うにその時右足を引き、拙者の切先を右に抑え、更に左足を引くと共に、又切先を右に抑えよう。アツハハハ、畳水練、道場ばかりで試合をし、真に人間を殺したことの無い、貴様如き懦弱の武士の、やり口といえば先ずそうだ。……そこで拙者はどうするか？ ナーニそのつど逆を取り、左足を進め右足を進め、位詰めにしてグングン進み、貴様を追い詰め追い詰める。……追い詰めたあげくどうするか？ さあそのあげくどうするか？」

云い云い陣十郎は言葉通り、左足を進め左足を進め、一步一步ジリリ、ジリリと、主水を藪の方へ追い詰めて行った。

主水は次第に後へ下った。

飛び込もうとしても飛び込めず、切りかかろうとしても切りかかれぬ。

業の相違、伎倆うでの差違、段違いの悲しさは、どうすることも出来ないものであった。

8

追い詰められながらも妹のことを、主水は暇なく思っていた。

多勢に一人、しかも女、どうしただろうどうしただろう？ ……叫声がする！ 悲鳴が聞こえる！ ……殺されたのではあるまいか？ ……背後うしろは大藪、それに遮られて、俺の姿は見えないはずだ。案じていよう悶えていよう。……

上段に冠っていた陣十郎の刀が、忽然中段に直ったのは、主水が全く藪の裾に追い詰められた時であった。

「さあ追い詰めた！ さてこれから……」

陣十郎はまた喋舌り出した。

「退くことはなるまい、切り込んで来い、親の敵のこの拙者だ、さあ討ち取れ、切り込んで来い！」

主水の咽喉へ切先を差しつけ、左の拳を丹田より上、三寸の辺りにびたりとつけ、しかも腹部より二握りを距て、刀を構えて静まり返り、今度こそ切るぞ！ からかうのは止め

だ！　こう決心をしたらしく、肺腑を抉るような鋭い眼で、主水の眼を睨み詰めた。

切先と眼とに圧せられ、主水はさながら蛇に魅入られた蛙、それかのように居縮んでしまった。同じく中段に構えていたが、刀身が次第に顫えを帯び、下へ下へと下ろうとする。ハツハツと呼吸が忙しくなり、睨んでいる眼が霞もうとする。流るるは汗！　上るは血液！

と、フーツと主水の精神が、体から外へ脱けるように思われ、心がにわかに恍惚となつた。氣負けの極に起るところの、氣死の手前の状態であつた。

が、その時陣十郎の刀が、さながら水の引くがように、スーッと静かに冷たく、左の方へ斜に引かれた。

あぶない！　悪剣だ！　「逆ノ車」だ！　劍豪秋山要介さえ、破りかねると嘆息した、陣十郎独得の「逆ノ車」だ！　その序の業だ！　あぶないあぶない！　釣り出されて踏み込んで行つたが最後刀が車に返つて来る！　が、それも序の釣手だ！　その次に行なわれる大下手切り！　こいつだけは受けられない、ダーッとドツプリ胴へ入るだろう！　と、完全の胴輪切り！

その序の業が行なわれた。

釣られた釣られた主水は釣られた！ あッ、踏み出して切り込んだ。

一閃！

返った！

陣十郎の刀が、軽く宙で車に返った！

ハ——ツと主水！ きわどく反わせたが……

駄目だ！

見よ！

次の瞬間！

さながら怒濤の寄せるが如く、刀を返しての大下手切りだ——ツ！

「ワッ」

悲鳴！

血煙！

血煙！

いやその間に、一髪の間——大下手切りの行なわれる、前一髪の際どい間に……

秩父の郡こおり、小川村、

逸見へんみ様庭の松の根

そういう女の歌声が、手近かの所から聞こえてきた。

「あッ」と陣十郎は刀を引き、タジタジと数歩背後へ下った。

9

無心に歌をうたいながら、源女は大藪の中にいた。

いつも時々起こる発作が、昨夜源女の身に起こった。そこでほとんど夢遊病患者のように、赤尾村の林蔵の家を脱け出し、どこをどう歩いたか自分でも知らず、この辺りまで彷徨まよって来、この大藪で一夜を明かし、たつた今眼醒めたところであつた。

まだ彼女の精神は、朦朧もうろうとしていて正気ではなかつた。

島田の鬚かしがが崩れ傾り、細い白い頸うなじにかかつてい、友禅模様の派手な衣裳が、紫地の博多の帯ともども、着崩れて痛々しい。素足に赤い鼻緒の草履を、片っぼだけ突っかけている。夜露に濡れたため衣裳はしおたれ、茨や木の枝にところどころ裂かれ、手足も胸元も蕨蚊に刺され、あちこち血さえ出していた。

そういう源女は身を横倒しにし、草の上に延びていた。秋草の花——桔梗や女郎花や、

葛の花などが寝ている源女の、枕元や足下に咲いていた。栗色の兔がずっと離れた、萩の根元に一匹いて、源女の方を窺っていた。

彼女の頭上にあるものといえ、樺や、柏や、櫟くぬぎや、櫨はぜなどの、灌木や喬木の枝や葉であり、それらに取り縋り巻いている、山葡萄や蔦や葛であり、そうしてそれらの緑を貫き、わずかに幽かに隙すけて見える、朝の晴れた空であった。

藪を透して日の光が、深い黄味を帯びて射し込んで来ていて、地上の草や周囲まわりの木々へ、明暗の斑ふちを織っていた。

無心——というよりいつもいつも、心に執拗にこびりついている歌、例の歌を唄ってしまうと、彼女は恍惚うっとりと考え出した。こういう場合に彼女の脳裡へ、幻影のように浮かんで来るのは、大森林、大渓谷、大きな屋敷、大傾斜面、五百頭千頭もの放馬の群、それを乗り廻し追ひ廻し、飼養している無数の人、そうしてあたかも酒顛童子のような、長髪赭顔の怪異の老人——等々々のそれであった。

しかし彼女はそういう所が、どこにあるかは知らなかった。そうしてどうしてそういう光景が、浮き出して来るかも知らなかつた。とはいえ彼女はそういう光景の場所の、どこであるかを確かめなければならぬ、そうして是非ともその光景の場所へ、どうしても自

身行かなければならないと、そんなように熱心に思うのであった。がそれとて自分自身のために、その場所を知ろうとするのでもなく、又行こうとするのでもなく、自分の難儀を救ってくれた人秋山要介という人のために、知りたい行きたいと思うのであった。

浮かんで来る幻影を追いながら、今も彼女は思っていた。

（行かなければならない、さあ行こう！）

で、彼女は立ち上った。

昔はあつたということじゃ

昔はあつたということじゃ

又彼女は口ずさんだ。

そうして大藪を分けながら、大藪の外へ出ようとした。

その大藪の外側には、以前から彼女を狙っている吸血鬼水品陣十郎が、拔身を提げて立っているはずである。

10

後へ下った陣十郎は、刀を下段にダラリと下げ、それでも眼では油断なく、主水の眼を

睨みつけ、歌主の在所ありかがどこであるかと、瞬間それについて考えた。

周囲あたりには大藪があるばかりで、その他は展開ひらけた耕地であり、耕地には人影は見えなかつた。

声から云つても歌の性質たちから云つても、歌つたのは源女に相違ない。

が、源女などはどこにもいない。

(さては自分の空耳かな?)

それにしても余りに明かに、歌声は聞こえてきたではないか。

源女だ源女だ歌つたのは源女だ!

かつて一旦手に入れて、葉籠の物にしはしたが、その持っている一大秘密を、まだ発見しないうちに秋山要介に横取りされた女! お組の源女に相違ない!

探して探して探し廻ったあげく、江戸は両国の曲独楽の席で、ゆくりなくも発見した。

が、その直後に起こった事件——鳴澤庄右衛門を討ち果したことから、江戸にいられず旅に出たため、源女のその後の消息については、確かめることが出来なかつた。

その源女の歌声が、こんな所で聞こえたのであつた。

(どうしたことだ? どうしたことだ?)

不思議なことと云わなければならない。

(あの女を再び手に入れることが出来て、あの歌の意味を解くことが出来たら！)

その時こそ運命が——解いた人の運命が、俄然とばかり一変し、榮耀榮華を尽くすことが出来、至極の歡樂を享けることが出来る！

(どうでもあの女を手に入れなければ！)

だが彼女はどこにいるのだ？

分を秒に割った短い間だ！ 時間にして短いそういう間に、陣十郎の脳裡に起伏したのは、実にそういう考えであった。

その間彼は放心状態にあった。

何で主水が見逃がそうぞ！

一気に盛り返した勇を揮い、奮然として切り込んだ。

またも鏘然太刀音がした。

放心状態にあったとはいえ、劍鬼さながらの陣十郎であった。何のムザムザ切られようぞ！

受けて一合！

つづいて飛び退いた、飛び退いた時にはもう正気だ！ 正気以上に冴え切っていた。
 （こやつを一気に片付けて、源女の在所ありかを突き止めなければならぬ！）

「ヤ——ツ！」と掛けた物凄い掛声！

つづけて「ヤヤ——ツ、ヤヤ——ツ、ヤヤ——ツ！」

先々の先の手一杯！ さながら有段者が初心者相手に、稽古をつけるその如く、主水が撃とう切ろう突こうと、心組む心を未前に察し、その先その先と出て、追いつて切り立て突き立て進んだ。

またもや主水は藪際まで詰められ、眼眩みながら藪の裾を、右手へわずか廻り込もうとした時、天運尽きたか木の根に躓つまずき、横倒れにドツと倒れた。

「くたばれ！」

シ——ンと切り下した！

二

シ——ンと切り下ろした陣十郎の刀が、仆れている主水を拝み打ちに、眉間から鼻柱まで割りつけようとした途端、日の光を貫いて小柄が一本、陣十郎の咽喉へ飛んで来た。

「あッ」と思わず声を上げ、胸を反らせた陣十郎は、あやうく難を免れたが、小柄の投げられた方角を見た。

十数間のかなたから、一人の武士が走つて来る。

「む！……秋山！……秋山要介！」

いかにも走つて来るその武士は、今朝になつて眼醒めて見れば、昨夜から発作を起こしていた源女が、どこへ行つたものか姿が見えず、それを案じて探すために、林蔵の家を立ち出で、ここまでやつて来た秋山要介であり、見れば宿意ある水晶陣十郎が、これも因縁ゆかりある鳴澤主水を、まさに討つて取ろうとしていた。間隔は遠い、間に合わない。そこで小柄を投げたのであつた。

小柄を投げて陣十郎の兇刃を、制して置いて秋山要介、飛燕の如く飛び込んで来た。

が、陣十郎もただ者ではない、主水を相手に戦つて、既に躰は疲労つかれしていた。そこへ劍豪秋山要介に新規の力で出られては、百に一つの勝目はない。——と見て取るや刀を引き、鞘にも納めず下げたままで、耕地を一散に走つて逃げた。

と、瞬間飛び起きたは、無念残念返り討ちだと、一刹那覚悟して仆れていた主水で、
「秋山先生、お礼は後刻！……汝、待て——ッ、水晶陣十郎！……遁してなろうか、

父の敵！」と、身体綿の如く疲労して居り、劍技も陣十郎と比較しては、数段も劣つて居り、追っかけ追い詰め戦つたところで、あるいは返り討ちになろうもしれないと、そういう不安もありながら、みすみす父の敵に逢い、巡り合つて刀を交したのに、そうしてその敵が逃げて行くのに、そうして一旦逃がしてしまつたなら、いつたたび巡り逢えるやら不明と思えば追わずにいられた。かつた。

で、主水は刀を振り振り、陣十郎を追いかけた。

「待たれい！ 主水殿、鳴澤氏！」

追いついてよしんば戦つたところで、陣十郎に主水が勝つはずはない、返り討ちは見えないものだ——と知つている秋山要介は、驚いて大音に呼び止めた。

「長追いなさるな！ お引き返しなされ！ またの機会をお待ちなされ」

しかし何のそれを聞こう！ 主水はよろめきよろめきながら、走り走り走つて行く。

(尋常の敵を討つのではなく、親の敵かたきを討つのであつた。子とあつてみれば返り討ちも承知で、追いかけるのが本当であろう)

気がついた秋山要介は、孝子こうしに犬死させたくない、ヨーシ、追いついて後見うしろみしてやろう！ 助太刀してやろうと決心し、袴の股立取り上げた途端、

「セ、先生、秋山先生！」と、背後から息せき呼ぶ声がし、やにわに袖を掴まれた。

「誰だ！」と怒鳴って顔を見た。

林蔵の乾兒の藤作であつた。

12

「おお藤作、どうしたのだ？」

「夕、大變で……才、親分が！」

「なに親分が？ 林蔵がか？」

「へい、林蔵親分が、力、街道で、あそこの街道で……夕、高萩の猪之松と……」

「うむ、高萩の猪之松と？」

「ハ、果し合いたい、果し合いたい！」

「む——」と呻くと振り返り、要介は街道の方角を見た。

旅人や百姓の群であろう、遠巻にして街道に屯し、じつと一所を見ている光景が、要介の眼に鮮かに見えた。彼等の見ている一所で、林蔵は怨ある猪之松と、果し合いをしているのであろう。要介も以前から林蔵と猪之松とが、勢力争い激甚であり、一度は雌雄を決

するていの、真劍の切り合いをやるべきことを、いろいろの事情から知っていた。

(これはうっちゃって置かれない。林蔵を見殺しにすることは出来ない。聞けば高萩の猪之松は、逸見多四郎へんみから教えを受け、甲源一刀流では使い手とのこと、林蔵といえどもこの拙者が、新影流は十分仕込んで置いた。負ける気遣いもあるまいが、もしも負れば師匠たる拙者の、恥にならないものでもない。林蔵と猪之松との果し合い、考えようによれば逸見多四郎と、この秋山要介との、果し合いと云うことにもなる。これはうっちゃって置かれない)

「行こう、藤作！」と叫んだが、

(主水氏は?)とこれも気になり、走って行った方へ眼をやった。

広い耕地をよろめきよろめき、陣十郎の後を追い、なお主水は走っていた。

(一人で行ったら返り討ち、陣十郎に討たれるであろう。……惜しい武士! 気の毒な武士! ……どうでも助太刀してやらねば……)

——が、そつちへ身を挺したら、林蔵はどういう運命になるか?

(どうしたら可よいか? どうしたものだ?)

知らぬ藤作は急ぎ立てた。

「先生、早く、行つておくんなせえ！ ……云いたいことはたくさんあるんで…第一女が誘拐かどわかされたんで…若い女が、綺麗な女が…誘拐した野郎は猪之松の乾兒と、その相棒の馬方なんで…最初は俺らと杉さんとで…へい、それで浪之助さんとで、その女を助けたんですが…逃げた八五郎め馬方を連れて、盛り返して来てその女を…その時浪之助さんは留守だったんで…いやいやそんなこと！ ……行つておくんなせえ、さあ先生！ 親分が大変なんだ猪之松の野郎と！ ……」

（行かなければならない！）と要介も思った。

（嶋澤氏は赤の他人、少くも縁は極めて薄い。林蔵の方は俺の弟子、しかも現在この俺は、林蔵の家に世話になっている。深い縁がある、他人ではない。…その林蔵を見殺しには出来ない！ 行こう！ しかし、そうだし、主水殿もお気の毒な！ では、せめて言葉の助太刀！）

そこで要介は主水の方に向かい、大音をもつて呼びかけた。

13

「嶋澤しげさわ氏、主水殿！ 敵水品陣十郎を追い詰め、見事に復讐をお遂げなされ！ 拙者、

要介、秋山要介、貴殿の身边に引き添って、貴殿あやうしと見て取るや、出でて、必ずお助太刀いたす！ ……心丈夫にお持ちなされい！ ……これで可よい、さあ行こう！」

街道目掛けて走り出した時、

今は変わって千の馬

五百の馬の馬飼の

と、聞き覚えある源女の声で、手近で歌うのが聞こえてきた。

「や、……歌声！ ……源女の歌声！」

要介は足を釘づけにした。

探していた源女の歌声が、手近の所から聞こえてきたのであった。足を止めたのは当然といえよう。

「源女殿！ お組殿！」

思わず大声で呼ばわって、要介は四あたり辺を忙せわしく見た。

丘、小山とでも云いたいほどに、うず高く聳えている藪以外には、打ち開けた耕地ばかりで、眼を遮る何物もなかった。

（不思議だな、どうしたことだ。……歌声は空耳であったのか？）

陣十郎の感じたようなことを、要介も感ぜざるを得なかった。

「先生、どうしたんです、行っておくんなせえ」

要介に足を止められて、胆を潰した藤作が怒鳴った。

「第一先生がこんな方角へ、トツ走つて来たのが間違いだ。俺ら向こうで見ていたんで、すると先生の姿が見えた。しめた、先生がやって来た、林蔵親分に味方して、猪之松を叩つ切つて下さるだろう。——と思つたら勘違いで、こんな藪陰へ来てしまった。そこで俺ら迎えに来たんだが、その俺らと来たひには、ミジメさつたらありやアしない。馬方に土をぶつかけられたんで。と云うのも杉さんがいなかつたんで。その杉さんはどうしたかというに、誘かどわか拐された女の兄さんて奴が——そうそう主水とか云つたつけ、そいつが陣十郎とかいう悪侍に、オビキ出されて高萩村の方へ行つた。とその女が云つたんで、こいつ大変と杉さんがね、高萩村の方へ追つて行つたんで。——が、まあ可いいやそんな事ア。よくねえなア親分の身の上だ、まごまごしていると猪之松の野郎に……あツどうしたんだ見物の奴らア……」

いかさま街道や耕地に屯し、果し合ひを見ていた百姓や旅人が、この時にわかに動揺したのが、要介の眼にもよく見えた。が、すぐに動揺は止んで、また人達は静かになった。

緊張し固くなって見ているらしい。

突嗟に要介は思案を定めた。

(ここら辺りに源女がいるなら、藪の中にでもいるのであろう。正気でないと言ったところで、直ぐに死ぬような気遣いはない。……林蔵と猪之松との果し合い、これは一刻を争わなければならない。よしそっちへ行くことにしよう。……が、しかし念のために……)

そこで要介はまたも大音に、藪に向かって声をかけた。

「源女殿、要介お迎えに参った。どこへもおいでなざるなよ！ ……」

14

街道では林蔵と猪之松とが、遠巻きに見物の群を置き、どちらも負けられないおとこ侠客と侠客との試合それも真剣の果し合いの、白刃を互いに構えていた。

かなり時間は経過していたが、わずか二太刀合わせたばかりで、おおよそ二間を距てた距離で、相正眼に脇差をつけ、睨み合っているばかりであった。

猪之松には乾兒や水品陣十郎の間に、何か事件が起こったらしく、耕地で右往左往したり、逃げる奴倒れる奴、そういう行動が感ぜられたが、訊ねることも見ることもできず、

あつかうこともできなかつた。傍目一つしようなものなら、その間に林蔵に切り込まれるからであつた。

林蔵といえどもそうであつた、乾兒の藤作の声がしたり、杉浪之助の声がして、何か騒動を起こしているようであつたが、どうすることも出来なかつた。相手の猪之松の劍の技、己と伯仲の間にあり寸分の油断さえ出来ないからであつた。

が、そういう周囲の騒ぎも、今は全く静まつていた。数間を離れて百姓や旅人、そういう人々の見物の群が、円陣を作つて見守つてゐるばかりで、気味悪いばかりに寂靜ひっそりとしていた。

二本の刀が山形をなし、朝の黄味深い日の光の中で、微動しながら浮いている。

二人ながら感じていた。——

(ただ目茶々に刀を振り廻して、相手を切つて斃せばよいという、そういう果し合は演ぜられない。男と男だ、人も見ている。後日の取沙汰も恐ろしい。討つものなら立派に討とう！ 討たれるものなら立派に討たれよう！)

二人ながら心身疲労していた。

氣疲労つかれ！ 氣疲労！ 恐ろしい氣疲労！

技が勝れているだけに、伎倆うでが伯仲であるだけに、その気疲労も甚だしいのであった。向かい合っていた二本の刀の、その切先がやがて徐々に、双方から寄って来た。

見よ二人ながら踏み出している右足の爪先が蝮を作り、地を刻んで一寸二寸と、相手に向かって進むではないか。

ぢ——ン！

音は立たなかつた。

が、ぢ——ンと音立つように、互いの切先が触れ合つた。

しかしそのまま二本の刀身は、一度に水のように後へ引き、その間隔が六歩ほどとなつた。

そうしてそのまま静止した。

静止したまま山形をなし、山形をなしたまま微動した。

薄くポ——ツと刀と刀の間に、立ち昇っているのは塵埃ほこりであつた。

二人の刻んだ足のためにポ——ツと立った塵埃であつた。

間、

長い間。

天地寂寥。

が、俄然二本の刀が、宙で烈しくもつれ合った。

閃光！ 太刀音！ 鏘然！ 鏘鳴り！

で、Xの形となつて、二本の刀は交叉され、わずかに左右に又前後に、揺れつ繕れつ押し押されつ、粘つたまままで放れなかつた。

15

鏘競り合い！

眼と眼との食い合い！

そうだ、林蔵と猪之松との眼が、交叉された刀の間を通し、互いに食い合い睨み合つてゐる。

鏘競り合いの恐ろしさは、競り合いから離れる一刹那にあつた。胴を輪切るか真つ向を割り付けるか、伎倆の如何、躰形の如何、呼吸の緩急によつて変化縦横！ が、どつちみち恐ろしい。

林蔵も猪之松も一所懸命、相手の呼吸を計つていた。

と、交叉された刀の間へ、黒く塗られた刀の鞘が、忍びやかに差し込まれた。

「？」

「？」

鞘がゆるゆると上へ上った。二本の白刃を持ち上げるのである。と、威厳ある声がした。

「勝負待て！ 刀を引け！ 仲裁役は秋山要介！」

声と同時に刀の鞘が、二本の刀身を左右に分けた。

二間の距離を保ちながら、尚、残心、刀を構え、睨み合っている林蔵と猪之松、その間に鞘ぐるみ抜いた太刀を提げて、ノビノビと立ったのは秋山要介で、まず穏かに林蔵へ云った。

「刀を鞘へ納めるがよい」

それから猪之松の方へ顔を向け、

「以前一二度お見かけいたした。高萩村の猪之松殿か、拙者秋山要介でござる。刀を納め下されい」

しばらくの間寂然としていた。

やがて刀の鞘に収まる、鏗鳴りの音が二つ聞こえた。

この頃源女は大藪を出て、唐黍畑とうもろこしの向こうを歩いていた。
(行かなければ不可いけない、さあ行こう)

こう思いながら歩いていた。

何者か向こうで呼んでゐる。そんなように彼女には思われるのであった。

畦を越し桑畑を越した。そうして丘を向こうへ越した。もう背後を振り返って見ても、街道も大藪も見えないだろう。

大溪谷、大傾斜、大森林、五百頭千頭の馬、無数の馬飼、宏大な屋敷——そういうもの存在している所へ、行かなければならない行かなければならない！……そう思って彼女は歩いて行く。

崩れた髪、乱れた衣裳、彼女の姿は狂女そっくりであった。発作の止まない間中は、狂女と云つてもいいのであった。

長い小高い堤があつた。

よじ上つて歩いて行つた。

向こう側の斜面には茅や蘆が、生い茂り風に靡いている、三間巾ぐらゐの川があり、水

がゆるゆると流れていた。

「あッ」

源女は足を踏み込らせ、ズルズルと斜面を川の方へ落ちた。パツと葦切が数羽飛び立ち、烈しい声で啼いて去った。と、蘆を不意に分けて、古船が一隻入り出た。源女がその中に倒れている。

もやいづな 纜綱を切らした古船は、源女を乗せたまま流れて行く。

源女は微動さえしなかった。

各自の運命

1

高萩村に近い森の中まで、陣十郎を追って来たしぎさわもんど鳴澤主水は、心身全く疲労し尽くし、ほとんど人心地を覚えなかった。

拔身を地に突き体を支えたが、それにも堪えられずクタクタ倒れた。とうに陣十郎は見失っていた。

その失望も手伝っていた。

(残念、逸した、敵を逸した!)

(が、飽くまでも探し出して、……)

立ち上ろうと努力した。

が、躰はいうことをきかず、のみならず精神さえ朦朧となった。

こうして杉や桧や榎や、櫓などの喬木に蔽われて、その奥に朱の褪せた鳥居を持ち、その奥に稲荷の祠を持ち、日の光も通して来ず、で薄暗い風景の中に、雀やひわ彌やまがらや山雀や山鳩の、啼声ばかりが繁く聞こえる、鎮守の森に包まれて、気絶して倒れた主水の姿が、はじめに痛々しく眺められた。

色づいた病わくらば葉が微風にあおられ体の上へ落ちて来たりした。

かなり長い間しずかであった。

と、その時人声がし、間もなく十数人の男女の者が、森の中へ現われた。

変わった風俗の連中であつた。

赤い頭巾に赤い袖無、そんなものを着けている若い男もあれば、亀甲模様のたつつけを穿き、胸に大形の人形箱をかけた、そういう中年の男もあり、紫の手甲に紫の脚絆、三味

線を抱えた女もあり、浅黄の股引、茶無地の筒袖、そういう姿の肩の上へ、猿をとまらせた老人などもあった。

それらはいずれも旅装であった。

秩父香具師やしの一団なのである。

平素は自分の家において、百姓もやれば杣夫そまもやり、獵師もやれば川狩もやるが、どこかに大きな祭礼があつて、市たかまちが立つて盛んだと聞くと、早速香具師に早変わりして、出かけて行つて儲けて来、家へ帰れば以前通り、百姓や杣夫として生活するという——普通の十三香具師とは別派の、秩父香具師の一団であつた。

この日もどこかの市を目掛け親しい者だけで組をつくり、出かけて行くところらしい。その中に一人旅装ではなく、髪は櫛巻きに銀簪一本、茜の小弁慶ひとえの単衣を着た、若い女がまじっていた。

陣十郎の情婦のお妻であつた。

「姐御、お前さんも行くといひんだがな」

一人の男がこう云つて、そそのかすようにお妻を見た。

「そうさねえそうやつて、お前さんたちが揃つて出かけて行くのを見ると、一緒に行きた

いような氣持がするよ」

まんざらお世辞でもなさそうに、お妻はそう云つて薄笑いをした。

「陣十郎さんばかりが男じやアなし、他に男だつてあるうじやアないか。そうそういつもへばり付いてばかりいずに、俺らと旅へ出るのもいいぜ」

こうもう一人の男が云つた。

「あたしを旅へしよびいて行くほどの、好い男がどこかにいるかしら、お前さん達のお仲間の中にさ」

云い云い、お妻は又薄笑いをして、香具師達を見廻した。

「俺じやア駄目かな、え、俺じやア」と、猿廻しが顔を出した。

2

「十年若けりやア物になるが」

お妻はむしろ朗かに笑つた。

お妻は秩父の産れであり、秩父香具師の一人であつた。が、ずっと若い頃は、草深い故郷に見切りをつけ、広い世界へ出て行つて、香具師などというケチなものよりもっと烈し

い、もつと罪の深い、そうしてもつと度胸の入る、凄い商売へ入り込んでしまった。

おんなかんたんし
女邯鄲師——それになってしまった。

道中や温泉場などで親しくなり、同じ旅籠はたごへ一緒に泊り、情を通じてたらずもあり、好きな男で無い場合には、すかし、あやなし、たぶらかして、油断を窺って有金から持物、それらを持って逃げてしまう、平たく云えば枕探し、女賊になってしまったのである。

陣十郎の情婦になったのも、平塚の宿で泊まり合わせ、枕探しをしようとしたところ、陣十郎のために取って抑えられた、それが因縁になったのであった。

その女邯鄲師のお妻であるが、今度陣十郎と連立って、産れ故郷へ帰って来た。と、今朝高萩の村道を、懐かしい昔の仲間達が——すなわち秩父香具師達が、旅装よそおい束で通って行った。知った顔も幾個かあった。で、あまりの懐かしさに、冗談云い云いこんな森まで、連立って一緒に来たのであった。

「おや」と不意にお妻は云って、急に足を一所で止めた。

「こんなところに人間が死んでいるよ」

行手の杉の木の根下の草に、抜身を持った武士が倒れている。

「ほんに、可哀そうに、死んでらあ。……しかも若いお侍さんだ」

香具師達は云つて近寄つて行つた。

お妻はその前にしやがみ込み、その武士の額へ手をやったが、

「冷えちやアいない、あつた暖かいよ」

いそいでみやくどころ脈所を握つたが、

「大丈夫、生きてるよ」

「じゃア気絶というやつだな」

一人の香具師が心得顔に云つた。

「そうさ、気絶をしているのさ。拔身を持っているところを見ると、きっと誰かと切り合つたんだねえ。……どこも切られちやアいない。……気負けきつかれ気疲労で倒れたんだよ」

云い云いお妻は覗き込んだが、

「ご覧よ随分好い男子いとおとこじゃアないか」

「チエーツ」と誰かが舌打ちをした。

「姐御いい加減にしてくんな。どこの馬の骨か知れねえ奴に、それも死に損ない殺され損ないに。気をくばるなんて嬉しくなさ過ぎらあ」

「まあそういったものでもないよ。……第一随分可愛そうじゃアないか。……それにさ、

ご覧よ、この蒼白い顔を……唇の色だけが赤くてねえ。……ゾツとするほど綺麗だよ。……」

「色狂人！ ……行こう行こう！」

「行きやアがれ、碌で無し！ ……妾アこの人を介抱するよ」

お妻は主水の枕元へ、ペタペタと坐つてなお覗き込んだ。

3

その同じ日のことであつた。

絹川という里川の岸で、一人の武士が魚を釣っていた。

四十五六の年齢で、広い額、秀でた鼻、鋭いけれど暖かい眼、そういう顔の武士であつた。立派な身分であると見え、衣裳などは寧ろ質素であつたが、體に威があり品があつた。傍らに籃びくが置いてあつたが、魚は一匹もいなかった。

川の水は濁りよごれてい、藻草や水鏽が水面に浮かび、夕日がそれへ色彩をつけ、その中で浮うき子が動揺うごめしている、それを武士は眺めていた。

「東馬とうまもう何刻なんじきであろう？」

少し離れた草の中に、お供と見えて若侍が退屈らしい顔付をして、四辺あたりの風景を見廻していたがそれへ向かって話しかけた。

「巳よつじき刻でもありませんか？」

若侍はそう答え、

「今日は不漁しけでございますな」

笑止らしく云い足した。

「わしの魚釣、いつも不漁じゃ」

「御意で、全くいつも不漁で。……それにもかかわらず先生には、毎日ご熱心でございますな」

「それでいいのだ、それが本意なのだ。……と云うのはわしの魚釣は、太公望と同じなのだからな」

「太公望？ はは左様で」

「魚釣り以外に目的がある。……ということ云っているつもりだが」

「どのような目的でございますか？」

「そう安くは明かされませんよ」

「これはどうも恐れ入りました……が、そのように仰せられますと、魚の釣れない口惜くちおし
まぎれの、負けおしみなどと思われましても……」

「どうも其方そち、小人で不可いけない」

「お手敵てきしいことで、恐縮おそまじいたします」

「こう糸を垂れて水面を見ている」

「はい、魚釣りでございますからな」

「水が流れて来て浮子にあたる」

「で、浮き沈みいたします」

「いかにも自然で無理がない……芥あくたなどが引つかかると……」

「浮子めひどくブン廻ります」

「魚がかかると深く沈む」

「合憎あはにく、今日ばかりませんでした」

「相手によつて順応する……浮子の動作、洵まことにいい」

「浮子を釣るのでもござりますまいに」

「で、わしはその中に、何かを得ると思うのだよ」

「鮒一匹、そのくらいのもので」

「魚のことを云っているのではない」

「ははあ左様で。……では何を？」

「つまりあの業を破る術じや」

「は？ あの業と仰せられまするは？」

「水品陣十郎の『逆ノ車』……」

「ははあ」

「お、あれは何だ」

その時上流から女を乗せた、死んだように動かない若い女を乗せた、古船が一隻流れて来た。

「東馬、寄せろ、船を岸へ」

「飛んでもないものが釣れましたようで」

若侍は云い云い袴を脱ぎかけた。

が、古船は自分の方から、ゆるゆると岸の方へ流れ寄って来た。

武士は釣棹の柄の方を差し出し、船縁へかけて引き寄せるようにしたが、

「女を上げて介抱せい」

そう若侍へ厳しく云った。

鳳凰と麒麟

1

それから幾日か経った。

秋山要介は杉浪之助を連れて、秩父郡ちちぶのこおりおがわむら小川村の外れに、あたかも岬くさを負う虎の如くに蟠居し、四方の劍客に畏敬されている、甲源一刀流の宗家逸見多四郎へんみ義利の、道場構えの広大な屋敷へ、威儀を作つて訪れた。

「頼む」

「応」と返事があつて、正面の襖が一方へひらくと、小袴をつけた若侍が、恭しく現われた。

「これはこれは秋山先生、ようこそご光来下されました」

「逸見先生に御意得たい。この段お取次下されい」

「は、先生には江戸表へ参り、未だご帰宅ござりませねば……」

「ははあ、いまだにお帰らない」

「帰りませんでござります」

「先生と一手お手合わせ致し、一本ご教授にあずかりたく、拙者当地へ参つてより三日、毎日お訪ねいたしても、そのつどお留守お留守とのご挨拶、かりにも小川の鳳凰ほうおうと呼ばれ、上州間庭の樋口十郎左衛門殿と、並び称されている逸見殿でござれば、よもや秋山要介の名に、聞き臆じして居留守を使われるような、そのようなこともござるまいが、ちと受取れぬ仕儀でござるな」

洒脱であり豪放ではあるが、他人に対してはいつも丁寧な、要介としてはこの言葉は、かなり角立つたものであった。

傍に引き添っていた浪之助も、これはおかしいと思つた程である。

面喰つたらしい取次の武士は、

「は、もつとご尤もには存じますが、主人こと事実江戸へ参り、今に帰宅いたしませねば……」

「さようか、よろしい、事実不在、——ということでござるなら、又参るより仕方ござらぬ。……なれどこのまま帰つては、三度も参つた拙者の腹の虫、ちと納まりかねるにより、

少し無礼とは存じ申すが、表にかけられた門札を、お預かりして持ちかえる。逸見殿江戸よりご帰宅なさらば、この旨しかとお伝え下され。宿の小紅屋に滞在まかりある。ご免」というと踵きびすを返し、門を出ると門の柱に「甲源一刀流指南」と書いた、二寸厚さの桧板、六尺長い門札を外し、小脇に抱えて歩き出した。

呆れ返ったのは浪之助で、黙々として物も云わず、要介の後から従ついて行った。

村とはいっても小川村は、宿場以上の賑いを持った、珍らしく豊かな土地であつて、道の両側には商店多く、人の往来も繁かつた。そういう所を立派な武士が、大門札を引つ抱え、若い武士を供のように連れて、ノツシノツシと歩いて行くのであつた。店の人達は審かしそうに覗き、往来の人達も不思議そうに眺めた。

が、要介は意にも介さず、逸見家とは反対の方角の、これは小川村の入口にある、この村一番の旅籠屋の、小紅屋まで歩いて来た。

「お帰り」と番頭や婢おんなたち達が、これも怪訝そうな顔をして、大門札を抱えた要介達を迎え、玄関へ頭を並べたのを、鷹揚に見て奥へ通つた。

中庭を前にした離座敷——この宿一番の座敷らしい——その床の間へ大門札を立てかけ、それを背にして寛ゆるやかに坐わり、婢の持つて来た茶を喫しながら、要介は愉快そうに笑っていた。

その前に浪之助はかしこまっていたが、これは随分不安そうであった。

「先生」ととうとう浪之助は云った。

「これは一体どうしたことぞ？」

「……………」

愉快そうに笑っている。

「武芸指南所の門札は、商家の看板と等しなみに、その家にとりましては大切なもの、これを外されては大恥辱……………」

「ということは存じて居るよ」

「はい」と浪之助はキョトンとし、

「それをご承知でその門札を……………」

「さよう、わしは外して来た」

「はい」と又もキョトンとし、

「それも高名の逸見先生の……」

「鳳凰と云われる逸見氏だな」

「はい」ともう一度キョトンとし、

「それほど逸見様は高名なお方……」

「わしも麒麟きりんと呼ばれて居るよ」

「御意で」と今度は頭を下げ、

「関東の麒麟と称されて居ります」

「鳳凰と麒麟……似合うではないか」

「まさにお似合いではございますが、似合うと申して門札を……」

「ナニわしだから外して来てもよろしい」

「麒麟だから鳳凰の門札を……」

「さようさよう外して来てもよろしい」

「ははあ左様でございますかな」

「他の奴ならよろしくない」

「……………」

「ということとは存じて居る。さよう逸見氏も存じて居る」

「……………」

「人物は人物を見抜くからの」

「はい、もう私などは小人で」

「そのうちだんだん人物になる」

「はい、ありがたく存じます」

とは云つたものの浪之助は、

(うっかり物を云うとこんな目に逢う。訓された上に嚇されてしまう)

こう思わざるを得なかつた。

「それに致しましても先生には、何と思われて小川村などへ参り、何と思われて逸見先生のお宅などへ……………」

「武術試合をするためにさ……………」

「それだけの目的でございますかな？」

「真の目的は他にある」

「どのような目的でございますかな？」

「赤尾の林蔵を関東一の貸元、そいつに押し立ててやりたいのだ」

「そのため逸見先生と試合をなさる？」

「その通り。変に思うかな？」

「どういう関係がございますやら」

「今に解る。じきに解る」

「ははあ左様でございますか」

「わしは金蔓をなくしてしまった——源女殿を見失ってしまったので、秩父にいる必要がなくなってしまった。そこで江戸へ帰ろうと思う。……江戸へ帰って行く置土産に、林蔵を立派な男にしてやりたい。それで逸見氏と試合をするのだ。……高萩の猪之松の剣道の師匠、逸見多四郎殿と試合をするのだ」

3

(なるほどな)と浪之助は思った。

(林蔵の師匠たる秋山先生と、猪之松の師匠たる逸見先生とが、武術の試合をした上で、林蔵を関東一の貸元にする。なるほどな、意味がありそうだ)

確實のことは解らなかつたが、意味はありそうに思われた。

やがて解るといふことであつた。押しして訊こうとはしなかつたが、

「それに致しましてもお組の源女と、その源女のうたう歌と、先生とのご關係を承^{うけたま}わりたいもので」

以前から疑問に思つていたことを、浪之助は熱心に訊いた。

その浪之助は以前においては、まさしく源女の愛人であつた。がその源女が今度逢つてみれば、變つた性格となつて居り、不思議な病氣を持つて居り、妙な歌を口^{くちずさ}吟^むむばかりか、要介などという人物が、保護する人間となつていたので、浮いた恋、稀薄の愛、そのようなものは注がないこととし、ほんの友人のように交際^{つきあ}つて来たところ、その源女は上尾街道で、過ぐる日行なわれた林蔵と猪之松との果し合ひの際行方不明となり、爾来姿を見せなくなつていた。

浪之助も勿論心にかけてが、要介のかけ方は一層で、

「あの日たしかに大藪の陰で、源女殿の歌声を耳にした。が、果し合ひを引き分けおいて、急いで行つて探した時には、もう源女殿はいなかつた。どこにどうしていることやら」と、今日までも云いつづけて来たことであつた。

「源女殿とわしとの関係か。さようさな、もう話してもよかろう」

要介はいつになくこだわらなかつた。しかししばらく沈思していた。久しく聞きたいと希望していた、秘密の話が聞かれるのである。浪之助は思わず居住いを正し、緊張せざるを得なかつた。

中庭に小広い泉水があり、鯉が幾尾か泳いでいたが、時々水面へ飛び上つた。それが田舎の古い旅籠屋の、昼の静かさを破壊するところの、たった一つの音であつた。

と、要介は話し出した。

「武蔵という国は承知でもあろうが、源氏にとっては由縁ゆかりの深い土地だ。源氏の発祥地ともいうべき土地だ。ここから源氏の諸豪族が起つた。秩父庄司ちちぶしょうじ、畠山重忠はたけやましげただ、くまが谷次郎直実等いじろうなおぎね、いずれも武蔵から蹶起した武将だ。……がわしにかかわる事件は、もつと昔に遡らなければならぬ。……これは誰もが承知していることだが、後冷泉天皇の御宇ぎよにあつて、奥州の酋長阿部の頼時よりときが、貞任さだとう、宗任むねとうの二子と共に、朝廷に背いて不逞を逞ましゆうした、それを征したのが源頼義よりよし、そうしてその子の八幡太郎義家——さてこの二人だが奥州征めの往來に、武蔵の国にとどまつた。今日の国分寺村の国分寺、さよう、その頃には立派な寺院で、堂塔伽藍聳えていたそうじゃが、その国分寺へとどま

つた……ところが止まったばかりでなく、前九年の役が終了した際、奥州産の莫大な黄金、それを携えて帰って来、それを国分寺の境内に、ひそかに埋めたということじゃ。それには深い訳がある」

こう話して来て要介は、またしばらく沈思した。

4

要介はポツポツ話し出した。

「源氏は東国を根拠とすべし。根拠とするには金が必要だ。これをもってここへ金を埋めて置く。この金を利用して根を張るべし。——といったような考えから、金を埋めたということだ。……その後この地武蔵において、いろいろさまざまの合戦が起こったが、埋めであるその金を利用したものが、いつも勝ったということじゃ。ところがそのつど利用したものは、他の者に利用されまいとして、残った金を別の所へ、いつも埋め代えたということじゃ。……治承四年十月の候、源頼朝が府中の南、分倍河原ふばいがわらに關八州の兵を、雲霞げんこの如くに集めたが、その時の費用もその金であり、ずっと下って南北朝時代となり、元弘三年新田義貞卿が、北條高時を滅ぼすべく、鎌倉に兵を進めようとし、分倍河原に屯

して、北條泰家と合戦したが、その時も義貞は源氏というところから、その金を利用したという事じや。正平しょうへい七年十二月十九日、新田義宗よしむね南軍を率い、足利尊氏を狩野河こうのかわに討つべく、武蔵の国に入ったところ、尊氏すでに狩野河を発し、谷口から府中に入り、人見原ひとみはらにて激戦したが、義宗破れて入間川いるまがわに退き、二十八日こてさきはら小手差原にて戦い、ふたたび破れて退いたが、この時は足利尊氏が、これも源氏というところから、その金を利用したということじや。更に下つて足利時代に入り、鎌倉の公方足利成氏、管領上杉憲忠のりただを殺した。憲忠の家臣長尾景晴かげはる、これを怒つて手兵を率い、立川原で成氏と戦い、大いに成氏を破つたが、この時はその金を景晴が利用し、その後その金を用いた者で、史上有名な人物といえ、布衣ふいから起こつて関八州を領した、彼の小田原おだわらの北條早雲そう'un、武蔵七党しちとうの随一と云われた、立川宗恒たてかわむねつね、同恒成、足利学校の創立者ぶしん、武人で学者の上杉憲のりざ実ね。……ところがそれが時代が移つて、豊臣氏となり当代となり——即ち徳川氏となつてからは、その金を利用した誰もなく、金の埋没地も不明となり、わずかにこの地方秩父地方において『秩父の郡小川村、逸見様庭の松の根、昔はあつたということじや……』という、手毬唄に名残をとどめているばかりじや。……」

ここまで云つて来て要介は、不意に沈黙をしてしまった。

じつと聞いていた浪之助の、緊張の度が加わった。

源女のうたう不可解の歌が、金に關係あるということは、臆気ながらも感じていたが、そんな歴史上の合戦や人物に、深い關係があらうなどは、夢にも想像しなかつたからである。

(これは問題が大きいぞ)

それだけに興味も加わって、固唾を呑むという心持！ それでじつと待っていた。要介は語りついだ。

「あの歌の意味は簡単じゃ。今話した例の金が、武蔵秩父郡小川村の逸見家へんみの庭にある松の木の木の根元に、昔は埋めてあつたそうさな。——という意味に他ならない。逸見家というのは云う迄もなく、逸見多四郎殿の家の事じゃ。……その逸見家は何者かというに、甲斐源氏の流げんじを汲んだ、武州無双の名家で旧家、甲源一刀流の宗家だが、甲源の文字もそこから来ている。即ち甲斐源氏という意味なのじゃ」

5

要介は語りつづけた。

「歌もそこ迄なら何でもないので、というのには普通の手毬歌として、秩父地方の人々は、昔から知っているのだからな。ところがどうだろう源女殿だけが、その後の文句を知っている『今は変わつて千の馬、五百の馬の馬飼の……それから少し間が切れて——秣の山や底無し、川の中地の岩窟の……』という文句を知っている。そこへわしは眼をつけたのじや。頼義よりよし、義家が埋めたという金は、その後の歌にうたわれている境地に、今は埋めてあるのだろう。それにしても源女殿はどこでどうしてその後の歌を覚えたかとな。で源女殿へ訊いて見た。その返辞まことが洵に妙じや。大森林や大溪谷や、大きな屋敷や大斜面や、そういう物のある山の奥の、たくさんの馬や馬飼のいる所へ、いつぞやわたし妾は行ったような気がする。そこでその歌を覚えたような気がする。でもハッキリとは覚えていない。勿論そこがどこであるかも知らない。——という曖昧の返辞なのだ。その上そち其方も知っている通り、源女殿は時々発作を起こす。……で、わしはいろいろの医者へ、源女殿の様態を診て貰つたところ、一人柳営お抱えの洋医、平賀杏きょうり里殿がこういうことを云われた。——非常に恐ろしい境地へ行き、非常に烈しい刺激を受け、精神的に大打撃を受け、その結果大熱を体に発し、一月とか二月とかの長い間、人事不省になっていた者は、その間のことはいうまでもなく、それ以前の事もある程度まで、全然忘却してしまうということが往々に

あるが、源女殿の場合がそうらしい。が、源女殿をその境地へ、もう一度連れて行けば思
い出すし、事実その境地へ行かずとも、その境地と酷似している境地へ、源女殿を置くこ
とが出来たなら、忘却していた過去のことを、卒然と記憶に返すであろうと。……しかし
源女殿をその境地へ、連れて行くということは出来難い。その境地が不明なのだから。同
じような境地へ源女殿を置く。ということもむずかしい。どんな境地かということ、わ
しは確実に知らないのだから。……しかしわしはこう思った。あの歌の前半の歌われている
、秩父地方へ出かけて行って、気長く源女殿をそこに住ませて、源女殿の様子を見守つ
ていたら、何か暗示を得ようもしいれないとな。そこでお連れして来たのだが。……しかる
に源女殿のそういう秘密を、わしの外にもう一人、同じように知っている者がある。他で
もない水品陣十郎じゃ」

こう云つて来て要介は、眉をひそめて沈黙した。

劍鬼のような吸血鬼のような、陣十郎という男のことを、思い出すことの不愉快さ、そ
れを露骨に現わさしたところの、それは氣不味まずい沈黙であつた。

浪之助も陣十郎は嫌いであり、嫌い以上に恐ろしくもあり、口に出すことさえ厭であつ
たが、しかし源女や要介が、どういう関係からあの吸血鬼と、知り合いになつたかという

ことについては、窺い知りたく思っていた。

それがどうやら知れそうであった。

そこで更に固唾を呑む気持で、要介の語るのを待ち構えた。

6

「今から十月ほど前であつたよ」と、要介は話をつづけ出した。

「信濃方面へ旅をした。武術の修行というのではなく、例によつての風来坊、漫然と旅をしたままでだが杳掛くつかげの宿で一夜泊まつた。明月の夜であつたので、わしは宿やどを出て宿しゆくを歩あき、つい宿外れまでさまよつて行つた。と、歌声が聞こえてきた。云うまでもなく例の歌さ。はてなと思つて足を止めると、狂乱じみた若い女が、その歌をうたつて歩いて来る。と、その後から一人の武士が、急ぎ足で追いついたが、やにわに女を蹴倒すと、踏む撲るの乱暴狼藉おのれ『汝逃げようとして逃がそうや』こう言つての乱暴狼藉！ その瞬間女は正氣づいたらしく、刎ね起きると拙者を認め、走り寄つて縋りつき、お助け下されと申すのじや。心得たりと進み出て、月明で武士を見れば、以前樋口十郎左衛門殿方で、立合つたことのある水品陣十郎！ 先方も拙者を認めたと見え、しかも形勢非なりと知つたか、『秋山殿

でござったか、その女は源女と申し、癡狂の女芸人、拙者故あつて今日まで、保護を加えて参りましたが、お望みならば貴殿に譲る』と、このようなヘラズ口をきいたあげく、匆^そ慌^{うごう}として立ち去つたので、源女殿を宿へ連れて参り、事情を詳しく訊いたところ、江戸両国の曲独楽の太夫、養母というものに悪婆あつて長崎の異人に妾^{めかけ}に出そうという。それを避けて旅へ出で、ある山国へ巡業したところ、大森林、大傾斜、百千頭も馬のいるところ、そういう所の大きな屋敷へ、どういう訳でか連れて行かれた。そうしてそこで恐ろしい目に逢い、妾^{わたし}は正気を失つたらしい。正氣づいて見れば陣十郎という男が、妾の側に附いていて、それ以来ずっとその男が、あらゆる圧迫と虐待とを加え、妾にその土地へ連れて行け、お前の謡う歌にある土地へ、連れて行けと云つて強いに強い、爾来その男に諸々方々を、連れ歩かれたとこう云うのじや。……それからわしは源女殿を連れて、江戸へ帰つて屋敷へ置いたが、そこは女芸人のことで、もう一度舞台に出たいという。そこで元の座へ出したところ、陣十郎に見付けられ、貴殿なども知り合うようになった。……」

「よく解^{わか}りましてござります」

要介の長い話を聞き、浪之助はこれまでの疑問を融かした。

「と致しますと陣十郎も、例の黄金の伝説的秘密を、承知いたして居りまして、それを探

り出そうと心掛け、源女を抑えて居りましたので……」

「さよう」と要介は頷いて云った「逸見多四郎殿の門弟として、秩父地方に永らく居た彼、黄金の秘密は知悉しているはずじゃ」

この時部屋の外の廊下に、つまましい人の足音がし、

「ご免下され」という男の声がし、襖が開いて小紅屋の主人が、恭しくかしこまった顔を出し、

「逸見の殿様お越しにござります。へい」と云って頭を下げた。

見れば主人の背後にあたって、威厳のある初老の立派な武士が、気軽にニコヤカに微笑しながら、部屋を覗くようにして立っていた。

「逸見多四郎参上いたしました」

7

「や、これは！」とさすがの要介も、郷土ながらも所の領主、松平大和守やまとのかみには客分にあつかわれ、新羅三郎義光しんら よしみつの後胤甲斐源氏の名門であり、剣を取らせては海内の名人、しかも家計は豊かであつて、倉入り千俵と云われて居り、門弟の数大略おおよそ二千、そういう人

物の逸見多四郎が、氣輕にこのような旅籠屋などへ、それも留守の間に道場の看板、門の大札を外して行つたところの、要介を訪ねて来ようなどとは、要介本人思いもしなかつたところへ、そのように氣輕に訪ねて来られたので、さすがに驚いて立ち上つた。

「これはこれは逸見先生、わざわざご来訪下されましたか。いざまずこれへ！ これへ！」
「しからばご免」と仙台平の袴に、黒羽二重の衣裳羽織、威嚴を保つた多四郎は、靜かに部屋の中へ入つて来た。

座が定まつてきて挨拶！ という時に要介の機転、床の間に立ててあつた例の門札を、恭しく抱えて持つて来るや、前へ差し出しその前に坐り、

「実は其先生お屋敷へ、本日参上いたしましたところ、江戸へ参つてご不在との御事。と、いつもの悪い癖が——酔興とでも申しましたところ、悪い癖がムラムラと起こりまして、少しく無礼とは存じましたが、門弟の方へ一応断わり、この大門札ひき外し、旅舎まで持参いたしました、がしかし決して粗末にはいたさず、床の間へ立てかけ見事の筆蹟を、打ち眺め居りましてござります。が、それにしてもこの門札を、ひき外し持参いたしましたればこそ、かかる旅舎などへ先生ほどのお方を、お招きすること出来ました次第、その術策の中りましてござるよ。ハツハツハツ」と笑つたが、それは爽かな笑いでもあつた。

と、多四郎もそれに合わせ、こだわらぬ爽かな笑い声を立てたが、

「その儀でござる、実は其所用それがしあつて江戸へ参り、三日不在いたしましたして、先刻帰宅いたしましたところ、ご高名の秋山先生が、不在中三回もお訪ね下され、三回目の本日門の札を、ひき外しお持ちかえりなされたとのこと、門弟の一人より承うけたまわり、三回のご来訪に恐縮いたし、留守を申し訳なく存じますと共に、その門弟へ申したような次第——、門札を外して持ち去つた仁、秋山要介先生でよかつた。他の仁ならこの多四郎、決して生かして置きませぬ。秋山要介先生でよかつた。その秋山先生は、奇矯洒脱の面白い方じゃ、いまだ一度もお目にかからぬが、勇ましいお噂は承つて居る。五百石といえば堂々たる知行、その知行取りの剣道指南役の、嫡男の身に産れながら、家督を取らず浪人し、遊侠の徒と交際ましわられ、権威に屈せず武威に恐れず、富に阿おもねらず貧に恥じず、天空海濶に振舞われる当代での英傑であろう。門札を持つて行かれたも、単なる風狂に相違ない。宿の小紅屋に居られるなら、早速参つてお目にかかろうとな。——そこで参上いたしましたような次第、お目にかかれて幸甚でござつた」

「杉氏どうじゃな」と要介は、浪之助の方へ声をかけた。

「人物は人物を見抜くと云ったが、どうじゃ杉氏、その通りであろう」

こう云ったがさらに要介は、多四郎の方へ顔を向け、

「ここに居られるは杉浪之助殿某の知己友人でござる。それがし門札外して持ち参ったことを、ひどく心配いたしましたについて、いや拙者だからそれはよい、余人ならばよろしくないと言ふことは逸見先生もご存知、人物は人物を見抜くものじゃと、今し方申して居りました所で、……杉氏何と思われるな？」

「ぼんやり致しましてござります」

浪之助はこう云うと、恰も夢から醒めたように、眼を大きくして溜息を吐いた。

「鳳凰ほうおうと麒麟きりん！ 鳳凰と麒麟！ 名優同志の芝居のようで。見事のご対談でございます

なあ」

逸見多四郎がやって来た！ さあ大変！ 凄いことが起こるぞ！ 激論！ 無礼咎め！

切合い！ 切合い！ と、その瞬間思ったところ、事は全く反対となり、秋山先生で先ずよかった！ ……ということになってしまい、十年の知己でもあるかのように、笑い合い和み合い尊敬し合っている。で浪之助は恍惚うっとりとして、両雄の対談を聞いていたので

あつた。

「酒だ」と要介は朗かに云つた。

「頼みある兵の交際に、酒がなくては物足りぬ。酒だ！ 飲もう！ 浪之助殿、手を拍つて女中をお呼び下され！」

「いや」と多四郎は手を振つて止めた。

「酒も飲みましょう。がしかし、酒は場所を変えて飲みましょう」

「場所を変えて？ はてどこへ？」

「拙者の屋敷で。……云うまでもござらぬ」

「要介のまかり在るこの屋敷、さてはお氣に入らぬそうな」

「いやいや決して、そういう訳ではござらぬ。……が、最初にご貴殿において、お訪ね下されたのが拙者の屋敷、言つて見れば先口で。……ではその方で飲むのが至当。……」

「ははあなるほど、それもそうじゃ」

「ということと存じましたれば、駕籠を釣らせてお宿の前まで、既に参つて居りますので」「それはそれはお手廻しのよいこと。……がしかし拙者といたしましては、ご貴殿のお屋敷におきましては、酒いたたくより木刀をもって、剣道のご指南こそ望ましいのでござる」

「云うまでもござらぬ劍道の試合も、いたしますでござりましょう」

「その試合じゃが逸見先生、尋常の試合ではござらぬぞ」

「と申してまさかに真劍の……」

「なんのなんの真劍など。……実は賭試合がいたしたので」

「ナニ賭試合？　これは面妖！　市井の無頼の劍術使いどもが、生活くらしのために致すような、そのような下等の賭試合など……」

「賭る物が異ちがつてござる」

「なるほど。で、賭物は？」

「拙者においては赤尾の林蔵！」

「赤尾の林蔵を？　赤尾の林蔵を？　ふうん！」と云ったが多四郎は、じつと要介の顔を

見詰めた。

9

「博徒ながらも林蔵は、拙者の劍道の弟子でござる」

要介はそう云って意味ありそうに、多四郎の顔を熟視した。

「その林蔵をお賭になる。……では拙者は何者を？」

いささか不安そうに多四郎は云つて、これも要介を意味ありそうに見詰めた。

「高萩村の猪之松を、お賭下さらば本望でござる」

「彼は拙者の剣道の弟子……」

「で、彼をお賭け下され」

「賭けて勝負をして？」

「拙者が勝てば赤尾の林蔵を、関東一の貸元になすべく、高萩村の猪之松を、林蔵に臣事いたさせ下され」

「拙者が勝たば赤尾の林蔵を、高萩の猪之松に従わせ、猪之松をして関東一の……」

「大貸元にさせましょう」

「はあそのための賭試合？」

「弟子は可愛いものでござる」

「なるほどな」と多四郎は云つたが、そのまま沈黙して考え込んでしまった。

林蔵と猪之松とが常日頃から、勢力争いをしていることは、多四郎といえども知っていた。その争いが激甚となり、早晚力と力とをもつて、正面衝突しなければなるまい——と

いう所まで競り詰めて来ている。ということも伝聞していた。とはいえそのため秋山要介という、一大劍豪が現われて、師弟のつながりを縁にして、自分に試合を申し込み、その勝敗で二人の博徒の、勢力争いを解決しようなどと、そのような事件が起ころうなどは、夢にも思いはしなかった。

(何ということだ！)と先ず思った。

(さてどうしたものだろう?)

とは云え自分も弟子は可愛い、成ろうことなら林蔵を挫いて、猪之松を大貸元にしてやりたい。

(では)と思わざるを得なかった。

(では要介の申し込みに応じ、賭試合を行ない打ち勝つてやろう)
腹が決まると堂々たるもので、逸見多四郎は毅然として云った。

「賭試合承知いたしてござる。しからば直ちに拙者屋敷に参り、道場においてお手合わせ、試合いたすでござりましょう」

「欣快」

要介は立ち上った。

「杉氏、貴殿もおいでなされ」
三人揃って部屋を出た。

逸見多四郎家のここは道場。――

竹刀しなではない木刀であった。

要介と多四郎とは構えていた。

一本勝負！

そう定められていた。

二人ながら中段の構え！

今、シ——ンと静かである。

かかる試合に見物は無用と、通いの門弟も内門弟も、一切退けてのただ二人だけ！ いや他に杉浪之助と、要介の訪問に応待に出た、先刻の若侍とが道場の隅に、つつましく控えて見守っていた。

見霞むばかりの大道場、高く造られある正面は、師範の控える席であり、それに向かつて左の板壁には、竹刀、木刀、槍、薙刀、面、胴、籠手の道具類が、棚に整然と置かれてあり、左の板壁には段位を分けた、漆塗りの名札がかけてあった。

塵もとどめぬ板敷は、から拭きされて鏡のように光り、おりから羽目板の隙間から、横射しに射して来た日の光りが、そこへ琥珀色の棒縞を織り、その空間の光の圏内に、ポツと立っている幽かな塵埃は、薄い煙か紗のようであった。

互いに中段に位取つて動かぬ、要介と多四郎は広い道場の、中央に居るところから、道場の端に腰板を背にして、端座している浪之助から見ると、人形のように小さく見えた。

おおよそ六尺の間隔を保ち、互いに切先を相手の眉間へ、ピタリと差し付けて構えたまま、容易に動こうとはしなかった。

道具を着けず木刀にての試合に、まさに真剣の立合いと、何の異なるところもなく、赤あ檜かがしはまぐり蛤は刃の木刀は、そのまま真まことの剣であり、名人の打った一打ちが、急所へ入らば致命傷、命を落とすか不具ふぐになるか、二者一つに定きまつていた。

とはいえ互いに怨みあつての、遺恨の試合というのではなく、互いの門弟を引つ立てようための義理と人情とにからまつた、名人と名人との試合であった。自然態度に品位があ

り、無理に勝とうの邪心がなく、闘志の中に礼讓を持った、すがすがしい理想的の試合であつた。

今の時間にして二十分、構えたままで動かなかつた。

掛声一つかけようとしなない。

掛声にも三通りある。

追い込んだ場合に掛ける声。相手が撃つて出ようとする、その機を挫くじいて掛ける声、一打ち打つて勝利を得、しかも相手がその後に出でて、撃つて来ようとする機を制し、打たせぬために掛ける声。

この三通りの掛声がある。

しかるに二人のこの試合、追い込み得べき機会などなく、撃つて出ようとするような、隙を互いに見せ合わず、まして一打ち打ち勝つという、そういうことなどは絶対になかつた。

で、二人ながら掛声もかけず、同じ位置で同じ構えで、とはいえ決して居附きはせず、腹と腹との業比べ、眼と眼との睨み合い、呼吸と呼吸との抑え合い、一方が切先を泳がせれば、他の一方がグツと挫き、一方が業をかけようとすれば、他の一方が先々ノ先で、し

かも気をもつて刎ね返す、……それが自ずと木刀に伝わり、二本の木刀は命ある如く、絶えず幽かにしかし鋭く、上下に動き左右に揺れていた。

更に長い時が経った。

と、要介の右の足が、さながら磐石をも蹴破るていの、烈しさと強さと力とをもつて、しかもゆつくりと充分に粘り、ソロリとばかり前へ出て、左足がそれに続いた。

瞬間多四郎の左足が、ソロリとばかり後へ下り、右足がそれに続いた。

で 間だ！ 静止した。

長い間！ ……しかし……次の瞬間……ドドドドツという足音が響いた。

二

奔流のように突き進む要介！

追われて後へ退く多四郎！

ドドドドツという二人の足音！

見よ、その速さ、その鋭さ！

あッ、多四郎は道場の端、板壁へまで追い詰められ、背中を板壁へあてたまま、もう退

けない立ち縮んだ。

その正面へ宛然さながら巨岩、立ちふさがったは要介であった。

勝負あつた！

勝ち是要介！

非ず、見よ、次の瞬間、多四郎の胸大きく波打ち、双肩渦高く盛り上ると見るや、ヌツと一足前へ出た。

と、一足要介は下つた。

多四郎は二足ヌツと出た。

要介は退いた。

全く同じだ！

ドドドドツという足音！

突き進むは多四郎、退くは要介、たちまちにして形勢は一変し、今は要介押し返され、道場の破目板を背に負つた。

で、静止！

しばらくの間！

二本の劍が——木刀が、空を細かく細かく細かく、細かく細かく刻んでいる。

多四郎勝ちか？

追りようい詰りようめ了りようしたか？

否！

ソロリと一足下った。

追つて要介が一足出た。

粘りつ、ゆつくりと、驚足さながら、ソロリ、ソロリ、ソロリ、ソロリと、二人は道場の中央まで出て来た。

何ぞ変らざる姿勢と形勢と！

全く以前と同じように、二人中段に構えたまま、見霞むばかりの大道場の、真中の辺りに人形のように小さく、寂然と立ち向かっているではないか。

さすがに二人の面上には、流るる汗顎までしたり、血上って顔色朱の如く、呼吸は荒くはずんでいた。

窒息的なこの光景！

なおつづく勝負であった。

試合はつづけられて行かなければならない。

が、忽然そのおりから、

秩父の郡こおり

小川村

逸見様庭の

桧の根

昔はあつたということじゃ

と、女の歌声が道場の外、庭の方から聞こえてきた。

「しばらく！」と途端に叫んだ要介、二間あまりスルスルと下ると、木刀を下げ耳を澄ました。

「……………」

審かしそうに体を斜めに、しかし獲物は残心に、油断なく構えた逸見多四郎、

「いかなされた、秋山氏？」

「あの歌声は？ ……歌声の主は？」

「ここに控え居る東馬共々、数日前に、絹川において、それがちようぎよ某釣魚いたせし際、古船に乗

つて正体失い、流れ来たった女がござった。……助けて屋敷へ連れ参ったが、ただ今の歌の主(ご)ぢやる」

12

「名は？ 源女！ お組の源女！ ……と申しはいたしませぬか？」

「よくご存知、その通りじや」

「やっぱりそうか！ そうでござったか！ ……有難し、まさしく天の賜物！ ……その女こそこの要介仔細ござって久しい前より、保護を加え養い居る者、過日上尾の街道附近で、見失い失望いたし居りましたが、貴殿お助け下されたか。……源女拙者にお渡し下され」

「ならぬ！」と多四郎ニベもなく云った。

「源女決して渡すことならぬ！」

「理由は？ 理由は？ 逸見氏？」

「理由は歌じや、源女の歌う歌じや！」

「……………」

「今は変わって千の馬、五百の馬の馬飼の……後にも数句ごぎったが、この歌を歌う源女という女子、拙者必要、必要でござる！」

「なるほど」と要介は頷いて云った。

「貴殿のお家に、逸見家に、因縁最も深き歌、その歌をうたう源女という女、なるほど必要ござろうのう……伝説にある埋もれたる黄金、それを掘り出すには屈竟の手蔓……」

「では貴殿におかれても？」

「御意、さればこそ源女をこれ迄……」

「と知ってはいよいよ源女という女子おなご、お渡しいたすことなりませぬ」

「さりながら本来拙者が保護して……」

「過ぐる日まではな。がその後、見失いましたは縁無き證拠。……助けて拙者手に入れたからは、今は拙者のものでござる」

「源女を手蔓に埋もれし黄金を、では貴殿にはお探しなさるお気か？」

「その通り、云うまでもござらぬ」

「では拙者の競争相手！」

「止むを得ませぬ、因縁でござろう」

「二重に怨みを結びましたな！」

「ナニ怨みを？ 二重に怨みを？」

「今は怨みと申してよかろう！ ……一つは門弟に関する怨み、その二は源女に関する怨み！」

「それとても止むを得ぬ儀」

「用心なされ逸見氏、拙者必ず源女を手に入れ、埋もれし黄金も手に入れましょう」

「出来ましたなら、おやりなされい！」

「用心なされ逸見氏、源女を手に入れ埋もれし黄金を、探し出だそうと企て居る者、二人以外にもござる程に！」

「二人以外に？ 誰じゃそ奴？」

「貴殿の門弟、水品陣十郎！」

「おお陣十郎！ おお彼奴か！ ……弟子ながらも稀代の使い手、しかも悪劍『逆ノ車』

の、創始者にして恐ろしい奴。 ……彼奴の悪劍を破る業、見出だそうとこの日頃苦心していたが、彼奴が彼奴が源女と黄金を……」

「逸見氏、お暇申す」

「勝負は？ 秋山氏、今日の勝負は？」

「アツハハ、後日真剣で！」

因果な恋

1

高萩村の村外れに、秩父香具師やしの部落があり、「刃ノ郷やいばのじょう」と称していた。三十軒ほどの人家があり、女や子供や老人などを入れ、百五十人ほどの半農半香具師が、一致団結して住んでいた。

郷に一朝事が起こり、合図しらせの竹法螺がボーツと鳴ると、一切の仕事を差し置いて、集まるということになっていた。

弁三爺さんという香具師の家は、この郷の片隅にあつた。

茅葺の屋根、檜の生垣、小広い前庭と裏の庭、主屋、物置、納屋等々、一般の農家と変わりのない家作、——ただし床ノ間に鳥銃一挺、そうして壁に半弓一張、そういう武器が懸けてあるのは、本来が野士といつて武士の名残——わけても秩父香具師は源氏の正統、

悪源太義平から来ていると、自他共に信じているそれだけあって、普通の農家と異^{ちが}つていた。

秋山要介と逸見多四郎とが、多四郎の道場で、木刀を交した、その日から数日経過したある日の、こころよく晴れた綺麗な午後、この庭に柿の葉が散っていた。

その葉の散るのをうるさそうに払って、お妻が庭へ入って来た。

「いい天気ね、弁三爺さん」

母屋の縁側に円座を敷き、その上に坐って憂鬱の顔をし、膏藥を練っていた弁三爺さんは、そう云われてお妻の顔を見た。

「よいお天気でございますとも……へい、さようで、よいお天気で」

——そこで又ムツツリと家伝の膏藥を、節立った手で練り出した。

お妻は眉をひそめて見せたが、

「日和が続いていい気持だのに、爺つあんはいつも不機嫌そうね」

「へい、不機嫌でございますとも、倅が江戸へ出て行つたまま、帰つて来ないのでござい
ますからな」

「またそれをお云いなのかえ。ナーニそのうち帰つて来るよ」とは云つたものの殺された

碎、弁太郎が何で帰るものかと、心の中で思っているものであった。

(あの人を殺したのは陣十郎だし、殺すように進めたのは妾だったつけ)

こう思えばさすがに厭な気がした。

まだお妻がそんな邯鄲かんたんし師などにならず、この郷に平凡にくらしていた頃から、弁太郎はひどくお妻を恋し、つけつ廻しつして口説いたものであった。その後お妻は故郷を出て、今のような身の上になつてしまった。と、ヒョッコリ弁太郎が、膏藥売となつて江戸へ出て来、バツタリお妻と顔を合わせた。爾来弁太郎は付き纏い、長い間の恋を遂げようとし、お妻の現在の身分も探ぐり、恋遂げさせねば官に訴え、女邯鄲師として縄目の恥を、与えようなどと脅迫さえした。お妻は内心セラ笑つたが、うるさいから眠らせてしまおうよ、こう思つて情夫の陣十郎へケシカケ、一夜お茶ノ水へ引つ張り出し、一刀に切らせてしまったのであった。

杉浪之助が源女の小屋から、自宅へ帰る途みちすが中らに見た、香具師の死骸は弁太郎なのであった。

「爺つあん、主水さんのご機嫌はどう？」お妻は話を横へそらせた。

2

「あのお方もご機嫌が悪そうで」

弁三はそう云つて俯向いて、物憂そうに膏藥を練つた。

「出て行きたそうなご様子はないかえ？」

「出て行きたそうでございますなあ」

「出て行かしちゃアいけないよ」

「というお前さんの云いつけだから、せいぜい用心しては居りますがね」

「行かせたらあたしやア承知しないよ」

剃かみそり刀はさきのような眼でジロリと見た。

「手に合わなけりやア仕方がねえ、ボーツと竹法螺吹くばかりだ」

「と、村中の出口々々が、固められるから大丈夫だねえ。でもそういつた大袈裟なこと、あたしやアしたくはないのだよ」

「もつとご尤もさまでございます」

「どれご機嫌を見て来よう」

腰かけていた縁から立って、お妻は裏の方へ廻つて行つた。

(凄い女になったものさな)

お妻の後を見送りながら、そう弁三爺さんは思った。

以前この郷に居た時分は、度胸こそあったが可愛い無邪気な綺麗な娘つ子に過ぎなくて、この家などへもノベツに来て、お爺さんお爺さんと懐かしがってくれたお妻、それがどうだろう陣十郎とかいう浪人者と手をたずさえて、今度やって来た彼女を見れば、縹緖も上つたがそれより何より、人間がすっかり異つてしまつていて、腕には刺青眼には殺気、心には毒を貯えていて、人殺しぐらいしかねまじい姐御、だいそれた女になっているではないか。

(陣十郎とかいうお侍さん、随分怖そうなお侍さんだが、あんな人の眼をこつそり盗んで、しぎさわもんど鳴澤主水とかいうお侍さんを、こんな所へかくま隠匿うなんて……血腥さい事件でも起こらなけりやアいいが)

これ进行と弁三爺さんは、不安で恐ろしくてならなかつた。

数日前のことであつた、そのお侍さんを駕籠に乗せて、宵にこつそりやって来て、

「このお侍さんを隠匿つておくれ、村の者へも陣十郎さんへも、誰にもないしよ秘密で隠匿つておくれ、昔馴染みのお前さんのところより、他には隠し場所がないんだからねえ」

こうお妻が余儀なげに云つた。

見ればどうやらお侍さんは、半分死んででもいるように、氣息奄々憔悴していた。

「へい、それではともかくも……」

こう云つて弁三は引き受けた。

と、翌日から毎日のように、お妻はやって来て介抱した。

(どういう素性のお侍さんなのかな?)

(お妻さんとの関係はどうなんだろう?)

わか解らなかつたが不安であつた。

婆さんには死に別れ、たつた一人の倅の弁太郎は江戸に出たまま帰つて来ない。ただでさえ不安で小寂しいところへ、そんなお侍さんをあずかつたのである。

弁三爺さんは憂鬱であつた。

黙々と膏藥を練つて行く。

ヒョイと生垣の向こうを見た。

「あッ」と思わず声をあげた。

陣十郎が蒼白い顔を、氣味悪く歪めて生垣越しに、じつとこつちを見ているではないか。

(さあ大変！ さあ事だ！)

3

「おい」と陣十郎は小声で呼んだ。

「おい爺とっつあん、ちよつと来てくんない」

生垣越しに小手招きした。

裏の座敷にはお妻がいるはずだ。

「へい」とも返辞が出来なかった。

顛えの起こった痩せた体を、で弁三はヒヨロヒヨロと立たせ、庭下駄を穿くのもやつとこさで、陣十郎の方へ小走つて行つた。

生垣を出ると村道である。

と、陣十郎がしゃがみ込んだので、向かい合つて弁三もしゃがみ込み、

「へ、へい、これは水品様……」

「爺つあん、お妻が来たようだね」

「オ、お妻さんが……へい……いいえ」

「へい、いいえとはおかしいな。へいなのか、いいえなのか？」

「へい……いいえ……いいえなので」

「とすると俺の眼違いかな」

「……………」

「恰好がお妻に似ていたが……」

「……………」

「ナー二の、俺ら家を出てよ、親分の家へ行こうとすると、鼻っ先を女が行くじやアないか。滅法粹な後ろ姿さ。悪くねえなア誰だろうと、よくよく見ると俺の女房さ。アツ、ハツハツそうだったか、女房とあつては珍しくねえ、と思ったがうちの女房ども、どちらへお出かけかとつけて来ると、お前の家へ入ったというものさ」

「へ、へい、さようで、それはそれは……」

「それはそれはでなくて、これはこれはさ。これはこれはとばかり驚いて、しばらく立って見ていたが、裏の方へ廻って行ったので、爺つあんお前をよんだわけさ」

「へ、へい、さようでございますかな」

「裏にやア何があるんだい？」

「へい、庭と生垣と……」

「それから雪隠と座敷とだろう」

「へい、裏座敷はございます」

「その座敷にだが居る奴はだれだ！」

「ワーツ！ ……いいえ、どなた様も……」

「居ねえ所へ行つたのかよ」

「ナ、何でございますかな？」

「誰もいねえ裏座敷へ、俺の女房は入つて行つたのか？」

「……………」

「犬か！」

「へ？」

「雄の犬か！」

「滅相もない」

「じゃア何だ！」

「……………」

「云わねえな、利いていると見える、お妻のくらわせた鼻薬が……」

「水品様、まあそんな……そんな卑しい弁三では……」

「ないというのか、こりやア面白い、あいびきやど媾曳宿に座敷を貸して、鼻薬を貰わねえ上品な爺おやじ

——あるというならこりやア面白い！ 貰った貰った鼻薬は貰った。そこでひし隠しに隠しているのだ！……ヨシそれならこつちの鼻薬、うんと利くやつを飲ませてやる」

トンと刀の柄を叩いた。

「鍛えは関、銘は孫六、随分人を切ったから、二所ばかり刃こぼれがある、抜いて口からズーツと腹まで！……」

ヌツと陣十郎は立ち上り、グツと鯉口を指で切った。

4

古びた畳、煤けた天井、雨もりの跡のある茶色の襖。裏座敷は薄暗く貧しそうであった。江戸土産の錦絵を張った、枕屏風を横に立てて、しとね褥の上に坐っているのは、蒼い頬、削けた顎、こればかりは熱を持って光っている眼、そういう姿の主水であった。

「心身とも恢復いたしました。もう大丈夫でございます」

そんな姿でありながら、そうして声など力がないくせに、そう主水は元気ありそうに云った。

「そろそろ発足いたしましたねば……」

「さあご恢復なさいましたかしら」

高過ぎる程高い鼻、これだけが欠点といえれば欠点と云え、その他は仇つぼくて美しい顔へ、意味ありそうな微笑を浮かべ、流眇ながしめに主水を眺めながら、前に坐っているお妻は云った。

「ご恢復とあつてはお父様の敵かたき、お討ちにならねばなりませんのねえ」

「はいそれに誘かどわか拐わされました妹の、行方を尋ね取り戻さねば……」

「そうそう、そうでございましたわねえ」

お妻はまたも微笑したが、

「そのお妹御の澄江様すみえ、まことは実のお妹御ではなく、お許いいなすけ婚けの方でございましたのね」

そう云った時お妻の眼へ、嫉妬ねたましさを雜えた冷笑のようなものが、影のようにチラリと射した。

「はい」と主水は素直に云った。

「とはいえ永らく兄妹として、同じ家に育つて参りましたから、やはり実の妹のように……」

「さあどんなものでございましょうか」

云い云い髪へ手をやって、かんざし簪で鬢の横を搔いた。

「お許婚の方をお連れになり、敵討の旅枕、ホ、ホ、ホ、お芝居のようで、いつそお羨うらやましゅうございますこと……」

主水は不快な顔をしたが、グツと抑えてさりげなく、

「その妹儀あれ以来、どこへ連れられ行かれましたか……思えば不愆……どうでも探して……」

「不愆は妾もでございますよ」

お妻の口調が邪見になり、疝を亢ぶらせた調子となった。

「人の心もご存知なく……妾の前でお許婚の、お噂ばかり不愆とやら、探そうとやら何とやら、お気の強いことでございます」

グツと手を延ばすと膝の前にあつた、冷えた渋茶の茶碗を取り、一口に飲んでカチリと

置いた。

「妾の心もご存知なく！」

西陽が障子に射していて、時々そこへ鳥影がさした。

生垣の向こう、手近の野良で、耕しながらの娘であろう、野良歌うたうのが聞こえてきた。

背戸せとを出たればナ―

よいお月夜で

さまさまの頬ほお冠かむナ―

白々と

二人はしばらく黙っていた。

と、不意に怨ずるように、お妻が熱のある声で云った。

「ただに酔興で貴郎様を、何である時お助けしましょうぞ。……その後もここにお隠かくま匿いし、何の酔興でござ介抱しましょう。……心に想いがあるからでござんす」

主水は当惑と多少の不快、そういう感情をチラリと見せた。

が、お妻はそんなようにされても、手を引くような女ではなく、

「あの際お助けしなからうものなら、陣十郎が立ち戻り、正気を失っている貴郎様を、討ち取ったことでござりましょうよ。……恩にかけるではござりませぬが、かけてもよいはずの妾わたしの手柄、没義道もぎどうになされずにねえ主水様……」

「あなた様のお心持、よう解つては居りますが、……そうしてお助け下されました、ご恩の程も身にしみじみと有難く存じては居りますが……」

そう、主水はお妻の云う通り、あの日陣十郎を追って行き、疲労困憊極まって、鎮守の森で気絶した時、お妻の助けを得なかつたなら、後にて聞けば陣十郎が、森へ立ち戻つて来たとはいうし、その陣十郎のために刃の錆とされ、今に命は無かつたろう。だからお妻は命の恩人と、心から感謝はしているのであり、そのお妻が来る度毎に、それとなく、いやいや、時には露骨に、自分に対して恋慕の情を、暗示したり告げたり訴えたりした。でお妻が自分を助けた意味も、とうに解つてはいるのであった。

さりとてそのため何でお妻と、不義であり不倫であり背徳である関係、それに入ることが出来ようぞ！

「主水様」とお妻は云つた。

「あなた様にはまだこの妾わたしが陣十郎の寵おもいもの女、陣十郎の情婦いろおんな、それゆえ心許されぬと、お思い遊ばして居られますのね」

下から顔を覗かせて、主水の顔色を窺つた。

「いかにも」と主水は苦しうに云つた。

「それを思わずに居られましようか。……討ち取らねばならぬ父の敵かたき！ 陣十郎の寵女、お妻殿がそれだと知りましては、心許されぬはともかくも、何で貴女様あなたのお志に……」

「従うことなりませぬか」

「不倶戴天の敵の情婦に……」

「では何でおめおめ助けられました」

「助けられたは知らぬ間のこと……」

「では何で介抱されました……」

答えることが出来なかつた。思われるはただ機を失した！ 機を失したということであつた。

助けられたその翌日、訊ねられるままにお妻に対し、主水は姓名から素性から、その日

の出来事から敵討のことから、敵の名さえ打ち明けた。

と、お妻は驚いたように、主水の顔を見詰めたが、やがて自分が陣十郎の情婦、お妻であることを打ち明けた。

これを聞いた時の主水の驚き！

同時に思ったことといえば、

(助けられなければよかつたものを！)

——というそういうことであり、直ぐにも立ち退こうということであつた。

6

(直ぐに立ち退いたらよかつたものを)

今も主水もんどはこう思っている。

立ち退こうとその時云いはした。

と、お妻が止めて云つた。

「ここは高麗郡こまろおりの高萩村、博徒の縄張は猪之松という男、陣十郎の親分でござんす。十町とは歩けなさるまい、そのように弱っているお体で、うかうか外へ出ようものなら、手

近に陣十郎は居りまするし、猪之松親分の乾兒こぶんも居り、貴郎様あなたにはすぐに露見、捕らえられて罾り殺し！……ご発足など出来ませぬものか」

しかし主水としては敵の情婦に、介抱などされること、一分立たずと思われたので、無理にも立とうと云い張った。

と、お妻は嘲笑うように云った。

「ここは『刃ノ郷やいばのこ』と申し、高萩村でも別趣の土地、秩父香具師の里でござんす。住民一致して居りまして、事ある時には竹法螺を吹く。と、人々出で合つて、村の入口出口を固め、入る者を拒み出る人を遮る。妾わたしもこの郷の女香具師の一人、いいえ貴郎様は発足たせませぬ！ 無理にお発足おっしやちと有仰おっしやるなら、竹法螺吹いて止めるでござんしよう」

もう発足つことは出来なかつた。

こうして今日まで心ならずも、介抱を受けて来たのであつて、無理に受けさせられた介抱ではあるが、敵の情婦と知りながら、介抱を受けたには相違なく、で、それを口にされては、返す言葉がないのであつた。

(直ぐに立ち退けばよかつたのだ！ 機を失した！ 機を失した！)

このことばかりが口惜まれるのであつた。

二人はしばらく黙つたままで——主水は俯向いて膝を見詰め、お妻はそういう主水の横顔を、むさぼるように見守つていた。

「それにいたしましたしても何と云つてよいか、あなたにとりましてはこの主水。敵の片割ともいふべきを、そのようにお慕い下さるとは……」

途切れ途切れの言葉つきで、やがて主水はそんなように云つた。

「さよう、敵の片割でござる。あなたの愛人水品陣十郎を、敵と狙う拙者故……」

「悪縁なのでござりましょうよ」

そうお妻も言葉を詰らせ、ともすると途切れそうな言葉つきで云つた。

「因果な恋なのでござりましょうよ……あの日、あの時、鎮守の森で、死んだかのように可哀そうに、憐れなご様子で草を褥しとねに、倒れておいでなさいましたお姿、それを見ました時どうしたものか、妾はそれこそ産れてはじめての、——本当の恋なのでございましょうねえ……そういう思いにとらえられ……まあ恥かしい同じ仲間の、たくさんのお郷の人達が、側にいたのに臆面もなく、あたしやアこのお方をご介抱するよと、ここへお連れして参りましたが……因果の恋なのでござりましょうねえ。……それにもう一つには妾にとりまして、あの水品陣十郎という男、本当の恋しい男でなく、愛する男でもありません故と……

「そうも思われるのでござります」

7

「お妻殿！」とやや鋭く、やや怒った言葉つきで、咎めるように主水は云った。

「いかに拙者に恋慕の情をお運びになるあなたとはいえ、現在の恋人をあからさまに、恋せぬなどと仰せらるるは……：そういうお心持でござるなら、拙者に飽きた暁には、又他の情夫に同じように、拙者の悪口を仰せられましよう……：頼み甲斐なき薄情！ ……」

「いいえ、何の、主水様、それには訳が、たくさん訳が……」

あわてて云つたもののそれ以上、お妻は云うことは出来なかつた。

自分が女賊で、女おんな邯鄲かんたん師で、平塚の宿の一夜泊り、その明け方に同宿の武士、陣十郎の胴巻を探り、奪おうとして陣十郎のため、かえつて取つて押えられ、それを悪縁に爾来ずつと、情夫情婦の仲となり今日まで続いて居るなどは、さすが悪女の彼女としても、口へ出すことが出来なくて、自分はこの郷の香具師の娘、陣十郎に誘惑され、情婦となつて江戸や甲州を、連れ廻されたとなんのように、主水には話して置いたのであつた。

女邯鄲師としての悪事の手證を、押えられたための情夫情婦、それゆえ本当の恋ではな

いと、こう云い訳出来ぬ以上は、そう主水に咎められても、どう弁解しようもなく、お妻は口籠つてしまったのであつた。

が、お妻はニツと笑い、もつともらしくやがて云つた。

「妾の前に陣十郎には、情婦おんながあつたのでござります。江戸両国の女芸人、独楽廻しの源女という女、これが情婦でござりまして、諸所方々を連れ歩いたと、現在の情婦の妾の前で、手柄かのように物語るばかりか、貴郎様あなたのお許いひなすけ婚の澄江様にも……」

「澄江にも！ うむ、陣十郎め！」

「横恋慕の手をのばし……」

「いかにも……悪虐！ ……陣十郎……」

「あの夜澄江様を誘かどわか拐し、しかも妾という人間を、下谷の料亭常磐などに待たせ……さて首尾よく澄江様を、連れ出すことが出来ましたら、妾を秋の扇と捨て、澄江様を妾の代わりに……」

「何の彼如き鬼畜の痴者に、妹を、妹を渡してなろうか？」

「そういう男でござります。そういう男の陣十郎を、何で妾ひとりだけが……先が先なら

こつちもこつち……主水様！今は貴郎様へ！」

「それにいたしても、妹澄江は……」

「お許婚の澄江様は……」

「上尾街道のあの修羅場で、馬方博徒数名の者に、担がれ行かれたと人の噂……」

「人の噂で聞きましたなア……さあそのお許婚の澄江様……澄江様のお噂さえ出れば、眼の色変えてお騒ぎになられる」

「妹であれば当然至極！」

「可愛い可愛いお許婚なりや、脳乱遊ばすもごもつとも？ホ、ホ、ホ、その澄江様、どうで担いだ人間が、馬方博徒のあぶれ者なら？……」

しかしその時表の庭の、方角にあたって云い争う、男の声が聞こえてきた。

「や、あの声は？」

「おおあの声は」

二人ながら森と耳を澄ました。

陣十郎は弁三を突きつけ、村道から境の生垣を越え、表の庭へ入って行った。

「云い古されたセリフだが、俺の遣る金鼻薬は、小判じやアねえドスだ延金だアツハハ、驚いたか望みならば——ズバツと抜いて、先刻も云った口から腹まで、差し込んでやろうどうだ、どうだ？」

なお止める弁三を突きまくり、陣十郎はグングン歩いた。

8

「ままにしやアがれ！」

不意に弁三は、年は取つても秩父香具師——兇暴の香具師の本性を現わし、猛然と吼え競い立った。

「裏座敷にやア誰もいねえ！ とこう一旦云つたからにやア、俺も秩父香具師の弁三だ、あくまでも居ねえで通して見せる！ 汝^{うぬ}は何だ、え汝は？ 馬の骨か牛の骨か、どこの者とも素性の知れねえ、痩せ浪人の身分をもつて『刃ノ郷』の俺らの仲間、お妻ツ娘と馴れ合つたのさえ、胸糞悪く思っているのここら辺りを立ち廻り、博徒の用心棒、自慢にもならねえヤクザの身を、変にひけらかせて大口を叩き、先祖代々素性正しく、定住している俺達へ、主人かのように振る舞い居る！ ナニ刀だ！ 抜いて切るって！ おお面白い

切られよう、が手前が切る前に、こつちもこつちで手前の体へ」

喚くと陣十郎へ背中を向け、庭を突つ切り縁へ駈け上り、座敷へ飛び込むと床の間にある、鳥銃を抱えて走り出で、縁に突つ立ち狙いを定めた。

「秩父の山にやア熊や狼が、ソロソロ冬も近付いて来た、餌がねえと吼えながら、ウロウロ歩いてるだろう。狙い撃ちにして撃ち殺し、熊なら胸を裂き肝を取り、皮を剥いで足に敷く、秩父香具師の役得だア。手練れた鉄砲にやア狂いはねえ！ 野郎来やがれ、切り込んで来い！ 定九郎じゃアねえが二ツ弾、胸にくらって血へどを吐き、汝それ前にくたばるぞよ！ 来やアがれ——ツ」とまくし立て、まくし立てながらも手に入った早業、いつか火縄に火を付けていた。

「待て待て爺おやじ」と周章狼狽、陣十郎は胆を冷し、生垣の間まで後退つた。

「気が短いぞ、コレ待て待て！ ……鉄砲か、ウーン、こいつ敵かなわぬ……」

まさか撃つまい嚇しであろう、そうは思つても気味が悪く、見ればいやいや嚇しばかりでなく、こつちを睨んでいる弁三の眼に、憎悪と憤怒と敵愾心が、火のように燃えていた。

ゾツと感ずるものがあつた。

（いつぞやお妻に聞いたことがあった、いつぞやお茶ノ水の森の中で、お妻に頼まれて殺生ながら、叩つ切つて殺した弁太郎という男、秩父香具師の膏薬売、弁三という老人の、失つた一人の倅である！ おおそうだったこの弁三が、殺した弁太郎の父親だった。：：下手人が俺だということなど、まさかに知つては居るまいが、親子の血がさせる不思議の業、この世には数々ある、何となく弁三爺の心に、俺を憎しむ心持が、深く涌いていないものでもない。もしそうなら撃つぞ本当に！）

ゾツと感ずるものがあつた。

そこでいよいよ後退りし、小門の方へ後ざまに辿り、

「解つた、よし裏座敷には、誰もいない、犬さえ居ない！ よし解つた、そうともそうとも！ ……誰がいるものか、居ない居ない！ ……居れば！ 居れば悪いが……それもよろしい、居ない居ない！ ……そこで帰る、撃つな撃つな！ ええ何だ鉄砲なんど……恐ろしいものか、ちと怖いが……馬鹿！」と一喝！ がその時には、既に村道へ遁れ出ていた。

生贄の女

1

同じその日のことである。――

高萩村の博徒の親分、猪之松の家は賑わっていた。

馬大尽事井上嘉門様を、ご招待して大盤振舞いをする――というので賑わっているのであつた。

博徒とはいつても大親分、猪之松の家は堂々たるもので、先はお屋敷と云つてよく、土蔵二棟に離座敷、裏庭などは数奇すきを凝らした一流の料亭のそれのようであり、屋敷の周囲には土塀さえ巡らし、所の名主甚兵衛様より、屋敷は立派だと云われていた。内緒も裕福で有名であつたが、これは金方が附いているからで、その金方が井上嘉門様だと、多くの人々は噂して居、噂は単なる噂ばかりでなく、事実それに相違なかつた。

猪之松という人間が、博徒のようになく人品高尚で、態度も上品で悠然としてい、お殿様めいたところがあり――だからどこか物々しく、厭味の所はあつたけれど、起居動作はおちついている、行儀作法も法に叶っている、貴人の前へ出したところで、見劣りがしないところから、自然上流との交際が出来、そこで井上嘉門などという、大金持の大胆那に、

愛顧され鼻屑にされるのであった。

金方の井上嘉門様を、ご招待するといふのであるから、その物々しさも一通りでなく、上尾宿からは茶屋女の、氣の利いたところを幾人か呼び、酒肴給仕に従わせ、村からも渋皮の剥けた娘——村嬢そんじょうの美よいとところを幾人か連れて来、酒宴の席へ侍らせたり、これも上尾の宿から呼んだ、常磐津とぎわすの女師匠や、折から同じ宿にかかっていた、江戸の芝居の役者の中、綺麗な女形の色若衆を、無理に頼んで三人ほど来させ、舞など舞わせる寸法にしてあった。

田舎の料理は食われない——と云ったところで上尾も田舎、とは云え勿論高萩村より、いくらか都会といふところから、料理は上尾からことごとく取った。

兄弟分はいうまでもなく、主立った乾兒幾十人となく、入れ代わり立ち代わり伺候して、嘉門様からお流れ頂戴、お盃をいただいたりした。

嘉門は午後ひるからやって来て、今は夜、夜になつても、仲々去らず、去らせようともせず、奥の座敷の酒宴の席は、涌き立つように賑わつてい、高張を二張り門に立てて、砂を敷き盛砂さえた、玄関——さよう猪之松の家は、格子づくりというような、町家づくりのそれだけでなく、大門構え玄関附、そういつた武家風の屋敷であつたが、その玄関を夜になつた

今も、間断なく客が出入りして、ここも随分賑かであり、裏へ廻ると料理場、お勝手、こは一層の賑かきで、その上素晴らしい好景気で、四斗樽が二つも抜いてあり、酒好きの手合いは遠慮会釈なく、冷をあおつては大口を叩き、立働きの女衆へ、洒落冗談を並べていた。

陽気で派手でお祭り気分、ワーツといったような雰囲気であった。

その勝手元へ姿を現したのは、浮かない顔をした陣十郎であった。

「これはいらつしやい水品先生、こんな遅くどうしたんですい？」

こう云つて声をかけたのは、猪之松にとつては一の乾分——上尾街道で浪之助などに追われ、逃げ廻る弱者の峯吉ではなく——角力上りかんぬき門峰吉であった。

「遅いか早いかそんなことは知らぬ。陽気だな、これは結構」どこかで飲んで来たらしく、陣十郎は酔っていたが、凄じく据わつた血走つた眼で、ジロジロあたり四辺を見廻しながら、上ろうともせず随分邪魔な、上あがりかまち 框へデンと腰かけ、片足を膝の上へヒョイとのつけ、楊子で前歯をせせり出した。

(ご機嫌が悪いぞ、あぶないあぶない)

酒癖の悪いのを承知の一同、あぶないあぶないと警戒するように、互いに顔を見合わせだが、こんな時にはご自慢の情婦おんな——お妻を褒めるに越したことはない、唐子の音吉というお先ツ走りの乾児が、

「姐御、どっこい、奥様だったつけ、奥様お見えになりませんが、一体全体どうしたんで、こんな時にこそご出張を願って、あの綺麗で粹なご様子で、お座敷の方を手伝っていただき、愛嬌を振り蒔いていただけば、嘉門様だって大喜び、親分だって大恭悦、ということになるんですがねえ。それが昼から夜にかけて、一度もお見えにならねえなんて……一体全体奥様は……」

「奥様？ ふん、誰のことだ！」

ギラリと陣十郎は音吉を睨み、

「奥様、ふふん、どいつのことだ！」

「どいつツて、そりや、お妻さんのこと……」

「枕探し！ ……あいつのことか！」

「え？ 何ですって、こいつアひでえや」

ヒヤリとして音吉は首を縮めた。

勿論音吉をはじめとして、乾児一同お妻のことを、どうせ只者じゃアありやアしない。

枕探し、女邯鄲師かんたんし、そんなようには薄々のところ、実は推していたようなものの、亭主

——情夫——陣十郎の口から、今のようにあからさまに云われては、ヒヤリとせざるを得なかつた。

「何を云うんですい、水品先生」

「何とは何だ、これ何とは！ ……枕探しだから枕探し、こう云つたに何が悪い。いずれは亭主の寝首を搔く奴！ ……そんな女でも奥様か！」

「ワ——ツ、不可いけねえ、何を仰有るんで、 ……奥様で悪かつたら奥方様 ……」

「出ろ！ 貴様！ 前へ出ろ！」

勝手元一杯に漲っていた、明るい燈火がカツと一瞬間、一所へ集まり閃めいた。

見れば陣十郎の右の手に、抜かれた白刃が持たれていた。

バタバタと女達は奥の方へ逃げた。

「アツハハハ」と陣十郎は、不意に気味悪く笑い出した。

「ある時には関の孫六、ある時には三条小鍛冶、ある時には波の平！ 時と場合でこの刀、

素晴らしい銘をつけられるが、ナー二本性は越前直安ただやす、二流どころの刀なのさ。……が、切れるぞ、俺が切れれば！……千里の駒も乗手がヤクザで、手綱さばきが悪かろうものなら、駄馬ほどにも役立たぬ。……名刀であろうとナマクラが持てば、刀までがナマクラになる。……それに反して名人が持てば、切れるぞ切れるぞ——ズンと切れる！……嘘と思わば切つて見せる！……どいつでもいい前へ出る！」

云い云い四方を睨み廻した。

山毛戸やまかいどの源太郎、中新田の源七、玉川の権太郎、門峰吉、錚々そうそうたる猪之松の乾児達

が、首を揃えて集まっていたが、狂人きちがいに刃物のそれよりも悪く、酒乱の陣十郎に拔身はつしんを持たれ、振り廻されようとしているのであった。首を縮め帆立尻ほたてじりをし、ジリジリと後へ退りながら、息を呑み眼を見張り、素破すわと云わば飛んで逃げようと、用心をして構えていた。

3

「アツハハハ」

と陣十郎は、また気味の悪い笑声を立てた。

「切る奴は他にある、汝らは切らぬ、安心せい……鳴澤主水しぎさわもんどを探し出し、ただ一刀に返り討ち！ 婦おんな、お妻を引きずり出し、主水と子ども二太刀で為止めしとる。……久しく血を吸わぬ越前直安、間もなく存分に血を吸わせてやるぞ！」
 燈火ともしびに反射してテラテラ光る、ネットリとした刀身を、じつと睨んで呟くように云つたが、

「汝ら解るか男の心が？ 己を殺そうとして付け廻している、敵かたきを持っている男の心が」
 乾児達の方を振り返つた。

「へい」と云つたのは門峰吉で、

「さぞまア気味の悪いことで、いやなものでございましょうなあ」

「討たれまいとして逃げ廻る。いやなものだぞ、いやなものだぞ」

「いやなものでござりましょうなあ」

「が、一面快い」

「……………」

「討て、小童こわっぱ、探し出して討て！ が俺は逃げて逃げて、決して汝には討たれてやらぬ。……こう決心して逃げ廻る心、快いぞ快いぞ」

「そんなものでございませうかなあ」

「とはいえ厭いな気持のものだ。討つ方の心は一所懸命、命を捨ててかかっている。討たれる方は討たれまいとして、命を惜しんで逃げ廻る。心組みが全く別だ。討つ方には用心はいらぬ。討とう討とうと一向だ。討たれる方は用心ばかりだ。……用心をしても用心をしてもいずれば人間油断も隙もあろう、そこを狙われて討たれるかもしれぬ！ この恐怖心、厭いなものだぞ」

「へい、さようでございませうかなあ」

突然立ち上ると陣十郎は、刀をグ——ツと中段につけ、両肘を締め肩を低めたが、

「今迄の俺がそうだった！ 討たれる者、逃げ廻る者、今迄の俺はそうだった！ 劍法で云えばこの構えだ！ ……が俺は一変した！」

こう沈痛に声を絞ると、俄然刀を大上段に冠った。

「大上段、積極的の構え！ 俺は今日からこつちで向かう！ 俺の方から敵を探し、返り討ちにかけてやる！ それにしても汝ら卑屈だぞ！ 俺が鳴澤主水という敵に、付け廻されているということを、心の中では知っていないながら、おくびにも出そうとしないではないか！ そうであろうがな！ そうであろうがな！」

刀を大上段に振り冠ったまま、陣十郎は憎さげに叫んだ。
乾児達は顔を見合わせた。

それに相違ないからであつた。

過ぐる日上尾の街道で、赤尾の林蔵にいどまれて、こっちの親分が引きもならず、真剣勝負をした際に、鳴澤主水とその妹の、澄江とかいう娘とが、親の敵を討つと宣^{なの}つて、水品陣十郎を襲つたが、討ちもせず、討たれもせず、主水という武士は行方不明、澄江という娘は博労達に、どこかへ担がれて行ってしまつたと、その時こっちの親分に従^ついて、その修羅場にいた八五郎の口から、乾児達は詳しく話されて、そういう事情は知つていた。そればかりでなくその日以来、それ迄はほとんど毎日のように、ここの家へやつて来て、乾分達へ剣術を教えたり、ゴロゴロしていた陣十郎が、姿をあまり見せなくなり、なお噂による時は、これ迄ずっと住んでいた家——この村の外れにあるお妻の実家へも、住まな**い**ばかりか余り立ち寄らず、ひたすら主水兄妹によって、探し出されることを恐れていると、そういうことも聞き知つていた。

そうして知つて居りながら、知つて居るとも知らないとも、事実おくびにも出さなかつた。というのは事が事であるからで、それにそういう次第なら、あつし達が味方をいたしますから、主水兄妹を探し出し、返り討ちにしておしまいなせえと、こんなことを云うには陣十郎の劍技が、余りにも勝れて居る、といつて主水兄妹に、器用に討たれておやりなせえとは、なおさら云えた義理でなく、それで黙つていたのであつた。

で、乾児達は顔を見合わせた。

と不意に陣十郎は、振り冠つていた燈ひに光る刀を、ダラリと力なく下げたかと思うと、にわかになんか疑わしうに寂しうに、むしろ恐怖に堪えられないかのように、ウロウロとした眼付をして、勝手元に、乾児達の中に、主水が居りはしないだろうかと、それを疑つてもいるかのように、一人々々の顔を見たが、

「疑心！ こいつが不可いけないのだ！ こいつから起こるのだ、弱気がよ！ ……と、守勢、こいつになる！」再び中段に刀を構えた。「こいつが守勢、守勢になると、かえつて命は守られぬ。……それよりも、守勢の弱気になると、ヒツヒツヒツ、情婦おんなにさえ、嘗められ裏切られてしまうのさ！ ……そこでこいつだ積極的攻勢！」また上段に振り冠つた。

「攻勢をとつてやつとこさ、身が守られるというものだ！ ……酒だ！ くれ！ 冷で一

杯！」

ソロリと刀を鞘に納め、片手をヌツと差し出したが、ヒョイとその手を引っこませると、フリリとばかりにかまち櫃を上った。

「飲むならいつそ奥で飲もう。馬大尽様の御前ですよ。陽気で明るい座敷ですよ。親分にもしばらくご無沙汰した。お目にかかつて申訳……退け、邪魔だ！」

ヒョロリヒョロリと、乾分達の間を分け、奥の方へ歩いて行つた。

後を見送つて乾児達は、しばらくの間は黙っていた。

と不意に門峰吉が、

「八五郎の奴どうしたかなあ」と、あらぬ方へ話を持って行つた。

陣十郎の影口をうっかり利いて、立聞きでもされたら一大事、又拔身を振り廻されるかもしれない。障さわるな障さわるなという心持から、話をあらぬ方へ反らせたのであつた。

みんな一同はホツと息を吐いた。

「先刻さつきヒョッコリ面を出して、馬大尽様にもうちの親分にも、お気に入るような素晴らし、献上物を持つて来るんだと、大変もねえ自慢を云つて、はしゃいで素っ飛んで行きやアがったが、それつきりいまだ面ア出さねえ。何を持って来るつもりかしら」

こう云つたのは源七であつた。

「上尾街道の一件以来、あいつ親分に不首尾なものだから、気を腐らせて生地なかつたが、そいつを挽回しようてんで、何か彼かたくらんではいゐるらしい」

こう云つたのは権太郎であつた。

「あいつが一番の兄貴だつたんだから、たとえ親分が何と云おうと——手出しするなど云つたところで、そんなことには頓着なく、林蔵の野郎を背後の方から、バツサリ一太刀あびせかけ、あの時息の音止めてしまつたら、とんだ手柄になつたものを、主水とかいう侍の妹とかいう女を、馬方なんかと一緒になつて、どこかへ担いで行つたということだが、頓馬の遣口つてありやアしねえ」

苦々しく門峰吉が云つた。

がその時玄関の方で、五六人の声で景気よく、

「献上々々、献上でえ！」と囃し喚く声が聞こえてきたので、一同は黙みんなつて聞耳を立てた。

この囃し声を耳にしたのは、お勝手元の乾児ばかりでなく、奥の座敷で酒宴をしている、馬大尽歓迎の人々もひとしく耳を引つ立てた。

五十畳敷の広さを持った座敷に、無数の燭台が燈し連らねてあり、隅々に立ててある金屏風に、その燈火ひが映り榮えて輝いている様は、きらびやかで美しく、そういう座敷の正面に、嵯峨野を描いた極彩色の、土佐の双幅のかけてある床の間、それを背にして年は六十、半白の髪を切下げにし、肩の辺りで渦巻かせた、巨大な人間が坐っていたが、馬大尽事井上嘉門であった。日焼けて赧い顔色が、酒のために色を増し、熟柿じゅくしを想わせる迄になつて居り、そういう顔にある道具といえ、ペロリと下った太い眉、これもペロリと下つてはいるが、そうしてドロロンと濁つてはいるが、油断なく四方へ視線を配る、二重眼瞼の大きい眼、太くて偏平で段のある鼻、厚くて大きくて紫色をしていて、閉ざしても左の犬歯だけを、覗かせている髭なしの唇に、ぼつたりと二重にくくれている顎、その顎にまでも届きそうな、厚い大きな下った耳であった。身長せいも人並より勝れていたが、肥満の方は一層で、二十四五貫もありそうであり、黒羽二重の紋付に、仙台平の袴をつけ、風采は尋常で平凡であったが腹の辺りが太鼓のように膨れ、ムツと前方に差し出されているので、格好がつかず奇形に見えた。曲きょくに片肘を突いて居り、その手の腕から指にかけて、熊のように毛が生えていた。

蝦蟇のようだと形容してもよく、絵に描かれている酒顛童子、あれに似ていると云つてもよかつた。

嘉門の左右に居流れているのは、招待よばれて来た猪之松の兄弟分の、領家の酒造みきぞう造、松岸の権右衛門、白須の小十郎、秩父の七九郎等々十数人の貸元で、それらと向かい合つて亭主役の、高萩の猪之松が端座したまま、何くれとなく指図をし、その背後に主だった身内が、五六人がところかしこまつてい、それに雜つて水品陣十郎が、今は神妙に控えていた。

常磐津の師匠の三味線も濟み、若衆役者の踊も濟み、馳走も食い飽き酒も飲み飽き、一座駘然、陶然とした中を、なお酒を強いるべく、接待とりもちの村嬢や酌婦おんななどが、銚子を持つて右往左往し、拒絶ことわる声、進める声、からかう声、笑う声、景気よさは何時いつまでも続いた。どうで今夜は飲み明かし、嘉門様はお泊まりということであつた。

「納めの馬市も十日先、眼の前に迫つて参りました、いずれその時は木曾の福島で、又皆様にお眼にかかれますが、何しろ福島は山の中、碌なご馳走も出来ませず、まして女と参りましては、木曾美人などと云いますものの、猪首で脛太で肌は荒し、いやはやものでございまして、とてもとてもここに居られる別嬪衆に比べましては、月に鼈すっぽんでございませよ。

が、そいつは我慢をしていたき、その際には私が亭主役、飲んで飲んで飲みまくりましよう。いや全く今夜という今夜は、一方ならぬお接待とりもち、何とお礼申してよいやら、嘉門大満足の大恭悦、猪之松殿ほんに嬉しいことで」

猪之松は片頬で微笑したが、

「いや関東の女こそ、肌も荒ければ気性も荒く、申して見ますれば癖の多い勿馬——そこへ行きますと木曾美人、これは昔から有名で、巴御前、山吹御前、ああいう美姫びきも出て居ります。納めの馬市に参りました際には、嘉門様胆入りでそういう美人の、お接待に是非とも預かりたいもので。……」

ここで猪之松は微笑した。

6

微笑をつづけながら猪之松は、

「そこで今夜は私が胆入り、ここに居りますどの女子でも、お気に入りござりの者ござりましたら、アツハハハ、取り持ちましょう」

「アツハハ、それはそれは、重ね重ねのご好意で、そういうお許しのある以上、嘉門今夜

は若返りまして、……」

すると、その時間こえてきたのが「献上々々、献上でえ！」という、玄関の方からの声であつた。

(何だろう?)

と猪之松をはじめとし、座にいる一同怪訝そうに、玄関の方へ首を捻じ向けた時、八五郎を先頭に四人の博労が――、それは以まえかた前馬大尽事、井上嘉門を迎えに出た、高萩村の博労達であつたが、その連中が縦六尺、横三尺もあるらしい、長方形の白木の箱に、献上と大きく書き、熨斗まで附けた物を肩に担ぎ、大変な景気で入つて来た。

「八五郎じゃアないか、この馬鹿者、嘉門様おいでが眼につかぬか！ 何だ何だその変な箱は！」

猪之松は驚いて叱るように怒鳴つた。

八五郎はそれには眼もくれず、博労を指揮してその大箱を、猪之松と嘉門との間に置いたが、自分もその傍らへピタリと坐ると、

「ええこれは木曾の馬大尽様事、井上嘉門様に申し上げます。私事は八五郎と申し、猪之松身内にござります。ふつつか者ではござりますが、なにとぞお見知り置き下さりまし

よう。……さて今回嘉門様には、木曾よりわざわざの武州入り高萩村へお越し下され、我々如き者をもご引見、光榮至極に存じます。そこであつしも何かお土産みやげをと、いろいろ考案つかまつ仕りましたが、何せ草深いこのような田舎、これと申して珍しい物も、粹な物もござりませぬ。それに食い物や食べ物じゃア、いよいよもつて珍しくねえと、とつおいつ思案を致しました結果、噂によりますると安永年間、田沼主殿頭あんえい たぬまとのものかみ様の御代の頃、大変流行いたしまして、いまだに江戸じやア流行はやつていそうな、献上箱の故智に慣い、八五郎細工の献上箱、持参いたしてござります。なにとぞご受納下さりませ。……ええ所で親分え、貴郎あなただつてこいつの蓋を取り、中の代物をご覧になつたら、八五郎貴様素晴らしいことをやつた、手柄々々と横手を拍つて、褒めて下さるに違えねえと、こうあつしは思うんで……と、能書はこのくらいにしておき、いよいよ開帳はじまりはじまり……さあさあお前達手伝つてくれ」と、その時まで喋舌しゃべる八五郎の背後うしろに、窮屈きうくつそうに膝ツ小僧を揃え、かしまつていた博労達を見返り、ヒョイとばかりに立ち上つた。

「開帳々々」とこれも景気よく、四人の博労達も立ち上つたが、水引の形に作つてあつた縄を、先ず箱から解きほぐした。

「ようござんすか、蓋取りますでござんす。ヨイシヨ！」と八五郎は声をかけた。

「ヨイシヨ」と博勞達はそれに応じた。

と、パツと蓋が取られた。

7

京人形が入れてあつた。

髪は文庫、衣裳は振袖、等身大の若い女の、生けるような人形が入れてあつた。

と、眼瞼を痙攣させ、その人形は眼をあけて、天井をじいいと見上げたが、又しずかに眼をとじた。

人形ではなく生ける人間で、しかもそれは澄江すみえであつた。

富士額、地藏眉、墨を塗つたのではあるまいかと、疑われるほどに濃い睫毛で、下眼瞼を色づけたまま、閉ざされている切長の眼、延々とした高い鼻、蒼褪め寡れてはいたけれど、なお処女としての美しさを持った、そういう顔が猿轡で、口を蔽われているのであつた。

明るい華やかな燭台の燈が、四方から箱の中のそういう顔を照らして浮き出させているだけに、美しさは無類であつた。

一座何となく鬼気に襲われ、誰も物云わず顔を見合せ、しばらくの間は寂然としていた。がさつ者の八五郎は喋舌り立てた。

「いつぞやの日に上尾街道で、親分と赤尾の林蔵とが、真剣の果し合いなさんとした時、水品先生に対し——いやこれは水品先生、そこにお居でなさんしたか、こいつア幸い、いい証人だ——その水品先生に対し、親の敵かたきとか何とか云つて、若工武士とこの娘とが、切つてかかつたはずでござえます。その時あつしとここに居なさる、博労衆とが隙を狙い、この娘だけを引つ担ぎ、あつしの家へ連れて来たんで。さてどうしようか考えましたが、見りやアどうしてこの娘つ子、江戸者だけに素晴らしく、美しくもありやア品もあつて……そこで考えたんでござえますよ、嘉門様へご献上申し上げようかね……」

身を乗り出し首を差し出し、箱の中の女を覗き込んでいた嘉門は、この時象のような眼を細め、厚い唇をパツクリ開け、大きい黄色い歯の間から、満足と喜悦の笑声を洩らした。

「フ、フ、フ、八五郎どんとやら、嘉門満足大満足でござんす……フ、フ、フ、大満足！こりやア全く、とても素晴らしい、何より結構な贈おくりもの品、嘉門大喜びで受けますでござんす。……」

8

夜はすっかり更けていた。

裏庭に別棟に建てられてある、猪之松の屋敷の離座敷、植込にこんもり囲まれて、黒くひっそりと立っていた。屋根の瓦が水のように、薄白く淡く光っているのは、空に遅い月があるからであった。

その建物を巡りながら、幾人かの人影が動いていた。

寝所へ入った馬大尽嘉門に、もしものことがあつたら大変———といふので猪之松の乾児達が、それとなく警護しているのであつた。

池では家鴨あひるが時々羽搏き、植込の葉影で寝とぼけた夜鳥が、びっくりしたように時々啼いた。

が、静かでしんとしていた。

主屋でも客はおおよそ帰り、居残った人々も酔仆れたまま、眠ったかして静かであつた。離座敷うちまの内部ひとまの一室。——そこには屏風が立て廻してあつた。

一基の燭台が置いてあり、燈心を引いて細めた燈火ひかりが、部屋を朦朧と照らしていた。

屏風の内側には箱から出された生贄の女澄江の姿が、掛布団を抜いて首から上ばかりを、

その燈火の光に照し出していた。

そうしてその傍には、嘉門が坐っているのであった。

澄江の心はどうであろう？

義兄あにであり恋人であり許婚いいなづけである、主水とゆくゆくは婚礼し、身も心も捧げなけれ

ばならぬ身！ それまでは穢さず清浄に、保たねばならぬ処女の体！ それを山国の木曾あたりの、大尽とはいえ馬飼の長、嘉門如きに、嘉門如きに！

処女を失つてはもう最後、主水と顔は合わされない。永久夫婦になどなれないであろう。復讐という快挙なども、その瞬間に飛んで消えよう。

澄江の気持はどんなであろう？

時が刻々に経ってゆく。

と、不意に屏風の上から、白刃がヌツと差し出された。

嘉門はギョツとはしたものの、大胆に眼を上げて上を見た。

屏風の上に覆面をした顔が、じつとこちらを睨んで居た。

「曲者！」

ガラガラ！

屏風が仆された。

9

枕刀の置いてある、床の間の方へ走って行く嘉門の姿へは眼もくれず、着流しの衣裳の裾をからげ、脛をあらわし襷がけして、腕をまくり上げた覆面武士は、やにわに澄江を小脇に抱えた。

「曲者でござるぞ、お身内衆！ 出合え！」と喚き切り込んだ嘉門！

その刀を無造作に叩き落とし、

「うふ」

どうやら笑ったらしかったが、

ビシリ！

もう一揮！ 振った白刃！

「ワツ」

へたばったは峯打ちながら、凄い手並の覆面に、急所の頸を打たれたからで、嘉門はのめって這い廻った。

それを見捨てて襖蹴開き、既に隣室へ躍り出で、隣室も抜けて雨戸引つ外し、庭へ飛び下りた覆面を目掛け、

「野郎！」

「怪しい！」

と左右から、猪之松の乾児で警護の二人が、切りつけて来た長脇差を、そや征矢だ！ 駈け抜け、振り返り、追いつたところを、

グーツ！

突だ！

「ギヤーツ」

獣だ！ 殺される獣！ それかのように悲鳴して仆れ、それに胆を消して逃げかけた奴の、もう一人を肩から大袈裟がけ！

「ギヤーツ」

こいつも獣となつてくれたばり、夜で血煙見えなかつたが、プ——ツと立つたなまぐさ腥い匂い！ が、もうこの時には覆面武士は、植込の中に駈け込んでい、その植込にも警護の乾児、五人がところ塊つてい、

「泥棒！」

「遁すな！」

と、竹槍、長ドス！

しかし見る間に槍も刀も、叩き落とされ刎ね落とされ、つづいて悲鳴、仆れる音！そこを突破して覆面武士が、土塀の方へ走るのが見られ、土塀の裾へ行きついた時、そこにも警護の乾児達がいる。ムラムラと四方から襲いかかったばかりか、これらの物音や叫声に、主屋の人々も気づいたかして、雨戸を開け五人十人、二十人となく駆け出し走り出し、提燈、松明を振り照らし、その火の光に獲物々々を、——槍、鉄砲、半弓までひっさげ、しごぎ、振り廻し狙っている、——そういう姿をさえ照らしていた。

しかしこの頃覆面武士は、とうに土塀を乗り越えて、高萩村を野良の方へ外れ、淡い月光を肩に受け、野を巻いている霧を分け、足にまつわる露草を蹴り、小脇に澄江をいとしそうに抱え、刀も既に鞘に納め、ただひたすらに走っていた。

その武士は水品陣十郎であった。

それから十日ほど日が経った。

陣十郎と澄江との二人が、旅姿に身をよそおい、外見からすれば仲のよい夫婦、それになかつたら仲のよい兄妹、それかのような様子をして、木曾街道を辿っていた。

初秋の木曾街道の美しさ、萩が乱れ咲き柿の実が色づき、渡鳥が群れ来て飛びつれて啼き、晴れた碧空を千切れた雲が、折々日を掠めて漂う影が、在郷馬や駕籠かきによつて、軽い塵埃を揚げられる街道へ、時々陰影かげを落としたりした。

「澄江殿、お疲労つかれかな？」

優しい声でいたわるように、こう陣十郎は声をかけた。

「いいえ」と澄江は編笠の中から、これも優しい声で答えた。

心々の旅の人々

1

「お疲労でござらば駕籠雇いましょう」

陣十郎も編笠の中から、念を押すようにもう一度云った。いかにも優しい声であった。「何の遠慮などいたしましょう、疲労ましたら妾の方から、駕籠など馬などお雇い下され

と、押しとお頼みいたします……どうやらそう仰おっしゃ言る貴郎様こそ、お疲労のご様子でございますのね。ご遠慮なく馬になど駕籠になど、ホ、ホ、ホ、お召しなさりませ」
からかうように澄江は云った。

「ア、ハ、ハ、とんでもない話で、拙者と来ては十里二十里、韋駄天のように走りましたところでビクともする足ではござりませぬ。……貴女は女無理して歩いて、さて旅籠はたごへ着いてから、ソレ按摩じや、ヤレ灸やいとじやと、泣顔をして騒がれても、拙者決して取り合いませんぞ」

「貴郎様こそ旅籠に着かれてから、くるぶしが痛めるの肩が凝るのと、苦情めいたこと仰せられましても、妾取り合わぬでござりましょうよ。ホ、ホ、ホ」と朗かに笑った。

陣十郎も朗かに笑った。

これは何たることであろう！ 敵同志であるこの二人が、こう親しくこう朗かで、浮々と旅をつづけて行くとは？

それには深い事情があった。

澄江はあの夜猪之松の屋敷で、すんでに井上嘉門によって、操を穢けがされるところであった。それを陣十郎が身を挺し、養われかくまわれた恩をも不かえりみず顧、猪之松の乾兒こぶんを幾人

となく切り捨て、自分を助けて遠く走り、農家に隠匿かくまい今日まで、安穩くらしに生活をさせてくれた。その間一度も陣十郎は、自分に対していやらしい言葉や、いやらしい所業しわざに及ばなかつた。勿論陣十郎は義父ちちの敵かたき、討うつて取らねばならぬ男、とはいえ義父を討うつたのも、その一半は自分に対し、恋慕したのを自分が退け、義父や主水が退けたことに、原因があることではあり、性来悪人ではあろうけれど、従来一度も自分に対しては、悪事を働いたことはなかつた。その上今は女の生命の、操を保護してくれた人——とあつて見ればこの身の操は、云うまでもなく許いいなすけ婚けの、主水一人に捧げる外、誰にも他の男へは、捧げてはならず自分としても、断じて捧げぬ決心であり、このことばかりは陣十郎にも、ハッキリ言動で示しはしたが、それ以外には陣十郎に対して、優しく忠実にまめまめしく、尽くさねばならぬ境遇となり、義父ちち上の敵を討うつことは、武士道の義理には相違ないが、生命——操の恩人には、人情としてそれと等なみに、尽くさなければならぬ義理があるはず、そこで澄江はそれ以来、今のような行為を執とつてるのであり、主水様と陣十郎殿とが巡り合い、敵討の太刀が交わされても、どうも妾には陣十郎殿に対し敵対することも出来そうもないと、心では思つてさえているのであつた。

陣十郎の心持といえは

「この清浄無垢の白珠を、俺は誰にも穢させない！」

この一点にとどまっていた。

鳴澤庄右衛門を殺したのも、一つは澄江への恋心を、遮られたがためであった。敵持つ身となつた原因、それが澄江であるほどの、澄江は陣十郎の恋女であつた。だからその澄江を馬飼の長、嘉門如きが穢そうとする、何のむざむざ黙視出来ようぞ！　そこで奪つて逃げたのであり、遁れて知己しりあの農家に隠匿い、今日まで二人で生活くらして来る間、彼は今更に澄江という女が、女らしい優しい性質の中に、毅然として動かぬ女丈夫の気節を、堅く蔵していることを知り、愛慕の情を加えると同時に、尊敬をさえ持つようになり、暴力をもつて自己の欲望などを、どうして遂げることが出来ようぞと、そう思うようになりさえした。

2

（澄江にとっては俺という人間、何と云つても義父の敵だ、それについてどう思っているだろう？）

これが一番陣十郎にとっては、関心の事であらねばならず、で、絶えず心を配り、澄江

の心を知ろうとした。

と、澄江はその一事へは、決して触れようとはしなかった。

陣十郎も触れなかった。

さよう、互いにその一事へは、決して触れようとはしなかったが、陣十郎は自分の油断に澄江が早晚つけ込んで、寝首を搔くというような、卑劣な態度に出るということなど、澄江その人の性質から、有り得べからざることであると知り、それだけは安心することが出来、同時に澄江が義父の敵の自分に助けられたということから、義理と人情の板ばさみとなり、苦しい心的境遇に在る、そういうことを思いやり、憐愍同情の心持に、とらわれざるを得なかった。

(主水に対して澄江の心は?)

これも実に陣十郎にとつては、重大な関心の一事であった。

(勿論澄江は心に深く、主水を恋していることだろう!)

こう思うと陣十郎はムラムラと、嫉妬の思いに狩り立てられ、

(澄江が俺の意に従わぬのも、主水があるからだ!)と、主水に対する憎悪の念が、彼をほとんど狂気状態にまで、導き^{たかぶら}亢せ追いやるのであった。

時々彼は澄江に向かい、主水のことを云い出して見た。

と澄江はきつとそのつど、あらぬ方へ話を反らせてしまつて、何とも返辞をしなかつた。それが陣十郎には物足らず、心をイライラさせはしたが、しかしまだまだその方がよくて、もしもハッキリ澄江の口から、ないしは起居や動作から、主水恋しと告げられたら、その瞬間に陣十郎の兇暴性が爆発し、乱暴狼藉するかもしれないなかつた。

どっちみち陣十郎はこう思つていた。

(自己一身の生命の、永久の安全を計るためにも、主水は是非とも討つて取らねばならぬ)こつちから主水を探し出して、討つて取ろうと少し前から、心に定め^きた陣十郎が、今や一層にその心を深く強く定めたのであつた。

その主水はどこにいるか？

それは全く解らなかつた。

が、気がついたことがあつた。

間もなく行なわれる木曾の馬市、納めの馬市へは武州甲州の、博徒がこぞつて行くはずである。高萩の猪之松も行くはずである。ところで主水は俺という人間が、その猪之松の賭場防ぎとして、食客となつていふことを、知っているといふことであるから、猪

之松が福島へ行く以上、俺も行くものとそう睨んで、俺を討つたため福島さして、主水も行くに相違ない。ヨ——シそいつを利用して、俺も出て行き機を狙い、彼を返り討ちにしてやろう。

で、ある日澄江へ云った。

「猪之松乾児の幾人かが、拙者と其方そなたとがこの農家に、ひそみ居ること知りましてと見え、この頃あたりを立ち廻ります。他所よそへ参ろうではござりませぬか」

3

こうして旅へ出た二人であった。

旅へ出てはじめて木曾へ行くのだと、澄江は陣十郎によって明かされた。とはいえ嶋澤主水を討つべく、木曾へ行くのだとは明かされなかった。

「木曾へであろうと伊那へであろうと、妾わたしはどこへでも参ります」

そう澄江はおだやかに応えた。

成るようにしか成りはしない。神のまにまに、流るるままに。……そう澄江は思っているからであった。

又、そう思つてそうするより他に、仕方のない彼女でもあるのであつた。

（しかし澄江がこの俺が、主水を討つために木曾へ行くのだと、そう知つたら安穩では居るまいなあ）

陣十郎はそう思い、そうとは明かさずただ漫然と、木曾への旅に澄江を引き出した。自分の邪の心持が、自分ながら厭になることがあり、

（俺は悪人だ悪人だ！）と、自己嫌忌の感情から、口の中で罵ることさえあつた。

それに反して澄江に対しては、そうとは知らずに云われるままに、義兄であり、恋人であり許婚である主水を、返り討ちにする残虐な旅へ、引き出されたことを惻々と、不愠に思わざるを得なかつた。

複雑極まる二人の旅心！

しかし表面は二人ながら、朗かに笑い朗かに語り、宿りを重ねて行くのであつた。さて、追分の宿へ着いた。

四時煙を噴く浅間山の、山脈の裾に横たわっている宿場、参観交代の大名衆が——北陸、西国、九州方の諸侯が、必ず通ることに定まっている宿、その追分は繁華な土地で、旅籠はたごには油屋角屋などという、なかば遊女屋を兼ねたような、堂々としたものがあり、名所に

は枅形があり、旧蹟には、石の風車ややらずの石碑や、そういうものがありもした。街道を一方へ辿つて行けば、俚謡うたに詠まれている関所があり、更に一方へ辿つて行けば、沓くつか掛の古風の駄うまやじがあつた。

旅籠には飯盛、青樓ちややにはさぼし、そういう名称の遊女がいて、

後供あとごもは霞あせひくなり 加賀守かがのかみ

加賀金沢百万石の大名、前田侯などお通りの節には、行列蜿蜒数里に渡り、その後供など霞むほどであつたが、この追分には必ず泊まり、泊まれば宿中の遊女という遊女は召されて纏頭はなをいただいた。

そういう追分の鍵屋という旅籠へ、陣十郎と澄江が泊まったのは、

「お泊まりなんし、お泊まりなんし、銭が安うおまんまて飯が旨うやぐて、夜具よが可うてお給仕が別嬪、某屋なにやはここじやお泊まりなんし」と、旅人を呼び立て袖を引く、留女とめおんなの声のかまびすしい、雀色の黄たそがれ昏であつた。表へ向いた二階へ通された。

旅装を解き少しくつろぎ、それから障子を細目に開けて、澄江は往来の様子を眺めた。駕籠が行き駄賃馬が通り、旅人の群が後から後から、陸続として通つて行き、鈴の音、馬子唄の声、その間にまじつて虚無僧の吹く、尺八の音などが聞こえてきた。

と、旅人の群に雜り、旅仕度に深編笠の、若い武士が通つて行つた。

「あッ」と澄江は思わず云い、あわただしく障子をあげ、身を乗り出してその武士を見た。肩の格好や歩き方が、恋人主水もんどに似ているからであつた。

なおよくよく見定めようとした時、一人の留女が走り出て、その武士の袖を引いた。と、その武士と肩を並べて、これも旅姿に編笠を冠つた、年増女が歩いていたが、つとその間へ分けて入り、留女を押しやつて、その若い武士の片手を取り、いたわるような格好に、ズンズン先へ歩いて行つた。

が、その拍子に若い武士が、振り返つて何気なく、澄江の立っている二階の方を見た。

4

黄昏ではあり笠の中は暗く、武士の顔は不明であつた。

(あんな女が附いている。主水様であるはずがない)

そう澄江には思われた。

主水様ともあるお方が、妾以外の女を連れて、こんな所へ暢気らしく、旅するはずがあるものか——そう思われたからである。

とはいえどうにもその武士の姿が、主水に似ていたということが、絶える暇なく主水のことを、心の奥深く思い詰めている澄江の、烈しい恋心を刺激したことは、争われない事実であつて、なおうつとりと佇んで、いつまでもいつまでも見送つた。

しかしその武士とその女との組は、旅人の群にまぎれ込み、やがて、間もなく見えなくなつた。

婢女こおんなの持つて来た茶を飲みながら、旅日記をつけていた陣十郎が、この時澄江へ声をかけた。

「澄江殿、茶をめしあがれ」

「はい」と云つたがぼんやりしていた。

「宿場の人通り、珍らしゅうござるか」

「はい」と云つたがぼんやりしていた。

「どうなされた？　元気がござらぬな」

「……………」

「やはりお疲労つかれなされたからであらう」

「……………」

「返辞もなさらぬ。アツハハ。……それゆえ拙者馬か駕籠かに、お乗りなされと申したのじゃ」

「……………」

「按摩なりと呼びましようかな」

「いいえ。……それにしても……主水様は……」

思わず言葉に出してしまった。

「何！ 主水！」と陣十郎は、それまでは優しくいたわるように、穏やかな顔と言葉とで、機嫌よく澄江に話しかけていたが、俄然血の気を頬に漂わせ、敵の体臭を鼻にした獣が、敵愾心と攻撃的猛気、それを両眼に集めた時の、兇暴惨忍の眼のように、三白眼を怒らせたが、

「ふふん、主水！ ……ふふん主水！ ……澄江殿には主水のことを、このような旅の宿場の泊りにも、心に思うて居られたのか！ ……ふふん、そうか、それでござったか！」

ジロリと床の間の方へ眼をやった。

そこにあるものは大小であった。

既に幾人かの血を吸って、なお吸い足らぬ大小であった。

鍵屋から数町離れた地点に、岩屋という旅籠があり、その裏座敷の一室に、主水とお妻とが宿を取っていた。

主水は先刻さつき一軒の旅籠の、二階の欄干に佇んでいた、澄江に似ていた女のことを、心ひそかに思っていた。

もう夜はかなり更けていて、夕暮方の騒がしかった、宿の泊客の戯声や、婢女おんなや番頭や男衆などの声も、今は聞こえず静かとなり、泉水に落ちている小滝の音が、しのびやかに聞こえるばかりであり、時々峠を越して行く馬子の、

追分油屋掛行燈に、浮気御免と書いぢやない

などと、唄って行く声が聞こえるばかりであった。

間隔まあいを離して部屋の隅に、一ふたながれ流敷しいてある夜具の中に、二人ながら既に寝ているのであった。

(もうお妻は眠ったかしら?)

顔を向けてそつちを見た。

夜具の襟に頤を埋めるようにして、お妻は眼を閉じ静まっていた。高い鼻がいよいよ高くなり、頬がこけて肉が薄くなり、窶れて凄艶の度を加えていた。

(俺のために随分苦勞をしてくれた)

二人が夫婦ならぬ夫婦のようになり、弁三の家にかくまわれてから、木曾への旅へ出た今日が日まで、日数にしては僅かであったが、陣十郎のために探し出されまい、猪之松一家の身内や乾分共に、発見されまいと主水に対し、お妻が配慮し用心したことは、全く尋常一様でなかった。

あの日——お妻が主水に対し、はじめてうってつけた恋心を、露骨に告げた日陣十郎によつて、後をつけられ家を見付けられ、あやうく奥へ踏み込まれようとしたが、弁三の鉄砲に嚇されて、陣十郎は逃げて行つたものの、危険はいよいよ迫つたと知り、爾来お妻は家へも帰らず、陣十郎とも勿論逢わず、猪之松の家へも寄りつかず、主水の傍らに弁三の家に、身を忍ばせて動かなかつた。

だからお妻も主水も共々、あの夜高萩の猪之松方で、澄江があやうく馬大尽によつて、処女の操をけがされようとしたことや、陣十郎が澄江を助け、猪之松の乾児達を幾人か切つて、逃げたということなどは知らなかつた。

しかしその中に弁三べんぞうの口から、木曾の納めの馬市を目指して、馬大尽を送りかたがた、猪之松が大勢の乾児を引き連れ、木曾福島へ行くそうなど、そういうことだけは聞くことが出来た。

それをお妻は主水に話した。

「陣十郎は賭場防ぎ、猪之松方の賭場防ぎ。で、猪之松が木曾へ行くからは、陣十郎も行くでござんしょう」

こうお妻は附け足して云った。

「では拙者も木曾へ参って……」

主水は意気込み発足しようと云った。

「妾もお供いたします」

こうして旅へ出た二人であった。

（いわば敵の片割のような女、……それにもかかわらず縁は不思議、よく自分に尽くしてくれたなあ）

お妻の寝顔を見守りながら、そう思わざるを得なかった。

（露骨に恋心を告げた日以来、自分の心が決して動かず、お妻の要求は断じて入れない、

——ということを知ったものと見え、その後はお妻も自分に対して、挑発的の言動を慎み、ただ甲斐々々しく親切に、年上だけに姉かのように、尽くしてくれるばかりだったが、思えば気の毒、おろそかには思われぬ。……)

そう主水には思われるのであった。

(それにしても先刻見かけた女、澄江に似ていたが、澄江に似ていたが……)

6

とはいえ澄江がこんな土地の、あんな旅籠に一人でシヨンボリ、佇んでいるというようなことが、有り得ようとは想像されなかった。

(あの時お妻が、留女を、突きやり、俺の手を強く引つ張って、急いで歩いて来なかったら、あの女を仔細に見ることが出来、あの女が澄江かそうでないか、ハッキリ知ることが出来たものを)

それを妨げられて出来なかったことが、主水には残念でならなかった。

(やはり澄江であろうも知れない!)

不意に主水にはそう思われて来た。

(上尾街道での乱闘の際、聞けば澄江は猪之松方に属した、馬方によって担がれて行き、行方知れずになったとのこと、馬方などにはずかしめられたら、烈しい彼女の気象である、それ前に舌噛んで死んだであろう、もし今日も生きて居るとすれば、処女であるに相違なく、そうしてあの時から今日まで、そう日数は経っていない、わしの消息を知ろうとして、あの土地に居附いていたと云える。とすると木曾の福島へ、納めの市へ馬大尽ともども、猪之松が行くということや、その猪之松の賭場防ぎの、陣十郎も行くということや、陣十郎が行く以上それを追つて、わしが行くだろうということや、澄江は想像することが出来る。ではそのわしに逢おうとして、単身でこのような土地へ来ること、あり得べからざることではない)

こんなように思われるからであった。

(あの旅籠は鍵屋とかいったはずだ。距離も大して離れてはいない。行って様子を見て来よう)

矢も楯もたまらないという心持に、主水は襲われずにいらなかった。

(が、お妻に悟られては?)

それこそ大変と案じられた。

(爾来二人が夫婦ならぬ夫婦、妻ならぬ妻のような境遇に——そのような不満足の境遇に、お妻ほどの女が我慢しているのも、あの時以来澄江のことを、自分が口へ出そうとはせず、あの時以来澄江のことを、思っているというような様子を、行動の上にも出そうとはせず、ただひたすらにお妻の介抱を、素直に自分が受けているからで。そうでなくて迂闊にもし自分が、今も澄江を心に深く、思い恋し愛していると、口や行動に出したならば、それこそお妻は毒婦の本性を、俄然とばかり現わして、自分に害を加えようし、澄江がこの土地にいるなどと、そういうことを知ったなら、それこそお妻は情容赦なく、澄江を探し出して罾り殺し！——そのくらいのことではやるだろう)と、そう思われるからであつた。

(澄江を確かめに行く前に、お妻が真実眠っているかどうか、それを確かめて置かなければならない)

主水は静かに床から出、お妻の方へ膝で進み、手を延ばして鼻へやった。

規則ただしのお妻の呼吸が、主水の掌てのひらに感じられた。

(眠っている、有難い)

で立ち上つて衣裳のある方へ行つた。

途端に、

「どちらへ？」と云う声がした。

ギョツとして主水は振り返った。

眼をあいたお妻が訝しそうに、主水の顔を見詰めながら、半身夜具から出していた。

「……いや……どこへも……厠へ……厠へ……」

「……………」

お妻は頷いて眼を閉じた。

で、主水は部屋から出た。

7

部屋から出て廊下へ立ったものの、寝巻姿の主水であった、旅籠を抜け出して道を歩き、鍵屋などへは行けなかった。

行けたにしても時が経ち、用達しの時間よりも遅れたならば、そうでなくてさえ常始終から、逃げはしないかと警戒しているお妻が、不安に思つて探しに来、居ないと知ったら騒ぎ立て、一悶着起こそうもしれない。そうなつては大変である。

そこで主水は厠へ入り、やがて出て来て部屋へ帰り、穏しく又夜具の中へ入った。

見ればお妻は同じ姿勢で、安らかに眠っているようであった。
やはり主水には澄江のことが、どうにも気になってならなかった。

(よし、もう一度試みてみよう)

で、お妻の方へ眼をやったまま、又ソヨリと夜具から出た。

お妻はやはり眠っていた。

衣裳や両刀の置いてある方へ行つた。

幸いにお妻は眼をさまさなかつた。

(有難い)と心で呟き、手早く衣裳を着換えようとした時、

「主水様どちらへ？」とお妻が云つた。

眼をさましていたのであつた。

怒つたような、嘲るような、——妾を出し抜いて行こうとなされても、出し抜かれるものではござんせん——こう云つてもいるような眼付で、お妻は主水をじつと見詰めた。

「いや……ナニ、ちよつと……それにしても寒い——信州の秋の夜の寒いことは……そこで重ね着しようとして……」

もずもずと口の中で云いながら、テレテ、失望して、断念して、主水は又も夜具の中へ

入った。

(もう不可^{いけ}ない、諦めよう)

主水はすっかり断念した。

眼端の利くお妻が眠った様子をして、こう自分を監視している以上、こっそり抜け出して行くことなど、とうてい出来ないと思つたからであつた。

(よしよし明日の朝早く起き、そぞろ歩きにかこつけて、鍵屋へ行つて見ることにしよう) 　　こう考えをつけてしまうと、一時に眠りが襲つて来た。

主水は間もなく深い眠りに落ちた。

あべこべにお妻は眼をさましてしまい、腹這いになつて考え込んだ。

好きで寝る間も枕元に置く^{たはこ}蓆、その煙管^{きせる}を口にくわえ、ほの明るい行燈^{あんどん}の光の中へ、漂つて行く煙の行方を、上眼を使つて見送りながら、お妻は考えに沈み込んだ。

これ迄は観念をしたかのように、決して自分を出し抜いて、逃げようなどとしたことのない主水が、今夜に限つて何としたことか、二度まで抜けて出ようとした！　これはどうしたことだろう？

どうにも合点がいかないのであつた。

(何か曰くがなけりやアならない)

それにしても自分というこの女が、女賊、枕探し、邯鄲師かんたんし、だから他人の寢息をうかがい、抜け出ることも物を盗むことも、殺すことさえ出来るのに、知らぬとはいえそういう自分を出し抜き、抜け出ようとした主水の態度が、どうにも可笑おかしくてならなかった。

(いっそ可愛い位だよ)

煙管をくわえたままお妻は笑い、主水の方をそつと見遣った。主水は安らかに天井の方を向いて、規則正しい呼吸をしていた。深い眠りに入っているらしい。

もう時刻は丑の刻でもあろうか、家の内外寂しく静かで、二間ほど離れた座敷の方から、鼾の音が聞こえてき、初秋の夜風に吹かれて落ちる、中庭あたりの桐の葉でもあろうか、バサリ、バサリと閑寂の音を、時々立てるのが耳につくばかりで、山国の駅路えきろの旅籠の深夜は、芭翁ばしやう好みの寂寥に入っていた。

(今日まで我慢をして来たんだよ。……やっぱり順当の手段てで行こうよ)

お妻はどう思う返した。

で、煙管を抛り出し、男の方へ顔を向け、横に寝返って眠ろうとした。

途端に、

「澄江！」と眠ったままで、主水がハッキリ声を立てて云った。

「澄江よ！　澄江よ！　お前はどこに！　……」

お妻はグラグラと眼が廻った。

（畜生！）

ムツクリと起き上った。

（やつぱり思つていやがるんだ！　あの女のことを！　澄江のことを！）

眼を据えて主水の寝顔を睨んだ。

主水は長閑のどかに眠っている。

が、愛する女のことを、夢にでも見ているのであろうか、閉じた眼を優しく痙攣させ、閉じた唇に微笑を湛えている。

8

それからしばらく経った時、追分の宿の宿外れを、野の方へ行く女があつた。

星はあるが月のない夜で、それに嵐さえ吹いていて、その嵐に雲が乱れ、星をさえ隠す暗澹さ！

そういう夜道を物に狂ったかのように、何か口の中で呟きながら、走ったかと思うと立ち止まり、立ち止まったかと思うと又走る。

それは他ならぬお妻であった。

眠っている間も恋しい女、澄江のことを忘れかね、うわ言に出して云った主水——そういう主水の心持を知り、怒りと失望と嫉望しつととに、お妻はほとんど狂わんばかりとなり、汝おのれどうしてくれようかと、殺伐の気さえ起こしたのであったが、それは年増であり世間知りであり、世なれている彼女であったので、まずまずと心をおちつかせ、燃えるように上気のぼって痛む頭を、夜の風にでも吹かせてやろうと、そこは女邯鄲かんたんし師で、宿をこつそり抜け出すことなど、雑作なく問題なく出来るので、宿をこつそり抜け出して、今こうやって歩いているのであった。

さて冷え冷えとした高原の、秋の夜の風に吹かれながら、お妻は歩いているのであるが、問題が問題であるだけに、心は穏かにはならなかった。

(宿へ放火ひつけでもしてやろうか！)

(人殺ひところしでもしてやろうか！)

そんなことさえ思うのであった。

街道から反れて草の露を散らし、お妻は野の方へ歩いて行く。

と、街道を背後うしろの方から、木曾の納めの馬市へ出る、馬の群が博労に宰領されて、陸續と無数にやって来た。徹夜をして先へ進むのであった。それらのともして行く提燈の火が、点々とあたかも星のように、道を明るめ動いていたが、珍らしい美しい眺めであった。

秋が来たとして鹿さえ鳴くに、なぜに紅葉もみじは色に出ぬ

余り米とはそりや情ない、美濃や尾張の涙米

などと唄う馬子唄の音が、ノンビリとして聞こえてきた。

しかしお妻にはそういう光景も、珍らしくもなければ美しくもなかった。でただ夢中で歩いていた。

陣十郎が同じような心境の下に、旅籠を出て野の方へやって来たのは、ちょうどこの頃のことであつた。

主水のことを思っている澄江！ それを口へ出して云つた澄江！ そういう澄江を夕方見た。汝々どうしてくれよう！ すんでにその時陣十郎は、澄江を一刀に切ろうとした。が、それは辛うじて抑えた。

さて夜になつて二人は寝た。

部屋の片隅に澄江が寝、別の片隅に陣十郎が寝。——これまでやって来たように、その夜もそうやって二人は寝た。

が、陣十郎は眠られなかつた。

怒り、失望、嫉妬の感情が、心を^{たか}亢ぶらせ頭を燃やし、安眠させようとしないのである。見れば澄江も眠られないと見えて、そうして恐怖に襲われていると見えて、こつちへ細い頸足^{うなじ}を見せ深々と夜具にくるまつたまま、溜息を吐いたり顫えたりして、夜具の中で蠢いていた。

(一思いに……)

この考えが又浮かんだが、あさましくも憐れにも思われて、断行することが出来なかつた。

(夜の風にでも吹かれて来よう)

で、こつそりと宿を抜け出したのである。

足にまつわる露の草を、踏分け踏分け陣十郎は歩いた。

街道を馬の列が通つて行く。

それを避けて草野を歩いて行くのである。

(ガーツとどいつかを叩つ切つたら、この心も少しはおちつくかもしれない)

そんなこともふと思われた。

(ウロウロ女でも通つて見ろ)

そんな兇暴の考えも、チラチラ彼の心の中に燃えた。

と、そういう彼の希望に、応じようがために出て来たかのように、行手から女が星の光で知れる、小粋の姿を取り乱し、走つたり止まつたりよろけたりして、こつちへ歩いて来るのが見られた。

(しめた!)と一刹那陣十郎は思った。

(宿の女か、旅の者か、そんなことはどうでもいい、来かかったのが女の不運! ……)

で、素早く木陰に隠れた。
その女はそれとも知らぬか、よろめくような足どりで、その前を通過して行き過ぎようとした。

不意に躍り出た陣十郎、物をも云わず背後うしろの方から……

「あッ」

不意の事だったので、女は驚きの声をあげたが、……

しかし次の瞬間に、二人はパーッと左右へ別れた。

「貴様はお妻！」

「陣十郎様か！」

サーッとお妻は逃げだした。

「待て！」

刀を抜いて追っつけた。

澄江と夫婦ならぬ夫婦となり、共住ともずまい居から旅に出た。そうなつてからはお妻のことは、

ほとんど陣十郎の心になかった。

ところが意外にもこんな事情の下に、あさましいお妻とぶつかった。

高原狂乱

1

仆れて、

「人殺シ——ッ」

だが飛び起き、

「どなたか助けて——ッ」と走り出した。

そのお妻をなお追いかけて、周章あわてのために不覚至極にも、切り損った自分を恥じ恥じ、

「逃げようとて逃がそうや！　くたばれ、汝おのれ、毒婦、毒婦！」

陣十郎は執念しゅうねく追った。

仆れつ、飛び起きつ、刀を避け、お妻は走り走ったが、ようやく街道へ出ることが出来た。

馬、博勞、提灯、松明——馬市へ向かう行列が、街道を埋めて通っていた。

そこへ駆け込んだ女邯鄲かんとんし師のお妻、

「助けて——ッ、皆様、助けて！」

「どうしたどうした？」

「若い女だ！」

博勞達は騒ぎ立った。

「狂きちがい人が妾わたしを手籠めにし……殺そうとしてアレアレそこへ！」
瞬間躍り込んで来た陣十郎、

「逃げるな、毒婦、逃がしてなろうか！」

切り付けようとするやつを、

「女を助ける！」

「狂人を殺せ！」

「ソレ拔身を叩き落とせ！」

ムラムラと四方からおつとり囲み、棒や鞭を閃めかし、博勞達は陣十郎へ打ってかかった。

「汝ら馬方向を知って、邪魔立っていたすか、命知らずめ！」

揮った刀！

首が飛んだ！

「ワ——ッ」

「切ったぞ！」

「仲間の敵！」

「逃がすな！」

「たたんでしまえ！」

「狂人め、泥棒め！」

十、二十、三十人！ ムラムラと寄せ、轟いた。

狂奔する馬！ 地に落ちて燃える、提燈ちようちん、松明たいまつ、バ——ツと立つ火焰！

悲鳴に続く叫喚怒号！ 仆れる音、叱咤する声！

百頭に余る馬の群が、音に驚き光に恐れ、野の方へ宿しゆくの方へ駆け出した。

「馬が放れたぞ——ッ」

「逃がすな、追え！」

「捕らえろ！」

「大変だ——ッ」

「人殺し——ッ」

ほとんど狂気した陣十郎、剣鬼の本性を現わして、馬と馬方の渦巻く中を、

「お妻！ どこに！ 逃がそうや！」と、右往し左往し走り廻り、邪魔になる博労、馬の

群を、見境もなく切りつ薙ぎつ、追分宿の方へ走る！ 走る！

と、この時一挺の駕籠を、菅の笠に旅合羽、長脇差を揃って差し、嚴重に足のかためをした、三十人あまりの博労が守り、莫蔭に包んだ金箱や駒箱、それを担いで肅々と、宿の方からやつて来たが、そこへ駈け込んだ馬の群に驚き、街道を反れて野に立った。

上尾宿に長く逗留し、夜道をかけて帰らないことには、木曾福島の納めの馬市に、間に逢わないと焦慮して、帰りを急ぐ馬大尽を守護して、高萩の猪之松とその乾児とが、同じ夜道をかけて来た。——同勢は実にそれなのであった。

2

「馬を放したな、馬鹿な奴だ」

こう云つたのは猪之松で、駕籠の脇に立っていた。

「商売物を逃がすなどは、冥利に尽きた連中で」

駕籠の戸をあけて騒動を見ていた、井上嘉門が嘲笑うように云つた。

「だから一生馬方商売、それ以上にはなれませんので。ハッハッハッ」と附け加えた。そこへ陣十郎が駈けて来た。

眼が眩んでいて見境いがなかった。

数人を切った血刀を提げ、乱れた髪、乱れた衣裳、返り血を浴びたムキ出しの脛。——
 そういう姿で駈けて来た。

「陣十郎だ！ 陣十郎だ！」

門峰吉が眼ざとく目付け、ギョツとしたように声をあげた。

「おおそうだ陣十郎だ！」

こう猪之松も叫んだが、いつぞやの晩自分の屋敷で、養ってやった恩を忘れ、乾児を切ったばかりでなく、井上嘉門に捧げた女——澄江とか云った武家の娘を、奪い去ったことを思い出した。

「畜生、恩知らず、たたんでしまえ！」

「やれ！」

ダ、ダ、ダ、ダ！ ——

乾児達だ！

一斉にひっこ抜いて切ってかかった。

「……………」

無言で横なぐり！

陣十郎であつた！

ブ——ツと血吹雪！
ちっふぶき

闇ながら立つた。

匂いで知れる！ 生臭さ！

「切つたぞ畜生！」

「用心しろ！」

開いて散じたが又合した。

見境いのない陣十郎、躍り上つてズ——ンと真つ向！

「キャ——ツ」

仆れて、ノタウチ廻る。また乾児が一人やられた。

見すてて一散宿の方へ！

「汝お妻ア——ツ！ 逃がしてなろうか！」
おのれ

「追え！」と猪之松は地団太を踏んだ。

「仕止めろ、汝ら、仕止めろ仕止めろ！」

一同ド——ツと追っかけた。

この頃宿は狂乱しゆくしていた。

馬！ 馬！ 馬！

博勞！ 博勞！ 博勞！

戸を蹴破り、露路に駈け込み、騒ぎに驚いて戸を開けた隙から、駈け入る馬！ 捕らえようとして、無二無三に踏み入る博勞！

ボ——ツと一軒から火の手が揚がった。

火事だ！

とうとう火を出したのだ！

おりから吹きつのはつた夜風に煽られ、飛火したらしいもう一軒から、カ——ツと火の手が空へあがった。

「起きろ！」

「火事だ！」

「焼き討ちだ！」

家々はおおよそ雨戸を開け、人々は争って外へ出た。

岩屋では主水が眼を覚まし、鍵屋では澄江が起き上った。

番頭が階上階下を怒鳴り廻っている。

「お客様方大変でございます。焼き討ちがはじまりましてござります！どうぞお仕度下さりませ！ご用心なすつて下さりませ！」

本陣油屋の奥の座敷では、逸見多四郎義利が、眼をさまして起き上った。

3

多四郎は聞き耳を澄ましたが、

「源女殿！東馬々々！」と呼んだ。

と、左の隣部屋から、

「はい」という源女の声が聞こえ、

「眼覚め居りますでござります」という、門弟東馬の応える声が、右の隣部屋から聞こえてきた。

「宿に騒動が起こったようじゃ。……ともかくも身仕度してこの部屋へ！」

間もなく嚴重に身拵みじしらえした、東馬と源女とが入つて来た。

その間に多四郎も身拵えし、三人様子をうかがっていた。

そこへ番頭が顔を出し、

「木曾福島の馬市へ参る、百頭に余る馬の群が、放れて宿へなだれ込み、出火などもいたしましたし、切り合いなどもいたし居ります様子、大騒動起こして居りますれば、ご用心あそばして下されますよう」

こう云つてあわただしく走つて行つた。

「何はあれ宿の様子を見よう」

多四郎は源女と東馬とを連れて、油屋の玄関から門口へ出た。

多四郎がこの地へやつて来た理由は？

源女の歌う歌の中に、今は変わつて千の馬、五百の馬の馬飼の、云々という文句があつた。そこで多四郎は考えた。そういう馬飼の居る所に、黄金は埋められているのであろう、そうしてそういう馬飼の居る地は、木曾以外にはありそうもない。木曾山中には井上嘉門という、日本的に有名な馬飼があつて、馬大尽とさえ呼ばれている。そやつが蔵しているのではあるまいか？ おおそうそう馬大尽といえ、門弟高萩の猪之松方に、逗留してい

るといふことじや、源女殿と引き合わせ、二人の様子を見てやろうと、源女を連れて高萩村の、猪之松方へ行つたところ、本日井上嘉門ともども、木曾へ向かつて行つたとのこと、それではこちら木曾へ行こうと、東馬をも連れて旅立つたので、途中で馬大尽や猪之松の群と、遭遇あしなければならぬはずなのであるが、急いで多四郎が間道などを歩き、かえつて早くこの地へ着き、日のある中うちに宿を取つたため、少し遅れてこの地へ着き、先を急いで泊まろうとせず、夜をかけて木曾の福島へ向かう、猪之松と馬大尽との一行と、一瞬掛け違つてしまつたのであつた。

さて門口に立つて見れば、宿の混乱言語に絶し、收拾すべくもなく思われた。

群集が渦を巻いて街道を流れ、その間を馬の群が駆け巡り、その上を火の子が梨地なしじのように飛んだ。

「これは危険だ、ここにいては不可いけない、野の方へ！ 耕地の方へ！」

こう云つて多四郎は群集を分け、その野の方へ目差して進んだ。

その後から二人は従ついて行つたが、いつか混乱の波に吞まれ、全く姿が見えなくなつてしまつた。

鍵屋で眼を覚まして起き上った澄江は、傍らを見たが陣十郎が居ない。

(どうしたことか?) と思つたものの、居ないのがかえつて天の与え、今日の彼の様子から推せば、今後どんな目に逢わされるかも知れない。

(宿を出てもかくも外へ行こう)

仕度をして外へ出た。

(主水様は?)

こんな場合にも思つた。

4

昼間見かけた例のお侍さんが、もし恋しい主水様なら、この宿のどこかに泊まっていよう、お逢いしたいものだお逢いしたいものだ!

思い詰めて歩く彼女の姿も、いつか混乱に捲かれてしまった。

岩屋で眼覚めた主水その人も、ほとんど澄江と同じであつた。

傍らを見るとお妻が居ない。天の与えと喜んだ。義理あればこそ今日まで、一緒に起居をして来たのではあるが、希望のぞみは別れることにあつた。

そのお妻の姿が見えない。

(よしこの隙に立ち去ろう)

で、身仕度して外へ出た。

(鍵屋の二階で見かけた女、義妹澄江であろうも知れない。ともかくも行つて探して見よう)

で、その方へ歩を運んだが、人と馬と火との混乱！ その混乱に包まれて、全く姿が見えなくなつた。

喚声、悲鳴、馬のいななき！

破壊する音、逃げまどう足音？

唸る嵐に渦巻き渦巻き、火の子を散らす火事の焰！

宿は人の波、馬の流れ、水の洗礼、死の饗宴、声と音との、交響楽！

その間を縫つて全くの狂乱——血を見て狂つた悪鬼の本性、陣十郎が走つては切り、切つては走り、隠見出没、宿の八方を荒れ廻つていた。

今はお妻を探し出して切る！——そういう境地からは抜け出していて、自分のために追分の宿が、恐怖の巷に落ち入っている、それが変質的彼の悪魔性を、恍惚感に導いてい

た。で男を切り女を切り馬を切り子供を切り、切れば切るほど宿が恐怖し、宿が混乱するその事が、面白くて面白くてならないのであった。

返り血を浴び顔も手足も、こうはんはん紅斑々として凄まじく、もとどり髻千切れて髪はザンバラ、そういう陣十郎が老人の一人を、群集の中で切り仆し、悲鳴を聞き捨て突き進み、向こうから群集を掻き分け掻き分け、こっちへ向かつて来る若い女を見た。

「澄江エ——ツ」と思わず声をあげた。

それが澄江であるからであった。

「陣十様か！」と澄江は云ったが、あまりにも恐ろしい陣十郎の姿！ それに自身陣十郎から遁れ、立ち去ろうとしている時だったので、陣十郎の横を反れ、群集の中へまぎれ込もうとした。

「汝逃げるか！ 忘恩の女郎めろう！」

そういう澄江の態度によつて、心中をも見抜いた陣十郎は、可愛さ余つて憎さが百倍！ この心理に勃然として襲われ、いつそ未練の緒を断つてしまえ！ 殺してしまえと悪鬼の本性、今ぞ現わして何たる惨虐！

「くたばり居ろう！」と大上段に、刀を振り冠り追いかけたが、その間をへだてる群集の

波！ が、そいつを押し分け突つ切り、近寄るや横から、

「思い知れ——ッ」と切つた。

が、幸いその途端に、一頭の馬が走つて来、二三の人を蹴り仆し、二人の間へ飛び込んだ。
だ。

「ワ——っ」という人々の叫び！ 又三人蹴り仆され、澄江も仆れる人のあおりで、ドツと地上に伏し転んだ。

と「お女中あぶないあぶない！」と、云い云い抱いて起こしてくれたは、旅装束よそおいをした武士であつた。

「あ、あ、あなたは主水様ア——ッ」

「や、や、や、や、澄江であつたか——ッ」

5

抱き起こしてくれたその武士こそ、恋しい恋しい主水であつた。

「主水様ア——ッ」と恥も見得もなく、群集に揉まれ揉まれながら、澄江は縋りつき抱きしめた。

「澄江！ 澄江！ おおお澄江！」

思わず流れる涙であった。

涙を流し締め返し、主水はほとんど夢中の態で、

「澄江であったか、おおお澄江で！ ……昼間鍵屋の二階の欄で。 ……それにいたしてもよくぞ無事で！ ……別れて、知らず、生死を知らず、案じていたに、よくぞ無事で…
…」

しかしその時群集の叫喚、巷の雑音を貫いて

「やあ汝はおのれ嶋澤主水！ この陣十郎を見忘れはしまい！ ……本来は汝に討たれる身！

逃げ隠れいたすこの身なれど、今はあべこべに汝を探して、返り討ちいたさんと心掛け居るわ！ ……見付けて本望逃げるな主水！」と叫ぶ声が聞こえてきた。

「ナニ陣十郎？ 陣十郎とな？」

かかる場合にも嶋澤主水、親の敵かたきの陣十郎とあつては、おろそかにならずそれどころか、討たでは置けない不倶戴天の敵！

(どこに?)と声の来た方角を見た。

馬や群集に駈けへだてられ、十数間あなたに離れてはいたが、まさしく陣十郎の姿が見

えた。

が、お何とその姿、凄く、すさまじく、鬼気陰々、悪鬼さながらであることか！ ザンバラ髪！ 血にまみれた全身！

ゾツとはしたが何の主水、驚こうぞ、恐れようぞ、

「妹よ、澄江よ、天の賜物、敵陣十郎を見出したるぞ！ 討って父上の修羅の妄執、いで晴そうぞ続け続け——ツ」と刀引き抜き群集を分け、無二無三に走り寄った。

「ア、あにうえ！ お兄子様ア——ツ」

叫んだが澄江の心は顛倒！ 勿論親の敵である！ 討たねばならぬ敵であるが、破られべかりし女の命の、操を救い助けてくれた恩人！ ……陣十郎を陣十郎を！

(妾わたしには討てぬ！ 妾には討てぬ！)

「オ、お兄子様ア——ツ、オ、お兄子様ア——ツ」

その間もガガ——ツ！ ド、ド——ツ！ ド、ド——ツ！ 響き轟き寄せては返す、荒波のような人馬の狂い！

宿しゆくは狂乱！ 宿は狂乱

「陣十郎オ——ツ！ 尋常に勝負！」

「参れ主水オ——ッ！ 返り討ち！」

一間に逼った討ち手討たれ手！

音！

太刀音！

合ったは一合オ——ッ！

「わ、わ、わ、わ——ッ」と悲鳴！ 悲鳴！

いや、いや、いや、主水ではなく、陣十郎でもなく群集群集！

群集が二人の切り結ぶ中を、見よ恐れず意にもかけず、馳せ通り駆け抜け抜ける走る！

その人々に駆けへだてられ、寄ろうとしても再び寄れず、あせつ焦心でも無駄に互いに押され、

右へ左へ、前と後とへ、次第次第に、遠退く、遠退く！

「陣十郎オ——ッ！ 汝逃げるな！」

「何の逃げよう——ッ！ 主水参れ——ッ！」

「お兄イ様ア——ッ」

「妹ヨ——ッ」

「澄江殿！ 澄江殿！ 澄江殿オ——ッ」

6

追分宿の狂乱の様を、望み見ながらその追分宿へ、入り込んで来る一団があつた。

旅合羽に草鞋脚絆、長脇差を落として差し、菅笠を冠つた一団で、駒箱、金箱を莫塵に包み、それを担いでいる者もあり、博徒の一団とは知れていたが、中に二人の武士がいた。秋山要介と杉浪之助と、赤尾の林蔵とその乾児の、三十余人の同勢であり、云わずと知れた木曾福島の、納めの馬市に開かれる、賭場に出るべく来た者であつた。

納めの馬市には日限がある。それに間に合わねば効果がない。で猪之松や林蔵ばかりが、この日この宿を通るのではなく、武州甲州の貸元で、その馬市へ出ようとする者は、およそ今日を前後に挿んで、この宿を通らなければならぬのであつた。

要介達は何故来たか？

源女を逸見多四郎に取られた。

爾来要介は多四郎の動静、源女の動静に留意した。

と、二人が連立って、木曾へ向かったと人伝てに聞いた。

(では我々も追つて行こう)

おりから林蔵も行くという。

では同行ということになり、さてこそ連れ立って来たのであった。

肃々と一団は歩いて来たが、見れば行手の追分宿は、火事と見えて火の手立ち上り、叫喚の声いちじるしかった。

と、陸続として逃げて来る男女！ 口々に罵る声を聞けば、

「焼き討ちだ——ツ！」

「馬が逃げた——ツ！」

「百頭、二百頭、三百頭オ——ツ！」

「切り合っているぞ——ツ！」

「焼き討ちだ——ツ」

耳にして要介は足を止めた。

「林蔵々々、少し待て！」

「へい、先生、大変ですなア」

「どうも大変だ、迂闊には行けぬ」

「そうですとも先生迂闊には行けない」

「宿を避けて野を行こう」

「そうしましょう、さあ野郎共、その意つもりで行け、街道から反れろ」

「へい」と一同街道を外し、露じめつてゐる草を踏み、野へ出て先へ肅々と進んだ。

進み進んで林蔵の一団、生地獄の宿を横に睨み、宿の郊外まで辿りついた。

と、この辺りも避難の人々で、相当混雑を呈してい、放れ馬も時々走って来た。火事の光は勿論届きほとんど昼のように明るかった。

その光で行手を見れば、博徒の一団が屯たむろしていて、宿の様子を眺めていた。

（おおどこかのお貸元が、避難してあそこにいるらしい。ちよつとご挨拶せざるまい）
渡世人の仁義である。

「藤作々々」と林蔵は呼んだ。

「へい、親分、何でござんす」

「向こうに一団見えるだろう。どこのお貸元だか知らねえが、ちよつと挨拶に行つて来ねえ」

「ようがす」と藤作は走つて行つたが、すぐ一散に走り帰つて来た。

「親分、大変で、猪之松の野郎で」

「ナニ猪之松？ ううん、そうか！」

見る見る額に青筋を立てた。

「先生々々、秋山先生！」

「何だ？」と要介は振り返った。

「向こうに見えるあの同勢、高萩の猪之だつていうことで」

「猪之松？ ふうん、おおそうか」

要介も向こうを睨むように見た。

7

「林蔵！」としかし要介は云った。

「猪之松には其方そち怨みはあろうが、ここでは手出ししてはならぬぞ」

「何故です先生、何故いけません？」

「何故と申してそうではないか。宿は火事と放れ馬とで、あの通りに混乱し、人々いずれも苦しんで居られる。そういう他人の苦難の際に、男を売物の渡世人が、私怨の私闘は謹むべきだ」

「そうですねえ、そう云われて見れば、こいつ一言もありませんや。が、相手がなぐり込んできたら？」

「おおその時には売られた喧嘩、降りかかる火の子だ、断乎として払え！」

「ようがす、それじゃアその準備だ。……やいやい野郎共聞いていたか、猪之の方から手出ししたら幸い、遠慮はいらねえ叩き潰してしまえ！ ……それまではこっちは居待懸け！ おちついていろおちついていろ！」

「合点でえ」と赤尾の一党、鳴を静めて陣を立てた。

と、早くも猪之松方でも、彼方に見える博徒の群が、赤尾の一党と感付いた。

「親分」と云ったのは一の乾児の、例の門峰吉であった。

「林蔵の乾児の藤作の野郎が、やって来て引つ返して行きましたねえ」

「うん」と云ったのは猪之松で、先刻すでに駕籠から出、牀几を据えさせてそれへ腰かけ、火事を見ていた馬大尽、井上嘉門の側に立つて、これも火勢を眺めていたが、

「うん、藤作が見えたつけ」

「向こうにいるなあ林蔵ですぜ。林蔵と林蔵の乾児共ですぜ」

「俺もそうだと睨んでいる」

「さて、そこで、どうしましょう？」

「どうと云って何をどうだ。先方が手出しをしやアがったら、相手になって叩き潰すがいい。それまではこっちは静まっているばかりさ」

「上尾街道では林蔵の方から、親分に決はたしあ闘いを申し込んだはず。今度はこっちから申し込んだ方が」

「嘉門様がお居でなさらあ。……素人の客人を護衛まもって行く俺らだ、喧嘩は不可いねえ、解つたろうな」

「なるほどなあ、こいつア理屈だ。……じゃア静まって居りやしよう」

この時二人の旅姿の武士と、同じく一人の旅姿の女、三人連れが火事の光に、あざやかに姿を照らしながら、宿の方から野へ現われ、猪之松方へ歩いて来た。

眼ざとく認めたのが要介であった。

「杉氏」と要介は声をかけた。

「あの武家をよくご覧」

浪之助は見やったが、

「先生ありやア逸見先生で」

「であろうな、わしもそう見た」

「先生、女は源女さんですよ」

「そうらしい、わしもそうと見た。……よし」と云うと秋山要介、つかつか進み出て声をかけた。

「あいやそこへまいられたは、逸見多四郎先生と存ずる。しばらくお待ち下されい」
さようその武士は本陣油屋から、人波を分け放馬を避け、源女と東馬とを従えて、野へ遁れ出た多四郎であつたが、呼ばれて足を止め振り返つた。

8

「これはこれは秋山先生か」

こう云つたが逸見多四郎、当惑の眉をひそかにひそめた。

「不思議な所でお逢い申した」

「いや」と要介は苦笑いをし、

「拙者におきましてはこの邂逅、不思議ではのうて期する処でござつた」

「期する処？ はてさてそれは？」

「と申すはこの要介、貴殿を追っかけ参りましたので」

「拙者を追っかけ？ ……何故でござるな？」

「源女殿を当方へいただくために」

「……………」

「過ぐる日貴殿お屋敷において、木刀立合いたしました際、拙者貴殿へ申し上げましたはずで。源女殿を取り返すでござりましょうと。……なお、その際申し上げましたはずで、後日真剣で試合ましよう。……」

「……………」

「いざ、今こそ真剣試合！ 拙者勝たば有無ござらぬ、源女殿を頂戴いたす！」

「……………」

「なお、この際再度申す、拙者が勝たば赤尾の林蔵を——その林蔵は拙者と同伴、乾児と共にそこへ参つてござる。——関東一の貸元として、猪之松を隷属おさせ下さい！」

「拙者が勝たば高萩の猪之松を——その猪之松儀これより見れば、同じく乾児を引卒して、そこに屯して居るようでござるが、その猪之松を関東一の、貸元として林蔵を乾児に……」

「致させましよう、確かでござる！」

「しからば真劍！」

「白刃の立合い！」

「いざー！」

「いざー！」

サ——ツと三間あまり、二大劍豪は飛び退ったが、一度に刀を鞘走らせると、火事の光りに今はこの辺り、ひるま白昼よりも明るくて、黄金の色を加えて赤色、赤金色の火焰地獄！ さながらの中にギラギラと輝く、二本の劍をシ——ンと静め、相青眼に引つ構えた。

これを遙かに見聞して、驚いたのは林蔵と猪之松で、

（俺らのために先生——師匠が、——師匠同志が切り合つたでは、こちとら此方の男がすたつてしまふ！ もうこうなつては遠慮は出来ねえ！ 控えていることは出来なくなつた！）

兩人ながら同じ心で、同じ心が言葉になり、

「さあ手前達かもう事アねえ、猪之の同勢へ切り込んで、猪之の首をあげつちめえ！」

「さあ野郎共赤尾へ切り込め！ 林蔵を仕止める仕止めろ！」

ド——ツとあがつた鬨の声！

ムラムラと両軍走りかかった。

白刃！ 閃き！ 悲鳴！ 怒声！ 仆れる音！ 逃げつ追いつ、追いつ逃げつする姿！ 混乱混戦の場となったが、この時宿しゆくもいよいよ混乱！ 混乱以上に阿鼻叫喚の焦熱地獄となりまさり火事の焰の熱気に堪えかね、空地へ耕地へ……耕地へ耕地へと、さながら怒濤の崩れる如く、百、二百、三百、四百！ 老幼男女家畜までが、この耕地へ逃げ出して来た。

その人波に揉まれ揉まれて、澄江とお妻とが泳いで来た。

と、陰惨とした幽鬼の声で、

「澄江殿才——、お待ちなされ！ ……汝お妻ア——遁そうや！」と叫ぶ、陣十郎の声を聞いた。

9

澄江もお妻も振り返って見た。

愛欲の鬼、妄執の餓鬼、殺人鬼、——鬼となった陣十郎が人波を分けて、二人の方へ走って来た。

血刀が群集の波の上に、火光ひかりを受けて輝いている。

(陣十郎に捕らえられたら、妾わたしの命は助からない)

お妻は夢中で悲鳴を上げて走り、

(陣十郎殿に捕らえられたら、妾の躰も貞操も……)

こう思つて澄江も無我夢中で、前へ前へとヒタ走つた。

「どうぞお助け下さりませ！」

無我夢中で走つて来た澄江、一挺の駕籠のあるのを見かけて、そこへ駈け付けこう叫んだ。

「お助けいたす！ 駕籠の中へ！」

誰とも知らず叫んだ者があつた。

「お礼は後に、事情も後に！」

こう云つて澄江は駕籠の中へ、窮鳥のように身を忍ばせた。

「駕籠やれ！」と又も誰とも知れず叫んだ。

駕籠がユラユラと宙に上り、街道の方へ昇がれて走り、その後から赧顔長髪の、酒顛童子さながらの人物が、ニタニタ笑いながら従ついて走つた。

猪之松の屋敷で澄江の躰を、自分の物にしようとして、陣十郎に邪魔をされて、望みを

遂げることに失敗した、馬大尽の井上嘉門であつた。

「駕籠待て——ッ、遣らぬ！ 待て待て待て——ッ！」

陣十郎は追っかけたが、

「や、こいつ陣十郎！ 又現われたか、今度こそ仕止めろ！」と、猪之松の乾児達一斉に、陣十郎を引っ包んだ。

一方、お妻はその隙を狙い、ひた走りひた走つたが、息切れがして地に仆れた。と、そこに刀を下げて、寄せ来る群集に当惑し、左右に避けていた武士がいた。

「お侍さまと見申して、お助けお願いいたします！」

云い云いお妻は武士の袖に縋つた。

「誰じゃ？ よし、誰でもよし！ 見込まれて助けを乞われた以上、誰であろうと助けつかわす！ 参れ！」と云つたがこの武士こそ、秋山要介と太刀を交わし、命の遣り取りをしようとした瞬間、群集の崩れに中をへだてられ、相手の姿を見失つたところの、逸見多四郎その人であつた。

「東馬々々、東馬参れ！」

「はい先生！ 私はここに！」

「源女殿は？ 源女殿は？」

「源女殿は人波にさらわれて……どこも知れずどこも知れず……」

「残念！ ……とはいえ止むを得ぬ儀、東馬参れ——ッ！」と刀を振り上げ、遮る群集に大音声！

「道を開け！ 開かねば切るぞ！」

刀の光に驚いて、道を開いた群集の間を、あてもなく一方へ一方へ、三人は走つた走つた走つた。

が、それでも未練あつて、

「源女殿才——、源女殿才——ッ」と呼ばわつた。

そういう声は聞きながら、永らく世話になつてなつかしい、要介の姿を見かけた源女は——逸見多四郎に対しても、丁寧な待遇を受けたので、決して悪感を持っていなかったが、要介に対してはそれに輪をかけた、愛慕の情さえ持っていたので、その方角へ人を掻き分け、この時無二無三に走っていた。

「秋山先生！」とやつと近付き、地へひざまずくと足を抱いた。

「源女殿か——ッ！」と秋山要介、これも地面へ思わず膝つき

「逢えた！ よくぞ！ 参られた！ ……杉氏々々！」と嬉しさの声、顫わせて呼んで源女を抱き、

「もう逃がさぬ！ どこへもやらぬ！ 杉氏々々源女殿を、林蔵の手へ！ ……そこで介抱！」

「おお源女殿オ——ッ！ よくぞ来られた！」

駈け寄つて来た浪之助、これもなつかしさに声を亢たかぶらせ、

「いざ源女殿、向こうへ向こうへ！ ……先生にもご同道……」

「いやいや俺は逸見多四郎を！ ……」

「この混乱、この騒動、見失いました上からは……」

「目つからぬかな。……では行こう」

この混乱の人渦の中を、阿修羅のように荒れ廻っているのは、澄江を奪われお妻を見失い、猪之松の乾児達に取り巻かれ、切り立てられている陣十郎であった。

十数人を殺傷し、己も幾度か薄手を受け、さすがの陣十郎も今は疲労！ その極にあつ

て眼はクラクラ、足元定まらずよろめくのを、得たりと猪之松の乾児の大勢、四方八方より切つてかかった。

それをあしらい、避けつ払いつ——こいつらに討たれては無念残念、どこへなりと一旦遁れようと退く、退く、今は退く！

ようやく人波の渦より出、追ひ継る猪之松の乾児からも遁れ、藪の裾の露じめった草野へ、さんまん 蹣跚として辿りついた時には、神氣全く消耗し尽くした。

(仆れてなろうか！ 仆れぬ！ 仆れぬ！)

が、ドツタリ草の上に仆れ、氣絶！——陣十郎は氣絶してしまった。

火事の遠照りはここまでも届いて、死人かのように蒼い顔を、陰影づけて明るめていた。修羅の巷は向こうにあつたが、ここは寂しく人氣なく、秋の季節は争われず、虫の音がしげく聞こえていた。

と、この境地へ修羅場を遁れ、これも同じく疲労困憊、クタクタになった武士が一人、刀を杖のように突きながら、ヒヨロリヒヨロリと辿つて来た。

「や、死人か、可哀そうに」と眩き、陣十郎の側そばへ立った。

が、俄然躍り上り——躍り上り躍り上り声をあげた。

「陣十郎オ——ッ！ 汝おのれであったか！ 鳴澤主水が参つたるぞ！ 天の与え、今度こそ遁
さぬ！ 立ち上つて勝負！ 勝負いたせッ！」

武士は鳴澤主水であつた。

「起きろ起きろ水品陣十郎！ 重なる怨み今ぞ晴す！ ……起きろ！ 立ち上れ！ 水品
陣十郎！」

刀を真つ向に振り冠り、起き上つたらただ一討ち！ ……討つて取ろうと構えたが、陣
十郎は動かなかつた。

（死んでいるのか？）と疑惑が湧いた。

手を延ばして額へ触つた。

気絶しているのだ、暖味がある。

（よ——し、しからばこの間に！）

振り冠つた刀を取り直し、胸へ引きつけ突こうとしたが、心の奥で止めるものがあつた。
（あなたが高萩の森の中で、気絶しているのを陣十郎の情婦、お妻が助けたではありませ
んか。……正体もない人間を、敵かたきであろうと討つは卑怯、まず蘇生させてその上で）と。

（そうだ）と主水は草に坐り、印籠から薬を取り出した。

恩讐同居

1

木曾福島の納めの馬市。――

これは勿論現代にはない。

現代の木曾の馬市は、九月行なわれる中見なかみの市と、半夏至を中にして行なわれる、おけつげという二つしかない。

納めの馬市の行なわれたのは、天保末年の頃までであり、それも前二回の馬市に比べて、かなり劣つたものであつた。もうこの頃は山国の木曾は、はなはだ寒くて冬めいてさえ居り、人の出もあまりなかつたからである。

とは云え天下の福島の馬市！　そうそう貧弱なものではなく、馬も五百頭それくらいは集まり、縁日小屋も掛けられれば、香具師やしの群も集まって来、そうして諸国の貸元衆が、乾児をつれて出張つても来、小屋がけをして賭場をひらいた。

この時集まって来た貸元衆といえば――

白子の琴次ことじ、一柳の源右衛門、廣澤の兵右衛門、江尻の和助、妙義の雷蔵、小金井の半助、御輿の三右衛門、かじかざわ 鰻澤の藤兵衛、三保松源蔵、藤岡の慶助——等々の人々であり、そこへ高萩の猪之松と、赤尾の林蔵とが加わっていた。

左右が山で中央が木曾川、こういう地勢の木曾福島は、帯のように細い宿であつたが、三家の筆頭たる尾張様の家臣で、五千八百余石のご大身、山村甚兵衛が関の関守、代官としてまかり居り、上り下りの旅人を調べる。で、どうしてもこの福島へは、旅人は一泊かあるいは二三泊、長い時には七日十日と、逗留しなければならなかつたので、宿は繁盛を極めていた。尾張屋という旅籠はたごがあつた。

そこへ何と堂々と、こういう立看板が立てられたではないか！

「秋山要介在宿」と。

これが要介のやり口であつた。

どこへ行つても居場所を銘記し、諸人に自己の所在を示し、敵あらば切り込んで来い、慕う者あらば訪ねて来いという、そういう態度を知らせたのであつた。

その尾張屋から二町ほど離れた、三河屋という旅籠には、逸見多四郎へんみが泊っていたが、この人は地味で温厚だったので、名札も立てさせずひっそりとしていた。

さて馬市の当日となった。

博勞、市人、見物の群、馬を買う人、馬を売る人、香具師（やし）の男女、貸元衆や乾児、非常を警める宿役人、関所の武士達、旅の男女——人、人、人で宿（しゆく）は埋もれ、家々の門や往来には、売られる馬が無数に繋がれ、嘶（いなな）き、地を蹴り、噛み合い勿ね合い、それを見て犬が吠え——、声、声、声で騒がしくおりから好天気で日射し明るく、見世物小屋も入りが多く、賭場も盛って賑やかであった。

そういう福島の繁盛を外に、かなり距たった奈良井の宿の、山形屋という旅籠屋へ、辿りついた二人の武士があった。

陣十郎と主水であった。

奥の小広い部屋を二つ、隣同志に取って泊まった。

二人ながら駕籠で来たのであったが、駕籠から現われた陣十郎を見て、

「こいつは飛んだお客様だ」と、宿の者がヒヤリとした程に、陣十郎は憔悴してい、手足に幾所か繃帯さえし、病人であり、怪我人であることを、むごたらしく鮮やかに示していた。

夕食の膳を引かしてから、主水は陣十郎の部屋へ行つた。

「どうだ陣十郎、気分はどうだ？」

「悪い、駄目だ、起きられぬ」

床を敷かせ、枕に就き、幽かに唸っていた陣十郎は、そう云って残念そうに齒を噛んだ。
「これではお前と立ち合い出来ぬよ」

2

「まあ可い、ゆつくり養生するさ」

主水はそう云って気の毒そうに見た。

「快癒してから立ち合おう」

「それよりどうだな」と陣十郎は云った。

「こういう俺を討って取らぬか」

「そういうお前を討つ程なら、あの時とうに討って居るよ」

「あの時討てばよかったものを」

「死人を切ると同じだったからな」

「それでも討てば敵討かたきうちにはなつた」

「誉にならぬ敵討か」

「ナーニ見事に立ち合いました、討つて取りましたと云ったところで、誰一人疑う者はなく、誉ある復讐ということになり、立身出世疑いなしじゃ」

「心が許さぬよ、俺の良心が」

「なるほどな、それはそうだろう。……そういう良心的のお前だからな」

「お前という人間も一緒に住んで見ると、意外に良心的の人間なので、俺は少し驚いている」

「ナーニ俺は悪人だよ」

「悪人には相違ないさ。が、悪人の心の底に、一点強い善心がある。——とそんなように思われるのさ」

「そうかなア、そうかもしれないぬ。いやそうお前に思われるなら、俺は実に本望なのだ。……俺は一つだけ可いことをしたよ。……いずれゆつくり話すつもりだが」

「話したらよかろう、どんなことだ？」

「いやまだまだ話されぬ。もう少しお前の気心を知り、そうして俺の性質を、もう少しお前に知って貰ってからそうだ知って貰ってからでない、話しても信じて貰われまいよ」

「実はな」と主水も真面目の声で、

「実はな俺もお前に対し、その中是非とも聞いて貰いたいこと、話したいことがあるのだよ。が、こいつも俺という人間を、もつとお前に知って貰ってからでない……」

「ふうん、変だな、似たような話だ。……が、俺はお前という人間を、かつて疑ったことはないよ。俺のような人間とはまるで違う。お世辞ではない、立派な人間だ」

「お前だつてそうだ、可いところがある」

二人はしばらく黙っていた。

木曾街道の旅籠の部屋だ、襖も古び障子も古び、畳も古び、天井も古び、諸所に雨漏りの跡などがあつて、暗い行燈でそれらの物象が、陰惨とした姿に見えていた。

乱れた鬚、蒼白の顔、——陣十郎のそういう顔が、夜具の襟から抽ぬきんでている。

それは化物絵を思わせるに足りた。

「おい」と陣十郎は感傷的の声で、

「俺とお前は血縁だったなア」

「……………」

主水は無言で頷いた。

「俺とお前は従々またいとこ兄弟だだったんだなア」

「……………」

「だから互いに敵同志になつても、……………」

「……………」

「こんな具合に住んでいられるのだなア」

「そうだよ」と主水も感傷的に云つた。

「そうだよ俺達は薄くはあるが、縁つづきには相違ないのだ」

ここで又二人は黙つてしまった。

行燈の光が暗くなつた。

燈心に丁字でも立つたのであろう。

「寒い」と陣十郎は呟いた。

「木曾の秋の夜……………寒いのを……………風邪でも引いては大変だ。わしの夜具を掛けてやろう」

主水は云つて自分の部屋へ立つた。

追分宿の大乱闘、その時仆れた陣十郎を目つけ、主水は討って取ろうとしたが、気絶している人間は討てぬ。で蘇生させたところ、陣十郎は無数の負傷、立ち上る気力もなくなっていた。

しかし彼は観念し、草に坐って首差し延べ、神妙に討って取られようとした。

これがかえって主水の心を、同情と惻隠とに導いて、討って取ることを出来なくした。で、介抱さえしてやることにした。

旅籠へ連れて来て医師にかけた。

それにしてもどうしてそんな負傷者を連れて、福島などへ行くのであろう？

こう陣十郎が云ったからである。

「井上嘉門という馬大尽が、博徒猪之松の群にまじり、あの夜乱闘の中にいた。そこへ澄江殿が逃げ込まれた。と、嘉門が駕籠に乗せ、福島の方へ走らせて行った。その以前からあの嘉門め、澄江殿に執着していた。急いで行って取り返さずば、悔いても及ばぬことになろう。……これにはいろいろ複雑の訳と、云うに云われぬ事情とがある。そうして俺はある理由によって、その訳を知っている。が今は云いにくい。ただ俺を信じてくれ。俺の言葉を信じてくれ。そうして一緒に木曾へ行つて、澄江殿を取り返そう」

——で、二人は旅立ったのであった。

主水にしてからが澄江の姿を、追分の宿で見かけたことを、不思議なことに思っていた。馬大尽井上嘉門のことは、上尾宿の旅籠の番頭から聞いた。

しかし、澄江と嘉門との関係——何故嘉門が駕籠に乗せて、澄江をさらって行ったかについては、窺い知ることが出来なかった。

陣十郎は知っているらしい。

詳しい事情を知っているらしい。

が、その陣十郎はどうしたものか、詳しく話そうとはしないので、強いて訊くことも出来なかった。

とはいえ澄江がそんな事情で、嘉門に連れられて行ったとすれば、急いで木曾へ出張って行って、澄江を奪い返さなければならぬ。

——で、旅立って来たのである。

二人は翌日山形屋を立って、旅駕籠に身を乗せて、福島さして歩ませた。

鳥居峠へ差しかった。

ここは有名な古戦場で、かつ風景絶佳の地で、芭蕉翁なども句に詠んでいる。

雲雀ひばりより上に休らう峠かな

木曾の五木と称されている、杜松ねずや扁柏ひのきや金松かさやまきや、花柏さわらや、そうして羅漢松おすとのろうなどが、鬱々蒼々と繁つてい、昼なお暗いところもあれば、カラツと開けて急に眼の下へ、耕地が見えるというような、そういう明るいところもあつた。

随分急の上りなので、雲助はしきりに汗を拭いた。

主水は陣十郎の容態を案じた。

(窮屈の駕籠でこんな所を越して、にわか悪くならなければよいが)で、時々駕籠を止めて、客をも駕籠昇かごかきをも休ませた。

峠の中腹へ来た時である、

「駕籠屋ちよつと駕籠をとめろ」

突然陣十郎はそう云つた。

「おい主水、景色を見ようぜ」

「よかろう」と主水も駕籠から下りた。

「歩けるのか、陣十郎」

「大丈夫だ。ボツボツ歩ける」

陣十郎は先に立って、森の方へ歩いて行った。

4

明^{めい}心^お年^う間に木曾義元、小笠原氏と戦って、戦い勝利を得たるをもつて、華^{とり}表^いを建てて鳥居峠と呼ぶ。

その鳥居の立っている森。——森の中は薄暗く、ところどころに日漏れがして、草に斑^ま紋^だを作つてはいたが、夕暮のように薄暗かった。

そこを二人は歩いて行った。

紅葉した楓^{かえでうるし}が漆の木と共に、杉の木の間に火のように燃え、眩惑的に美しかったが、その前までやって来た時、

「エ——イ——ツ」と裂帛の声がかかり、木漏れ陽を割って白刃一閃！

「あッ」

主水だ！

叫声を上げ、あやうく飛び退き抜き合わせた！

悪人の本性に返つたらしい！ 見よ、陣十郎は負傷の身ながら、刀を大上段に振り冠り、

繃帯の足を前後に踏み開き、大眼カツと見開いて、上瞼へ瞳をなかば隠し、三白眼を如実に現わし、主水の眼をヒタと睨み、ジリリ、ジリリと詰め寄せて来た。

殺気！

ぼうぼう
磅 磅！

えん
宛として魔だ！

気合に圧せられ殺気に挫かれ、主水はほとんど心とりのぼせ、声もかけられずジリリジリりと、これは押されて一步一步後へ後へと引き下った。

間！

静かにして物凄い、生死の境の間が経った。

と、陣十郎の唇へ酸味のある笑いが浮かんで来た。

「駄目だなア主水、問題にならぬぞ。それでは到底俺は討てぬ」

「……………」

「人物は立派で可い人間だが、剣道はからきし物になっていない」

「……………」

「刀をひけよ、俺も引くから」

陣十郎は数歩下り、刀を鞘に納めてしまった。

二人は草を敷いて並んで坐った。

小鳥が木から木へ渡り、囀りの声を立てていた。

「主水、もつと修行せい」

「うん」と主水は恥かしそうに笑い、

「うん、修行するでしょう」

「俺が時々教えてやろう」

「うん、お前、教えてくれ」

「俺の創始した『逆ノ車』——こいつを破る法を発明しないことには、俺を討つことは出来ないのだがなア」

「とても俺には出来そうもないよ。『逆ノ車』を破るなんてことは」

「それでは俺を討たぬつもりか」

「きつと討つ！ 必ず討つ！」

主水は烈しい声で云い、鋭い眼で陣十郎を睨んだ。

それを陣十郎は見返しながら、

「討てよ、な、必ず討て！ 俺もお前に討たれるつもりだ。……が、それには『逆ノ車』を……」

主水は俯向いて溜息をした。

二人はしばらく黙っていた。

森の外の明るい峠道を、二三人の旅人が通って行き、駄賃馬の附けた鈴の音が、幽かながらも聞こえてきた。

「『逆ノ車』使つて見せてやろうか」

ややあつて陣十郎はこう云つた。

「うむ、兎も角も使つて見せてくれ」

「立ちな。そうして刀を構えな」

云い云い陣十郎は立ち上つた。

そこで主水も立ち上り、云われるままに刀を構えた。

と、陣十郎も納めた刀を、又もソロリと引き抜いたが、やがて静かに中段につけた。

「よいか」と陣十郎が云つた途端、陣十郎の刀が左斜に、さながら水でも引くように、静かに、流暢に、しかし粘つて、惑わすかのようにスーッと引かれた。

何たる誘惑それを見ると、引かれまい、出まいと思ひながら、その切先に磁気でもあつて、己が鉄片でもあるかのように、主水は思わず一步出た。

陣十郎の刀が返つた。

ハ——ツと主水は息を呑んだ。

瞬間怒濤が寄せるように、大下手切り！ 逆に返つた刀！

見事に胴へダツプリと這入つた。

「ワツ」

「ナーニ切りやアしないよ」

もう陣十郎は二間の彼方へ、飛び返つていて笑つて云つた。

「どうだな主水、もう一度やろうか」

「いや、もういい。……やられたと思つた」

主水は額の冷汗を拭いた。

また二人は並んで坐つた。

「どうだ主水、破れるか？」

「破るはさておいて防ぐことさえ……」

「防げたら破つたと同じことだ」

「うん、それはそうだろうな」

「どこがお前には恐ろしい？」

「最初にスーツと左斜へ……」

「釣手の引のあの一手か？」

「あれにはどうしても引つ込まれるよ」

「次の一手、柳生流にある、車ノ返シ、あれはどうだ？」

「あれをやられるとドキンとする」

「最後の一手、大下手切り！　これが本当の逆ノ車なのだが、これをお前はと思う？」

「ただ恐ろしく、ただ凄じく、されるままになつていなければならぬよ」

「これで一切分解して話した、……そこで何か考案はないか？」

「……………」

無言で主水は考えていた。

と、陣十郎が独言のように云った。

「すべての術は単独ではない。すべての法は独立してはいない。……『逆ノ車』もその通りだ。『逆ノ車』そればかりを単独に取り上げて研究したでは、とうてい破ることは出来ないだろう。……その前後だ、肝心なのは！ ……どういふ機会に遭遇した時『逆ノ車』を使用するか？ ……『逆ノ車』を使う前に、どうそこまで持つて来るか？ ……こいつを研究するがいい。……こいつの研究が必要なのだ」

ここで陣十郎は沈黙した。

主水は熱心に聞き澄ましていた。

そう陣十郎に云われても、主水には意味が解らなかつた。いやそう云われた言葉の意味は、解らないことはなかつたが、それが具体的になつた時、どうなるものかどうすべきものか、それがほとんど解らなかつた。

で、いつ迄も黙っていた。

「澄江殿はどうして居られるかのう」

こう如何にも憧憬あこがれるように、陣十郎が云いだしたのは、かなり間を経た後のことであつた。

異様な声音に驚いて、主水は思わず陣十郎を見詰めた。
と、陣十郎の頬の辺りへ、ポツと血の気が射して燃えた。

(どうしたことだ?)と主水は思った。

が、直ぐに思い出されたことは、陣十郎が以前から、澄江を恋していたことであつた。

(いまだに恋しているのかな)

こう思うと不快な気持がした。

それと同時に陣十郎の情婦? お妻のことが思い出された。

卒然として口へ出してしまった。

「お妻殿はどうして居られることやら」

「ナニお妻?」と驚いたように、陣十郎は主水を見詰めた。

6

「お妻! ふふん、悪婆毒婦! あんな女も少ないよ」

やがて陣十郎は吐き出すように云つた。

追分宿の夜の草原で、後口の悪い邂逅をした。——そのことを思い出したためであつた。

「そうかなア」と主水は云つたが主水にはそう思われなかつた。

彼女の執拗なネバネバした恋慕、どこまでも自分に尽くしてくれた好意——一緒にいる中は迷惑にも、あさましいものにも思われたが、さてこうして離れて見れば、なつかしく恋しく思われるのであつた。

（が、そのお妻とこの俺とが、夫婦ならぬ夫婦ぐらし、一緒に住んでいたと知つたら、陣十郎は何と思うであろう？）

夫婦のまじわりをしなかつたといかに弁解したところで、若い女と若い男とが、一緒に住んでいたのである。清浄の生活など何で出来よう、肉体的の関係があつたと、陣十郎は思うであろう——主水にはそんなように思われた。

それが厭さに今日まで、主水は陣十郎へ明かさないのであつた。

とはいえいずれは明かさなければならぬ——そこで奈良井の旅籠屋でも、聞いて貰いたいことがある、云わなければならぬことがあると、そういう意味のことを云つたのであつた。

似たような思いにとらえられているのが水品陣十郎その人であつた。

澄江と夫婦ならぬ夫婦ぐらし、それをして旅をさえつづけて来た。が、そう打ちあけて

話したところで、肉体のまじわりなかつたと、何で主水が信じよう。暴力で思いを遂げたぐらいに、まず思うと思つてよい。

打ち明けられぬ！ 打ち明けられぬ！

で、今だに打ち明けないのであつたが、早晚は話してしまわねば、自分として心苦しい。そこでこれも奈良井の宿で、聞いて貰いたいことがある、話さねばならぬことがあると、主水に向かつて云つたのであつた。

二人はしばらく黙つていた。

互いに一句云つたばかりで、澄江について、お妻に関して、もう云おうとはしなかつた。触れることを互いに避けているからである。

木曾福島へやつて来たものの、逸見多四郎は馬市そのものに、何の関心も執着もなく、執着するところは埋ずもれた巨宝、それを手に入れることであつた。

「お妻殿」と旅籠の座敷で多四郎は優しく微笑して云つた。

「木曾の奥地西野郷へ、行つて見ようではござらぬか」

「はいはいお供いたしますとも」

お妻は嬉しそうにそう云った。

「其方は健気で話が面白い。同行すると愉快でござろうよ」

「まあ殿様、お世辞のよいこと」

「東馬、其方も行くのだぞ」

「は、お供いたします」

こんな塩梅に二人を連れて、多四郎は福島あんなばいの宿を立った。

奥地の木曾の風景を探る。こう二人には云ったものの、その実は奥地の西野郷に、馬大尽事井上嘉門がいる。そこに巨宝があるかもしれない。有ったらそれを手に入れて、それを目的に行くのであった。

木曾川を渡ると渡った裾から、もう険しい山路であった。

急ぐ必要の無い旅だったので、三人は悠々と辿って行った。

馬大尽の屋敷

その同じ日のことであつた、旅籠尾張屋の奥の部屋で、秋山要介が源女と浪之助とへ、「さあ出立だ。いそいで用意！ 西野郷へ行くのだ、西野郷へ行くのだ！」
 急ぎ立てるようになつた。

要介は源女を取り返して以来、そうして源女と福島へ来て以来、源女の口からこういう事を聞いた、

「妾わたくしだんだん思い出しました。大森林、大溪谷、大きな屋敷、無数の馬、酒顛童子のような老人のいた所、そこはどうやら福島こくふんの、奥地のように思われます」と。

それに福島へ来て以来、林蔵の乾児こくふんをして逸見多四郎へんみの起居を、絶えず監視させていたが、それから今しがた通知があつた。逸見多四郎が供二人を連れて、西野郷さして発足したと。

そこでこんなように急ぎ立てたのであつた。

三人は旅籠を出た。

(西野郷には馬大尽事、井上嘉門という大金持が、千頭ほどの馬を持って、蟠踞ばんぎよしているという事だ。それが源女という所の、酒顛童子のような老人かも知れない)
 要介はそんなことを思った。

さて三人は歩いて行く。

西野郷は今日の三岳村と、開田村とに跨がっており、木曾川へ流れ込む黒川の流域、貝坪、古屋敷、馬橋、ヒゲ沢渡、等々の小部落を点綴したところの、一大地域の総称であつて、その中には大森林や大渓谷や瀧や沼があり、そのずっと奥地に井上嘉門の、城砦のような大屋敷が、厳然として建っているのであつた。

今日の歩みをもつてすれば、福島から西野郷へは一日で行けるが、文政年間の時代においては、二日の日数を要するのであつた。

分け上る道は険しかったが、名に負う木曾の奥地の秋、その美しさは類少なく、木々は紅葉し草は黄ばみ、木の実は赤らみ小鳥は啼きしきり、空は澄み切つて碧玉を思わせ、驚嘆に足るものがあり、そういう境地を放牧されている馬が、あるいは五頭あるいは十頭、群をなし人を見ると懐かしがって、走つて来ては鼻面を擦りつけた。

「^{わたし}妾、だんだん思い出します」

源女は嬉しそうに云い出した。

「たしかに妾こういう所を、山駕籠に乘せられ揺られながら、以前に通つたように思います」

「そうでござるか、それは何より……源女殿には昔の記憶を、だんだん恢復なされると見える」

そう云つて要介も喜んだ。

歩きにくい道を歩きながら、三人は奥へ進んで行った。

その日も暮れて夜となった。

その頃要介の一行は、一軒の杣夫そまの家に泊まつていた。

このような土地には旅籠屋などはなく、旅する人は杣夫や農夫に頼み、その家へ泊まることになっていた。

大きな囲炉裏を囲みながら、要介は杣夫の家族と話した。

「西野郷の馬大尽、井上嘉門殿のお屋敷は、大したものでござろうの？」

「へえ、そりやア大したもので、ご門をお入りになってから、主屋の玄関へ行きつくまでに、十町はあるということだ」

「それはどうも大したものだな」

「嘉門様お屋敷へ参られますので？」

「さよう、明日あした行くつもりじゃ」

「あそこではお客様を喜ばれてな、十日でも二十日でも置いてくれます」

2

「大家のことだからそうであろう」

「幾日おいでになろうとも、ご主人のお顔を一度も見ない、……見ないままで帰ってしま
う……そういうことなどザラにあるそうで」

「ほほう大したもののだう」

翌日一行は杣夫の家を立ち、その日の夜には要介達は、井上嘉門家の客になっていた。

客を入れるために造つてある、幾軒かある別棟の家の、その一軒に客となっていた。

想像以上噂以上に、嘉門の屋敷が豪壮であり、その生活が雄大なので、さすがの要介も
胆を潰した。

いうところの大家族主義の典てんけい型のようなものであった。

西野郷の井上嘉門と、こう一概に人は云っていたが、行つて見れば井上嘉門の屋敷は、
西野郷からは更に数里、飛驒の国に寄っている、ほとんど別個の土地にあり、その土地か
ら西野郷へまで、領地が延びているのだと、こう云つた方がよいのであった。

山の大名！

まさにそうだ。

周囲三里はあるであろうか、そういう広大な地域を巡って、石垣と土牆どしようと巨木とで、自然の城壁をなしている（さよう將に城壁なのである）その中に無数の家々があり田畑があり丘があり、林があり、森があり、川があり、沼があり、農家もあれば柚夫の家もあり、空地では香具師やしが天幕テントを張って見世物を興行してさえた。

しかもそれでいてその一廓は、巖然として嘉門の屋敷なのであった。

つまり嘉門の屋敷であると共に、そこは一つの村であり、城廓都市であるとも云えた。

馬や鹿や兎や狐や、牛や猿などが、林や森や、丘や野原に住んでいた。

到る所に厩舎うまやがあつた。

乞食までが住居していた。

嘉門の住んでいる主屋なるものは、一体どこにあるのだろうか？

ほとんど見当がつかない程であつた。

が、その屋敷はこの一劃の奥、北詰の地点にあるのであって、その屋敷にはその屋敷に属する、石垣があり門があつた。

要介に杣夫が話した話、「ご門をお入りになつてから、主屋の玄関へ行きつくまでに、十町はあるということだ」と。

これはこの門からのことなのであつた。

が、総体の嘉門の屋敷、周圍三里あるというこの屋敷の、雄大極まる構えと組織は、何も珍しいことではなく、昭和十七年の今日にあつても、飛驒の奥地や信州の奥地の、ある地方へ行つて見れば、相当数多くあるのである。新家しんやとか分家ぶんけとかそういう家を、一つ所へ八九軒建て、それだけで一郷を作り、その家々だけで団結し、共同の収穫とりのいれしよ所や風呂などを作り、祭葬冠婚の場合には、その中での宗家へ集まり、酒を飲み飯を食う。

白川郷など今もそうである。

で、嘉門家もそれなのであるが、いかにも結構が雄大なので、驚かされるばかりなのであつた。

宗家の当主嘉門を頭に、その分家、その新家、分家の分家、新家の新家、その分家、その新家——即ち近親と遠縁と、そうしてそういう人々の従僕——そういう人々と家々によつて、この一劃は形成され、自給自足しているのであつた。

要介達の泊まっている家は、宗家嘉門の門の中の平屋建ての一軒であつた。

さてその夜は月夜であった。

その月光に照らされて、二挺の旅駕籠が入つて来た。

3

二挺の駕籠の着けられた家も、客を泊めるための家であつたが、要介達の泊まっている家とは、十町ほども距たつていた。

主水と陣十郎とが駕籠から出た。

そうして家の中へ消えて行つた。

こういう大家族主義の大屋敷へ来れば、主人の客、夫婦の客、支配人の客、従僕の客、分家の客、新家の客と、あらゆる客がやつて来るし、ただお屋敷拝見とか、一宿一飯の恩恵にとか、そんな名義で来る客もあり、客の種類や人品により、主人の客でも主人は逢わず、代わりの者が逢うことがあり、従僕の客でも気が向きさえすれば、主人が不意に逢つたりして、洵まことに自由であり複雑であつたが、感心のことには井上嘉門は、どんな粗末な客であつても、追いつ返すということはしなかつたそうなの。有り余る金があるからであろうが、食客を好む性質が、そういうことをさせるのであつた。

要介は心に思うところあつて、

「有名なお屋敷拝見いたしたく、かつは某事それがし武術修行の、浪人の身にござりますれば、数日の間滞在いたし、お家来衆にお稽古つけたく……」

とこういう名目で泊まり込み、陣十郎と主水とは、

「旅の武士にござりまするが、同伴の者この付近にて、暴漢数名に襲われて負傷、願わくば数日滞在し、手あて致したく存じます」

と、こういう口実の下に泊まったのであつた。

陣十郎は猪之松の屋敷で、嘉門を充分知つて居り、知つて居るばかりか嘉門を襲つた。

——そういう事情があるによつて、絶対に嘉門には逢えなかつた。

顔を見られてさえ一大事である。

で、顔は怪我したように、繻帯で一面に包んでいた。

逸見多四郎が堂々と、

「拙者は武州小川の郷士、逸見多四郎と申す者、ご高名を知りお目にかかりたく、参上致しますてござります」

と、正面から宣なのつて玄関へかかり、丁寧に主屋へ招じ入れられたのも、同じ日のことで

あり、お妻も東馬も招じ入れられた。

さて月のよい晩であった。

要介は源女と浪之助を連れてブラリと部屋から戸外へ出た。

この広大の嘉門の屋敷の、大体の様子を見て置こうと、こう思つて出て来たのであつた。林のような植込みの中に、ポツリポツリと幾軒とない、立派な屋敷が立っていて、もう夜も相当更けていたからか、いずれも戸締り厳重にし、火影など漏らしてはいなかつた。

と、三人の歩いて行く行手を、二人の武士が歩いていた。

この家へ泊まつている客であろう。

そう思つて要介は気にも止めなかつた。

が、そこは人情で、自分もこの家の客であり、先方の二人も客であるなら、話して見たいとこんなように思い、その後をソロソロとつけて行つた。

植込を抜け幾軒かの屋敷の、前を通つたり横を通つたりして、大略おおよそ五六町も歩いたであらうか、その時月夜の空を摩して、一際目立つ大屋敷が、その屋敷だけの土塀を巡らし、その屋敷だけの大門を持つて、行手に堂々と聳えていた。

(これが嘉門の住居だな。いわば本丸というやつだ。いやどうも広大なものだ)

要介はほとほと感に堪えた。

4

先へ行く二人の客らしい武士も、その屋敷の広大なのに、感嘆をしているのであろう、しばし佇んで眺めていたが、土塀に添って右の方へ廻った。

要介たちも右の方へ廻った。

と、二人のその武士達は、土塀の前の一所へ立って、しばらく何やら囁いていたが、やがて土塀へ手をかけると、ヒラリと内へ躍り込んだ。

「おや」

「はてな」

と云い要介も、浪之助も声をあげた。

「先生、あいつら変ですなえ」

「客ではなくて泥棒かな」

二人は顔を見合わせた。

と、先刻から物も云わず、熱心に四辺あたりを見廻したり、深く物思いに沈んだりして、様子

を変えていたお組の源女が、この時物にでも憑かれたような声で、

「おお^{わたし}妾は思い出した。この屋敷に相違ない！ 妾が以前^{まえかた}送られて来て、酒顛童子のよ

うなお爺さんに、恐ろしい目に逢わされた屋敷！ それはここだ、この屋敷だ！ ……こ

の屋敷だとするとあの地獄は——地獄のように恐ろしく、地獄のようにむごたらしく、…

… まぐさの山や底無しの、川の中地の岩^{いわむろ}窟の……その地獄、その地獄は、どちらの方

角だったかしら？ ……もう解^{わか}る！ 直ぐ解る！ ……でもまだ解らない、解らない！

……そこへ妾はやられたんだ！ そこで妾は気絶したんだ！ ……」

云い云い源女は右を指さしたり、左を指さしたりした。

土塀を乗り越越えた二人の武士、それは主水と陣十郎とであった。鳥居峠から駕籠に乗り、藪原から山へかかり、この日この屋敷へ来た二人であった。

彼等二人の主たる目的は、井上嘉門に攫^{さら}われた澄江を、至急に取り返すことにあった。

遅れてももしも澄江の躰に——その貞操に傷でもついたら、取り返しのつかぬことになる。

そこでこの屋敷へ着くや否や、負傷の躰も意に介せず、陣十郎は陣十郎で、その奪還の策を講じ、主水は主水で策を講じたが、これと云つて妙案も浮かんで来ず、こうなつては

仕方がない、嘉門の主屋へ忍び込み、力に訴えて取り返そうと、さてこそ揃って忍び込んだのであった。

忍び込んで見てこの主屋だけでも洵まことに広大であることに、驚かざるを得なかった。

百年二百年経っているであろうと、そう思われるような巨木が轟すくすく々と、主屋の周囲に聳えていて、月の光を全く遮り、四辺あたりを真の闇にしてい、ほんの僅かの光の縞を、木間からこぼしているばかりであった。ところどころに石燈籠が道標みちしるべのように立っていて、それがそのある四辺だけをぼつと明るくしているばかりであった。

主屋の建物はそういう構えの、遙か向こうの中央にあったが、勿論雨戸で鎧われているので、燈火など一筋も漏れて来なかった。

と、拍子木の音がした。

夜廻りが廻って来たらしい。

二人は木立の陰へ隠れた。

拍子木の音は近付いて来た。

と、不意に足を止めたが、

「これ、誰じゃ、そこにいるのは？」

一蹶！

「わッ」

一揮！

寂寥！

「おい、陣十郎切ったのか？」

「いや峯打ちだ。殺してはうるさい」

5

なお二人は先へ進んで行つた。

と、行手から男女らしいものが、話しながら来るけはい氣勢がした。

そこで二人は木陰へかくれた。

男女の声は近寄つて来たが、数間へだてた地点まで来ると、

「其方そなたあちらへ……静かにしておいで。……ちと変だ……何者かが……」

こういう男の声がして、しばらくそれからヒツソリしていたが、やがておちついた歩き方で、歩み寄つて来る氣勢がし、

「これ誰じゃ、そこに居るのは？」と咎める威厳のある声がした。

主水も陣十郎も物云わず、息を殺してじっとしていた。

「賊か、それとも……賊であろう。……身遁してやる、早く立ち去れ」

声の様子でその人物が、武士であることには疑いなかった。

主水の耳へ口を寄せ、陣十郎は囁いた。

「俺がやる。お前は見て居れ……ちと彼奴手強いらしい」

「うむ」と主水は頷いた。

陣十郎はソロツと出た。

既に刀は抜き持っている。

それを暗中で上段に構え、一刀に討ち取ろうと刻み足して進んだ。

「来る気か」と先方の男が云った。

「可哀そうに……あつたら命を……失わぬ先に逃げたがよかろう」

あくまでも悠然とおちついていた。

陣十郎はなお進んだ。

勿論返辞などしなかった。

「そうか」と先方の武士が云った。

「どうでも来る気か、止むを得ぬの。……では来い！」と云って沈黙した。

疾風はやて！ 宛然さながら！ 水品陣十郎！ 二つになれと切り込んだ。

が、春風に靡く柳條！ フワリと身を反わした一瞬間、引き抜いた刀で横へ払った武士

！

陣十郎はあやうく飛び退き、大息を吐き身を固くした。

何たる武士の剣技ぞや！

品位があつてふくらみがあつて、真に大家の業であつた。

（ふ——ん）と陣十郎は感に堪え、また恐ろしくも思ったが、

（ナーニ、こうなりやこつちも必死、必勝の術で「逆ノ車」で……）

見やがれとばかり中段に構え、闇の大地をジリジリと刻み、除々にせり詰め進んで行ったが、例の如くに水の引くように、スーッと刀を左斜めに引き、すぐに柳生の車ノ返シ、瞬間を入れず大下手切り！

が、

鏘然！

太刀音があつて……

美事に払われ引つ外され、続いて叫ぶ武士の聲がした。

「『逆ノ車』！ さては汝おのれ、陣十郎であつたか、水みず品しな陣十郎！ ……拙者は逸見多四郎じゃ！ ……師に刃向こうか、汝悪逆！」

「あッ！ ……しまった！ ……主水逃げろ！」

木間をくぐつて盲目滅法に、逃げ出した陣十郎の後につづき、主水も逃げて闇に没した。

「まあ陣十郎さんに主水さん！」

すぐに女の驚きの聲が、逸見多四郎の背後うしろから聞こえた。

「お妻殿ご存じか？」

「はい。 ……いいえ。 ……それにしても……」

「それにしても、うむ、それにしても、あの恐ろしい悪剣を……『逆ノ車』をどうして破つたか？」

「眩き多四郎は考え込んだ。」

（それにしても）とお妻も考えた。（どうして陣十郎と主水さんが、一緒になんかいたのだらう？）

敵同士の主水と陣十郎が、一緒にいるということが、お妻には不思議でならなかった。

（主水さん、それでは人違いであろうか？）

そうとすれば何でもなかった。

世には同名の異人がある。

人違いであろう、人違いであろう！

そう思うとお妻にはかえって寂しく、やはり今の主水さんが、恋しい主水さんであつてくれて、自分の身近にいてくれる——そうあつて欲しいように思われるのであつた。

恐ろしいは陣十郎の居ることであつた。

（逢つたら妾ア殺されるだろう）

追分宿の乱闘で、殺されようとして追い廻されたことが、悪寒となって思われて来た。

ポンと多四郎は手を拍った。

「解つた！ 闇だからよかつたのだ。……それで『逆ノ車』が破れたのだ。……では昼な

ら？ 昼破るとすると？」

じつと考えに打ち沈んだ。

「ナ——ンだ」とややあつて多四郎は云つた。「ナ——ンだ、そうか、こんなことか！……こんな見易い理屈ことだったのか！……よし、解つた、これで破つた、陣十郎の『逆ノ車』俺においては見事に破つた！」

主屋に招じ入れられたが、嘉門とは未だ逢わなかつた。退屈なので夜の庭の、様子でも見ようとしてお妻をつれて、ブラリと出て来た多四郎であつた。

それが偶然こんなことから、日頃破ろうと苦心していた、「逆ノ車」の悪剣を易々と破ることが出来たのである。

そのコツ法を知つたのである。

(よい事をした、儲け物だった)

そう思わざるを得なかつた。

嘉門が奥の豪奢な部屋で、澄江を前にしネチネチした口調で、この夜この時話していた。「不思議なご縁と申そうか、変わったご見と申そうか、高萩でお逢いしたお前さまと、追分宿でまたお逢いし、とうとう私の部屋まで参られ、こうゆつくりとお話が出来る、妙な

ものでござりますな」

ネチリネチリと云うのであった。

古法眼こほうがんの描いた虎溪三笑、その素晴らしい六枚折りの屏風が無造作に部屋の片隅に、

立てられてある一事をもつてしても、部屋の豪華が知れようではないか。

座には熊の皮が敷きつめられてあり、襖の取手の象嵌などは黄金と青貝とで出来ていた。「それにいたしましたも高萩では、とんだ無礼いたしましたのう。ハツ、ハツ、とんだ無礼を！ ……が、あいつは正直のところ、私の本意ではなかつたので。いかに私が田夫野人でも、何で本気で婦人に対し、あのような所業に及びましようぞ。あれは高萩の猪之松どのの乾児衆のやつた仕事なので。ただ私はゆきがかりで、そいつをご馳走にあずかろうと、心掛けたばかりでございますよ。が、それさえ不所存至極！ そこで平にあやまります。何卒ご用捨下さりませ……さてこれで以前のことは、勘定済みとなりました。次は将来これからのご相談で。……とところでちよつとご相談の前に、申さねばならぬことがありますのでな。……」

ここで嘉門は莨たばこを喫んだ。

持ち重りするような太い長い、銀の煙管きせるを厚い大きい、唇へくわえてパクリと喫すい、厚い大きい唇の間から、モクリモクリと煙を吐いた。

どうしても蝦蟇が空に向かつて、濛氣を吐くとしか思われない。

「何かと云いますに私という人間、一旦やろうと思ひ立つた事は、必ずやり通すということとで！」

うまそうに莨を一喫みすると、そう嘉門はネットリと云った。

さよう、嘉門はネットリと云った。

が、そのネットリとした云いぶりは、尋常一様の云いぶりではなく、馬飼の長、半野蛮人の、獯猛敢為の性質を見せた、ゾツとするような云いぶりなのであった。

「では私今日只今、どんなことをやろうと思つてゐるかというに、澄江様とやらいうお前さまを、よう納得させた上で、私の心に従わせる！……ということでござりますじゃ」

云つて嘉門は肩にかかつてゐる、その長髪をユサリと振り、ペロリと垂れてゐる象のよな眼を、カツと見開いて澄江を見詰めた。

澄江はハ——ツと息を飲んだ。

その澄江はもう先刻さつぎから、観念と覚悟とをしているのであった。

思えば数奇の自分ではある！ ……そう思われてならなかった。

上尾街道で親の敵かたきと逢った。討つて取ろうとしたところ、博労や博徒に誘拐かどわかされた。

そのあげくに馬飼の長の、人身御供に上げられようとした。と敵に助けられた。親の敵の陣十郎に！ ……これだけでも何という、数奇的の事件であろう。しかもその上その親の敵に、親切丁寧にあつかわれ、同棲し旅へまで出た。夫婦ならぬ夫婦ぐらし！ 数奇でなくて何であろう。

追分宿のあの騒動！

義兄あにであり恋人であり、許婚いいなづけである主水様に、瞬間逢い瞬間別れた！

数奇でなくて何であろう！

と、嘉門にとらえられた。

そうして今はこの有様だ！

いよいよ数奇と云わざるを得ない。

(どうなとなれ、どうなろうとままよ)

観念せざるを得ないではないか。

(が、この厭らしい馬飼の長に躰を穢される時節が来たら、舌噛み切つて妾は死ぬ！)
こう決心をしているのであった。

そうしつかり決心している彼女は、外見には蝦蟇に狙われている、胡蝶さながらに憐れに不憫に、むごたらしくさえ見えるけれど、心境は澄み切り安心立命、すがすがしくさえあるのであった。

短い沈黙が二人の間にあつた。

「いかがでござりますな。澄江様」

嘉門はネットリとやり出した。

「この老人の可哀そうな望み、かなえさせては下さりませぬかな。……いやもうこういう老人になると若い奇麗なご婦人などには、金輪際モテませぬ。そこで下等ではござりまするが、金の力で自由まにします。……お見受けしたところ貴女様あなたは、武家の立派なお嬢様で、なかなかもちまして私などの、妾めかけてかけになるような、そんなお方では決してない、ということは解わかつていますじゃ。……それだけに私の身になつてみれば、自分のものに致したいので。……で、お願いいたしますじゃ。……可哀そうな老耄おいぼれた老人を、功德と思つて喜ばせて下されとな。……その代わりお前さまが何を望もうと、金づくのことでありまし

たら、ハイハイ何でも差し上げまする」

またパクリと苺を喫った。

8

「なりませんぬ」と澄江は云った。

先刻からじつと辛棒して、黙って、聞いていた澄江であつたが、この時はじめてハツキリと云った。

「貴郎様あなたのお心に従うこと、決して決してなりませんぬ！」

言葉数は少なかつたが、毅然とした態度冷然とした容貌に、動かぬ心を現わして、相手を圧してそう云った。

「ふうむ」と嘉門は唸り声を上げた。

勿論この女、烈女型で、尋常に口説いて落ちるような、そんな女ではあるまいと、そういうことは推すしていたが、今の返事とその態度とで、それがこっちの想像以上に、しっかりしているということを瞬間看取したからであつた。

がぜん嘉門の様子が変わった。

薄気味の悪い、惨忍な、しかも陰險執拗な、魔物めいた様子に一変した。

それでいて言葉はいよいよ柔かく、

「それでは大変お気の毒ですが、貴女様には変わった所へ、一時おいでを願わねばならず……是非ともおいでを願わねばならず……一度まアそこへ行って来られてから、改めてゆるるご相談——ということに致しましょうのう」

で、また莩をパクリと喫い、濛々と煙を吐き出した。

「何と申してよろしいか、貴女様がこれからおいでになる所、何と申してよろしいか。……どつちみち厭アなところでござる……どんな強情のジャジャ馬でも、一どそこへ叩つ込まれると、生れ変わったように穏しくなります……気の弱いお方は発狂したり、もつと気の弱いお方になると、さつさと自殺するようです。……さようさよう以前のことはあるが、お組の源女とかいう女芸人が、やはり強情でそこへやられたところ、発狂——まあまあそれに似たような状態になりましたつけ……さて、そこで貴女様も、そこへおいでにならないければ……ならないことになりましたようで」

「どこへなと参るでござりましょう」

澄江は冷然とそう云った。

死を覚悟している身であつた。

何も恐れるものはない。

苦痛！ それとて息ある間だ！ 死んでしまえば苦痛はない。

澄江は冷然とし寂然としていた。

嘉門はポンポンと手を拍った。

と、次の間に控えていた、侍女が襖をソロリと開けた。

「権九郎に云つておくれ、送りの女が一人出来た。赤い提燈の用意をしなと」

侍女は頷いて襖をしめた。

「あれ——ツ」という源女の声が、要介と浪之助とを驚かせたのは、それから間もなくのことであつた。

三人はこの時嘉門の主屋の、構えの外を巡りながら、なお逍遙さまよつていたのであつた。

「行きます、おお赤い提燈が！」

指さしながら源女が叫んだ。

極度の恐怖がその声にあつた。

「あそこへあそこへ人を送る火が！ 地獄へ、ねえ、生地獄へ！ ……わたし妾のやられた生地獄へ！ ……おおお誰か今夜もやられる！ ……可哀そうに可哀そうに！ ……そうです妾も赤い提燈に、あんなように道を照らされ、馬へ、裸馬へくりつけられ、そこへやられたのでございます！」

9

「追おう！」

要介が断乎として云った。

「送られる人間を取り返そう！」

「やりましょう！」と浪之助も云った。

夜の暗さをクツキリ抜いて、木立の繁みに隠見して、特に血のような赤い色の、小田原提燈が果実のように揺れて、山の手の方へ行くのが見えた。

三人は後を追った。

が、その一行に近寄って見て、これは迂闊に力で襲っても、勝目すくなく危険だと思つた。

というのは一頭の裸馬に、男か女かわからなかったが、一人の人間をくくりつけ、それへ油単ゆたんを上から冠せた、そういう人と馬とを圍繞いじょうし、十数人の荒くれ男が、鉄砲、弓、槍などを担いで、護衛して歩いているからであつた。

(飛道具には適わない)

三人ながらそう思つた。

で、要介は浪之助に、

「どこまでもこつそり後を尾けて、その行方を確かめよう。そうしていい機会が到来したら、切り散らして犠牲者を奪い取つてやろう」

こう耳元で囁いた。

「それがよろしゅうございます」

浪之助もそう云つた。

澄江を生地獄へ送り出した後の、嘉門の豪華な主家の部屋には、逸見多四郎が端座していた。

想う女を生地獄へ送つた。——そんな気振など微塵もなく、嘉門は機嫌よく愛想笑いを

して、多四郎との閑談にふけていた。

処士とはいつでも所の領主、松平大和守やまとのかみには客分として、丁寧にあつかわれる立派な身分、ことには自分が鼻肩はなかたにしている、高萩の猪之松の剣道の師匠——そういう逸見多四郎であった。傲岸な嘉門も慇懃丁寧に、応待しなければならなかった。

牧馬の話から名所旧蹟の話、諸国の風俗人情の話、そんな話が一渡り済んで、ちよつと話が途絶えた時、何気ない口調で多四郎は云った。

「秩父の郡小川村、逸見様庭の楡の根、むかしはあつたということじゃ……云々と云う昔からの歌が秩父地方でうたわれ居ります。この歌の意味は伝説によれば、源頼義よりよし、その子義家よしえ、奥州攻めの帰るさにおいて、秩父地方に埋めました黄金、それにまつわる歌とのこと、しかるにこの歌の末段にあたり、今は変わって千の馬、五百の馬の馬飼の——云々という、そういう文句がござります由、思うにこれはその黄金が、その素晴らしい馬飼のお手に、保存され居るということであろうと……」

「しばらく」と不意に嘉門は云った。

それから皮肉の笑い方をしたが、

「ははあそれで逸見様には、その黄金を手に入れるべく、当屋敷をお訪ね下されたので？」

「率直に申せばその通り、千、五百の大馬飼は、貴殿以外にはござらぬからな」

「御意で。……が、そうとありますれば、いささかお気の毒に存ぜられまする」

「何故でござるな。それは何故で？」

「なぜと申してそうではござらぬか、そのような莫大な黄金を、私保存いたし居りますれば、決して決して何人にも、お渡しすることではござりませぬ」

「それはもうもう云うまでもない儀、が、拙者といたしましては、そこに少しく別の考えが……」

10

「別の考え？ 何でござるかな？」

「貴殿がたしかにその黄金を、現実に保存され居るなら、何で拙者その貴殿より、その黄金取りましようや。……が、もしも貴殿においても、黄金の在り場所的確に知らず、ひそかに探し居らるるようなら……」

「なるほど、これはごもつとも。そうあるならば貴郎様と私、あなた力を集めて探し出そうと覺し召し、参られたので？」

「さよう、ざつとその通りでござる」

「これは事件が面白くなった。……が、さて何と申し上げてよいやら」

嘉門はここで沈黙してしまった。

妙に息詰まる真劍の気が、二人の間に漂っている。

やがて嘉門がポツリポツリと云った。

「歌にありますその馬飼は、たしかに私にござります。そうして歌にありますように、私の屋敷に領地内に、ある時代にはその黄金、ありましたそれでござります。……その黄金ありましたればこそ、馬鹿らしいほどの繁栄を来たし、今このように広い領地を、持つことが出来て居りますので。そうでなくては馬飼風情、いかにあくせく働きましたところで、とてもとても今日のような。……で私はその黄金を、巧みに利用し財を積んだところの、祖先に対して有難やと、お礼申して居ります次第で」

「とそう云われるお言葉から推せば、今日においてはその黄金、すでにお手にはないご様子……」

「さあそれとてそうとも否とも、ちと私としては申しかねますので……」

「これは奇怪、はなはだ曖昧！」

「へいへい曖昧でござりますとも」

「方角を変えてお尋ねいたす。例の歌の末段に 秣まぐさの山や底無しまぐさの、川の中地の岩窟いわむろにと、こういう文句がござりまするが、そこに大方その黄金、埋没されて居りたるものと、この拙者には思われまするが、そのような境地が領内に……？」

「へいへいたしかにござります」

「しからばそこへご案内を……」

「駄目で！」

「なぜ？」

「命が無い！」

「命が無いとな？」

「生地獄ゆえ！」

「……………」

「アツハツハツ、地獄々々！そこは恐ろしい生地獄！そこへ行ったら命が無い！有つても人間発狂する！アツハツハツ発狂する！……が、今夜も可哀そうに、女が一人送られましたよ。さようさようその生地獄へ！」

こう云うと嘉門は惨忍酷薄、洵女まことの生血を飲み、肉を喰らったといわれている、伝説の大江山の酒顛童子、それさながらの表情をして、ぐっと多四郎を睨むように見た。

さすがの多四郎も妖怪さながらの、嘉門の表情態度に搏たれ、言語ふさがり沈黙した。で、またも息詰まるような気が、部屋を押し人を押しした。

が、ややあつて井上嘉門は、謎のような言葉でこう云った。

「あの黄金はそれ以前に、あの歌にうたわれて居りますように、秩父の郡小川村の、逸見へんみ様のお庭の松の根方に、——即ち貴郎様のお庭の中に、埋没されて居りましたはず。……ひよつとかするとその黄金また逸見様のお庭へ帰り……」

二

「何を馬鹿な」と多四郎は笑った。

「拙者の屋敷にその黄金、今に埋もれて居りますなら、何のわざわざこのようなところへ

……」

「いやいや」と嘉門は云った。

「逸見様は幾軒もござります」

「……………」

「高名で比較的近い所では、尾張にあります逸見三家……」

「おおなるほど逸見三家！」

名古屋に一軒、犬山に一軒、知多に一軒、都合三軒、いずれも親戚関係で、逸見姓を宣とनावる大大尽があり、総称して尾張の逸見三家と云い、特殊の尊称と疑惑とを、世間の人から持たれていた。

金持ちであるから尊敬される！これは当然の事として、疑惑というのは何だろう？

尾張の大商人大金持といえ、花井勘右衛門をはじめとして、九十八軒の清洲きよすこ越衆えしゅう、

その他尾州家からお扶持をつぎあいただく、小坂新左衛門他十二家あつて、それらの人々はいずれも親しく、往来をし交際つぎあつていたが、逸見三家だけは交際せず、三家ばかりで往来し、他の金持は尾張家に対し、何等かの交渉を持っていて、御用達、三家衆、除地衆、御勝手、御用達、十人衆、等々という、名称資格を持っていたが、逸見三家ばかりは尾張家と、何等の交渉も持っていなかった。

これが疑惑される点なのである。

「おおなるほど逸見三家」と、多四郎は云つて眼を見張り、

「逸見三家の家風については、拙者も遙かに承わり居り、不思議な大尽があるものと、疑惑を感じて居りましたが、その逸見三家と埋もれた黄金と、関係ありと仰せられますか
な？」

「あるやらないやら確かのところは、私にも即座には申し上げられませぬが、……さよう即座には申し上げられぬとし、貴郎様におかれてもせっかくのご来訪、何卒長くご逗留下され、ゆるゆるそのことにつきまして、お話しすることにいたしましょう」

嘉門はここでも曖昧に云った。

奥歯に物の挿まった態度、多四郎には少なからず不愉快であったが、押して尋ねても云いそうもないと、そう思ったので後日を期することにした。

赤い提燈で道を照らし、澄江を裸馬にくくり付け、それを護った権九郎達は、無言で山道を進んで行った。

その後を慕って要介達が行った。

二里あまりも来たであろうか。その時突然行手にあたって、同じ赤い色の提燈の火が、点々といくつも見えて来た。

(おや?)と要介たちは不審を打った。

が、権九郎たちの一行は、それが予定されたことかのように、少しも驚かず又動ぜず、その火に向かつてこちらの提燈を、宙にかざして振って見せた。と向こうでも答えて振った。

こうして向こうの火にこちらの火が、十数間足らず接近した時、夜ながら要介たちに行手の光景が、ぼんやりながらも見えて来た。

行手に谷があるらしい。谷には川が流れているらしい。

谷を隔てて岩で出来た、屏風のような絶壁が、垂直に高く聳えていた。

絶壁の頂に月があつて、その光でその絶壁が、肩を銀色に輝かしているのが見えた。

生地獄

1

と、その時まで黙々として、要介たちに従いて来ていた源女が、恐ろしそうな声で魘れるように云った。

「生地獄はそこだ、谷の底だ！　そこへ行つては大変だ！　自殺するか発狂する！　……可哀そうに可哀そうに馬に乗っているお方！　……おおおあの人をお助けしなければ！」
「やろう！」と要介が忍び音ではあるが、烈しい声でそう云った。

「切り散らして犠牲者を助けよう！」

「先生やりましょう！」と浪之助が応じた。

が、その瞬間犠牲者を守護し、裸馬を圍繞して歩いて来た人々——権九郎輩下の者共が、一斉に足を止め振り返り、鉄砲の筒口をこつちへ向けた。

要介たちの方へ差し向けた。

「しまった！　目つけられた！　もう不可ない！」

——要介がそう叫んだ途端、

ド、ド、ド、ド、ド——ツと鉄砲の音が、夜の山谷にこだまして鳴り、バ、バ、バ、バ、バ——ツと筒口から出る、火花が夜の暗さを裂いた。

と、

馬の恐怖した嘶いななき！

見よ、犠牲者をくくりつけたまま、例の裸馬が谷口を目がけ、まっしぐらに馳せて行く

ではないか！

「あッ、あッ、あッ、もう不可ない！ あの人も生地獄へ追いやられた！ 妾わたしのように！

昔の妾のように！」

源女は叫んで地団太を踏んだ。

果敢！ 馬は谷底さして、なだれのように落ちて行つた。

鉄砲は決して要介たちを認め、要介たちを撃ち取ろうとして、発射されたものではないのであつた。

馬を驚かせて犠牲者諸共、谷底へやるために撃つたものなのであつた。

それは空砲に過ぎなかつたのである。

後は寂然！

シ——ンとしていた。

と、権九郎達の一団が、今は馬もなく犠牲者も持たず、手ぶらの姿で赤い提燈を、ただブラブラと宙に振つて、もと来た方へ引つ返す姿が、要介たちの眼に見えた。

木陰にかくれて見送っている、その要介たちの横を通つて、その一団の去つた後は、四あ辺たり寂々寥々としてしまつた。

と、要介は浪之助へ云った。

「とうとう犠牲者を助け損なつたが、これも運命仕方がない。……が、それは仕方がないとして、生地獄の光景を見ようではないか」

「それがよろしゅうございます」

「源女殿もおいでなされ」

「妾は厭でござります」

恐ろしかつた過去のことを、その場へ臨むことによつて、ふたたび強く思い出すことを、恐れるという心持から、そう源女は震えながら云った。

「さようか、では源女殿には、そこにてお待ちなさるがよろしい」

云いすてて要介は浪之助ともども、谷の下口へ足を向けた。

と、先刻現われて、権九郎達の赤提燈に対し、応えるように振られたところの、例の幾個かの赤提燈が、見れば谷の下口の辺りに、建てられてある番小屋らしいものの、その中から又現われて来た。

「誰だ、これ、近寄つてはならぬ！ 近寄ると用捨なく撃ち取るぞ！」
赤提燈の中から声が来た。

鉄砲を向けている姿が見えた。

2

馬が斜面を駈け下る間に、くくられていた綱が切れ、澄江は地上へ振り落とされた。馬と前後して谷の斜面を、底へ向かって転落した。

何と奇怪にも谷の斜面が、柔らかくて滑らかで、ほとんど土とは思われないではないか

!

こうして澄江は微傷びしょうさえ負わず、谷の底へ落ちついた。

と、眼の前を落ちて来る馬の、気の毒な姿が通って行ったが、底へ着くと立ち上り、立ち上ったが恐怖のためであろう、高い嘶をあげながら、前方へ向かって走りつづけた。

月光をうけて銀箔のように輝いて見える川があった。

そう、前方に川があった。

と、その川まで駈けて行った。

馬は川へ飛び込んだ。（泳ぐかな？）

と澄江は思った。

浅いと見えて五歩十歩、二十歩あまり歩いて行つた。

と、どうだろう歩くに従い、馬は次第に小さくなつて行つた。

そうしてやがて歩かなくなつた。

身長せいが大変低くなつて見えた。

と、馬は首を長く延ばし、悲劇を無言で眺めている月に向かつて顔を向けたが、悲しうに幾度か嘶いた。

だんだん身長が低くなつて行く。

やがてとうとう馬の姿が川の面から消えてしまい、漣さざなみも立たてずにどんよりと、流れるともなく流れている、そういう水面みづもには月光ばかりが銀の延板のそれかのように、平らに輝いているばかりであつた。

川巾は随分広かつた。

そうして対岸には屏風のような、切り立つた高い断崖が、険しく長く立っていた。

澄江はゾツと悪寒を感じた。

(どうして馬は沈んだらう?)

もしその川が深かつたら、馬は泳いで行くはずである。

もしその川が浅かったら、馬は歩いて渡るはずである。

それなのに沈んでしまった。

（おお川は底無しなのだ！）

そう、それに相違ない。

水そのものは浅いのであるが、底は泥の堆積で、幾丈となく深いのだ。で、そこへ踏み入ったものは、その泥に吸い込まれ、永久沈んでしまうのだ。

ゾツと澄江は悪寒を感じた。

（川を越しては逃れられない）

澄江はフラフラと立ち上った。

それから自分が転がり落ちて来た、山の斜面を振り仰いで見た。

斜面は洵まことにならからか、一本の木立も、一つの丘も、一つの岩も、何もなかった。

下おりくち口までは高く遠く、容易に達しがたく思われたが、上るには難なく思われた。

澄江は斜面を上り出した。

すぐツルリと足が迂すべり、たちまち谷底まで追い返された。

（おや）と思いつながら又上った。

一間あまり上ったかと思うと、非常に気持よく非常に滑らかに、スルスル谷底へ沁り落ちた。

(まあどうしたというのだろうか?)

澄江には不思議でならなかった。

で、土を取り上げて見た。

それは土ではないようであった。カラカラと乾いて脆くなつてはいたが植物の茎や葉のようであった。

植物の茎や葉が永い年月、風雨霜雪に曝された結果、こまかいこまかい砂のようになったもの！ それのように思われた。

そういう物が斜面を厚く、そうして高く蔽うているのだ。――

で、その上へ人が乗れば、重さに連れてそれが崩れ、どこまでも無限に崩れ崩れて、人を下へ沁り落とす！

(では上って行くことはできない!)

又ゾツと澄江は悪寒を感じた。

3

(ではもう一度験ためして見よう)

こう思つて澄江はまた上り出した。

と、背後から笑う声が出た。

驚いて澄江は振り返つて見た。

いつの間はどこから来たものか、五六人の人間が、数すう間けん離はなれた一所に、一緒に塊かたまりまつて立つていた。

月光の中で見るのであるから、ハッキリしたところは解わからなかつたが、その中には女もい、老人も若者もいるようであつた。

何より澄江を驚かせたのは、その人達が瘦ほろくずせていることで、それはほとんど枯木くものようであり、枯木が人間の形をしてい、それが檻ぼろくず樓くず屑くずを纏まとつてい。——そう云つたように瘦ほろくずせていることであつた。

そう、衣裳は纏まとつていた。が、その衣裳は形のないまでに、千切れ破れているのである。物の書ほんで見た鬼界ヶ島の俊しゅん寛かん！ それさながらの人間が、そこに群むられているのである。

「駄目だよ、娘っ子、上れやアしねえ。いくら上つても上れやしねえ」と、その中の一人がカサカサに乾いた、小さな、力の弱い、しめ殺されるような、不快な声でそう云った。
「まぐさ稗の山だ、なア娘っ子、お前が一所懸命上ろうとしているそいつ、そいつア稗の山なんだ。稗の山の斜面なんだ。……乗れば迂る、足をかければ迂る。二間と上つた者アねえ。無駄だから止めにしな」

「アツハツハツ」

「ヒツヒツヒツ」

「フツフツフツ」

「ヘツヘツヘツ」

みんなが揃つて笑い出した。

嘲つたような、絶望したような、陰険そうな、気の毒がったような、気味の悪い厭アな笑声であつた。

澄江は地獄の亡者に逢つた！——とそんなような思いに等しい、恐怖と不気味とを感じながらも、この境地には自分一人だけしか、居ないものと今まで思っていたのに、他にも人のいることを知り、この点何と云つても心嬉しく、急いでそっちへ小走つて行つた。

「どういふお方々かは存じませぬが、妾は井上嘉門という……」

「解っているよ解っているよ」と、その中の一人の老人が——片眼つぶれている老人が、澄江にみんな話させようとせす、

「俺らもそうなんだ。恐ろしい主人に、井上嘉門殿に、いやいやいや、殿じゃアねえ、鬼だ魔物だ、その魔物の嘉門めに、この生地獄へ放り込まれた、生き返る望みのねえ亡者なのさ。お前さんだつてそうだろうとも、嘉門めにここへ落とされたんだろうとも。……見りやア綺麗な娘つ子だ、どうしてここへ落とされたか、その理由も大概わかる。……嘉門の云うことを聞かなかつたんだらうよ。……以前にもそんな女があつた。……源女とかいう女だつた。……」

「お爺さん」と澄江は云つて、繼るような気持で訊ねて見た。

「ここはどこなのでございますか？　どういふ所なのでございますか？」

「処刑場だ、人捨場だ！　嘉門の云い付けに背いた者や、廃人になつて役に立たなくなつた者を、生きながら葬る墓場でもある」

「恐ろしい所なのでございますねえ」

「一緒においで、従つておいで、ここがどんなに恐ろしい所だかを、例をあげて知らせて

あげよう」

片眼の老人は歩き出した。

と、その余の亡者餓鬼——亡者餓鬼のような人間たちも、だるそうに、仆れそうに、あえぎあえぎ、その後から従いて来た。

蒼澄んで見える月光の中に、そういう人達が歩いて行く姿は、全く地獄変相図であつたと、一本の木の下の下に来た。

一人の若者がブラ下つていた。

4

首をくくつて死んでいたのであつた。

片眼の老人は説明した。

「二十日ほど前に来たお客さんなのさ。嘉門の可愛がつているお小間使いと、ちちくり合つたのが逆鱗にふれて、ここへぶちこまれた若造なのだ。女が恋しいの逃げ出したいのと、狂人のように騒いでいたが、とうてい逃げられないと見当をつけると、野郎にわかにおとなしくなつてしまった。と、今朝がた首を釣つてしまった。……首を釣る奴、川へ沈む奴、

五日に一人十日に一人、ちつとも不思議なく出来るってわけき。……だから底無し川の中には、幾百人とない男や女が、沈んでいるというわけだ。……そこを見な、その岩の裾を！ 白骨が積んであるじゃアねえか。首を釣った奴や舌を嚙んで死んだそういう奴らの骨の束だ」

見ればなるほど向こうに見える、大岩の裾に月光に照らされ、ほの白い物の堆積があつた。

「お爺さん」と澄江は震えながら云つた。

「何を食べて生きていますか？」

「馬の肉だ、死んだ馬の。……時々それを投げてくれるのだ。谷の下口から上の番人が」

「死んだ馬の肉を？ ……それが食物？」

「米もなけりやア麦もねえ。野菜もなけりやア香の物もねえ。……水といえばドロんと濁つた、泥のようなその川の水だ。……だから長く生きられねえ。一月か二月で死んでしまふ。……もつとも中にやアそいつに慣れて、三年五年と生きてる奴がある。……俺なんかはその一人だよ。……」

「皆様どこにいますか？ どこに住んでいるのですか？」

「岩窟いわむちろの中だ岩窟のな。……向こうにある、行ってみよう」

その老人が先に立ち、澄江たちは先へ進んだ。

人間の骨や馬の骨や——それらしいものが木の根や岩の裾に、灰白く散乱しているのが見えた。

と、行手に月光に照らされ、丘のような物形が見えた。

やはりそれは丘であった。

岩と土と苔と權木、そんなもので出来ている小丘であって、人間の身長たけの二倍ほどの間口と、長い奥行とを持つていた。

その前まで辿りついた時、丘の正面の入口から——つまりその丘が岩窟なのであり、正面に入口が出来ているのであったが、その入口から骸骨の群が——骸骨のような痩せた男や女、老人や老婆、男の子や女の子が、ムクムクと泡のように現われ出た。

そうして口々に喚き出した。

「また客が来た」

「俺らの仲間か」

「何か食物を持って来たかしら？」

「着物を剥げ！ ひつぺがしてしまえ！」

「若い女だ」

「綺麗な女だ」

「すぐ汚くなるだろう」

「ナーニ半月は経たねえうちに首をくくつてくたばるだろう」

すると片眼の老人が、叱るように大声をあげた。

「うるせえ、野郎共、しずかにしろ！ ……今度のお客さんはこれ迄のとは、どうやら少
オし違うようだ。身体へさわつちやア不可^{いけ}ねえぞ！」

5

片眼の老人は権威者と見える。彼らの仲間の権威者と見える。そう一言云っただけで、
彼らの騒動は静まった。

「さあさあ入って見るがいい。家の中へ入って見るがいい」

こう云って老人は澄江を連れて、岩窟の中へ入って行った。

入って真つ先に驚いたのは、何とも云われない悪臭であった。

不浄の匂い、獣皮の匂い、腐肉の匂い、檻樓ぼろの匂い——、いろいろの悪臭が集まって、一つになった得もいわれない悪臭、それがムツと鼻へ来て、澄江は嘔吐を催そうとした。岩窟の中は寒かった。

凍こじえそうなほどにも寒かった。

暗く、低く、狭くもあった。

ところどころに火が燃えていた。

住人が焚火をしているのであった。その周囲に集まったり、岩壁の裾に寝たりして、意外にたくさん人間がいた。

この時二三人の者が嘎しわがれた声で、鼻歌をうたうのが聞こえてきた。

秩父の郡小川村

逸見様庭の松の根

むかしはあったということじゃ

いまは変わって千の馬

五百の馬の馬飼の

木曾の馬主山主の

山の奥所も遙かなる

秣の山や底なしの

川の中地の岩窟の

御厨子おずしに籠りあるという

移り変わるがならわしじや

命はあれど形はなく

形は本来地水火じや

三所に移り元に帰し

命はあれど形はない

それはこういう歌であった。

「お爺さん」と澄江は云った。

「あの歌、何でございますの？」

「誰も彼もうたう歌なのじや、……この辺りではちつとも珍らしくない。……所在ないからうたうのさ……ずっと昔からある歌で、意味もなんにもないのだろうよ」

「この岩窟深いのでしょうか？」

「深いそうだ、深いそうだ。が誰もが行ったものはない。行ったものがないということだ。……わしだけは相当奥まで行った。だが途中で引返してしまった。……恐ろしいと云おうか凄いと云おうか、あらたかと云おうか何と云おうか、どうにも変な気持がして、とうとう引返してしまったのさ。……人柱が立っているんだからなア……骸骨なんだ、本当の骸骨！ ……そっくり原形を保っている奴だ。そいつが岸壁の右にも左にも、ズラリと並んでいやがるじゃアないか」

悪人還元

1

陣十郎は黙々として、山路に向かつて歩いていった。

後から主水が従いて行つたが、これも黙々として物を云わなかった。

嘉門の大屋敷の構内から出、あてなしに歩いて行くのであった。

どっちへ向かつて歩いているのか、陣十郎には解らなかつた。

師匠の逸見多四郎へんみによつて「逆ノ車」が破られたことそのことばかりを考えていた。

月はあつたが山路には巨木、……大木老木權木類が、空を被い四辺あたりを暗め、月光を遮っているがために、二人の姿は外方よそから見ては、ほとんど見ることが出来なかつた。

時もかなり経つていた。

(逸見先生があのような所に、どうしてお居でなされたのだろうか?)

このことも気にはかかつていたが、それより必勝不敗の術と、自信していた自己の創始の「逆ノ車」を破られた——このことばかりが不安にも恐ろしくも、情無くも思われるのであつた。

まだ破門をされない前に、多四郎の道場で多四郎を相手に、数回「逆ノ車」をもって、立合つたことがあつたのであり、そのつど陣十郎が勝ちを取るか、でなかつたら相打ちとなつた!

それだのに今夜という今夜に限り、物の見事にひつ外されてしまった。

(あの時先生に打つ気さえあつて、一步踏み込んで切られたら、俺は真ツ二つにされたはずだ)

(「逆ノ車」を破られては、俺に勝目はほとんどない。破つた先生がそれからそれと、その手を人々に伝えたら、俺は手も足も出なくなる)

これが彼には恐ろしいのであった。

(それともあの時俺の腕が、いつも鈍っていたがために「逆ノ車」は使ったが、使い方が精妙でなく、それで一時的に外されたのだろうか？ もしそうならまだ安心だ)

(では……) と陣十郎は惨忍に思った。

(誰かを、どいつかを、「逆ノ車」で、充分練って用意して、切って切れたら！ 切って切れたら！)

自信がつく！

そう思った。

(よ——し、どいつかを切ってやろう？)

(誰を?) と思った時主水のこと、瞬間脳裏に閃いた。

(うむ、こいつを切ってやろう！)

悪人の本性が甦ったのであった。

(思ってみれば主水という奴、危険至極の道連れだった。俺を敵と狙う奴だった。そうしていつかはこいつのために、俺は討たれるはずだった。……討たれてなろうか、何を馬鹿な！ ……俺も何という男だったろう、いずれこの男に討たれてやろう——などとそんな

ことを思っていたとは。……それに人心は変わるものだ。俺の心が変わるように。……で、主水め心が変わり、俺の寝息をうかがって、寝首搔かないものでもない。……よ——し、この場で討ち果し、災の根を断つてやろう)

グルリと陣十郎は振り返った。

「主水、おい、しぎさわ 嶋澤主水！」

「何だ？」と主水が足を止めた。

「この暗中でもう一度『逆ノ車』を使って見せてやろう」

2

「それには及ばぬよ」と主水は云った。

心に計画ある時には自ずと五音に現われるもので、陣十郎の言葉の中に、いつも 平時とはちが 異う不吉の響きが、籠っているがためであった。

それが恐ろしく感じられたためで。……

陣十郎はくどく云った。

「昼と夜とは自ずと異う。暗中での『逆ノ車』……使つて見せるから刀を抜け」

（使つて見せる、教えてやると偽つて充分用意をさせ、「逆ノ車」にひっかけ、後腹病まぬよう殺してしまおう）

これが陣十郎の本心であつた。

「なるほど」と主水は思わず云つた。

「昼と夜とは自ずと異う。暗中での『逆ノ車』……なるほど、こいつ教わつた方がいいな」

「いいともさあ、刀を抜きな」

云つて陣十郎は先に抜いた。

「よし。……抜いた。……さあ構えた」

主水もそう云つてその通りにした。

二人ながら拔身を構え、暗中に相手と向かい合つた。

「主水、充分用心しろよ。……試合などとは思ふなよ。……俺を父親の敵かたきと思ひ——事実

それに相違ないし……その敵を今討つのだと、こう思つて真劍にかかつて来い」

「うむ。よし。そのつもりで行こう」

「俺もお前を返り討ちにすると——こう思つてかかつて行くつもりだ」

「うむ、そのつもりでかかつて来てくれ」

「暗中での『逆ノ車』……ダ——ツとお前の左胸へ、事実入るかもしれないぞよ」

「……………」

「暗中だからな。……どうなるかわからぬ……」

「……………」

「本当にお前を切るかもわからぬ」

「……………」

「暗中だからな……よく見えぬからな」

「……………」

「とすると返り討ちだ。……返り討ちになつても怨むなよ。参るぞ——ツ」と忍音ではあったが、殺す気でかけた鋭い声！それが主水の耳を打った。

（あぶない！）と瞬間主水は思った。

（おかしいぞ！いつもとは違う！……本当に切る気ではないだろうか？）

主水は自ずと一所懸命になった。

刀を中段にピッタリと構え、圍を通して相手を睨んだ。

暗中ながら相手の姿が、黒く凄まじく立っているのが見え、これも中段に構えている刀

が、ボ——ツと薄白く感じられた。

その薄白い刀身ばかりに、主水の眼はひきつけられた。

間！

例によつて息詰まるような、命の縮まる間が経った。

と、刀身が水の引くように、左斜めにス——ツと引かれた。

フラ——ツと主水は前へ出た。

瞬間、刀が小さく返った。

「ハツ」

途端に……

「カ——ツ！」という、雷霆さながらの掛声が——渾身の力を集めた声が、どこからともなく聞こえてきた。

「あッ」と主水は膝を曲げ、グタ——ツとばかりに地に坐わり、

「うむ」と陣十郎はよろめいて、二三歩タジタジと後へ下った。

そうして次の瞬間には、闇の木立を潜り抜け、一散に麓の方へ走っていた。

声をかけたのは要介であった。

生地獄の光景を見ようとして、谷の下口まで行きかけると、番人によって遮られ、しかも鉄砲を向けられた。

飛道具には敵かなわない。

そこで避けて引つ返した。

一里あまり来た時であった。何とも云われない殺気刀気、そういうものが感じられた。

(何者かが何者かを殺そうとしている)

名人には別の感覚がある。

賭博に才のあるその道の名人——そういう名人には伏せた壺を通して、中の賽コロの目がわかる。

剣道の名人には自己に迫る殺気、そういうものなど当然わかり、あえて自己一身に迫るでなくとも、付近で行なわれる殺戮、殺傷、そういうものも感じられる。

それを要介は感じたのであった。

「切る奴を挫き、切られる奴を救おう」

こう要介は瞬間に思った。

思ったと同時に反射運動的に、

「カ——ッ！」と声をかけたのであった。

と、十数間のかなたから、木を潜って逃げて行く、葉擦れの音が聞こえてきた。

(逃げたな)と要介は直ぐに思った。

「セ、先生エ——ッ、ド、どうなされましたア——ッ」

主水が掛声に腰を挫かれ、地へベタベタと坐つたと同じく、これも掛声に腰を挫かれ、要介の背後の地へ坐つた、杉浪之助が悲鳴をあげた。

「杉氏か、何という態さまだ！」

「ナ、何という、ザ、態だと、セ、先生には、オ、仰せられても……」

「アツハハハハ、立ちな立ちな」

「恐ろしい目に逢いました」

云い云い浪之助は立ち上つた。

「一体どうしたのでございますか？」

「ナ——ニ、邪気を払ったままでさ」

「ははあ邪気を？ ……が、邪気とは？」

「まあよろしい、いずれ話そう……ともかくも邪気は払ってやった。……しばらくじっとしているがいい」

——で、立ったままじっとしていた。

間もなく麓の方へ走り下る、人の足音が聞こえてきた。

「ははあもう一人も逃げて行ったな」

「先生何です、逃げて行ったとは？」

「一人が一人を殺そうとしていたのだ。……それをわしが挫いてやったのだ。……殺そうとした奴が先に逃げ、殺されかけていた人間が、つづいて今逃げて行ったのさ」

「こんな暗中でそんなことが、先生におわかりになりますので？」

「活眼活耳さえ持つて居れば、暗中所であろうと、睡眠中であろうと、そういうことはわかるものだ」

主水は夢中で走っていた。

恐怖と不安と一種の怒りとで、彼の心はうわずっていた。

彼にもう一段沈着があつて、自分の危難を救つてくれたところの、恐ろしい掛声の主を尋ね、逢うことが出来たら自分と縁ある、侠劍の主人秋山要介と邂逅することが出来たのに！

4

が、しかし主水にとつては、そんな余裕はなかつたのであつた。

(陣十郎め、心が変わった。たしかに悪人に還元した。俺を殺そうとしたらしい。でなかつたらあの呼吸——あの殺伐の気は出ぬはずじゃ！……それにしても力——ツと鋭い気合が、あの時かかつて俺の命を、瞬間の間に救つてくれたが、一体誰が掛けたのであろう？)

走りながらもそう思った。

(どっちみち俺は陣十郎とは、もう一緒には住みがない。……では馬大尽井上嘉門の、賓客部屋へも帰れない。……どうしたらよからう？ どうしたらよからう？)

ひた走りながらそう思った。

(力——ツと掛かつたあの気合！……尋常の人間の掛けた気合と、全然別の恐ろしい気

合だ！ ……俺は命が縮まるかと思つた)

こう思いながら無二無三に、麓をさして陣十郎も、走り走り走っていた。

(が俺は「逆ノ車」を、これで再度やり損なつた訳だ！ 再度の失敗！ 再度の失敗！ ……う——む再度の「逆ノ車」の失敗！)

これは洵まことに彼にとつては、致命的の打撃と云わざるを得なく、そうして、事実彼にとつて、再度の致命的の打撃なのであつた。こうなつてはヤブレカブレ、どいつであろうと誰であろうと、かもうものか切つて切つて、……この鬱忿おつとを晴らしてやろう)
ひた走り、ひた走つた。

偽善の巢窟であるところの、井上嘉門おつとの領地内が、攪乱されたのはこの夜であつた。
乳飲児を抱いた若い女が、放蕩の良人おつとを探し出そうとして、深夜に領地内を彷徨さまよつてい
る。

横を魔のように通る者があつた。

「わ——ッ」と女は悲鳴をあげた。

もう女は斃れていた。

飼犬がどこかへ行つてしまつた。それを目付けようと老いた農夫が、杖をつきながら通つていた。

「クロよ、クロよ、おいで、おいで」

こう云いながら通つていた。

その横をスルスルと通る者があつた。

一閃！

刀光！

「わ、わ、わ、わ、わ——ッ」

老農夫は斃れ動かなくなつた。

向こうでも切られこつちでも切られた。

人々は戸外へ飛び出した。

賭場荒れ

嘉門は決して人格者ではなく、又勝れた施政家でもなく、ただ家長という位置にあり、伝統的にその位置を利用し、压制し専政し、威圧ばかりしていた人物であった。

で、隷属していた人々は、永い間に不平と不満を、ひそかに蔵していたのであった。そういう人々が侵入者によって、この境地が攪乱された、その機に乗じ爆発した。向こうに一団、こっちに一団、露路に一団、空地に一団、林の中に一組、森の中に一組、到る所に集まって、議論し撲り合いし取っ組み合いした。

どうして、誰が、何のために、どういう騒動を起こしたのか、そういう真相を確かめようともせず、漠然とした恐怖、漠然とした憤怒、漠然とした焦燥に狩り立てられ、同派は組んで異端を襲い、同党は一致して異党を攻め、罵り、要求し、喧騒し合った。

「生地獄の人達を救い出せ！」

「ワ——ツ」と数十人が鬨の声をあげて、山の手の方へ押して行った。

「嘉門様にこの地から出て貰おう！」

「ワ——ツ」と数十人が屋敷を目掛け、無二無三に走って行った。

「人使いが荒すぎる」

「役にも立たないお客さんなどを、泊めて置くのが間違っている！」

「客人たちを追つ払え！」

「ワ——ッ」と大勢が一つに集まり、その客人の泊まっている家々へ、押し寄せて行つて騒ぎ立てた。

悲鳴！ 呻き声！ 泣き声！ 怒声！

客人達も狼狽して、家々を出て群集にまじつた。

秋山要介も浪之助も、源女も主水もその中にいた。

嘉門も狼狽し恐怖したらしい。

玄関に立つて途方にくれていた。

そこへ多四郎が現われた。

「逸見様へんみ何といたしましょう？」

「とり静める方法ござりますかな？」

「さあこう人心たかぶが充つていましては……」

「一時避けたがようござろう？」

お妻や東馬も怯えたように、その側そばに立つて震えていた。

竹法螺が鳴り陣鐘が鳴り、やがて鉄砲の音さえした。

閉ざされた大門が破られそうになった。

嘉門と多四郎とお妻と東馬、四人を乗せた駕籠を守り、十数人の嘉門の家の子郎党が、騒乱の領内から裏山づたいに、福島の方へ走り出したのは、それから間もなくのことであつた。

その翌日の午後となつた。

林蔵の乾兒こぶん藤作は、フラリと自分の賭場を出て、猪之松の賭場の方へ足を向けた。

猪之松の賭場は上ノ段にあつて、この夜客人で一杯であつた。

2

藤作は酔つていた。

そうして彼は上尾街道で、澄江を危難から救おうとした時、猪之松の乾兒の八五郎たちのために、叩きのめされたことを忘れなかつた。

いつか怨みを返してやろう——こういうことを考えていた。

さて福島へやつて来た。

猪之松一家が上ノ段で、盛大に賭場をひらいていた。

「諸国の立派なお貸元衆が、ここには集まっているのだから、猪之松の方から手を出したら別だが、こつちから手を出しちやアならねえぞ」

親分林蔵から戒められてはいたが、猪之松の賭場には八五郎もいる、こいつどうしたつてトツチメなけりやアと、酔いも手伝つて乾兒の藤作、猪之松の賭場へ出かけたのであった。

内へ入つて懷手をし、客人達の背後に突立ち、藤作は四辺あたりを睨み廻した。

板敷の上へ長蘆を敷き——これを中にして客人達がズラリと並んで控えていた。猪之松の姿は見えなかつたが、代貸元として一の乾兒、門峰吉が駒箱を控え、銀ごしらえの長脇差を引きつけ、正面の位置に坐つていた。

中盆——即ち壺皿を振る奴、それが目差す八五郎であつたが、晒の下帯一筋だけの、素晴しく元氣のいい恰好で、盆の世話を焼いていた。

勝ちつづけた客人の膝の前には、駒が山のように積まれてあり、こいつはニコニコ笑つている。

馬持、山持、土地の大尽、どれを見ても客は立派なもので、いかがわしい手合などは一人もいなかった。

藤作は自分で張ろうとはせず、何か因縁をつけてやろうと、いつまでも突立って眺めていた。

その藤作が入って来た時から（厭な野郎が舞い込みやアがった）

と、峰吉も八五郎も思ったが、まさか帰れとも云いかねて（障るな触れるな、そつとして置け）

こう考えて眼まぜで知らせ合い、声もかけず勝負をつづけて行った。

と、不意に藤作は怒鳴った。

「勝負待った、イカサマあ不可^{いけ}ねえ！」

同時に飛び出し盆座を掴むと、パーツとばかりにひっぺがした。

「野郎！」と飛び上ったは八五郎。

「賭場荒らしだ——ツ」と客人たちは、総立ちになって右往左往した。

「イカサマとは何だ、この野郎！」

やにわに八五郎は飛びかかった。

その横ッ面をポカリと一つ、藤作は見事にくらわせたが、

「イカサマだ——ッ、イカサマだ——ッ！……高萩の猪之の賭場の壺振、八五郎はイカ

サマをして居りやす！……お客人衆、イカサマだ——ッ」と叫んだ。

「藤作！」と腹に据えかねたように、怒声をあげると、門峰吉、長脇差をひっ掴み、立ち上るとツカツカと前へ出た。

「見りやア手前は赤尾の藤作、まんざら知らねえ顔でもねえ。事を決して荒立てたくはねえが、高萩一家が盆割の場所で、イカサマと云われちゃア、どうにも我慢が出来にくい。

さあ云え云えどこがイカサマだ！」

「何を云やがる、イカサマだ——ッ、賽もイカサマなら盆もイカサマ、高萩一家は、イカサマだ——ッ」

こう藤作は叫んだものの、実はイカサマを発見して、それであばれ出したというのではなく、ただ何かしらあばれてやろう、あばれて八五郎をとちめてやろうと、そう思つて仕掛けた賭場荒らしだったので、そう峰吉に突つ込まれては、イカサマの証拠をあげるこ

となど、勿論することは出来ないものであった。

イカサマだ——、イカサマだ——、とただ怒鳴った。

「野郎」と峰吉はいよいよ怒り、

「さては野郎賭場を荒らし、賭場銭さらいに来やがったな！」

ここで嘲笑い毒吐いた。

「赤尾の林蔵は若いに似合わず、万事に行届きいい親分だと、仲間内で評判がいいと聞いたが、乾兒へロクロク小使さえくれず、懐ふところ中さみしくしていると見える。乾兒が場銭をさらいに来たわ！……汝うぬらに賭場を荒らされるような、高萩一家と知っているか！……

……さあみんなこの野郎を、袋叩きにして追い返せ！」

声に応じて八五郎はじめ、高萩身内の乾兒五六人、ムラムラと寄り藤作を囲み、撲り蹴り引きずり廻した。

「殺せ殺せさあ殺せ！ 骨は親分が拾ってくれる！ 殺せ殺せさあ殺せ！」

藤作は大の字に仆れたまま、多勢かなに一人力では敵わず、ただ声ばかりで威張っていた。そいつを高萩の乾兒達は、戸外おもてへ引き出し抛り出した。

「ナニ藤作が猪之の賭場で、間違いを起こして袋叩きにされたと」

料理屋の奥で酒を飲んでいた、赤尾の林蔵はこれを聞くと、——乾兒の注進でこれを聞くと、長脇差をひつ掴み、

「こうしちやいらねえ、みんな来い！」

取巻いていた乾兒を連れ、自分の賭場の方へ走って行った。

4

高萩の猪之松も料理屋の座敷で、四五人の乾兒たちと酒を飲んでいたが、乾兒の注進でこの事件を知ると、顔の色を変えてしまった。

「云うことに事を欠いて、イカサマがあると云われちやア、袋叩きにもしただろうさ。…
…が、相手が悪かった。日頃から怨みの重なっている、赤尾の林蔵の身内だからなア。…
…こいつアただではおさまるまい。…ともかくも旅籠やどへ引き上げろ」

そこで旅籠はたしへ帰って来た。

林蔵も一旦賭場へ行き、負傷をしている藤作へ、すぐに応急の手あてを加え、板で吊らせて旅籠へ運び、自分も旅籠へ帰って来た。

「藤作のやり方が悪かったにしても、場錢をさらいに来やがったと、こう云われては腹に据えかねる……そうでなくてさえ怨みの重なる、高萩一家の奴やつばら原だ、この際一気に片づけてしまえ！」

なぐり込みの準備をやり出した。

という知らせが猪之松方へ行つた。

「もうこうなつては仕方がない、こつちからもなぐり込みをかけてやれ」

竹槍、長脇差、鉄砲まで集め、高萩一家も準備をはじめた。

驚いたのは他の貸元連で、小金井の半助、江尻の和助、かじかざわ鰻沢の藤兵衛、三保ノ松の

源蔵、その他の貸元ほとんど一同、一つ旅籠へ集まつて、なかなおり仲裁の策を相談した。

その結果小金井の半助が、猪之松方へ出かけて行き、そうして鰻沢の藤兵衛が、林蔵の方へ出かけて行き、事を分けて話すことになった。

「赤尾の身内の藤作どんとやらが、酒に酔つての悪てんごう、あんたの賭場にイカサマがあると、そう云われちゃア高萩のにしても、さぞ腹が立つではありましようが、日和ひよりも続き馬市は繁昌、おかげでわしらの賭場も盛り、芽出度い芽出度いと云つて居る際に、赤尾と出入りが起きようものなら、馬市もメチャメチャ諸人方は、どれほど迷惑するかしれね

え。その馬市も明日一日だけ。……そこで出来ねえ我慢をして、ここはわし等の顔を立て、穩便に済まして貰いたいが」と、こう半助が猪之松に話すと、又藤兵衛は林蔵に対し、「藤作どんが酔ったまぎれの、賭場荒しめいたてんごうも、景気に連れての振舞いでしようよ、そいつを高萩の身内衆に、場錢さらいにやって来たかと、悪態されたでは赤尾のとしては、黙っていることは出来すめえが、馬市も明日一日、どうか穩便に済ませたいもので。出入りとなると諸商人はじめ宿の者一統が難渋するので」

こう云つて納めようとした。

林蔵も猪之松も頑迷ではなかった。こう云われるとそれを押し切つて、私闘をすることは出来なかつた。

「ではお任せいたしましょう」と云つた。

しかし林蔵は考えた。

(いづれ俺と猪之松とは、将来交際つきあえる関係なかではない。そのうち必ず命を賭しての、出入り果し合いをすることとなろう。一日延ばせば一日延ばしただけ、双方嫌な目をするばかりだ。……この機会に勝負をつけてしまおう。……諸人に迷惑さえかけなかつたら、何をやってもいいわけだ)

そこで彼は果し状を認め、こつそり猪之松へ持たせてやった。

—— 諸人はかかわりなく二人だけで、今夜宿外れの黒川渡くろかわどの野原で、勝負しようという果し状であつた。

「承知した」という返事が来た。

5

黒川渡は宿から半里ほど距てた、樹木の茂つた箇所であり、人家などはほとんどなく、ただ川の岸に渡し守の小屋が、一軒立っているばかりであり、そこを渡つて向こう岸へ行き、そこから西野郷へは行くのであつた。

林蔵は渡し守の小屋まで来た。

「爺とつつあん船を出してくんな」

「おや、これは親分さんで、夜分渡し船を出しますのは、堅い法度でございませうが……」
「と云うことは知っているが……」

「実はたつた今もお渡ししましたんで。法度は法度、拔道は拔道、ハイハイお渡しいたしますとも」

爺じいさんは船を出し、林蔵を乗せて向こう岸へついた。

「もう一人俺のような人間が、渡りてえと云って来るだろうから、そうしたら文句無く渡してやってくれ」

「高萩の親分さんじゃアございませんなかな」

「こりやア驚いた、どうして知ってる？」

「たった今お渡りになりました、同じようなことを仰おっしや有ありましたので」

「さすがは猪之松、先へ渡ったか、こいつはどうも恐れ入った。……じゃ爺とっつあんこうしてくんな。俺か猪之松かどっちか一人、間もなく宿の方へ帰るから、向こう岸へ帰らずに船をとめて、ここの岸で待っていてくんな」

「へい、よろしゅうございます……が、お一人だけお帰りになるので？」

「そうさ、一人だけ帰るのよ。もう一人は遠い旅へ出るんだ。……行って帰らぬ旅ってやつへな」

云いすてて林蔵は先へ進んだ。

と、雑木の林の中から、

「赤尾のか、待っていた」という、猪之松の声が聞こえてきた。

「高萩のか、遅れて悪かった」

「俺もいまし方来たばかりよ」

木洩れの月光の明るい所で、二人は顔を向かい合わせた。

「さて高萩の」と林蔵は云った。

「三度目の決闘だ、今度こそかたをつけようぜ」

「うん、俺もそのつもりだ。……最初は上尾の街道で、二度目は追分の宿外れの野原で、

三度目はこの黒川渡で……」

「今度こそかたがつきそうだ」

「三度目の定の目じょうめでなあ」

「俺が死んだらオイ高萩の、俺の縄張俺の乾兒、お前みんな悉皆世話を見てくれ」

「心得た、きつと見る。その代わり俺が死んだ時には……」

「俺が悉皆みてやろう」

「心残りはねえと云うものだ」

「もつれにもつれた二人の仲が、今夜こそスツパリとかたがつく、こう思うと気持がいい

や」

「これまでは四辺あたりに人がいて、勝負するにもこだわりがあつたが、今夜こそ本当に二人だけだ、思う存分切り合おうぜ」

「じゃアそろそろはじめようか」

「やろう、行くぜ、高萩猪之松！」

「さあ抜いた、林蔵来い！」

甲源一刀流と新影流！ 勢力伯仲の二人の博徒！

構えは同じ中段に中段！

逸見多四郎と秋山要介と、当代一流の劍豪を、師匠に取つて劍道を、正規に学んだ二人であつた。

位い取りから呼吸いきづかいから、正しく鋭く隙がない。

が、若いだけに赤尾の林蔵、やや気をいらち一氣に勝負と、相手の刀磨り上げ気味に、ジリジリと進み躍り込もうとした途端、

「む——」と呻く人間の声が、どこからともなく聞こえてきた。

1

(はてな?)と林蔵は不審を打った。

(二人の他に人はいないと思つたのに、人の呻き声が聞こえるとは)

こう注意が外れたので、躰の構えも自ずと崩れた。

そこを狙つて猪之松が、疾風迅雷、胴へ斬り込んだ。

「どっこい!」と喚くと林蔵は、一髪の間^{ひげ}に飛退いて、姿勢を整え構えを正した。もう寸分の隙もない。

二人は互いに呼吸を計り、その間^{あいだ}隔を一間とへだて、睨み合つて動かなかつた。

と、又も呻き声が聞こえた。

(おや?)と不審を打つたのは、今度は高萩の猪之松で、これも注意が外れたために、自ずと構えに隙が出来た。

(得たり!)とばかり得意の諸手突で、林蔵は征矢^{そや}のように突進した。

はじめて鏘然と太刀音がしたが、これは猪之松が林蔵の刀を、左に払つて右へ反^{かわ}したからで、太刀音のした次の瞬間には、二人の位置が少し移つたばかりで、構えは依然として

中段と中段、もう静まり返っていた。

それにしても呻き声はどこから来るのであろう？

二人から数間離れた位置に、藪と灌木とに覆われて、一個の大岩がころがっていたが、その陰に一人の武士が仆れてい、その武士から呻き声は来るのであった。

蒼い月光に照らされて、乱れた髪、はだかった衣裳、傷付いた手足のその武士が、水みずし品陣十郎だということが見てとられた。

嘉門の領地の動乱から、命からがら遁れ出て、ようやくここまで歩いて来たところ、手足の負傷、心の疲労から、昏倒してしまった彼であった。

岩のむこうで林蔵と猪之松とが、刀を交し戦っているので、目つかっては一大事、声を立てては不可いけないと思いつながら、つい呻き声を上げる彼でもあった。

嘉門の領地から遁れ出たものは、相当おびただ夥しい数と見え、この一角から遙か離れた、巢山すやまや明山あきやまの中腹を、福島の方へ行くらしい、たいまつたいまつの火が点々と見えた。

(どうして林蔵と猪之松とが、こんな所で斬り合っているのか?)

勿論陣十郎には合点いかなかったが、そういうことを突詰めて考え込むほど、彼の気持は冷静でなく、彼の躰は健康でなかった。

（それにしても井上嘉門の領地での、不思議な怪奇な事件の起伏！ 何と云つたらいいだろう？）

悪党の彼ではあつたけれど、このことを思えば身が震えるのであつたが、悩乱状態の陣十郎には、やはりこの事も冷静な気持で、回想することなど出来なかつた。

（こんな所で死んではたまらない！ 早く人里へ！ 早く福島へ！）

このことばかりを思い詰め、ノタウチながら呻き声を、先刻さつきから上げているのであつた。もう林蔵にとつても猪之松にとつても、呻き声など問題ではなくなつていた。

次第に迫る呼吸いきをととのえ、一気に雌雄を決しようと、刻きざみ足あしをしてジリジリと進んだ。

しかし又もこの折柄、意外の障害が湧き起こつた。

雑木林の間から、数本のたいまつたいまつの光が射し、四挺の駕籠を取巻いて、十数人の人々が、忽然現われて来たことであつた。

2

井上嘉門の一団であつたが、四挺の駕籠に乗っている者は、嘉門と逸見多四郎へんみと、お妻

とそうして東馬とであった。

「や、これは逸見先生で」

猪之松は思わず叫ぶように云つて、岩を廻つて数間走つた。逃げたというのでは決してなく、自分の剣道の師匠であり、日頃から無用の腕立てや、殺生を厳しく戒め^{いまし}られている、その逸見多四郎にこんな姿を——拔身をひっさげているこんな姿を、こんなところで見られるということが、面伏せに思われたからであつた。

しかし直ぐに思い返し、苦笑いをして足を止めた。

「そこに居るのは猪之松ではないか」

いち早くその姿を見かけたらしく、駕籠の中から多四郎は叫んだ。

「駕籠しばらく止めるがよい」

止まつた駕籠から多四郎は出て、猪之松の方へ寄つて行つた。

「拔身をひっさげ何をしているのじゃ」

云い云いこれも猪之松の横に、これも抜き身を引っさげて、これも苦笑いをして佇んでい
る赤尾の林蔵をジロリと見、

「そなたは赤尾村の林蔵殿じゃな」

猪之松が数間走ったので、それに連れて自分も数間走り、猪之松が足を止めたので、自分も足を止めた林蔵は、こう云われて頭を下げ、

「逸見の殿様でございまするか、意外のところでお目にかかり、恐縮至極に存じまする」
顔見知りの逸見多四郎だったので、こう林蔵は慚然として云った。

多四郎の方でも林蔵の顔は、以前に見かけて知っていた。それに自分の剣道の弟子たる高萩の猪之松の競争相手——そう云うことも知っていた。で、この場の光景から、心に響くものが少なからずあった。

「猪之松」と鋭い声で云った。

「決はたしあ闘いか？　そうであろう！」

「……………」

猪之松は頭を下げた。

「猪之松！」と又も多四郎は云った。

「決闘！　それもよかろう！　…………が決闘したその後において、一体どのような良いことが残るのか？」

「……………」

「決闘！ 決闘……さてその結果は一人が死ぬ！ ……そうだ一人は殺されるのだ！ よくよくのことがなければのう、決闘などするものではない」

「……………」

「理由は何か、云つてみい」

「はい」と猪之松は神妙に云つた。

「ここに居りまする林蔵の子分に、藤作と申するものがござりますが、その者が、わたくしの賭場へ参り、乱暴狼藉いたしましたゆえ、私子分ども腹を控えかね、みんなして袋叩きにいたしましたところ……」

「賭場荒しが原因だな」

「はい、さようでござります」

「みんなして藤作を叩いたといえ、争いは五分々々というものだな」

「まあ左様でござりますが……」

「では、どうしてお前たち二人、あらためてここで決闘などするのだ？」

「子分の怨みは上に立つ者の……」

「親分の怨みになるといふ訳か」

「そればかりでなく、ずっと以前から、林蔵と私とは犬猿もただならず……」

3

「そのような噂も聞いて居る、がその不和の原因も、要するに縄張りの取り合いとか、勢力争いだということではないか」

「はい左様にござります、が私共渡世人にとっては縄張りとは申すもの大切でありまして……」

「一体誰から許されて、縄張りというようなものをこしらえたのじゃ？」

「……………」

「土地はお上、ご領主の物、それをなんぞや博徒風情が、自分の勢力範囲じやの縄張りじやのと申し居る」

「……………」

「一体お前たちは、何商売なのじゃ？」

「……………」

「無職渡世などと申しているが、お上で許さぬ博奕をし、法網をくぐって日陰において生

くる、やくざもの、不頼漢ではないか！」

「……………」

「そういう身分のその方なら、行動など万事穩便にし、刃傷沙汰など決していたさず、謹しんでくらすのが当然じゃ！ それをなんぞや決闘とは！ ……猪之松、其方はわしそのほうにっいて剣道を学んだ者だったのう」

「お稽古いただきましてござります」

「では其方はわしの弟子じゃ」

「申すまでもございません」

「直れ！」と多四郎は凄じく云った。

「不肖な弟子を手討ちにいたす！」

するとこの時まで多四郎の言葉を黙々として聞いていた林蔵が、拔身をソロリと鞆におさめ、つつかつかと多四郎の前へ出て云った。

「逸見先生に申し上げます、私をもお手討ちにして下さいませ」
首をすつと差しのべた。

「？」

多四郎はただ林蔵を見詰めた。

「先生の秘蔵弟子の猪之松殿を、不肖におとしましたは、この林蔵にござりまする」

「……………」

「林蔵さえ争いを仕掛けませねば、穏和な高萩の猪之松殿には決闘などいたしはしませぬ」

「……………」

「私をもお手討ち下さりませ」

そういう林蔵の真面目な顔を、多四郎はつくづく眺めていたが、

「さすがは男、立派なお心！ 多四郎ことごとく感心いたしてござる……………そこで多四郎よ

りお願いすることがござる。……………林蔵殿、猪之松と和解下さい……………」

「……………」

「一つ秩父ちちぶの同じ地方で、それほどの立派な男が二人、両立して争うとはいかにも残念！

戦えば両虎とも傷つきましよう。和解して力を一つにすべきじゃ」

「殿様……………」と林蔵は頭を下げた。

「まことにごもつとものお言葉、林蔵身にしみてござります——高萩のいなに否やありませね

ば、私よろこんで和解いたしたく——」

「おお赤尾の俺とて承知だ！」と猪之松も嬉しそうに決然と云った。

「これまでもつれ水に流して、二人和解し親しくなろうぜ」

この時木陰から声がかかった。

「この要介も大賛成じゃ」

秋山要介が木陰から出て来た。

4

そうして、その後からついて来たのは浪之助とそうして源女であった。

いずれも井上嘉門の領地の一大混乱の渦から遁れ、ここまで下って来たのであった。

そうして要介は木陰に佇み多四郎の扱いを見ていたのであった。

「猪之松と林蔵との和解は賛成、重ねて逸見殿と拙者との争いも、和解ということになり
ましような」

磊落な要介はこう云って笑った。

「おおこれは秋山氏が、意外のところでお目にかかりました。林蔵殿と猪之松との和解、
貴殿と拙者との武芸争いの和解！ いずれをもご賛成下されて逸見多四郎満足でござる」

多四郎もいかにも嬉しそうに云った。

「それに致しても秋山殿には何用あつて、このような所に？」

「それは拙者よりお訊きしたい位で、何用あつて逸見殿にはこのような所においでなさるな？」

「実は井上嘉門殿の屋敷に、滞在いたして居りましたところ……」

「これはこれは不思議なことで、拙者も井上嘉門殿の屋敷に滞在いたして居りましたので……」

「や、さようで、一向存ぜず、彼の地にて御面会いたすこと出来ず、残念至極に存じ申す」

「しかるに今回の騒動！　そこで引揚げて参りましたので」

「実は拙者も同様でございます」

この時嘉門は駕籠から出て、改めて要介へ挨拶をした。

「ここに居りましても致し方ござらぬ、ともかくも福島まで引揚げましょう」

こう多四郎が云つたので、一同それに同意した。

一同がこの地から立ち去つた後は、またこの地はひとしきり、深い林と月光との、無人

の静かな境地となっていた。

しかし岩陰には陣十郎が負傷に苦しんで呻いていた。

大岩の陰にいたために、多四郎にも要介にも見あらわされず、そのことは幸福に感じられたが、お妻や源女を見かけながら、どうにもすることが出来なかったことは、彼には残念に思われた。

「ここに居ても仕方がない」

こう思つて彼は立ち上つた。

「痛い！ 痛い！ 痛い！」と声をあげ、陣十郎はすぐに仆れ、右の足の膝の辺りを抑えた。

「あツ……膝の骨が碎けて居るわ」

やがて秋が訪れて来た。

御三家の筆頭尾張家の城下、名古屋の町にも桜の葉などが風に誘われて散るようになった。

この頃知行一万石、石河原いしかわら東市正のお屋敷において月見の宴が催され、家中の重臣や

若侍が、そのお屋敷に招かれていた。

竹腰但馬、渡辺半左衛門、平岩ずしよ図書、成瀬けんもつ監物、等々の高禄の武士たちは、主人東市正と同席し、まことに上品におとなしく昔話などに興じていたが、若侍たちは若侍たちで、少し離れた別の座敷であたかも無礼講の有様で、高笑、放談、自慢話——女の話、妖怪変化の話、勝負事の話などに興じていた。

と佐伯勘六という二十八九歳の侍が、

「辻斬の噂をお聞きかな」と、一座を見廻して云い出した。

月見の宴で

1

「辻斬の噂、どんな辻斬で？」と前田主膳という武士が訊いた。

「撞木杖をついた跛者びっこの武士が辻斬りをするということごとでごと△るが」

「その噂なら存じて居ります」

「不思議な太刀使いをするそうで」

「こうヒヨイと車に返し、すぐにドツと胴輪切りにかける——ということでありませう
で」

この話はこれで終つてしまつた。

盃が廻り銚子が運ばれ、お酌の美しい若衆武士が、華やかに座を斡旋して廻つた。

「拙者数日前備前屋の店頭で、長船おさふねの新刀をもとめました、泰平のご時世試し斬りも
出来ず、その切れ味いまに不明、ちと心外でございますよ」

と、川上嘉次郎かじろうという武士が云つて、酔つた眼であたりを見廻した。

「貴殿も新刀をおもとめか、実は拙者ももとめましてな……相州物だということでも
やはり切れ味は不明でゝる」

こう云つたのは二十五六才の、古巢右内という武士であつた。

「ナーニ切れ味を知りたいとなら、近くの大曾根の田圃へ行き、乞食でも斬れば知れ申す
よ」と柱に背中をもたせかけて、赧顔を燈火に照し、少し悪酔をしたらしい、金田一新助
という武士が云い、

「近來お城下に性のよくない、乞食が殖えたようで、機会あるごとにたたつ斬つた方がよ
ろしい」

「なるほどこれは妙案でゐるな」

「乞食なら斬つてもよろしかろう」と二三人の武士が雷同した。しかしこの話もこれで終り、女の話へ移つて行つた。

「拙者ひどい目に逢いましたよ」

瀬戸金彌という二十二三の武士が、苦笑いしながら話し出した。

「数日前の夜でゐるが、大須の境内を歩いて居りますと、若い女が来かかりました。あの辺りのことでゐるによつて、夜鷹でもあらうと推察し、近寄つてヒョイと手を取りましたところ、その手を逆に返されまして、途端に拙者ころびましたが、どうやら女に投げられたようです」

「アツハツハツ」と一同は笑つた。

「女をころばすのは判つてゐるが、女にころばされるとはサカサマじゃ」

「そこが色男の本性かな」

「その女柔術やわらでも出来るのかな？」

「さようで」と金彌という武士は云つた。

「零落をした武家の娘——と云つたような様子でござつた。身装は穢くありましたが、顔

や姿は美しく上品でありましたよ」

この時川上嘉次郎と、古巢右内とが囁き合い、金田一新助へ耳うちをした。すると新助はニヤリと笑い、二三度頷いて立ち上り、つづいて嘉次郎と右内とが立ち、こつそり部屋を出て行つた。

雑談に余念のない一座の者は、誰もそれに気がつかなかったが、床柱に背をもたせかけコクリコクリと居眠りをしていた、秋山要介一人だけが、この時ヒョイと眼をあげて、三人の姿を見送つて、審しそうに眉をひそめた。

しかし眉をひそめただけで、声もかけず立つても行かず、また直ぐに眼を閉じて、長閑のどかそうに居眠りをつづけ出した。

2

何故要介がこんな所にいるのか？ 福島の馬市が首尾よく終えるや、赤尾の林蔵と高萩の猪之松とは、和解したので親しくなり、打ち連れ立つて故郷へ帰つた。

そこで要介は門弟の浪之助へ、源女を附けて江戸へ歸し、自分一人だけが名古屋へ来た。尾張家の重臣諫いさはや早勘兵衛が、要介の知己であるからであり、せつかく福島まで来たの

であるから、久々で名古屋へ出かけて行き、諫早殿にお目にかかり、お城下見物をすることにしよう、そこで出かけて来たのであった。

秋山要介の高い武名は、尾張藩にも知られていたもので、今夜の宴にも勘兵衛と一緒に、要介は石河原家へ招かれた。

最初要介は重臣たちとまじり、別の部屋で談笑していたのであったが、磊落の彼にはそういう座の空気がどうにも窮屈でならなかった。

そこでそつと迂り出て、若侍たちのいるこの部屋へ来て、若侍たちの話を聞いているうちにトロトロと居眠りをやり出したのである。

夜は次第に更けて来たが、酒宴は容易に終りそうもなく、人々の気焰はいよいよあがった。

と、その部屋を出て行った、古巢右内という若侍が、蒼白まっさおな顔をして帰って来た。

「どうしたどうした」

「顔色が悪いぞ」

「今までどこへ行っていたのだ」

と若侍たちは口々に訊いた。

「面目次第もないことを仕出来しでかしまして」

右内は震える口で云った。

「新刀の試し切りいたそうと存じて、川上氏と金田一氏共々、大曾根の乞食小屋まで参りましたところ、一つの小屋の菰垂れの裾より、白刃ひらめきいでまして、あの豪勇の金田一氏が、片足を斬り落とされましてこごとムリまする」

「なに乞食に金田一氏が……」

若侍たちは森然としてしまった。

それというのは金田一新助は、尾張藩の中でもかなりの使い手として、尊敬されている武芸者だからであつた。

「そこで拙者と川上氏とで、金田一氏お屋敷まで、金田一氏をお送りいたし、川上氏はそのまま止まり、拙者一人だけ帰つて参つたのでムるが……」と古巢右内は面目なさそうに云った。

一同は何とも云わなかつた。

同僚が斬られたというのであるから、本来なれば出かけて行つて、復讐すべきが当然なのであるが、相手が武士ぶしであろうことか、乞食小屋の乞食だというのであるから、討ち果

したところで自慢にもならず、もし反対に討たれでもしたら——相手は随分強そうであるから、——討たれでもしたら恥辱の恥辱である。

で黙っているのであった。

この時要介はヒョイと立った。

そうして部屋を出て行つた。

満月の光を浴びながら、秋山要介は大會根の方へ、静かな足どりで歩いて行つた。

まだこの辺りは屋敷町で、昼もひっそりとしたところなのであるが、更けた夜の今はよいよ寂しく歩く人の足音もなく、歩く人の姿もなかった。

疑い合う兄妹

1

この夜大會根の農家の一間に、兄妹の者が話していた。

主水もんどとそうして澄江すみえとであつた。

馬大尽井上嘉門の領地の、あの生地獄へ落された澄江が、どうしてこんな所に来ているかというに、あの夜暴民たちはその生地獄の上の、断崖へ押しよせて行き、生地獄にいる人々を助けようとして、幾筋となく綱を下ろした。

それへ縋つて地獄の人々は、あの谷から引き揚げられた。

その中に澄江もいたのであった。

そうして暴動の人渦に雑つて、嘉門の領地をさまよっているうちに、幸運にも義兄の主水と逢つた。

その時の二人の喜びは！

互いの過去を物語り、巡り逢えた幸運を感謝しながら、井上嘉門の領地を遁れ、まず福島しゆくの宿へ来た。

そこで陣十郎の消息を尋ねた。

名古屋の城下へ行つたらしかつた。

で、兄妹は連れ立って、名古屋へ来たのであつて、この地へ来ると主水と澄江とは、とりあえず旅籠はたごに逗留して、陣十郎の行方ゆくえを尋ねた。

が、城下はなかなか広く、行方を知ることが出来なかつた。

それにこれまでの艱難辛苦で、主水の躰も澄江の躰も、疲労困憊を尽くしていた。静養しなければならなかった。

それに旅用の金子なども、追々少なくなつて来たので、城下の旅籠を引払い、農家の離家を借り受けて、そこへ移つて自炊をし、敵かたきの行方を尋ねると共に、身体をいたわることにした。

鳴きしきる虫の音に時々まじつて、木葉の落ちるしめやかな音が、燈火の暗い古びた部屋へ、秋の寂しさを伝えて来た。

「お兄様ご気分はいかがですか？」

心配そうに澄江は訊いた。

「うむ、どうもよくないよ」

主水はこの頃病気なのであった。

と云つてもこれといつて、心臓とか肺臓とか、そういうものの病気ではなく、気鬱の病気にかかっているのがあった。

(澄江が水品陣十郎と、寝泊りをして旅をして来たとは！)

このことが気鬱の原因であった。

互いに過去の話をした時、このことを澄江は主水に話し、寝泊りして旅こそして来たが、
身に——貞操には欠けるところがないと、このことについては力説した。そこで主水もお
妻と一緒に、寝泊りをして旅をして来たことを、きわめて率直に打ちあけて、そうしてや
はり肉体的には、なんら欠点のないということ、澄江が安心するように話した。

艱難辛苦をしたあげく、久しぶりで逢った主水と澄江とは、その邂逅に歓喜して、疑わ
しい過去のそういう生活をも、疑うことなく許し合った。

が、その歓喜がやがて消えて、平静の生活に返って来ると、相互にこのことが疑われ出
した。

二人は兄妹とはいうものの、行く行くは夫婦になるべきところの、義兄妹でありいいなず
婚けであつた。

そうして水品陣十郎が、父庄右衛門を殺さつが害がいしたのは、澄江に横恋慕した結果からの
ずだ。

その陣十郎と二人だけで、寝泊りして旅をして来たという！

主水は苦悶せざるを得なかつた。

主水が苦悶すると同じように、澄江も苦悶せざるを得なかった。

（あの好色のお妻という女と、一つ宿に寝泊りして、旅をして幾日か来たからには、ただではすむべきはずがない。情交があるものと思わなければならない）

苦悶せざるを得ないのであった。

そういう二人の心持を——その苦しい心持を、カラリと晴らす方法はといえば、陣十郎とお妻とが現われて来て、その二人が自分の口から、そういう関係のなかつたということ、証明するより外はなかつた。

ところが二人は二人ながら、主水たちの敵であり、その行衛ゆくえは未だに知れない。従つて二人の苦しい心持の、解け消える機会はないのであった。

「澄江殿」と他人行儀の、冷い口調で主水は云つた。

「長の月日お父上の敵、陣十郎めを討とう討とうと、千辛万苦いたしても、今に討つことならぬとは、われわれ二人神や仏に、見放された結果かもしれませぬ……将来どのような探そうとも、陣十郎の行衛結局知れず……知れず終しまいにならうもしれませぬ……わしにとつては無念至極ではござるが、澄江殿にとつてはその方が、かえつてよいかもしれませぬ

のう……アツハツハツよいともよいとも！」

「……………」

澄江は返事をもせず首垂れていた。

(また皮肉を仰おっしや有ると見える。……わたしはもう何にも云うまい)

こう思つて黙つていたのであつた。

「のう澄江殿」と又主水は、意地の悪い調子で云いつづけた。

「わたしには不思議でなりませぬよ……お父上の敵の陣十郎と、一緒に旅をして居りながら、その敵を討つて取ろうと、一太刀なりと加えなかつたとは」

「……………」

「弱い女の身にしてからが、同じ部屋に寝泊りして来た以上、相手の眠りをうかがつて、討ちとる機会はありませんはずじゃ……それを見遁して討たなかつたからには、討てない理由があつたものと……」

「……………」

「わしは不幸だ！」と不意に主水は、昂奮して血走つた声で叫んだ。

「敵に肌身を穢された女を、妻にしなければならぬとは！」

「あなた！」と澄江は顔色を変え、軀をワナワナ顫わせて、腹に据えかねたように叫び返した。

「以前にも再々申しましたとおり、陣十郎と連立つて、道中旅をして参りましたは、秩父の高萩の猪之松の家で、馬大尽の井上嘉門に、すんでに肌身穢されようとしたのを、陣十郎に助けられましたからで……恩は恩、仇は仇、なんのお父上の敵などに、この肌身を穢させましようや……道中陣十郎を見遁しましたは、助けられた恩からでございます……それにいたしましても貴方様あなたに——未来の良人のあなた様に、そのようなことを疑われましては、生きて居る望みござりませぬ！ 死にます死にます妾は死にます！」

いきなり刀を取って抜いた。

3

主水は仰天して腕を伸ばし、その拔身をもぎ取った。

澄江は畳へ額をつけ、ひた泣きに泣くばかりであった。

拔身を鞘へそつと納め、手の届かない遠くへ押しやり、主水も腕を組んで考え込んだ。

(地獄の苦しみだ)とそう思った。

(こういう苦しみをすると、いうのも、みな水品陣十郎のためだ)

またここへ考えが落ちて行つた。

(どうともして早くあいつの居場所を、探り知つて討ち取りたいものだ)

(旅用の金も残り少なくなつた)

このことも随分辛いのであつた。

胸は苦しく頭痛さえして来た。

不意に主水は立ち上り、障子をあげ、雨戸をあげ、縁に立つて戸外を見た。

一跨ぎにも足りない竹垣をへだて、向かいはずつと田畑であり、月の光が農作物の上に、水銀のように照つていた。

でも一方右手の方には、逸見^{へんみ}三家中の名古屋逸見家の、大旗本の下屋敷のような、宏大な屋敷の一部が、黒く厳めしく立っていて、それが月光を遮っているのです、その辺り一体が暗く見えていた。

(ああいう所には有り余る金が、腐るほど死蔵されているのだらうなあ)
ふとこんなことが思われて、主水はその方を眺めやった。

秋山要介は屋敷町を抜けて、大曾根の方へ歩いてきた。

尾張家の相当の使い手の武士を、乞食風情で小屋の裾から、一刀に足を斬ったという――このことが要介には不思議でならず、いずれその乞食は武士あがりの、名ある人間に相違ない、人物を見素性を知りたいものだ、それに自分が武芸者だけに、研究心と好奇心とから、その乞食と逢おうために、酒宴の席から抜け出して、こうして歩いて来たのであった。

そして大曾根に辿りついた。

飛々に農家があるばかりで、後は一面の耕地であり、ただ一所に宏大極まる名古屋逸見家の大屋敷が、この辺り一体を支配するかのよう、月光の中に黒く高く、厳しく立っているばかりであった。

土塀を四方に嚴重に巡らし、土塀の内側へ植込を茂らせ、夜鳥を宿らせているらしく、時々啼音が落ちて来た。

その屋敷の横を通り、要介は先へ進んで行った。

と、遙かの行手にあたって、掘つ建て小屋が点々と、みすぼらしい形に並んでいるのが見えた。

その方へ要介は進んで行った。

しかしにわかには足を止め、

「はてな」と呟いて凝視した。

小屋から十数人の人影が、バツタのように飛び出して来て、それが一団にかたまつて、こつちへ歩いて来るからであつた。

なんとなく異様に思われたので、積藁の陰へ身をかくし、要介はしばらく待っていた。

編笠をかぶり、撞木杖をついた、浪人を先頭に立てながら、乞食の一団が近寄つて来た。

撞木杖の武士

1

乞食の一団は話し合いながら、逸見^{へんみ}屋敷の方へ歩いて行った。

「試し切りに来たらしい尾張藩の武士を、菰垂の裾からただ一刀に、足をお斬りになった先生の腕前、まったく凄いものでございましたよ」と、一人の乞食が感嘆したように云うと、

「あれなどは小供だましき」と撞木杖の武士は事も無げに、

「足が満足であった頃には、五人であろうと、十人であろうと、撫斬りにしたものだだったが」と、感慨深そうにそう云った。

要介は黙って積藁の陰で、そういう話を聞いていたが、彼らがその前を歩き過ぎると、その後から付いて行つた。

（撞木杖についている片脚の武士が、尾張家の武士を菰垂の裾から、一刀に斬つた奴なのだな）

こう思ったからである。

乞食の一団は逸見屋敷の裏門の前で足を止めた。

逸見屋敷の巨大な内土蔵の中に、二人の人間が話していた。

一人は馬大尽の井上嘉門であり、もう一人は逸見多四郎であつた。

二人の眼前にあるものといえば、鋌や鉄環で鎧われたところの、巨大ないくつかの唐櫃であり、その中に充ちている物といえば、黄金の延棒や銀の板や、その他貴金属の器具や
 武具であつた。

昭和年間の価値に換算したら、何百萬両になろうとも知れなかった。

「なるほど」と多四郎は溜息をしながら云った。

「伝説以上の莫大な財産で」

「さようで」と嘉門は頷いて云った。

「名古屋逸見家にある分だけが、これだけなのでございます……。この他に知多の逸見家にも、また犬山の逸見家にも、これほどの財宝が蔵してありますので」

「その三家を支配している者が、貴殿井上嘉門殿なので」

「はい代々井上嘉門が支配いたして居りました。……で、この秘密を保つために、逸見三家は家憲として、外界との交際を避けて居りました」

「それは聡明なやり口ではござるが、しかしこれほど莫大な財宝を、死蔵いたすということは……」

「さようさよう」と嘉門は云った。

「今後これまでのような保存のやり方では、よろしくないように存ぜられます……。それにこのように貴方様へ財宝の在り場所お知らせした以上、今後ともお力添えをいただきます。この財宝の使用方につき、研究いたしたく存じまする」

「結構、何なりとお力になりましたよ」

それにしてもどうしてこの二人が、こんな逸見家などにいるのであろう？

それは例の騒動から嘉門や多四郎たちは木曾福島に遁れ、そこから共に名古屋の地へ来、逸見三家の実際の主人が、井上嘉門その人だったので、まず名古屋逸見家の屋敷へ、一同入ったのにすぎないのであった。

2

この時主家おもやの方角から、喧騒の音が聞こえてきた。

嘉門と多四郎とは眼を見合せたが、内蔵を出ると扉をとじ、主家の方へ走って行った。見れば、一大事が起こっていた。

得物を持った多数の乞食が、撞木杖をついた浪人に指揮され、家財を奪おうとしているのを、家の者が防いでいたのであった。

編笠を刎ねのけた撞木杖の武士は、ほかならぬ水品陣十郎であった。

その陣十郎は右の片手で、お妻の襟がみを掴んでいた。

井上嘉門の領地内で、一騒動を起こしたが、自分も負傷して不具となった。左の片足を

傷つけたのである。

福島へ出、名古屋へ出た。

生活の道がなかつたので、とうとう乞食にまでおちぶれてしまった。

乞食仲間を煽動し、今宵逸見家を襲ったのは、金銭を得ようためだったのである。さて逸見家へ乱入して見れば昔の情婦で自分を裏切ったお妻が、意外にも姿を現わした。

「おのれ！」とばかり引つとらえたのである。

と、そこへ駈け込んで来たのが、嘉門とそうして多四郎とであった。

「陣十郎オーツ」

「あッ、逸見先生！」

陣十郎は仰天し、片手でお妻を小脇に抱くと、撞木杖を飛ばして走り出した。

「待て！ 陣十郎オーツ」と追う多四郎を、乞食どもは遮った。

「邪魔するか汝^{おのれ}！」と怒った多四郎が、刀を抜いた瞬間に、乞食を背後から斬り仆す者があつた。

それは秋山要介であつた。

「や、貴殿は秋山氏！」

「おおこれは逸見先生で」

「秋山氏には、どうしてここへ？」

「乞食ども怪しい片輪武士と、ともどもこの屋敷へ潜入いたしましたを、つけて参つて拙者見届け、押込みと推し、ご注意いたそうと、拙者も潜入いたしました次第で」

「その片輪武士こそ陣十郎でござる」

「ナニ、陣十郎？ さようでござつたか。……してそ奴、陣十郎めは？」

「お妻と申す女を奪い、たつた今しがた逃げましてござる」

「追いましょう、逃がしてはならぬ」

「御意で！ 追いましょう、遠くは行くまい！」

「多四郎と要介とは走り出した。」

「乞食どもはいつか逃げ散つていた。」

お妻を引つかかえた陣十郎は、この頃耕地を走っていた。

後から追つて来る足音がする。

(どこかへ隠れて……隠れなければならない)

見れば一軒の農家があつて、燈火の光が洩れて見えた。

(よしあそこへかくまって貰おう)

陣十郎はそつちへ走つた。

雨戸が一枚あいていて、人の姿がそこにぼんやりと見えた。

「狼藉者に襲われましたもの、しばらくおかくまい下されい」

「よろしゆござる」とその人は云い、一方へ躰を開いた。

本懐遂ぐ

で、燈火が雨戸の間から、ほのかながらも庭先へ射した。

「やア、汝は水品陣十郎オーツ」

「誰だ？ やア鳴澤主水かアーツ」

縁に佇んでいた者は、鳴澤主水その人であつた。

庭へ射し出した燈火の光で、陣十郎を認めた鳴澤主水は、叫ぶと同時に刀をひっ掴み、庭へ躍り出ると積る怨み、ほとんど夢中で斬り込んだ。

「わっ」

陣十郎は地に仆れた。

片手にお妻を抱えていた。

しかも片足は不具であった。

満足な方の右の足の、股の辺りを斬られたのである。

とその瞬間、澄江が刀を抜きそばめ、縁から庭へ飛び下りた。

「澄江殿かア—ツ」と死期迫った声で、陣十郎は呼ばわった。

「其方そなたに懸想したばかりに……が今では二人一緒に、木曾街道の旅はしたが、躰に操に傷

付けなかつたことを、陣十郎の本性に、善心のあつた証拠として心はればれ存じ居る……

いざ主水拙者を討て！ その前にこの女を！」

お妻を放すと放した手で、刀引抜きお妻の肩を、胸にかけて割りつけた。

「ヒ——ツ」と仆れてノタウツお妻！ でも断末魔の息の下で、

「主水様、この世の名残りに、お目にかかれて本望でござんす……二人一緒に旅はしましたが、とうとう最後まで赤の他人……今はやっぱり陣十郎殿の女房……良人おっとに討たれて死にまする」

「討て主水！ いざ立派に！」

「よい覚悟！ 討つぞ陣十郎！」

主水の切り下した刀の下に、陣十郎の息は絶え、それに寄りかかってお妻も死んだ。間もなくそこへ駆けつけて来たのは逸見多四郎と秋山要介とであった。

主水と澄江とが婚禮したのは、その翌年のことであつて、仲のよい夫婦として榊原家では同僚たちがうらやんだ。

多四郎と要介とは親友となり、井上嘉門の大宝財の、使用方などについて相談などをした。

源女は本心を取りもどし、女芸人として名声を馳せ、杉浪之助はその後援者として、何れとなく世話をした。

赤尾の林蔵と高萩の猪之松とは、一時和睦はしたものの、やはり両雄ならび立たず、その後対抗するようになったが、それは後日の出来事であつた。

青空文庫情報

底本：「国枝史郎伝奇全集 卷四」未知谷

1993（平成5）年5月20日初版発行

初出：「山形新聞」

1936（昭和11）年3月～8月18日

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号586）を、以下の場合には大振りにつくっています。

「戸ヶ崎熊太郎」「広谷ヶ原」

※底本は、「行方／行衛」、「提燈／提灯」、「綺麗／奇麗」、「子分／乾兒／乾児／乾分」、「仰有る／有仰る／仰言る」を混在させていますが、底本のママとしました。

※小見出しの終わりから、行末まで伸びた罫は、入力しませんでした。

入力：阿和泉拓

校正：門田裕志、小林繁雄

2007年4月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

剣侠

国枝史郎

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>